

蔵増押切遺跡 発掘調査報告書

2003

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

くら ぞう おし きり
蔵増押切遺跡

発掘調査報告書

平成15年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



ST1018焼土検出状況（南から）



ST1018全景（南から）

巻頭図版 2



ST1030焼土検出状況（西から）



ST1030全景（西から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、蔵増押切遺跡の調査成果をまとめたものです。

蔵増押切遺跡は天童市の中心より西部の蔵増地区の倉津川をはさんで所在し、沖積地の微高地に位置しています。

この度、日本道路公団の東北中央自動車道相馬・尾花沢線（上山～東根間）の建設事業に伴い、工事に先立って緊急発掘調査を実施しました。調査の結果、古墳時代中期から後期の集落跡、古墳時代から平安時代の河川跡、中世の建物跡群が検出されました。古墳時代の集落跡は、本遺跡の南西約300mに位置する国指定史跡西沼田遺跡との関連をうかがう資料となり、また、中世の建物跡では、成生庄に関わる有力者と思われる建物跡の資料を得ることができ、当時の生活との関連を示す貴重な手がかりが出来たのではないかといえます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫に伝えていくことが、私たちの重要な責務といえます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成15年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木村 宰

例 言

- 1 本書は、東北中央自動車道相馬・尾花沢線建設工事（上山～東根間）に係る「蔵増押切遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は日本道路公団東北支社山形工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名	蔵増押切遺跡	遺跡番号（平成9年度登録）
所 在 地	山形県天童市大字蔵増押切	
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター	
受 託 期 間	平成9年4月1日～平成14年3月31日	
現 地 調 査	平成9年10月20日～平成9年12月1日（第1次調査）	
調 査 担 当 者	調査第一課長	佐藤 庄一
	主任調査研究員	佐藤 正俊（調査主任）
	調査研究員	鈴木 良仁
	調 査 員	須賀井明子
	調 査 員	長瀬えみ子
	調 査 員	齋藤 健洋
現 地 調 査	平成10年4月14日～平成10年12月4日（第2次調査）	
調 査 担 当 者	調査第一課長	佐藤 庄一
	主任調査研究員	佐藤 正俊
	調査研究員	向田 明夫（調査主任）
	調 査 員	齋藤 健洋
現 地 調 査	平成11年4月20日～平成11年11月12日（第3次調査）	
調 査 担 当 者	調査第三課長	佐藤 正俊
	調査研究員	向田 明夫（調査主任）
	調査研究員	松田 道雄
	副調査員	齋藤 健洋
現 地 調 査	平成12年5月8日～平成12年6月9日（第4次調査）	
調 査 担 当 者	調査第三課長	佐藤 正俊
	主任調査研究員	氏家 信行
	調査研究員	松田 道雄（調査主任）
	副調査員	齋藤 健洋
整 理 期 間	平成13年4月1日～平成14年3月31日	
整 理 担 当 者	調査第三課長	佐藤 正俊

調査研究員	松田 道雄（整理主任）
調査研究員	岡崎 賢一
副調査員	石垣 岳彦
調査補助員	黒坂 広美

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、日本道路公団東北支社山形工事事務所、山形県山形建設事務所、東南村山教育事務所、天童市、天童市教育委員会等関係機関からご協力いただいた。また、山形大学教授阿子島功、仙台市地底の森ミュージアム斎野浩彦、岩手県立博物館日下和寿、仙台市教育委員会荒井格、古環境研究所松田隆二の各氏からご教示いただいた。
- 5 本書の作成・執筆は、松田道雄・黒坂広美が担当した。編集は、松田道雄が担当し、全体については佐藤正俊が監修した。
- 6 委託業務は下記の通りである。
遺構の写真測量・実測については、株式会社シン技術コンサルに委託した。
資料の自然科学分析・理化学分析については、株式会社古環境研究所に委託した。
- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

ST	竪穴住居跡	SB	掘立柱建物跡	SE	井戸跡	SK	土坑
SP	ピット	SD	溝跡	SX	性格不明遺構		
EB	掘立柱建物跡の柱穴			EL	カマド		
P	土器	S	礫	W	木	RP	登録土器

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆基準は下記の通りである。

(1) 遺跡は、北緯38°21'40"、東経140°20'55"に位置する。

(1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

(2) グリッドのY軸方向は磁北から26度30分東へ傾く。

(3) 遺構実測図は、1/30・1/40・1/60・1/100他の縮図で採録し、各々スケールを付した。

(4) 遺構挿図・遺物実測中のスクリーントーンは、下記の通りである。

柱穴のアタリ覆土



黒色処理



貼り床



焼土



(5) 遺物実測図・拓影図・図版は原則として1/3で採録し、各々にスケールを付した。

遺物図版については任意の縮尺とした。実測図断面中の は、須恵器を表す。

(6) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・図版とも共通のものとした。

(7) 遺物観察表中の()内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。

(8) 遺構覆土の色調の記載については、1997年農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目 次

調査の経緯	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過と概要	1
遺跡の立地と環境	4
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
遺構と遺物	7
1 竪穴住居跡	7
2 掘立柱建物跡	43
3 井戸跡・土坑跡・柵跡	70
4 溝跡	73
5 河川跡	79
6 水田跡	113
7 その他の遺構と遺物	114
8 縄文時代の遺物	116
まとめ	128
報告書抄録	131
付編 1 「葦増押切遺跡理化学分析報告」	
2 「葦増押切遺跡自然科学分析報告」	

表

表1 調査工程表(1)	2
表2 調査工程表(2)	3
表3 遺物観察表(1)	120
表4 遺物観察表(2)	121
表5 遺物観察表(3)	122
表6 遺物観察表(4)	123
表7 遺物観察表(5)	124
表8 遺物観察表(6)	125
表9 遺物観察表(7)	126
表10 遺物観察表(8)	127

挿 図

第1図 遺跡位置図	5	第22図 S T 1030竪穴住居跡(1)	34
第2図 調査区概要図	6	第23図 S T 1030竪穴住居跡(2)	35
第3図 S T 169竪穴住居跡、 出土遺物	8	第24図 S T 1030出土遺物(1)	36
第4図 S T 178・179・180竪穴住居跡 S T 178出土遺物	9	第25図 S T 1030出土遺物(2)	37
第5図 S T 184・185竪穴住居跡、 S T 184出土遺物	11	第26図 S T 1161竪穴住居跡	38
第6図 S T 187・188竪穴住居跡、 S T 188出土遺物	12	第27図 S T 1305竪穴住居跡	39
第7図 S T 196・197・198・199 竪穴住居跡	13	第28図 S T 1305出土遺物	40
第8図 S T 199・200・1001 竪穴住居跡	15	第29図 S T 1308竪穴住居跡、 出土遺物	41
第9図 S T 1003・1004竪穴住居跡 ...	17	第30図 S T 1312竪穴住居跡、 出土遺物	42
第10図 S T 1002竪穴住居跡、 出土遺物	18	第31図 S B 8 掘立柱建物跡	44
第11図 S T 1005・1006竪穴住居跡、 S T 1005出土遺物	19	第32図 S B 10・110掘立柱建物跡 ...	45
第12図 S T 1015・1016竪穴住居跡、 S T 1015出土遺物	20	第33図 S B 111掘立柱建物跡	47
第13図 S T 1017竪穴住居跡	21	第34図 S B 112・113掘立柱建物跡 ...	48
第14図 S T 1018竪穴住居跡(1)	22	第35図 S B 125・150掘立柱建物跡 ...	50
第15図 S T 1018竪穴住居跡(2) 出土遺物(1)	23	第36図 S B 151掘立柱建物跡	51
第16図 S T 1018出土遺物(2)	24	第37図 S B 152掘立柱建物跡	52
第17図 S T 1019・1020竪穴住居跡、 S T 1020出土遺物	27	第38図 S B 153掘立柱建物跡	53
第18図 S T 1021・1022竪穴住居跡、 出土遺物	29	第39図 S B 154掘立柱建物跡	54
第19図 S T 1023・1024・1025竪穴住居跡、 S T 1024・1025出土遺物	31	第40図 S B 155掘立柱建物跡	55
第20図 S T 1026竪穴住居跡	32	第41図 S B 156掘立柱建物跡	56
第21図 S T 1027・1029竪穴住居跡 ...	33	第42図 S B 157掘立柱建物跡	57
		第43図 S B 158掘立柱建物跡	58
		第44図 S B 160掘立柱建物跡	59
		第45図 S B 159掘立柱建物跡	62
		第46図 S B 161掘立柱建物跡	63
		第47図 S B 162掘立柱建物跡	64
		第48図 S B 166掘立柱建物跡	65
		第49図 S B 163掘立柱建物跡	66
		第50図 S B 1008・1011掘立柱建物跡 ...	67
		第51図 S B 1347掘立柱建物跡	68
		第52図 S B 1682掘立柱建物跡	69
		第53図 S E 105・135・136井戸跡、	

S E 136出土遺物	71	第73図	S G 1 C 区出土遺物(7)	93
第54図 S K 1034・2001・2017土坑跡、		第74図	S G 1155・1156河川跡	95
S A 114柵跡	72	第75図	S G 1155出土遺物(1)	96
第55図 S D 2 溝跡、出土遺物	74	第76図	S G 1155出土遺物(2)	97
第56図 S D 4 溝跡	75	第77図	S G 1155出土遺物(3)	98
第57図 S D 1040溝跡、出土遺物	76	第78図	S G 1155出土遺物(4)	99
第58図 S D 1325・1329溝跡、		第79図	S G 1155出土遺物(5)	100
出土遺物(1)	77	第80図	S G 1155出土遺物(6)	101
第59図 S D 1329出土遺物(2)		第81図	S G 1156出土遺物(1)	102
S D 1201溝跡、出土遺物	78	第82図	S G 1156出土遺物(2)	103
第60図 S G 1 B 区河川跡	80	第83図	S G 1301河川跡	105
第61図 S G 1 B 区出土遺物(1)	81	第84図	S G 1301出土遺物(1)	106
第62図 S G 1 B 区出土遺物(2)	82	第85図	S G 1301出土遺物(2)	107
第63図 S G 1 B 区出土遺物(3)	83	第86図	S G 1301出土遺物(3)	108
第64図 S G 1 B 区出土遺物(4)	84	第87図	S G 1301出土遺物(4)	109
第65図 S G 1 B 区出土遺物(5)	85	第88図	S G 1301出土遺物(5)	110
第66図 S G 1 C 区河川跡	86	第89図	S G 1301出土遺物(6)	111
第67図 S G 1 C 区出土遺物(1)	87	第90図	S G 1301出土遺物(7)	112
第68図 S G 1 C 区出土遺物(2)	88	第91図	水田跡	113
第69図 S G 1 C 区出土遺物(3)	89	第92図	その他の出土遺物(1)	114
第70図 S G 1 C 区出土遺物(4)	90	第93図	その他の出土遺物(2)	115
第71図 S G 1 C 区出土遺物(5)	91	第94図	縄文時代の出土遺物(1)	117
第72図 S G 1 C 区(4 次)河川跡、		第95図	縄文時代の出土遺物(2)	118
出土遺物(6)	92	第96図	石製品・陶磁器・古銭	119

図 版

- | | | | |
|------|---|------|-------------|
| 図版 1 | 調査区遠景 | 図版23 | 水田跡 |
| 図版 2 | 調査区発掘作業 | 図版24 | 現地説明会 |
| 図版 3 | S T 169・184・185・188 | 図版25 | 土師器坏 |
| 図版 4 | S T 197・198・199・200・1002・
1003・1004 | 図版26 | 土師器高坏 |
| 図版 5 | S T 1015・1017・1161・1308 | 図版27 | 土師器高坏・甑 |
| 図版 6 | S T 1018 | 図版28 | 土師器鉢・埴 |
| 図版 7 | S T 1018 | 図版29 | 土師器鉢・甕 |
| 図版 8 | B区S T群 | 図版30 | 土師器甕(1) |
| 図版 9 | S T 1030 | 図版31 | 土師器甕(2) |
| 図版10 | S T 1030 | 図版32 | 土師器甕(3) |
| 図版11 | S T 1305 | 図版33 | 土師器甕・壺(1) |
| 図版12 | S B 8 | 図版34 | 土師器甕・壺(2) |
| 図版13 | A区S B群 | 図版35 | 土師器甕・壺(3) |
| 図版14 | S B 111・112・125・150～155・
157～161・S A 114 | 図版36 | 土師器壺 |
| 図版15 | S B 1008・1682、S E 105他 | 図版37 | 土師器甕・壺 |
| 図版16 | S K 207・1034・2001・S D 2 | 図版38 | 須恵器坏(1) |
| 図版17 | S D 1201・1329 | 図版39 | 須恵器坏(2) |
| 図版18 | S D 4・1040 | 図版40 | 須恵器坏(3) |
| 図版19 | S G 1 | 図版41 | 須恵器坏(4) |
| 図版20 | S G 1 | 図版42 | 須恵器・縄文土器 |
| 図版21 | S G 1155・1156 | 図版43 | 須恵器大甕他 |
| 図版22 | S G 1301 | 図版44 | 木製品(1) |
| | | 図版45 | 木製品(2) |
| | | 図版46 | 石器・石製品・陶磁器 |

調査の経緯

1 調査に至る経過

蔵増押切遺跡は、天童市蔵増地区の南東の倉津川をはさんで所在し、沖積地の微高地および自然堤防上に立地し標高90mを測り、地目が水田・畑地となっている。倉津川をはさんで本遺跡の南西約300mの地点に古墳時代の低湿地遺跡で、多数の打込柱建物跡とともに大量の建築部材や木製品が検出された国指定史跡西沼田遺跡がある。北に約1 kmから2 kmの間に板橋1遺跡・板橋2遺跡・的場遺跡が立地している。

今回の発掘調査は、日本道路公団の東北中央自動車道相馬・尾花沢線（上山～東根間）の建設事業にともなって行なわれた。東北中央自動車道の上山～東根間の事業計画は平成2年度に都市計画整備事業として計画、平成5年度に高速道路整備路線として施工命令が発令され、平成8年度から建設工事が開始された。建設工事にともなう埋蔵文化財の取扱いについては、山形県教育委員会と山形県土木部や日本道路公団との協議の結果、山形県教育委員会が分布調査を行い、その後緊急発掘調査を計画的に進めることになり、財団法人山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託を受けて実施する運びになったものである。

2 調査の経過と概要

現地調査は、路線内面積53,200㎡を調査対象範囲として、平成9年度（第1次調査）から平成12年度（第4次調査）にかけて実施した。10m四方を1単位とするグリッドを設定した。

グリッドの南北軸は、磁北から東に21°44'傾く。東西軸（X軸）は西から東に、南北軸（Y軸）は南から北に番号を割り当てた。

平成9年度の予備調査・発掘調査（第1次調査）は、9月16日から12月1日まで行った。第1次調査は、事業区域内の遺跡範囲や内容・性格などを知る予備調査と遺跡の南側A・B・C区の一部2,300㎡について緊急発掘を行い、中世集落の一部分と水田跡、河川跡などを発見した。なお、昭和50年代の県ほ場整備事業で遺構の中位まで削平されていることが判明した。

平成10年度の第2次調査は、4月14日から12月4日まで行った。第2次調査は、遺跡の中央から南側のA・B区、C・D・E区の一部13,500㎡について発掘を行い、焼失住居跡をはじめとする古墳時代の竪穴住居跡群、古墳時代から平安時代にかけての河川跡と木製品、中世の掘立柱建物跡群と井戸跡などを検出した。調査説明会は、第1回9月5日、第2回11月27日に実施した。

平成11年度の第3次調査は、4月20日から11月12日まで行った。第3次調査は、遺跡の中央から北側のD・E・F区17,600㎡について発掘を行い、古墳時代の竪穴住居跡数棟、河川跡、溝跡などを検出した。調査説明会は、11月5日に実施した。

平成12年度の第4次調査は、5月8日から6月9日まで行った。第4次調査は、遺跡のC区西側1,300㎡について発掘を行い、中世の掘立柱建物跡と第2次調査で検出した河川跡の延長を確認した。

表1 調査工程表(1)

		平成9年			平成10年								平成11年						平成12年				
		10月	11月	12月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	5月	6月
A区	機材搬入																						
	重機粗掘																						
	グリッド設定																						
	面整理																						
	遺構検出																						
	遺構精査																						
	S B 8																						
	S B 110																						
	S B 群																						
	水田跡																						
	記録																						
	現地説明会																						
	機材撤収																						
B区	機材搬入																						
	重機粗掘																						
	グリッド設定																						
	面整理																						
	遺構検出																						
	遺構精査																						
	S T 178 ~ 200																						
	S T 1002 ~ 1017																						
	S T 1018																						
	S T 1019 ~ 1029																						
	S T 1030																						
	S D 2																						
	S D 4																						
	S D 1040																						
	S G 1																						
	記録																						
	現地説明会																						
機材撤収																							
C区	機材搬入																						
	重機粗掘																						
	グリッド設定																						
	面整理																						
	遺構検出																						
	遺構精査																						
	S T 169																						
	S B 1682																						
	S G 1																						
	記録																						
	現地説明会																						
	機材撤収																						

表2 調査工程表(2)

		平成9年			平成10年								平成11年						平成12年					
		10月	11月	12月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	5月	6月	
D区	機材搬入																							
	重機粗掘																							
	グリッド設定																							
	面整理																							
	遺構検出																							
	遺構精査																							
	S T 1305																							
	S T 1312																							
	S D 1329																							
	S G 1155																							
	S G 1301																							
	記録																							
	現地説明会																							
機材撤収																								
E区	機材搬入																							
	重機粗掘																							
	グリッド設定																							
	面整理																							
	遺構検出																							
	遺構精査																							
	S T 1161																							
	S D 1201																							
	S G 1155																							
	S G 1156																							
	記録																							
	現地説明会																							
	機材撤収																							
F区	機材搬入																							
	重機粗掘																							
	グリッド設定																							
	面整理																							
	遺構検出																							
	遺構精査																							
	S G 1156																							
	記録																							
	現地説明会																							
機材撤収																								

遺跡の立地と環境

1 地理的環境

山形盆地は山形県内のほぼ中心部を占め、県内を縦貫する最上川は、盆地の西寄りを北流している。天童市はこの盆地の中央部に位置し、西で最上川と接し、南で山形市と接する立谷川扇状地と、北で東根市まで続く乱川扇状地によって囲まれている。

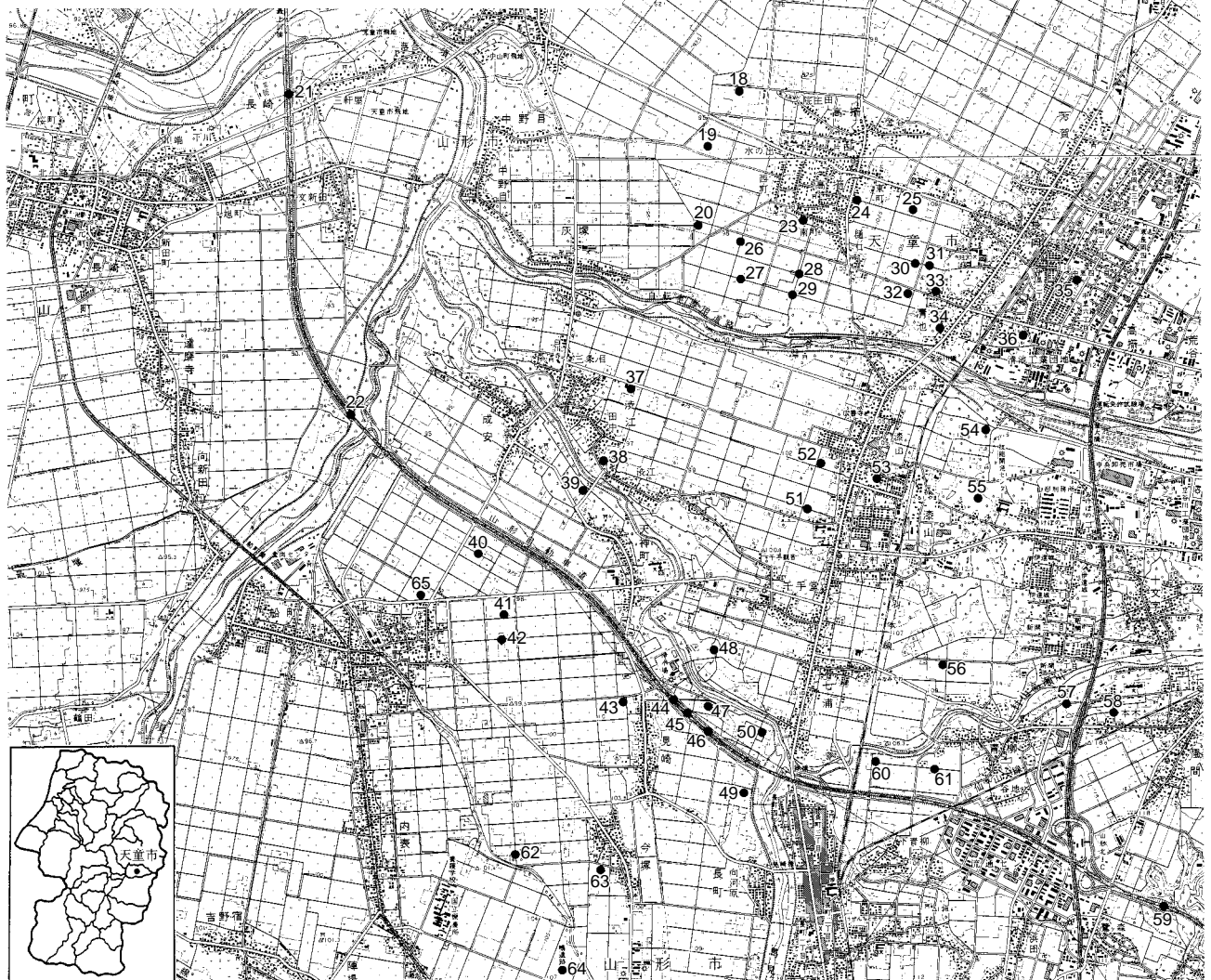
立谷川扇状地は、その南を流れる高瀬川の形成した扇状地との合成扇状地で、扇頂は山形市山寺の地藏堂付近で、扇端は山形市漆山から天童市清池、八幡山にかけての弧状の地域で、豊富な湧水が認められ、当該扇状地の北半部が天童市域の南縁を占めている。乱川扇状地は、白水川、村山野川、乱川、押切川などの河川による複合扇状地で、扇頂は関山付近、扇端部は長瀬から成生にかけての弧状の地域で、半径約11kmに及ぶ規模の大きい扇状地で、天童市域の北半部を占める。扇端部の高木、成生、大清水などには著名な湧泉があり、その豊富な水源を利用して、古くから人々の生活と密接にかかわっていたと考えられる。

最上川に接し、立谷川・乱川の両扇状地に囲まれた、市西部域の平野の三角形の地域には、天童低地と呼ばれる後背湿地が広がっている。最上川の氾濫原は、幅0.5km～1kmほどで、その右岸に立地する寺津から藤内新田、蔵増に至る帯状の地域は、付近より若干高い自然堤防で、蔵増押切遺跡はその微高地に立地している。この地域の土壌は、黒色泥炭状の土質が主体となり、水田耕作の土地利用が図られている。遺跡の表層は、シルトあるいは粘土の土質によって形成され、住居跡などの遺構が検出される確認面となっているが、大半がグライ化し、その基盤は礫および砂層から成り立っている。

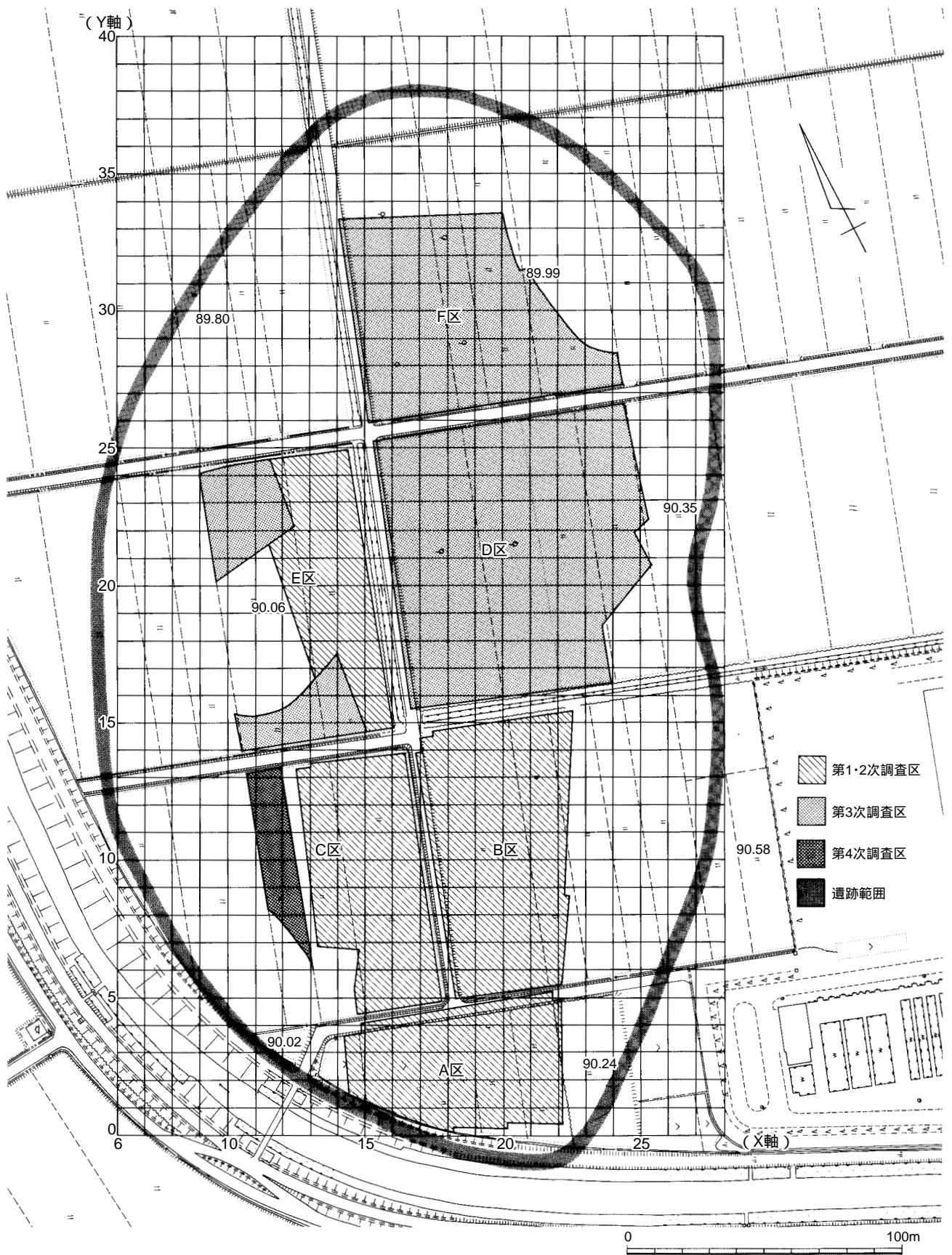
2 歴史的環境

天童市内における遺跡分布をみると、その多くは扇状地上に立地している。蔵増押切遺跡周辺では、自然堤防の微高地に古墳時代前半期の4～5世紀代の集落遺跡が多く認められる。塚野目A遺跡は、塚野目集落の北側に隣接した微高地にあり、4世紀後半と考えられる。それに後続する遺跡としては、乱川扇状地扇端部の微高地に立地する高木集落北側の原口遺跡があり、5世紀代と考えられる。また、高木集落の北の成生集落西側には板橋2遺跡と的場遺跡があり、後者のほうが時期は新しい。古墳時代後期の6世紀以降になると、集落はさらに低湿地へ進出する傾向が認められる。保存状態が大変良好で、大量の掘立柱建物の建築部材や木製農耕具などが出土している西沼田遺跡をはじめとして、鍋田遺跡、願正壇遺跡などは、いずれも後背湿地の低地に位置している。この地域の古墳時代前半の集落は、扇状地扇端部の湧水帯の微高地に位置して、前面に広がる後背湿地を利用して水稲耕作が行われていたと推測される。その後、古墳時代後期になると、集落はより広い範囲に点在するようになり、平地では後背湿地のより低い地域に進出し、集落の規模も拡大する傾向が認められる。中世になると、現在の天童市のほぼ全域は成生庄となる。成生庄は、安元2年(1167)「八条院目録」に「出羽国大山成生」として記載されていることから、12世紀頃には成立していたと思われる。

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 蔵増押切遺跡 (古墳・奈良・平安) | 34 火矢塚遺跡 (縄文～平安) |
| 2 板橋2遺跡 (縄文・古墳・平安) | 35 中里B遺跡 (平安) |
| 3 的場遺跡 (古墳・奈良・平安) | 36 永源寺遺跡 (縄文・奈良～中世) |
| 4 蔵増北B遺跡 (平安・鎌倉) | 37 三奈ノ目遺跡 (古墳) |
| 5 地藏池B遺跡 (平安) | 38 渋江遺跡 (奈良・平安) |
| 6 高木原口遺跡 (古墳) | 39 向河原遺跡 (奈良・平安) |
| 7 高木石田遺跡 (縄文・平安) | 40 馬洗場B遺跡 (奈良・平安) |
| 8 北畑遺跡 (平安) | 41 藤治屋敷遺跡 (奈良・平安) |
| 9 押切遺跡 (奈良・平安) | 42 服部遺跡 (奈良・平安) |
| 10 柏木遺跡 (縄文) | 43 見崎遺跡 (平安) |
| 11 西沼田遺跡 (古墳) | 44 境田C遺跡 (縄文～平安) |
| 12 願正壇遺跡 (縄文・古墳) | 45 境田D遺跡 (縄文～平安) |
| 13 中原遺跡 (平安) | 46 境田E遺跡 (縄文～平安) |
| 14 塚野目遺跡 (平安) | 47 境田B遺跡 (平安) |
| 15 矢口遺跡 (縄文) | 48 七浦古墳群 (古墳) |
| 16 塚野目A遺跡 (弥生～平安) | 49 境田A遺跡 (平安) |
| 17 塚野目B遺跡 (平安) | 50 境田E遺跡 (平安) |
| 18 中袋遺跡 (平安) | 51 衛守塚古墳群 (古墳) |
| 19 砂子田遺跡 (縄文) | 52 漆山遺跡 (古墳～平安) |
| 20 影沢北遺跡 (奈良・平安) | 53 柴崎古墳群 (古墳) |
| 21 三軒屋物見台遺跡 (古墳) | 54 一の坪遺跡 (平安) |
| 22 達磨寺遺跡 (奈良・平安) | 55 梅ノ木遺跡 (古墳～平安) |
| 23 高橋南浦遺跡 (縄文・平安) | 56 漆山長者遺跡 (奈良・平安) |
| 24 高橋東浦遺跡 (奈良・平安) | 57 一本木B遺跡 (平安) |
| 25 礼井戸奈里遺跡 (平安・室町) | 58 一本木A遺跡 (平安) |
| 26 菖蒲江1遺跡 (古墳) | 59 お花山古墳群 (古墳) |
| 27 高橋南遺跡 (古墳) | 60 下柳C遺跡 (平安) |
| 28 桜江遺跡 (古墳・奈良) | 61 下柳A遺跡 (古墳) |
| 29 菖蒲江2遺跡 (縄文・古墳) | 62 ハツ口遺跡 (古墳～平安) |
| 30 高橋東遺跡 (奈良・平安) | 63 今塚遺跡 (古墳～平安) |
| 31 清池西遺跡 (平安) | 64 嶋遺跡 (古墳) |
| 32 火矢塚2号墳 (古墳) | 65 中野遺跡 (古墳) |
| 33 火矢塚1号墳 (古墳) | |



第1図 遺跡位置図 (国土地理院発行2万5千分の1地形図「山形北部」「寒河江」を使用)



第2図 調査区概要図

遺構と遺物

1 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、S G 1155の両岸に検出された。特に、S G 1155の南岸とS G 1の間のB区では密集して重なり合って検出された。それらの中には、S G 1155に沿うようにして焼失住居も確認された。遺物は残存状況がよくない。以下にそれぞれの状況を述べる。

S T 169 (第3図)

C区16~17-12~14Gで検出された。南西半が調査区外となり、西角がS D 173に切られる。規模および平面形は一辺6.6mの方形を呈するものと考えられる。主軸方位はN-44°-Eである。床面は、ほぼ水平であるが、南半分は貼り床されており、他は地山である。床面全体に多量の炭化粒子と北辺に炭化材が検出されたため、焼失住居跡と判断した。壁の立ち上がりは北辺・西辺は緩やかで、南辺は急である。径10~30cm、深さ10~25cmのピットが壁面沿いや住居内側に13基検出された。柱穴かどうかは不明である。南辺ほぼ中央部に径110cmを測る円形状の焼土が検出され地床炉と考えられる。貯蔵穴は、南角にS K 177を検出した。径110cm、深さ30cmを測り円形を呈するが、東半分を調査区壁で切られている。

遺物は、土師器の大型壺の口縁部(1)と、壺の底部(2)を図化し得た。1は単純口縁で、やや直立ぎみに立ち上がり中央部で外反して開く。2は平底で体部へはゆるやかに立ち上がる。

S T 178 (第4図)

B区21~23-8~9Gで検出された。北東半が調査区外となり、南東半をS G 1で切られる。規模および平面形は南辺の西側部が欠けた一辺4.5mの不整形方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN-27°-Eである。床面はほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。柱穴は南壁面から1m中央寄りに2基検出された。径20~40cm、深さ5cmを測る。貯蔵穴は認められない。

遺物は、土師器のミニチュアの小型壺(1)を図化し得た。その他、土師器の高坏の中空の柱状部と、頸部にくぼみがある土師器の壺の口縁部の破片(2)を確認した。

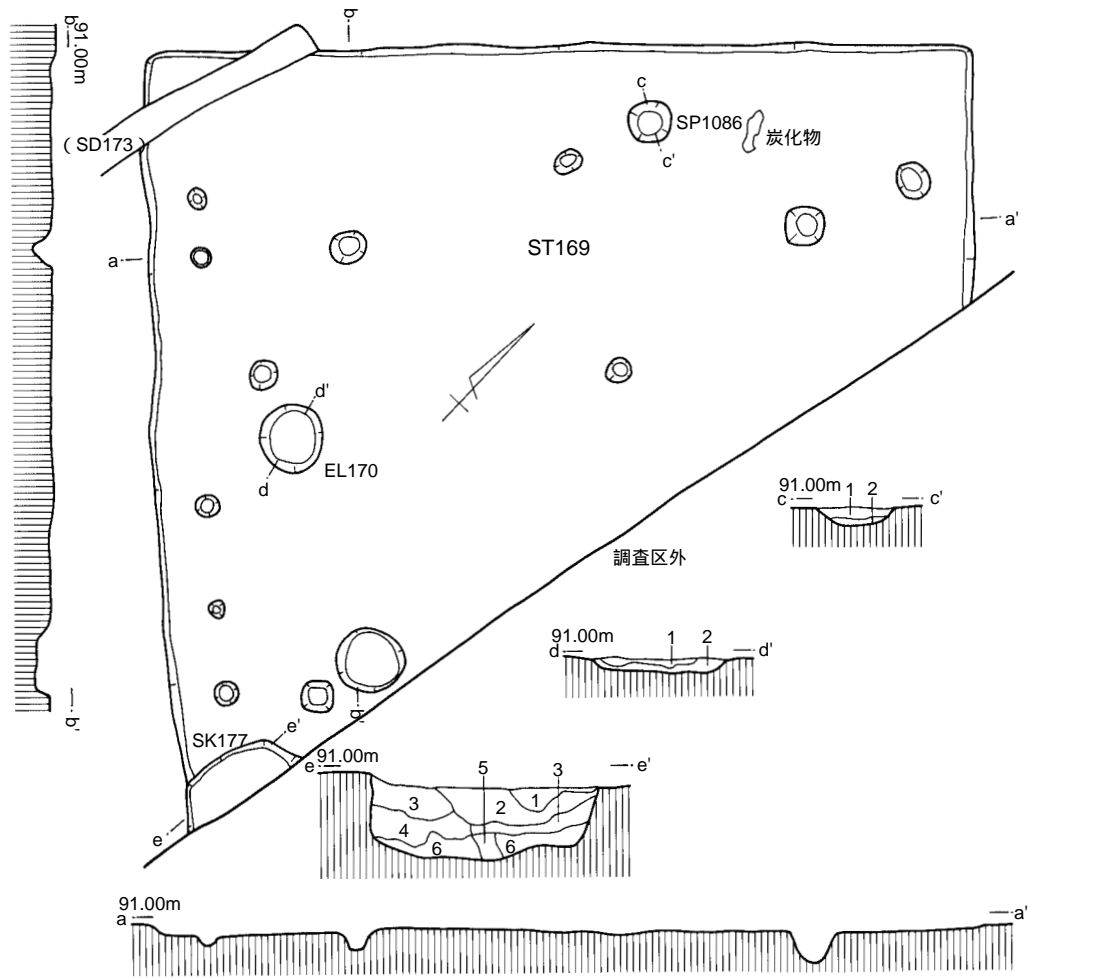
S T 179 (第4図)

B区21~22-8~9Gで検出された。南西半がS D 181に切られ、北西壁面中央がS T 180に切られる。規模および平面形は東西3.5m、南北3.2mの不整形方形を呈するものと考えられる。

長軸方位はN-63°-Eである。床面はやや凹凸があるが貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。南西隅にピットが1基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。

S T 180 (第4図)

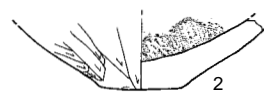
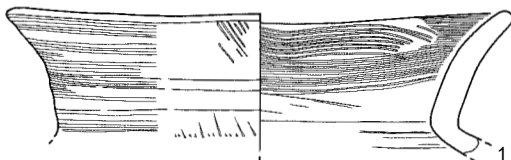
B区21~22-8~9Gで検出された。南西角がS T 179を切る。規模および平面形は東西4.4m、南北5.0mの不整形方形を呈する。主軸方位はN-132°-Wである。床面はやや緩やかな起伏があるが貼床は認められない。壁の立ち上がりは南西辺・北東辺は緩やかで、南東辺・北西辺はやや急である。径40cm、深さ10cmのピットが2基と、小ピットが多数検出されたが、柱穴かどうかは検討を要する。カマドは、南壁の東寄りに煙道跡を検出した。



ST169 内	1	7.5Y2/1	黒色	微砂質粘土	(炭化粒子と炭化ブロックを多量に含む。よく焼けている。)
EL170	2	10YR3/1	黒褐色	微砂質粘土	(炭化粒子を少量含む。)
SP1086	1	7.5Y3/1	黒褐色	微砂質粘土	(炭化粒子と焼土粒子と焼土ブロックを多量に含む。やや堅くしまっている。)
ST169 内	2	10YR2/1	黒色	微砂質粘土	(炭化ブロックを少量含む。やや堅い。)
ST169 内	1	7.5YR4/1	褐灰色	微砂質粘土	(炭化粒子少々、浅黄橙色焼土と明赤褐色焼土をそれぞれ塊で少量含む。)
SK177	2	7.5YR4/1	褐灰色	微砂質粘土	(炭化材と浅黄橙色焼土の固まりと橙色焼土を点状に含む。)
	3	7.5YR5/1	褐灰色	微砂質粘土	(赤褐色焼土粒子を多量に含む。)
	4	7.5YR	褐灰色	微砂質粘土	(赤褐色焼土粒子を多量に含む。)
	5	5YR3/1	黒褐色	微砂質粘土	(橙色焼土粒子を少量含む。)
	6	7.5YR4/1	褐灰色	微砂質粘土	(赤褐色焼土粒を多量に含む。)

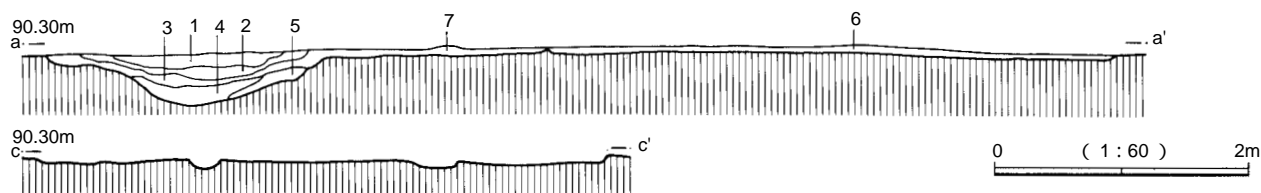
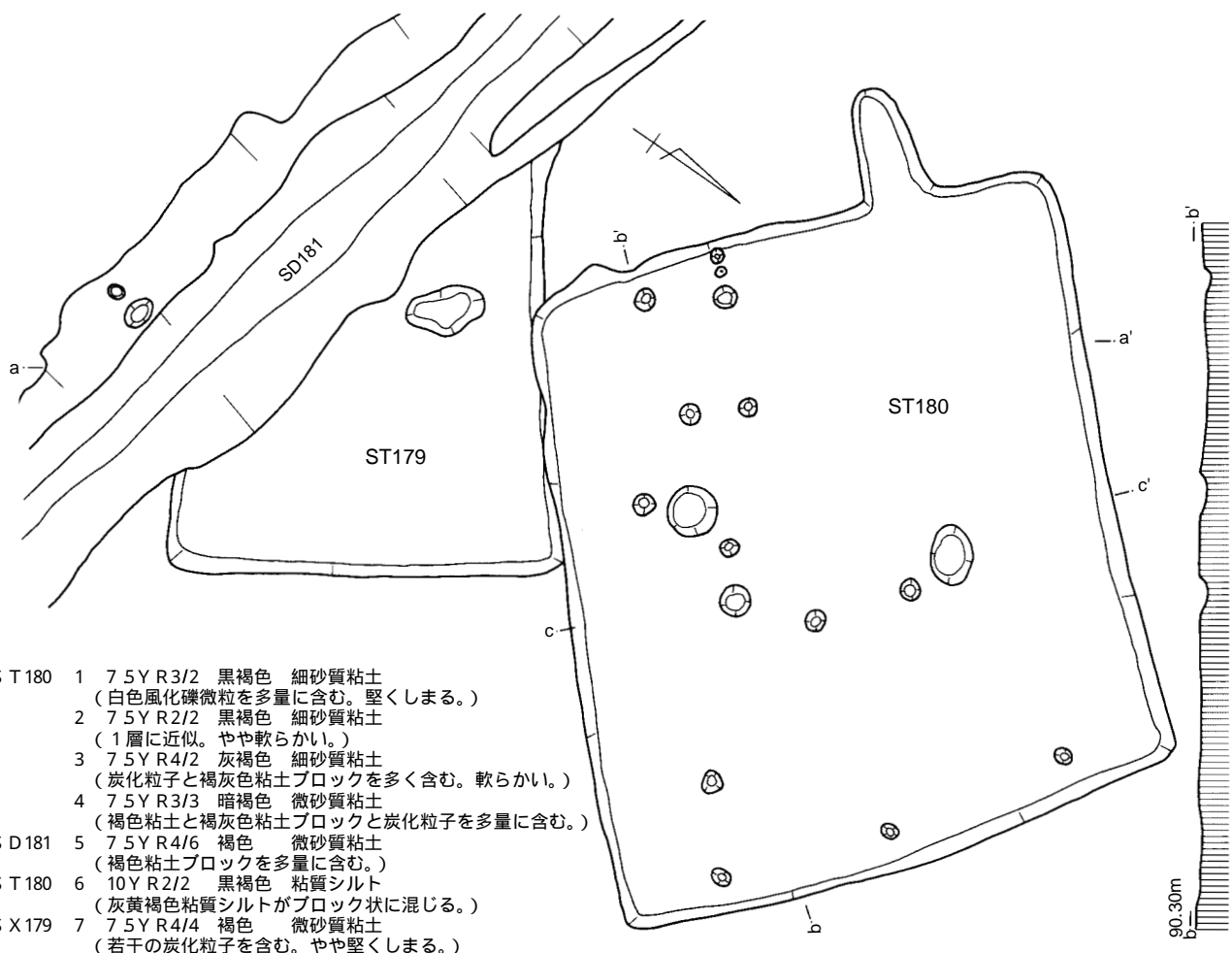
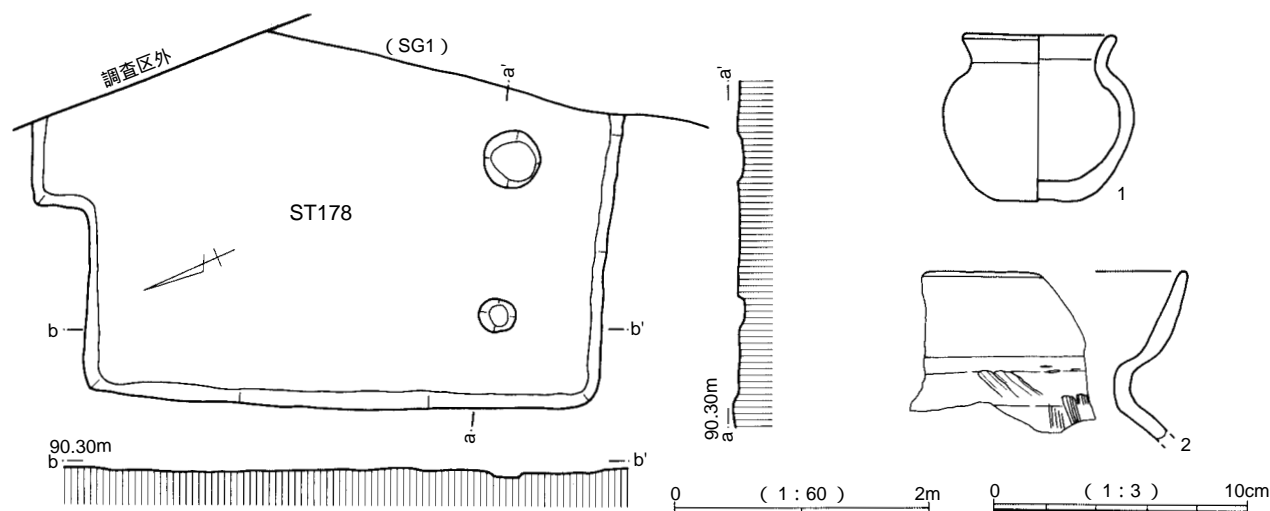
遺構平面図 0 (1:60) 2m

土層断面図 0 (1:30) 1m



0 (1:3) 10cm

第3図 ST169竪穴住居跡、出土遺物



第4図 ST178・179・180竪穴住居跡、ST178出土遺物

S T 184 (第5図)

B区21~22-9~10Gで検出された。南西角がS T 185を切る。規模および平面形は一辺3.1mの方形を呈するもの。主軸方位はN-95°-Eである。覆土は黒色粘土質シルトの一層からなり、土器片と炭粒をわずかに含む。床面はやや緩やかな起伏があるが貼床は認められない。

壁の立ち上がりは緩やかである。主柱穴は4基確認された。これらは、住居の四隅から約1m内側に位置し、径20cm、深さ5cmを測る。南壁沿いにある3基の小ピットは、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。遺物は、土師器の高坏の中実の柱状部(1)を図化し得た。柱状部は、中央部はやや丸みがあり、端はしぼられている。

S T 185 (第5図)

B区21~22-9~10Gで検出された。北辺西寄りをS K 186に切られ、北東角をS T 184に切られる。規模および平面形は東西3.1m、南北2.9mの不整形方形を呈する。長軸方位はN-96°-Eである。覆土は黒褐色粘土質シルトの一層からなり、土器片と炭粒をわずかに含む。床面はやや緩やかな起伏があるが貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。主柱穴は6基確認された。径15cm、深さ5cmを測る。貯蔵穴は認められない。

S T 187 (第6図)

B区20~22-9~10Gで検出された。北東角がS T 188を切る。規模および平面形は東西3.4m、南北3.2mの不整形方形を呈する。長軸方位はN-74°-Wである。覆土は黒褐色粘土質シルトの一層からなり、土器片と炭粒をわずかに含む。床面は地山の傾斜に沿って北に向かって下がり、やや起伏がある。貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。径20cm~40cm、深さ10cmのピットが3基と、小ピットが9基検出された。南東角のピットはその配置状況から本壁穴住居跡の主柱穴とみられるが、それ以外は不明である。貯蔵穴は認められない。

S T 188 (第6図)

B区21~22-9~10Gで検出された。西辺南寄りがS T 187に切られ、北辺がS D 193に切られる。規模および平面形は東西2.9m、南北3.6mの長方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN-23°-Wである。床面は地山の傾斜に沿って北に向かってやや下がる。貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかであるが、南辺はやや急である。径10~20cm、深さ5cmのピットが10基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。

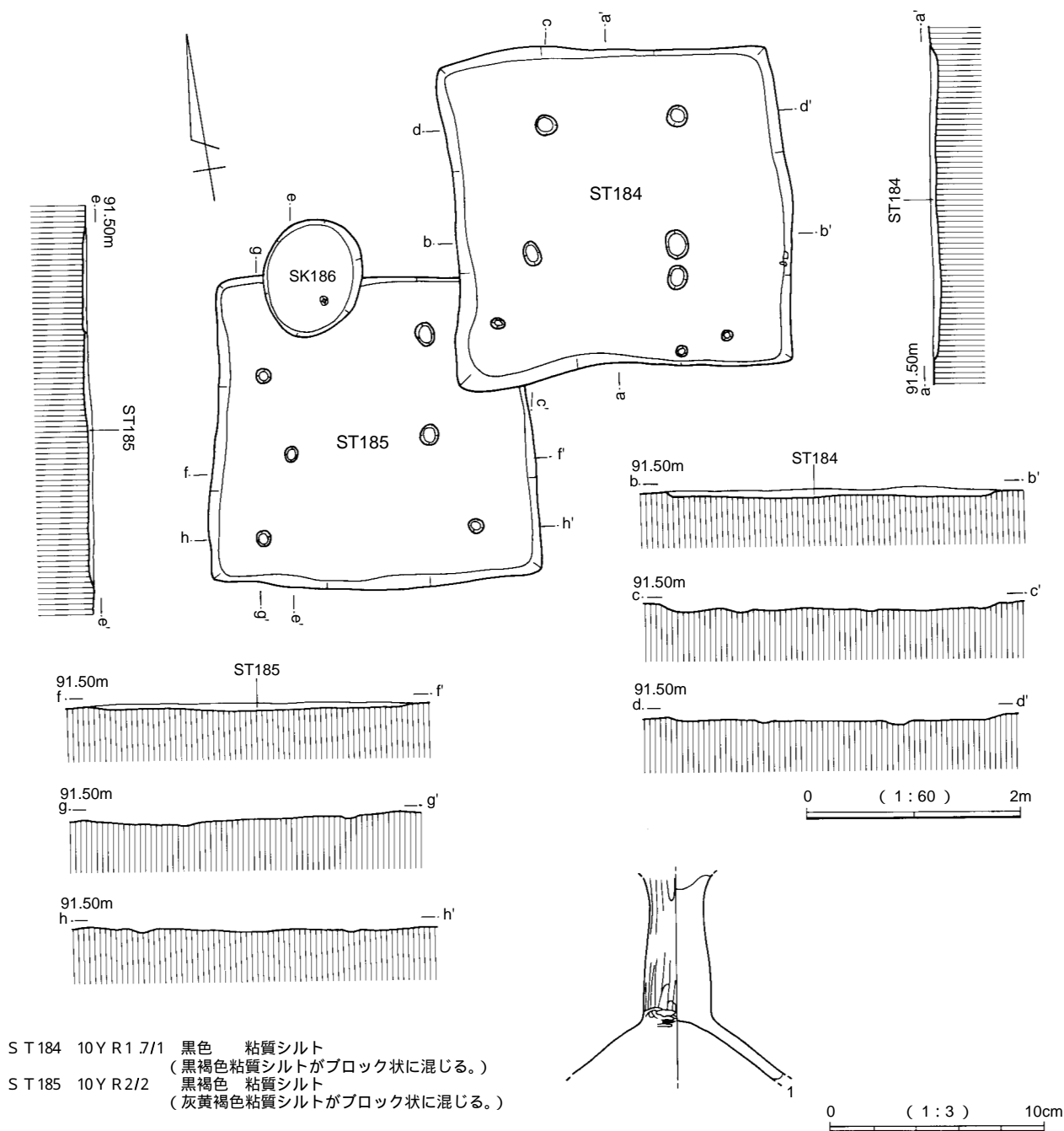
遺物は、土師器の甕の口縁部(1)と、土師器の壺の口縁部(2・3)を図化し得た。3は棒状浮文の複合口縁で、朱彩の顔料がわずかに付着している。S D 191~S D 193をはさんで、S T 197出土の破片と接合した。

S T 196 (第7図)

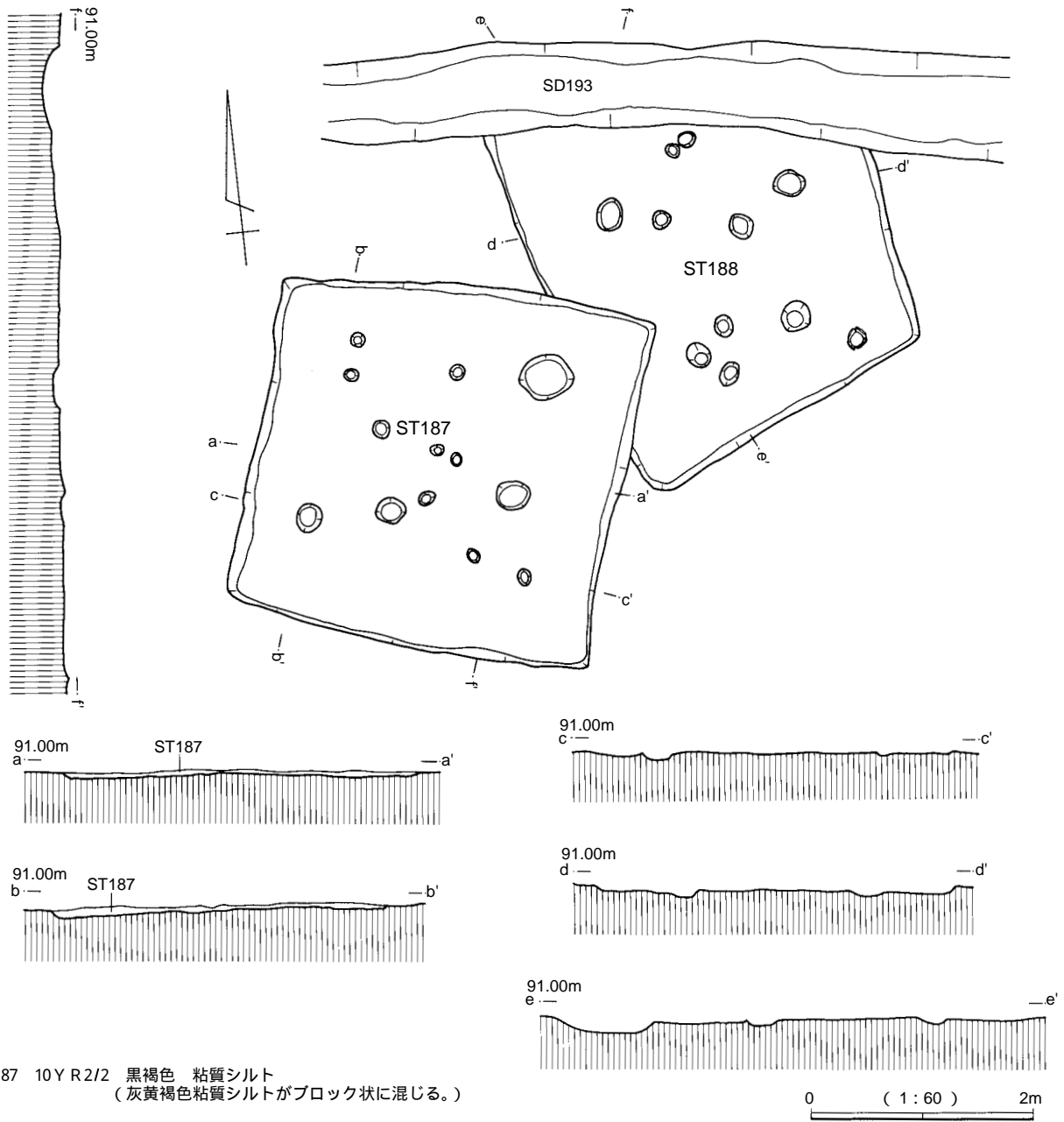
B区22~23-10~11Gで検出された。東半が調査区外となり、北辺がS T 1009の南辺を切る。規模および平面形は一辺3.4mの方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN-24°-Eである。床面は北半が南半より10cmほど低くなっている。貼床は認められない。壁の立ち上がりはやや急である。主柱穴は4基確認された。径30cm、深さ5cmを測る。

ST1009 (第7図)

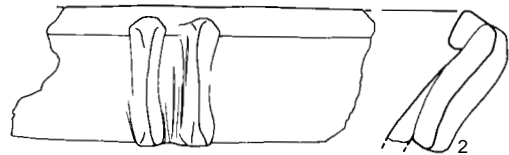
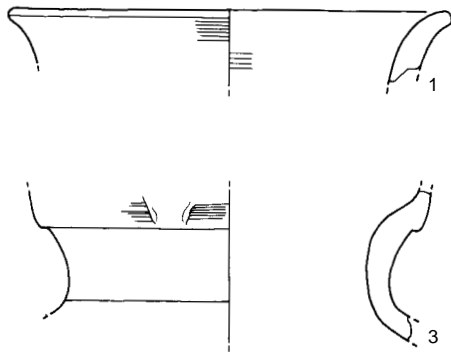
B区22~23-10~12Gで検出された。東半が調査区外となり、南辺がST196に切られる。規模および平面形は一辺3.0mの方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN-23°-Eである。床面はほぼ平坦で、西側中央に径30cm程の範囲で焼土が検出された。貼床は認められない。壁の立ち上がりは北辺および西辺の一部に確認できる。緩やかである。西壁角および北壁沿いに3基の柱穴が検出された。径20cm、深さ5cmを測る。西壁中央部の焼土を囲むように4基の小ピットも検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。



第5図 ST184・185竪穴住居跡、ST184出土遺物

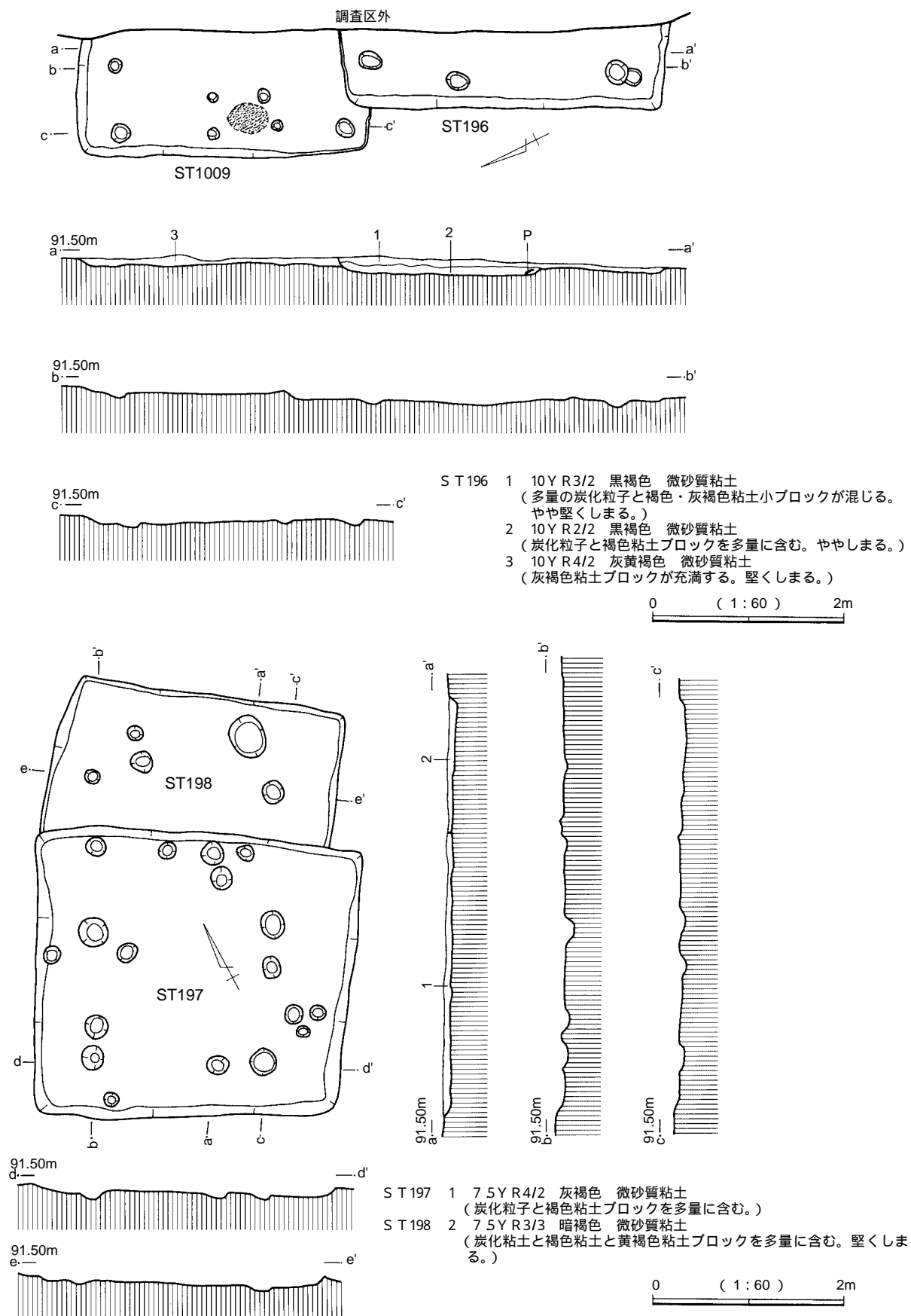


S T 187 10Y R 2/2 黒褐色 粘質シルト
 (灰黄褐色粘質シルトがブロック状に混じる。)



0 (1 : 3) 10cm

第 6 図 ST187・188 竪穴住居跡、ST188 出土遺物



第 7 図 ST196・197・198・199 竪穴住居跡

S T 197 (第7図)

B区21~22-10~11Gで検出された。北半がS T 198と重複し、これを切っている。西辺がS T 199を切っている。規模および平面形は東西3.5m、南北3.0mの不整形を呈する。長軸方位はN - 60° - Wである。床面はやや緩やかな起伏があるが貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。径10~30cm、深さ5~10cmのピットが18基壁面に沿って検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。

S T 198 (第7図)

B区21~22-10~11Gで検出された。南半がS T 197に切られている。規模および平面形は一辺2.8mの方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN - 50° - Wである。床面は地山の傾斜に沿って北に向かってやや下がる。貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。

北壁沿いに径40cm、深さ5cmのピットが1基と、径10~20cm、深さ5cmのピットが4基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。

S T 199 (第8図)

B区21~22-10~11Gで検出された。南東角がS T 197に切られ、西角がS T 200を切り、西辺がS T 1001を切る。規模および平面形は一辺4.6mの方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN - 15° - Wである。床面は硬くしまり、若干の起伏が認められる。貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。径10~30cm、深さ5~10cmのピットが19基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。

S T 200 (第8図)

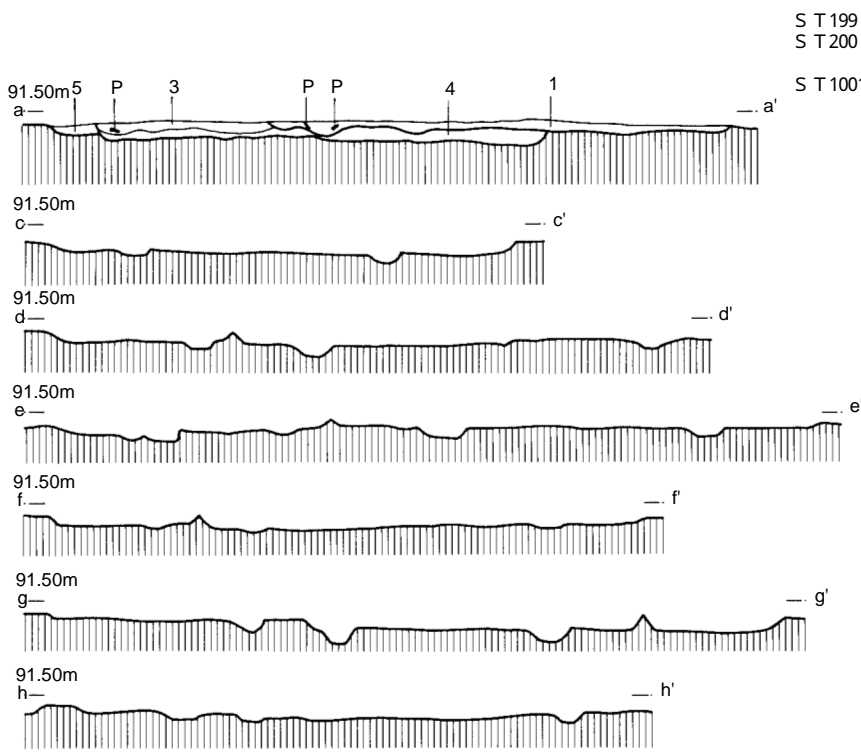
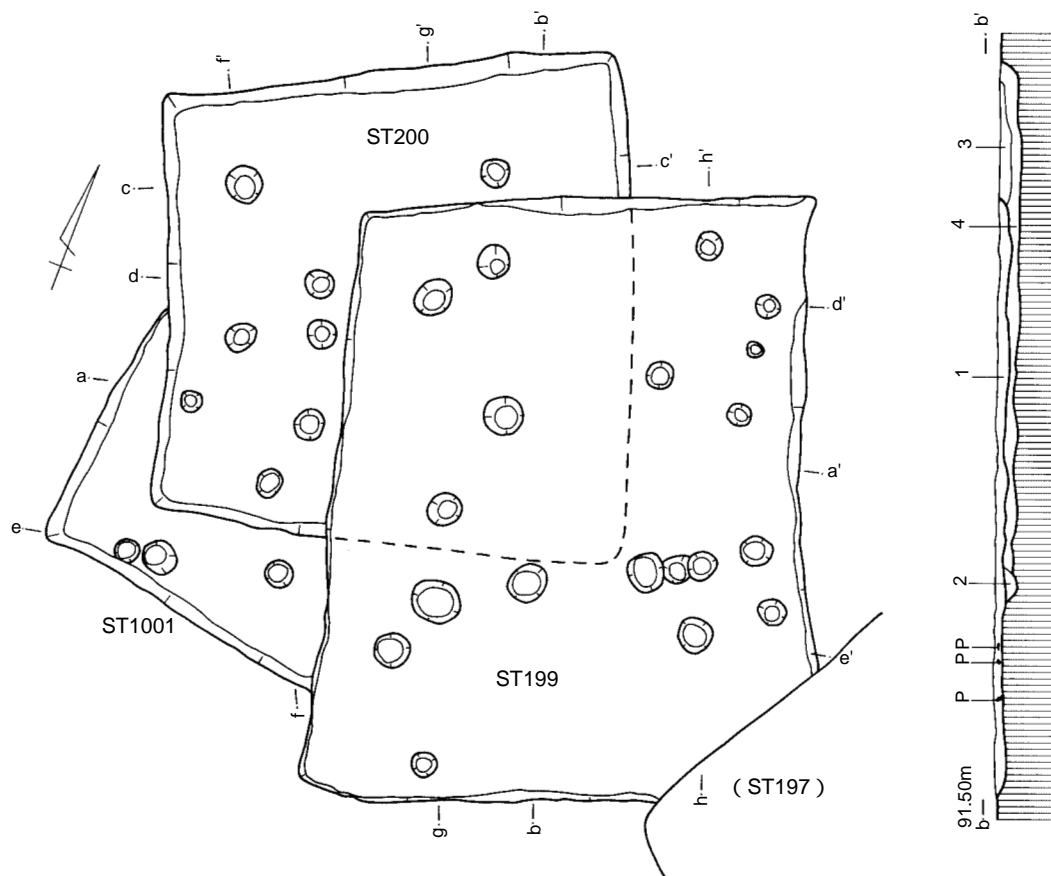
B区20~22-10~11Gで検出された。南東部4分の1がS T 199に切られ、南角がS T 1001を切る。規模および平面形は東西3.4m、南北3.7mの不整形を呈する。長軸方位はN - 65° - Eである。床面はやや緩やかな起伏があるが貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。径10~20cm、深さ5~10cmのピットが8基検出された。

S T 1001 (第8図)

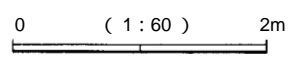
B区20~22-10~11Gで検出された。大半をS T 199とS T 200に切られ、南西角の一部が残存する。平面形は方形を呈すると考えられるが、規模は不明である。長軸方位はN - 80° - Wである。床面は硬くしまり、ほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは西辺は緩やかであるが、南辺は急である。径10~20cm、深さ5~10cmのピットが3基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。

S T 1003 (第9図)

B区19~21-10~11Gで検出された。大半をS T 1002、S T 1004、S T 1007に切られ、東角の一部が残存する。規模および平面形は一辺2.9mの方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN - 7° - Eである。床面は硬くしまり、ほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。径20cm、深さ5cmのピットが7基検出された。



- ST199 1 5Y R3/1 黒褐色 微砂質粘土
(炭化粒子と褐色粘土粒子と褐色粘土小ブロックを多量に含む。やや軟らかい。)
- ST200 1 5Y R3/1 黒褐色 微砂質粘土
(炭化粒子と褐色粘土粒子と褐色粘土小ブロックを多量に含む。やや軟らかい。)
- ST1001 2 7.5Y R3/3 暗褐色 微砂質粘土
(炭化粒子と粘土粒を多量に含む。軟らかい。)
- 3 10Y R3/4 暗褐色 微砂質粘土
(粘土粒子と粘土小ブロックが混じる。やや堅くしまる。)
- 4 10Y R4/4 褐色 微砂質粘土
(褐色・褐灰色・黒褐色粘土ブロックが多量に混じる。堅くしまる。)
- 5 10Y R3/1 黒褐色 微砂質粘土
(粘土粒子と炭化粒子を少量含む。)



第8図 ST199・200・1001 竪穴住居跡

S T 1002 (第10図)

B区19~21-10~12Gで検出された。南半でS T 1003、S T 1004、S T 1005を切っている。規模および平面形は東西6.2m、南北6.5mの不整形を呈する。長軸方位はN-58°-Eである。床面はほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。主柱穴は4基確認された。これらは、住居の四隅から約2m内側に位置し、径20~25cm、深さ5cmを測る。また、東壁を除く三面の壁を取り囲む多数の小ピットも検出されたが、柱穴かどうかは不明である。屋内の施設は2基検出された。S K 1109は北角に位置し、長径170cm×短径90cmの楕円形で深さ10cmを測る。北側の覆土には多量の炭化粒子と若干の焼土粒子を含み土師器甑が検出されたので炉の可能性も考えられる。S K 1115は北壁沿い中央寄りに位置し、径90cm、深さ10cmを測る。土師器坏1点、土師器甕1点を含む。

遺物は、土師器の鉢2点(3、4)、甑1点(5)、甕の口縁部(1、2)を図化し得た。3はS K 1115出土の鉢で、平底で大きくくの字に開いた単純口縁を持つ。5の甑は、口縁部に輪積痕があり、内外面にミガキ調整を施し、形態的に有孔鉢に近い。1と2の口縁は、くの字に外反する。

S T 1004 (第9図)

B区19~21-10~11Gで検出された。北辺をS T 1002に切られ、南辺をS T 1006に切られる。また、東角でS T 1005を切り、西角でS T 1003を切る。規模および平面形は東西5.7m、南北4.5mの長方形を呈する。長軸方位はN-72°-Eである。床面は硬くしまり、ほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。径20~35cm、深さ5cmのピットが12基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。

S T 1005 (第11図)

B区19~20-10~11Gで検出された。西半をS T 1002、S T 1004、S T 1006に切られる。

規模および平面形は一辺4.6mの方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN-36°-Eである。床面はほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。径20~30cm、深さ10cmのピットが住居全体に14基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。遺物は、甕の底部1点を図化し得た。

S T 1006 (第11図)

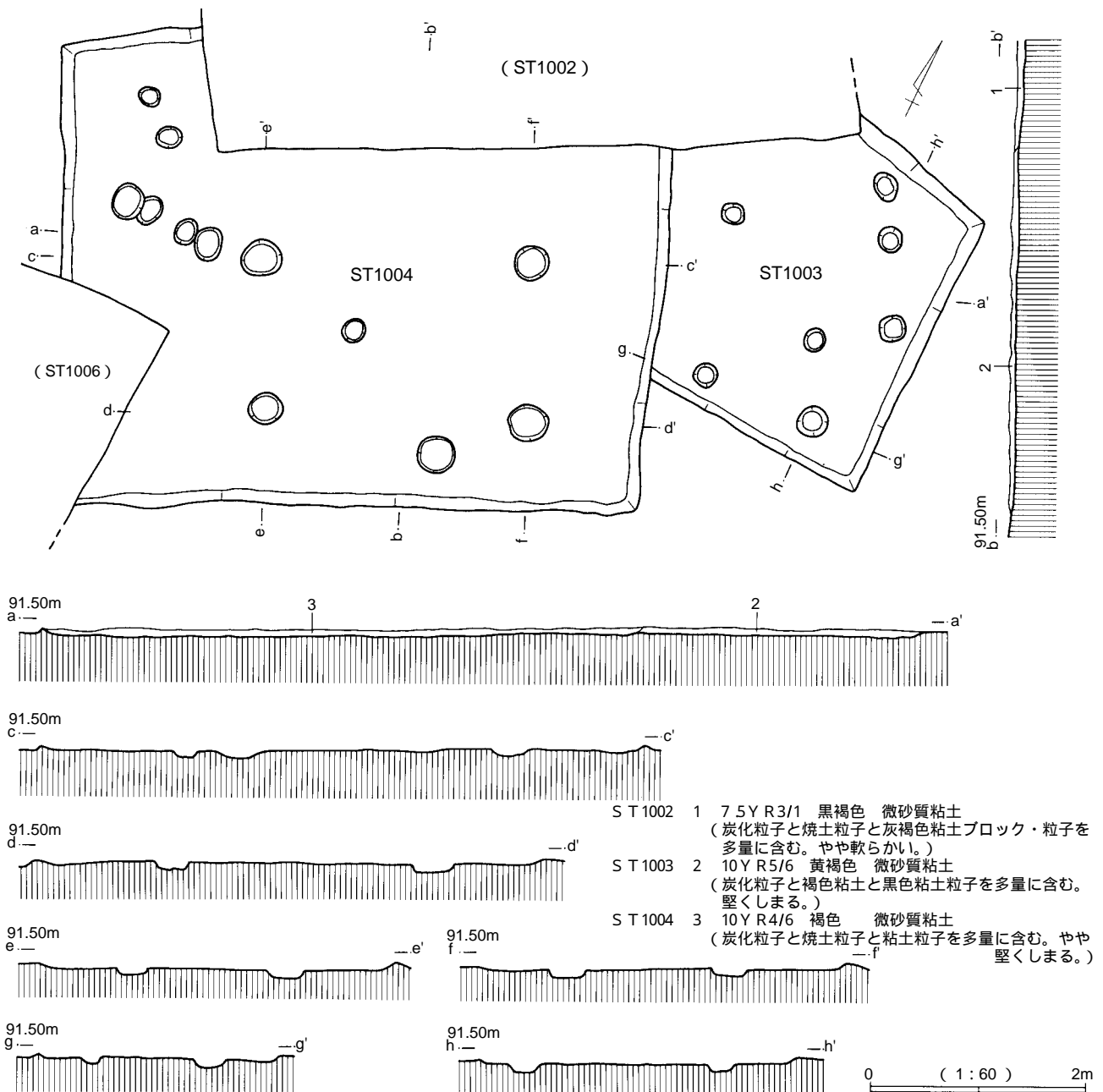
B区19~20-9~11Gで検出された。南半をS D 194に切られ、北辺がS T 1004、S T 1005を切る。規模および平面形は一辺3.9mの方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN-85°-Wである。床面は硬くしまり、ほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。径20~30cm、深さ10cmのピットが5基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。

S T 1015 (第12図)

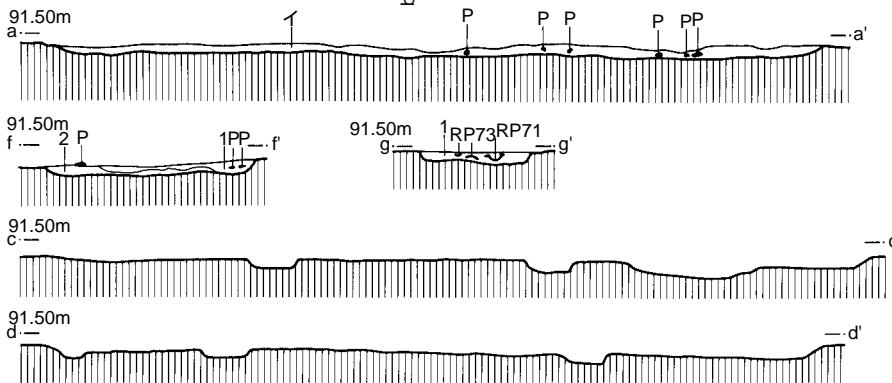
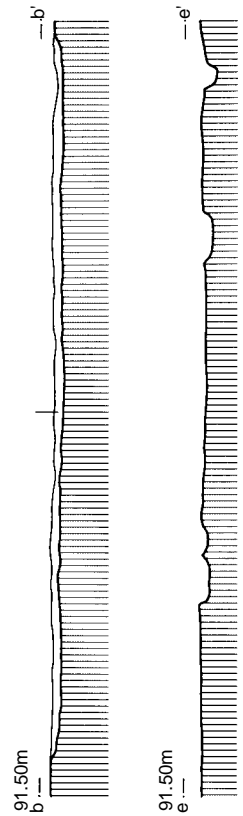
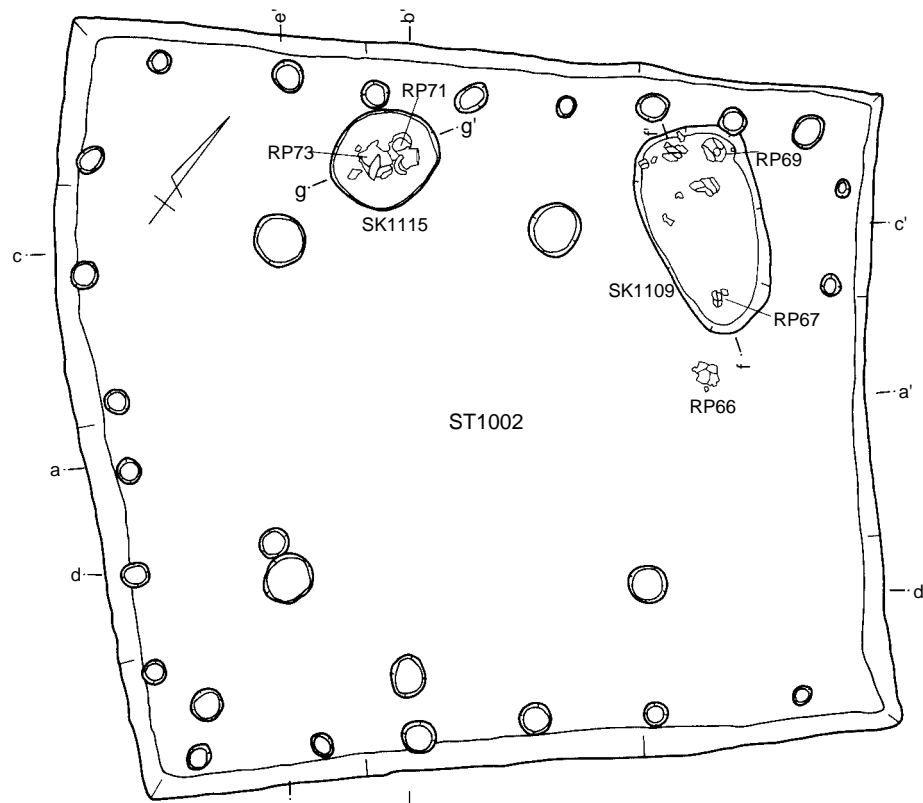
B区20~22-11~13Gで検出された。S T 1016と重複し、これを切る。規模および平面形は東西6.6m、南北4.2mの長方形を呈する。長軸方位はN-72°-Wである。床面は地山と同じ高さで、ほぼ平坦で貼床は認められない。壁は検出面が低く、床面が露出している。壁溝は、幅20cm、床面からの深さ10cm前後で西辺・南辺・東辺に掘り込まれ、南辺中央部では遺構の中

心に向けて150cm掘り込まれている。東辺はやや広い。径20~40cm、深さ10cmのピットが住居中央を中心に20基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。屋内の施設は2基検出された。S K 1119は南角に位置し、径70cmの方形に近い円形で深さは25cmを測る。覆土の上層には多量の炭化粒子を含み、下層には炭化材も多量に含み、土師器高坏1点と土師器甕1点を検出する。S P 1122は西壁南寄りに位置し壁溝を切っている。径50cmで深さは25cmを測る。覆土には炭化粒子と焼土を多量に含み、土師器高坏1点を検出する。どちらも炉の可能性が考えられる。

遺物は高坏の坏部2点を図化し得た。1はほぼ直線的に開く。きわめてもろい。1、2ともに棒状の脚部がつくと思われる。

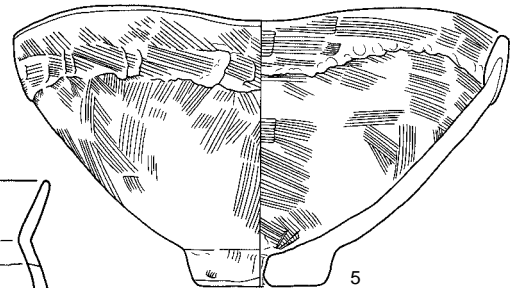
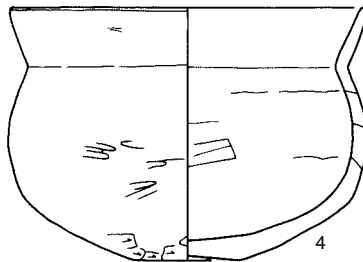
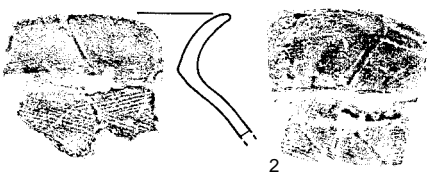
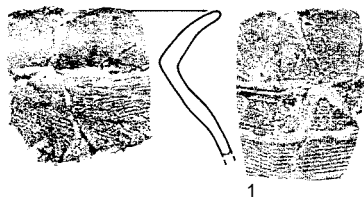


第9図 ST1003・1004竪穴住居跡



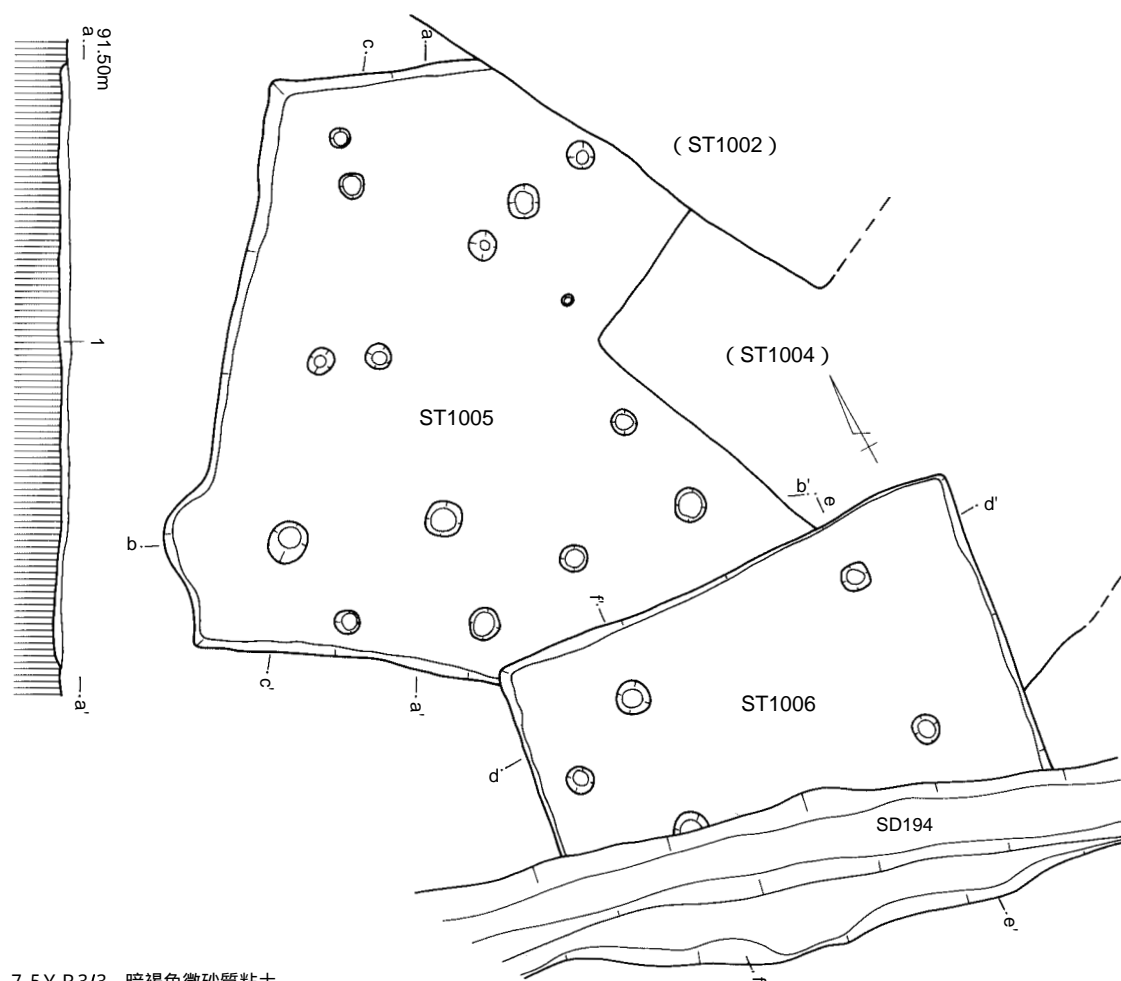
- ST 1002 1 7 5 Y R 3/1
黒褐色 微砂質粘土
(炭化粒子と焼土粒子と灰褐色粘土ブロック・粒子を多量に含む。やや軟らかい。)
- SK 1109 1 7 5 Y R 4/2
灰褐色 微砂質粘土
(炭化粒子や材が多量に含まれる。軟らかい。)
- SK 1115 2 7 5 Y R 6/2
灰褐色 微砂質粘土
(多量の粘土ブロックや粒子を含む。軟らかい。)

0 (1 : 60) 2m

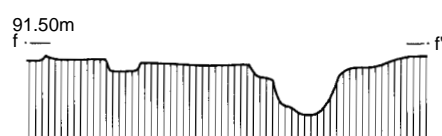
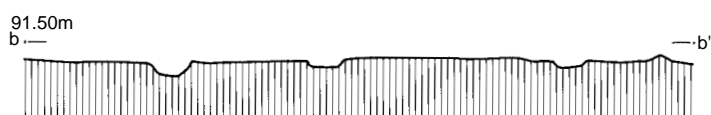


0 (1 : 3) 10cm

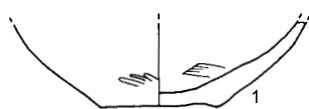
第10図 ST1002竪穴住居跡、出土遺物



S T 1005 7.5Y R3/3 暗褐色微砂質粘土
 (炭化粒子・黒褐色・褐色粘土ブロックを多量に含む。)

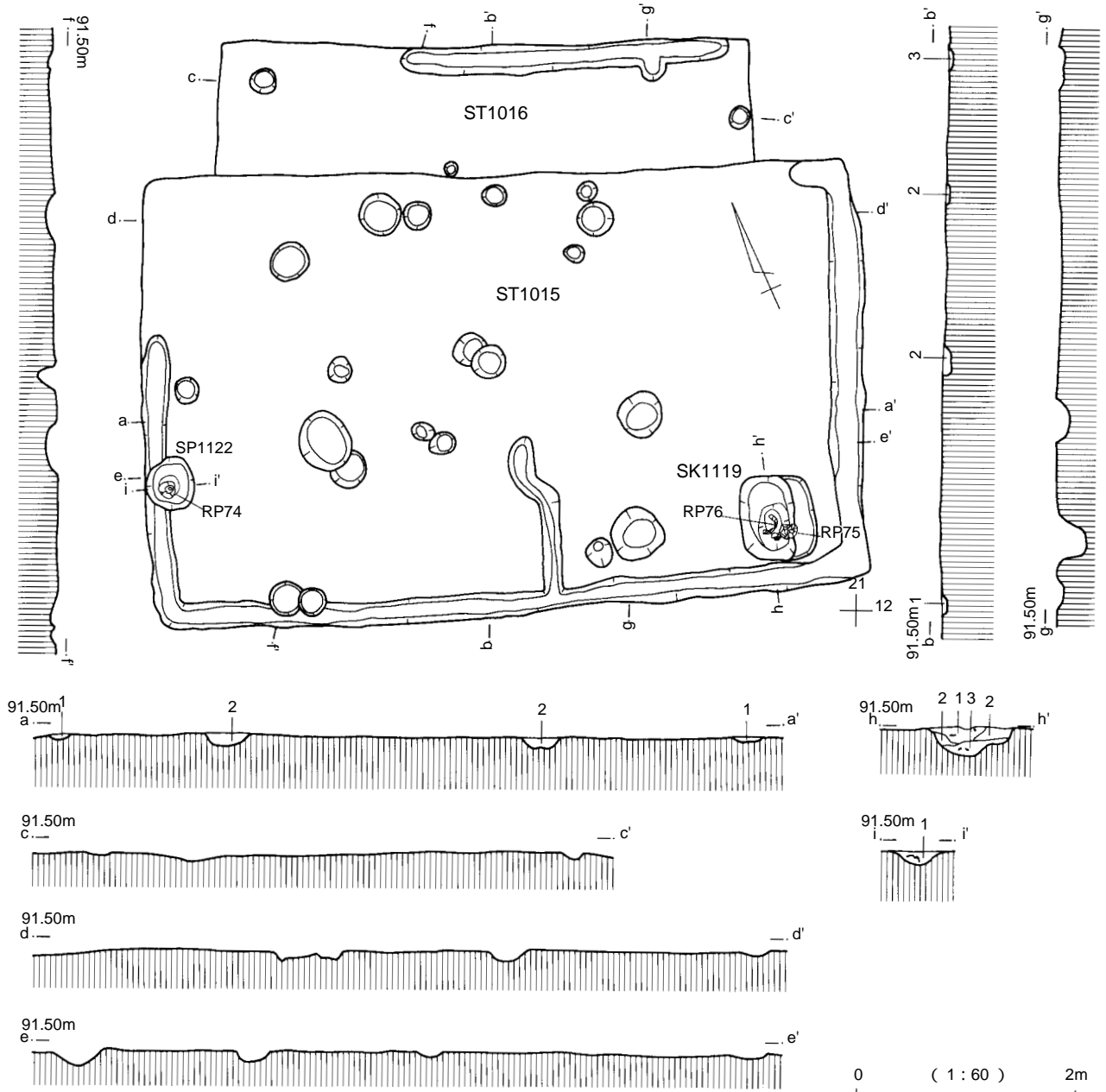


0 (1 : 60) 2m

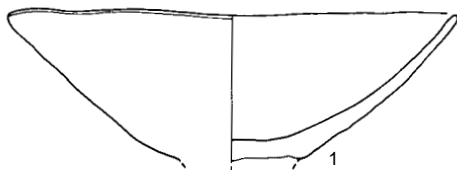


0 (1 : 3) 10cm

第11図 ST1005・1006竪穴住居跡、ST1005出土遺物



S T 1016	1	10 Y R 4/6	褐色	微砂質粘土	(2 に近似する。褐色粘土ブロックを含む。軟らかい。)
S T 1015	2	10 Y R 3/4	暗褐色	微砂質粘土	(炭化粒子と粘土粒子を多量に含む。軟らかい。)
	3	10 Y R 5/6	鈍い黄褐色	微砂質粘土	(褐色粘土ブロックと粒子を多量に含む。堅くしまる。)
S K 1119	1	10 Y R 3/2	黒褐色	微砂質粘土	(炭化粒子と褐色粘土粒・小ブロックを多量に含む。軟らかい。)
	2	10 Y R 3/1	黒褐色	微砂質粘土	(炭化粒子と炭化材を非常に多く含む。軟らかく粘性に富む。)
	3	10 Y R 5/4	鈍い黄褐色	微砂質粘土	(褐灰色粘土ブロック・粒子が充滿する。)
S K 1122	1	10 Y R 3/4	暗褐色	微砂質粘土	(炭化粒子と粘土粒子と焼土粒子を多量に含む。軟らかい。底面で炭化材が多く混じる。)



0 (1 : 3) 10cm

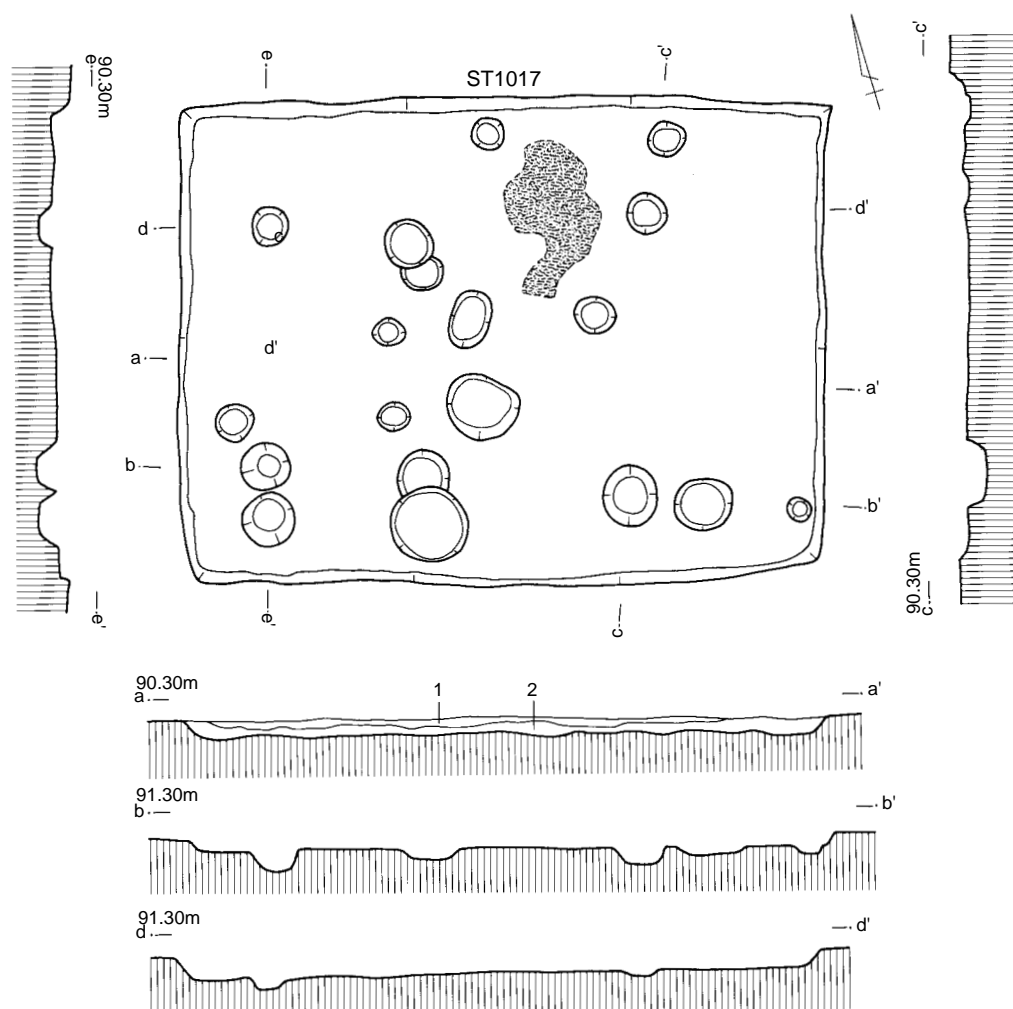
第12図 ST1015・1016竪穴住居跡、ST1015出土遺物

S T 1016 (第12図)

B区20~22-11~13Gで検出された。南側大半をS T 1015に切られる。規模および平面形は一辺4.9mの方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN-69°-Wである。床面は地山と同じ高さで、ほぼ平坦で貼床は認められない。床面が露出して、壁はほとんど確認できない。壁溝は、E D 1120が北辺中央より東側に掘り込まれている。径20cm、深さ5cmのピットが3基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。

S T 1017 (第13図)

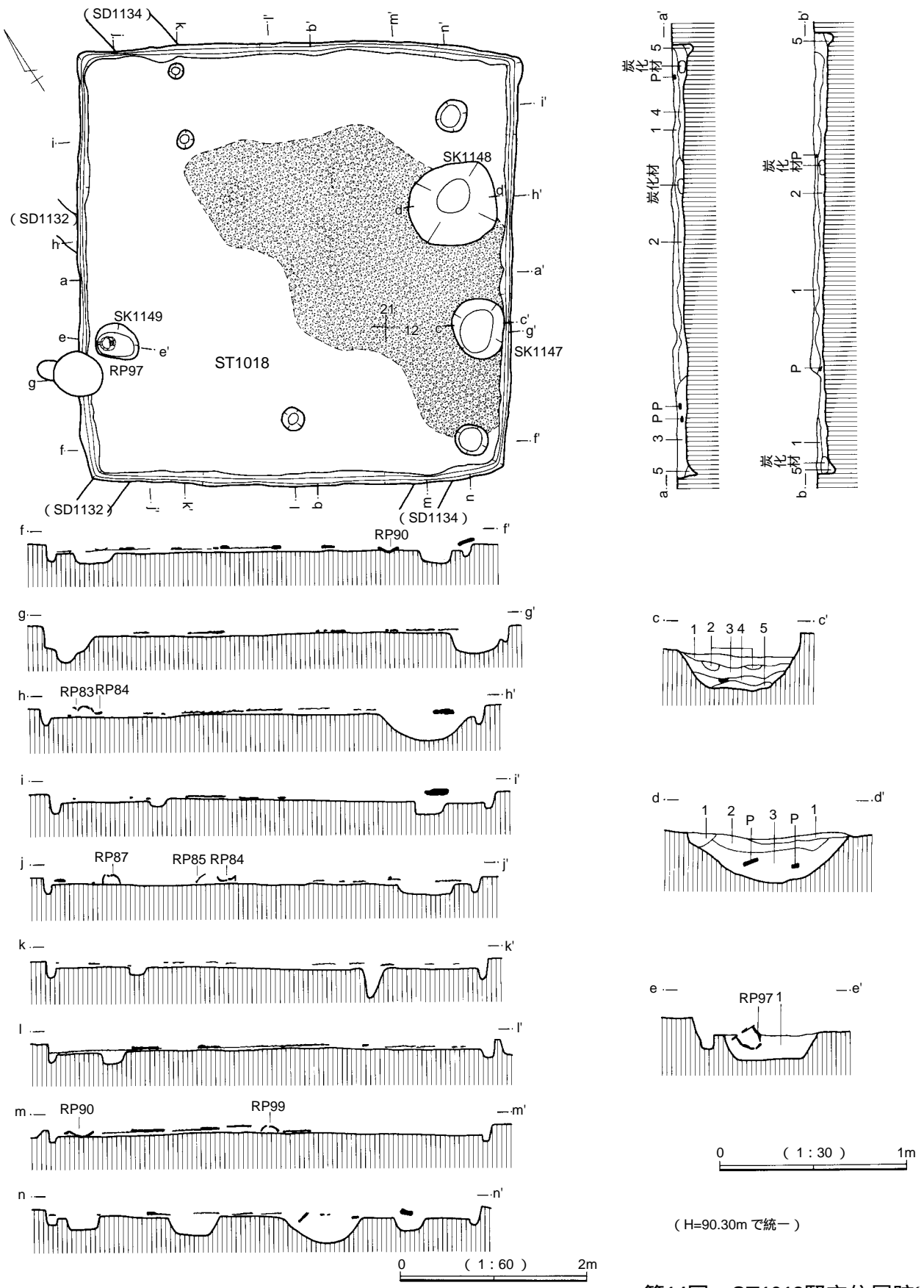
B区21~22-12~13Gで検出された。西辺でS T 1038を切る。規模および平面形は東西3.4m、南北2.5mの長方形を呈する。長軸方位はN-80°-Wである。床面は緩やかな起伏が認められる。北側中央に径60cm程の範囲で焼土が検出された。貼床は認められない。壁の立ち上がりは全周において急である。径25~60cm、深さ5~15cmのピットが住居全体に20基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。



- S T 1017 1 10Y R5/1 褐灰色 微砂質粘土
(褐色粘土粒・小ブロックを多量に含む。やや堅く締まり、粘性が非常に強い。)
2 10Y R4/1 褐灰色 微砂質粘土
(黒褐色粘土ブロック・粒子を多量に含む。)

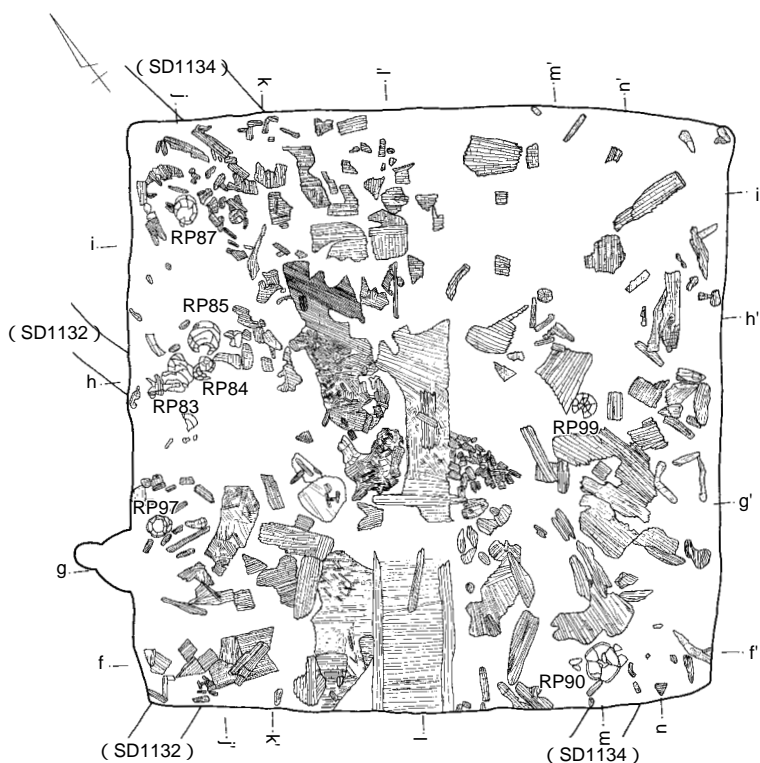
0 (1 : 40) 2m

第13図 ST1017竪穴住居跡

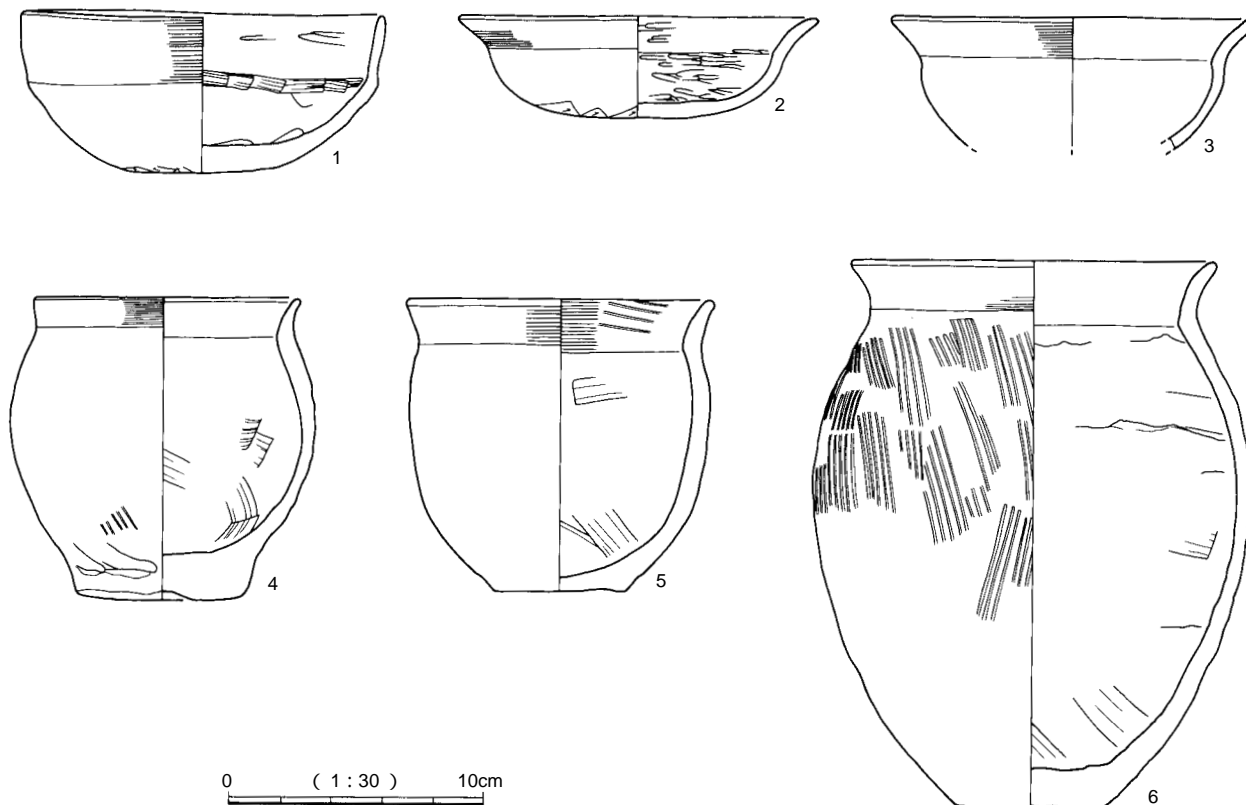


第14図 ST1018竪穴住居跡(1)

- ST 1018
- 1 7.5Y R5/1 褐灰色 細砂質粘土
(炭化粒子と炭化材と焼土粒子と黄褐色粘土小ブロックが、南側壁付近で非常に多く混じる。)
 - 2 7.5Y R4/1 褐灰色 細砂質粘土
(1に近似する。その間に焼土塊や炭化材が多く混じる。)
 - 3 2.5Y R5/4 鈍い赤褐色 微砂質粘土
(焼土粒や炭化粒や褐灰色粘土ブロックが多量に混じる。)
 - 4 5Y R3/1 黒褐色 微砂質粘土
(炭化粒子と焼土粒子・小ブロックが多く混じる。軟らかい。)
 - 5 7.5Y R6/6 橙色 微砂質粘土
(炭化・焼土粒子と褐灰色粘土ブロックが多量に混じる。やや堅くしまる。)
- SK 1147
- 1 5Y R3/2 暗赤褐色 微砂質粘土
(炭化材と焼土を各40%含む。もろい。)
 - 2 10Y R3/1 黒褐色 微砂質粘土
(ほぼ均質。)
 - 3 10Y R5/2 灰黄褐色 粘質シルト
(黒褐色粘土質シルトがまだらに20%混じる。)
 - 4 N3/0 暗灰色 灰
(大粒の焼土粒が30%混じる。水分を多く含み、非常にもろい。)
 - 5 10Y R4/3 にぶい黄褐色 微砂質粘土
(ほぼ均質だが、ごく小径の炭化粒子がわずかに混じる。)
- SK 1148
- 1 10Y R2/1 黒色 微砂質粘土
(炭化材を80%含む。もろい。)
 - 2 10Y R2/2 黒褐色 微砂質粘土
(堅くしまる。)
 - 3 10Y R4/3 鈍い黄褐色 微砂質粘土
(2がブロック状に5%混じる。)
- SK 1149
- 1 10Y R2/1 黒色 微砂質粘土
(炭化材を80%含む。もろい。)

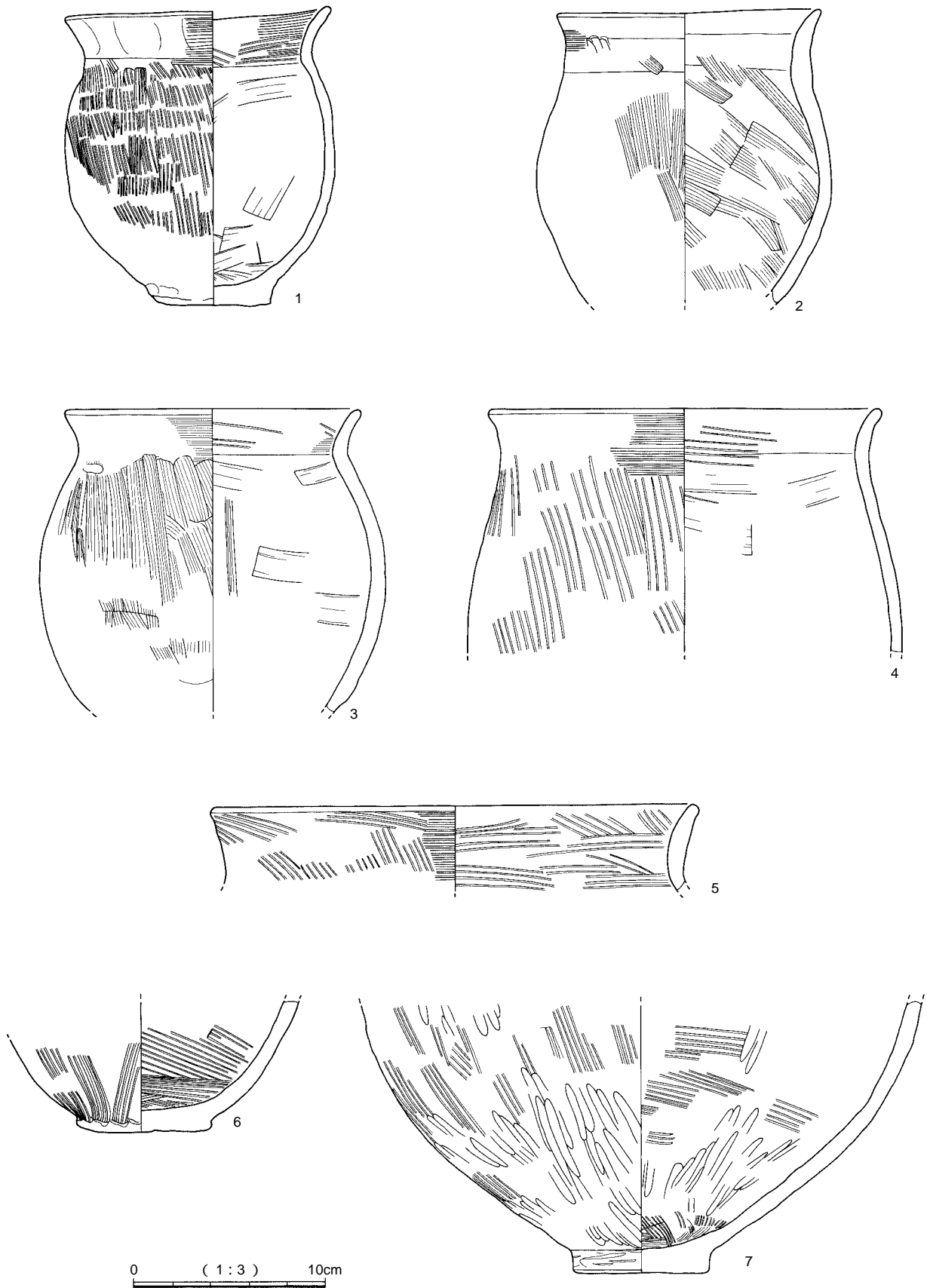


0 (1:60) 2m



0 (1:30) 10cm

第15図 ST1018竪穴住居跡(2) 出土遺物(1)



第16図 ST1018出土遺物(2)

S T 1018 (第14・15・16図)

B区19~21-11~13Gで検出された。西半でS D 1134、S T 1020、S D 1132、S T 1019を切り、北辺でS T 1021を切り、南角でS K 1125を切る。規模および平面形は東西4.6m、南北4.8mの不整形を呈する。長軸方位はN-53°-Wである。床面全体に炭化物及び散在する炭化材が検出された。炭化物層は5~10cmの厚さで床面を覆う。焼失家屋と考えられる。南辺中央部には幅60cmの平行する炭化材の間に植物繊維層が堆積し、壁材の倒壊したものと考えられる。炭化物層を取り除くと、南部中央寄りがやや高く凹凸があり周囲より堅く踏みしめられており貼床と認められる。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。壁溝は、幅20cm、床面からの深さ15cm前後で全周において掘り込まれている。主柱穴が東角と北角に2基検出された。径30cm、深さ15cmを測る。屋内の施設と考えられるものは3基検出された。S K 1147は東壁南寄りに位置し、径60cm深さは20cmを測る。覆土の上層には多量の炭化材と焼土を含み、下層には土器片をわずかに含む。S K 1148は東壁北寄りに位置し、径90cm深さは25cmを測る。覆土の上層には多量の炭化材と焼土を含み、下層には土器片をわずかに含む。S K 1149は西壁北寄りに位置し、径40cm深さは15cmを測る。上層に斜め上を向いたかたちで土師器甕1点が検出された。

遺物は、土師器の坏3点、甕9点、壺1点を図化し得た。15-1は、平底に近い土師器坏で、口縁部下位でくの字に折れて、口縁部が直立する。15-2・3の土師器坏は、口縁部がくびれて外反し、内面に稜を持つ。16-4・5は甕の口縁部のみでゆるやかに外反する。次の3点は口縁部が外反し径がほぼ同じ甕である。16-3の体部は丸みを呈して、体部に最大径を持つ。八ケ目の調整痕が明瞭に認められる。16-2は長い頸部を持ち、頸部から口縁部にかけてはゆるやかに外反し、口縁部径体部径がほぼ同じである。15-6は長胴形を呈し、体部中位に最大径を持つ。次の3点は小型甕である。16-1は頸部のくびれがはっきりして口縁部径と体部径はほぼ同じである。底部から体部にかけては直立ぎみに立ち上がる。八ケ目の調整痕が明瞭に認められる。15-4は底部から体部にかけて直立して立ち上がり、球状にふくらんだ体部を持ち、体部中位に最大径を持つ。口縁部のくびれは弱い。15-5は口縁部がゆるやかに外反して開き、口縁部に最大径を持つ。16-6は甕の台付き底部のみで、外面に煤が付着している。16-7は壺の下部で、底部は平底で体部は球状を呈する。内面の底に八ケ目の調整痕が明瞭に認められ、外面一部に煤が付着している。1、3、7、8、10、11、13が同じ胎土と思われる。

S T 1019 (第17図)

B区19~20-11~13Gで検出された。S T 1020の中央部に重複してこれを切り、南東角をS T 1018に切られ、北辺東寄りをS K 1131に切られる。規模および平面形は東西6.9m、南北6.0mの不整形を呈する。長軸方位はN-68°-Eである。床面は地山と同じ高さで、ほぼ平坦で貼床は認められない。検出面が低く、壁の立ち上がりはほとんど確認できない。周溝S D 1132は、幅60cm、床面からの深さ20cm前後で全周において掘り込まれ、北辺中央部で遺構の中心に向かって2m掘り込まれている。主柱穴と考えられるピットは住居の四隅に4基検出された。径50cm、深さ10~50cmを測る。貯蔵穴は認められない。

S T 1020 (第17図)

B区18~21-11~13Gで検出された。中央部にS T 1019が重複して位置して切られている。南東角をS T 1018に切れ、南辺をS X 1014に切られる。また、東辺でS T 1021を切り、北辺でS T 1029を切り、北西角でS T 1023、S T 1024を切る。規模および平面形は東西10.5m、南北11.5mの不整形を呈する。長軸方位はN-30°-Wである。床面は地山と同じ高さで、ほぼ平坦で貼床は認められない。検出面が低く、壁の立ち上がりはほとんど確認できない。周溝S D 1134は、幅40cm、床面からの深さ10cm前後で全周において掘り込まれている。北西角と南壁沿いに多数の小ピットが検出されたが、柱穴かどうかは不明である。S K 1130が、中央のS T 1019を囲んでいるS D 1132の南辺中央部を切って位置する。径90cm深さ25cmを測り、土器片を数点含むが、本竪穴住居跡の施設であるかどうかは不明である。

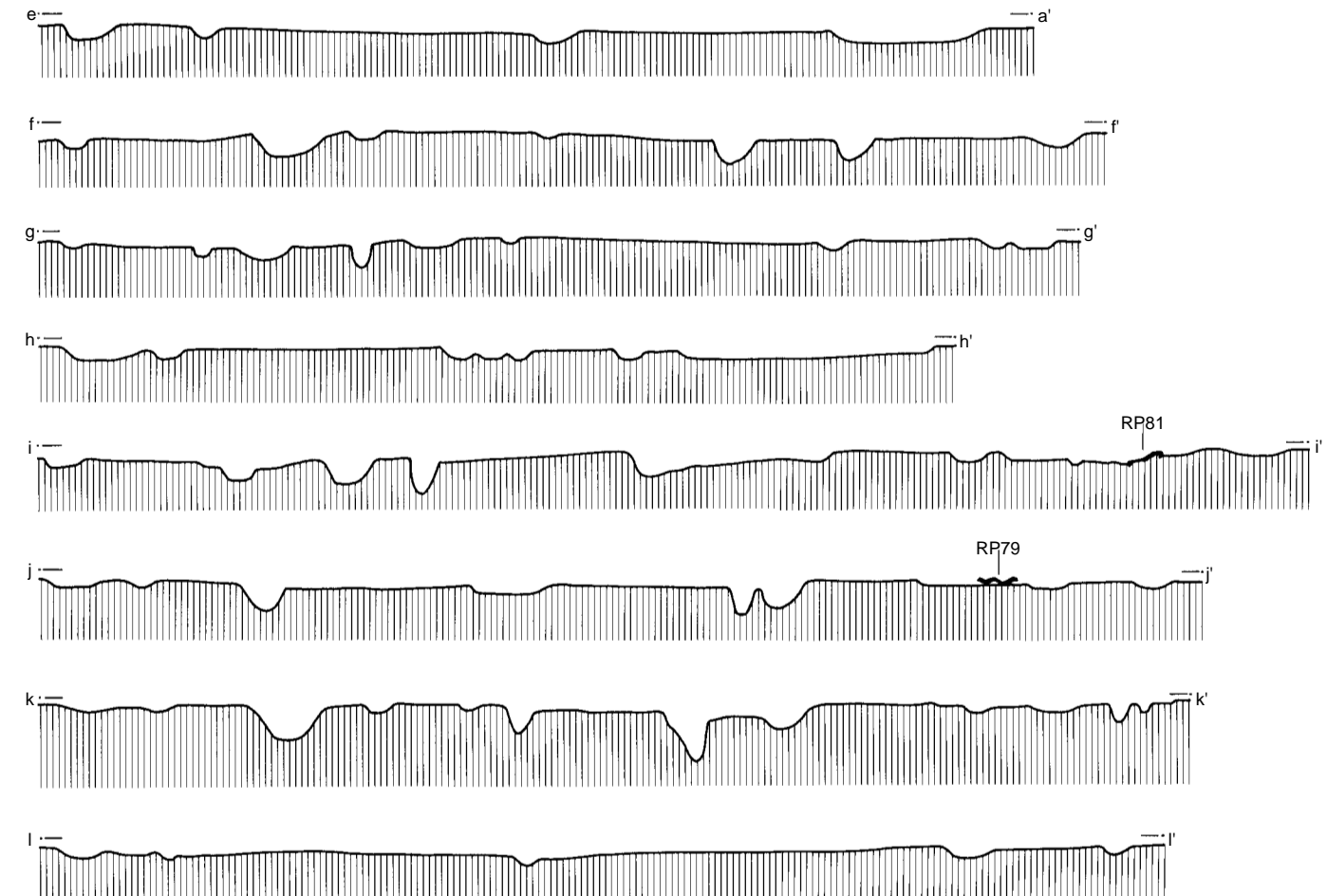
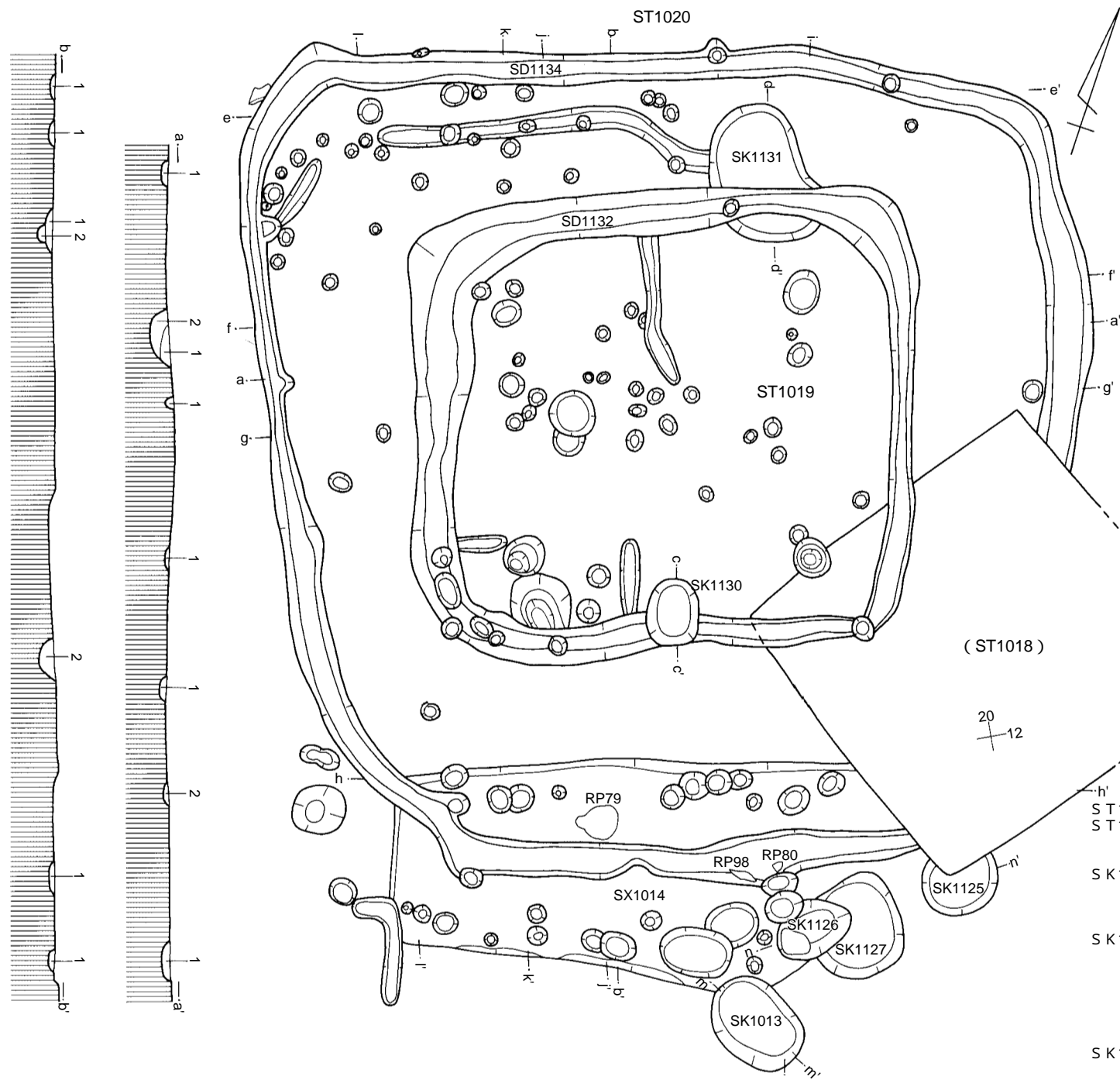
遺物は破片が多く、図化し得たのは、土師器甕口縁部1点(2)、甕複合口縁部片1点(1)、高坏1点(3)、坏底部1点(5)、甕底部2点(4, 6)である。1は単孔の甕と考えられる。2は頸部に指頭圧痕が認められ、口縁部は外傾する。6の胎土と類似し砂を多く含む。3は中空の棒状脚部で、坏部は下端に弱い段を持ってゆるやかに立ち上がる。5は内面にミガキ調整が施されているため坏と考えられる。4、6は丸みをおびた球胴形の体部を持つと考えられる。

その他に図化し得なかった破片の中には、坏部と脚部が急角度のX型に開き、外側にわずかにベンガラが施された痕跡がある器台片、小型の埴の底部片、口唇部が引き出され面取りしている甕の口縁部、壺の複合口縁部片などがある。

S T 1021 (第18図)

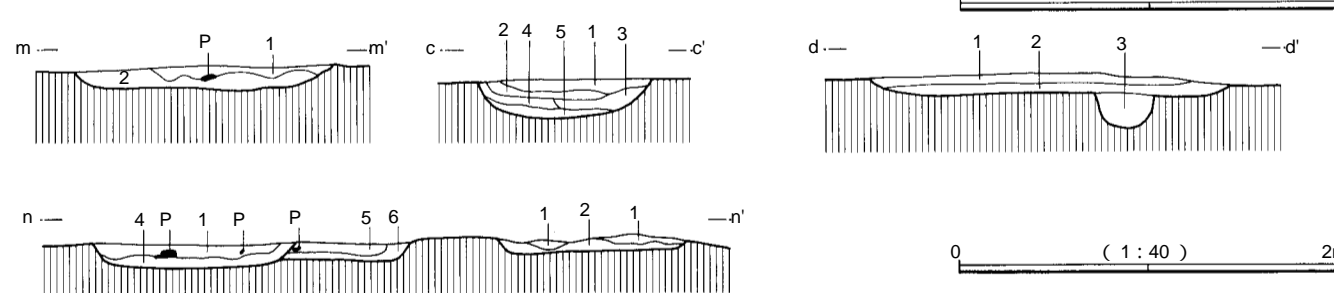
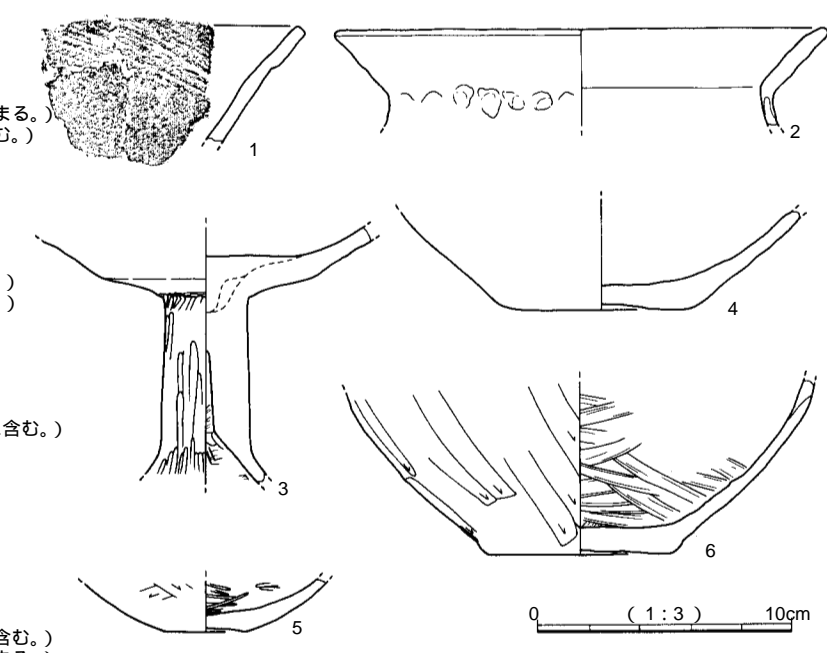
B区19~21-12~13Gで検出された。北西辺をS D 1040に切れ、南西辺をS T 1018に切られる。平面形は方形を呈すると考えられるが、規模は不明である。長軸方位はN-37°-Eである。床面は南半が地山と同じ高さで、北に向かって地山の傾斜に沿って下がる。壁の立ち上がりは検出面が低く確認できない。床面が露出している。径20~40cm、深さ10cmのピットが住居全体に多数検出されたが、柱穴かどうかは不明である。2基の土坑が検出されたが、本竪穴住居跡の施設であるかどうかは不明である。S K 1135は長径190cm×110cmのだ円形で深さ15cmを測り、土器片をわずかに含む。S K 1136は長径120cm深さ10cmを測り、炭化粒子を多量に含む、土器片をわずかに含む。

遺物は、土師器甕口縁部1点(1)、高坏柱状部1点(2)、手捏ね1点(5)、埴底部1点(3)、甕底部3点(4, 6, 7)、壺底部1点(8)を図化し得た。1は、くの字状に外反する単純口縁で外面と内面にハケ目の調整痕を明瞭に確認できる。2は、中実の高坏柱状部で上端がしぼられている。3は小型丸底である。4の底部の中心部はくぼみがある。6の底部は厚く段を形成して中心部がくぼみ蛇の目高台ふうになる。断面から高台を貼り付けたことがうかがえる。体部への立ちあがり状況から球胴形の体部を持つと考えられる。7の底部は中心部にかけてやや反っている。8の底部は段をつくって中心部がややくぼんでいる。S K 1135からの出土遺物は1、6で、S K 1136からの出土遺物は3、4、8で、その他に甕の口縁部破片が数点出土している。

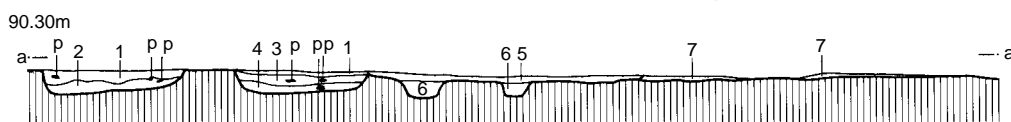
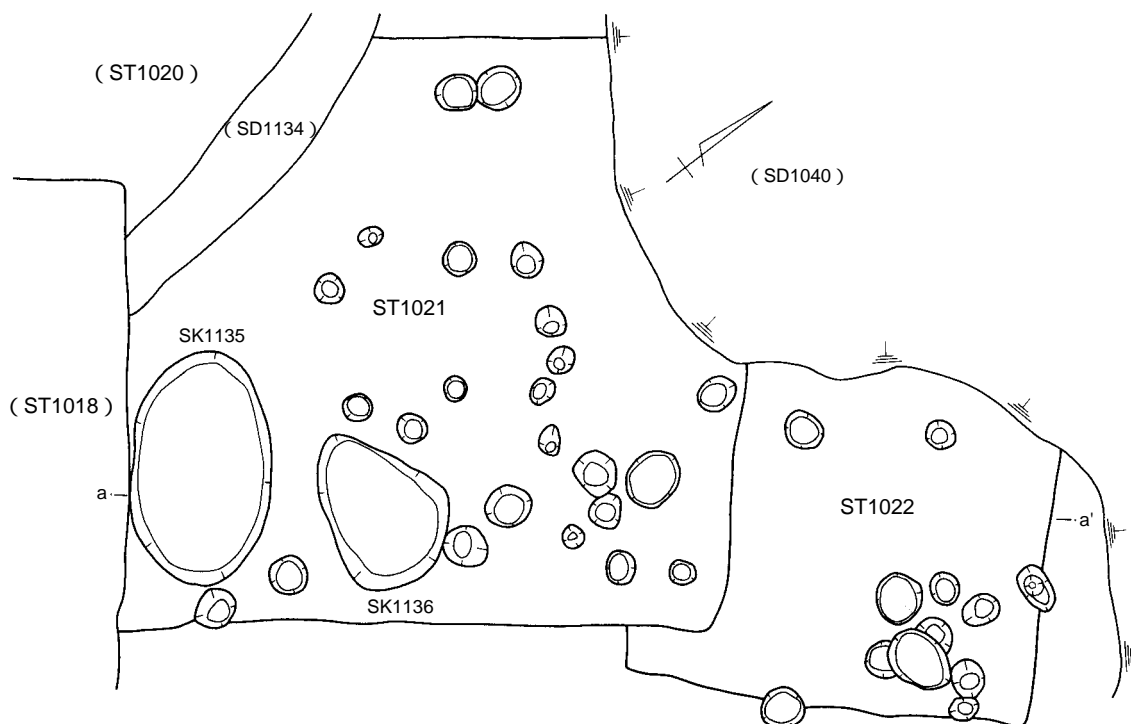


(H=90.30mで統一)

- S T 1019 1 10Y R3/1 黒褐色 微砂質粘土 (わずかに炭粒を含む。)
- S T 1020 2 10Y R3/1 黒褐色 微砂質粘土 (灰黄褐色微砂質粘土がブロック状に20%混じる。)
- S K 1013 1 10Y R3/3 暗褐色 微砂質粘土 (炭化・焼土・褐色粘土粒を多量に含み、軟らかい。)
- 2 10Y R6/1 褐灰色 微砂質粘土
- S K 1130 1 10Y R4/1 褐灰色 微砂質粘土 (褐色・褐灰色・黒褐色粘土ブロックを多量に含む。やや堅くしまる。)
- 2 10Y R4/2 灰黄褐色 微砂質粘土 (わずかに炭粒を含む。)
- 3 10Y R3/2 黒褐色 微砂質粘土 (ほぼ均質。)
- 4 10Y R2/1 黒色 粘質シルト (5がまだらに入り込む。もろい。)
- S K 1131 5 10Y R3/3 暗褐色 微砂質粘土 (ほぼ均質。)
- 1 10Y R4/2 灰黄褐色 微砂質粘土 (均質。堅くしまる。)
- 2 10Y R4/3 鈍い黄褐色 微砂質粘土 (均質。堅くしまる。)
- 3 10Y R3/1 黒褐色 微砂質粘土 (灰黄褐色微砂質粘土がブロック状に20%混じる。)
- S K 1125 1 10Y R3/3 暗褐色 微砂質粘土 (炭粒を含む。)
- S K 1126 2 10Y R4/4 褐色 微砂質粘土
- S K 1127 1 10Y R3/3 暗褐色 微砂質粘土 (1がブロック状に10%混じる。)
- 3 10Y R2/2 黒褐色 微砂質粘土 (炭化物の粒を多量に含む。)
- 4 10Y R4/2 灰黄褐色 微砂質粘土 (3がブロック状に30%混じる。)
- 5 10Y R3/2 黒褐色 微砂質粘土 (炭化物の粒をわずかに含む。)
- 6 10Y R4/2 灰黄褐色 微砂質粘土 (5がブロック状に20%混じる。)
- S T 1026 1 10Y R2/2 黒褐色 粘質シルト (粘りなくもろい。)
- 2 10Y R3/1 黒褐色 微砂質粘土
- S T 1023 1 10Y R2/2 黒褐色 粘質シルト (焼土粒をわずかに含む。)
- S T 1024 2 10Y R2/1 黒色 微砂質粘土 (ほぼ均質。堅くしまる。)
- 3 10Y R2/2 黒褐色 粘質シルト (小径の焼土粒をわずかに含む。堅くしまる。)

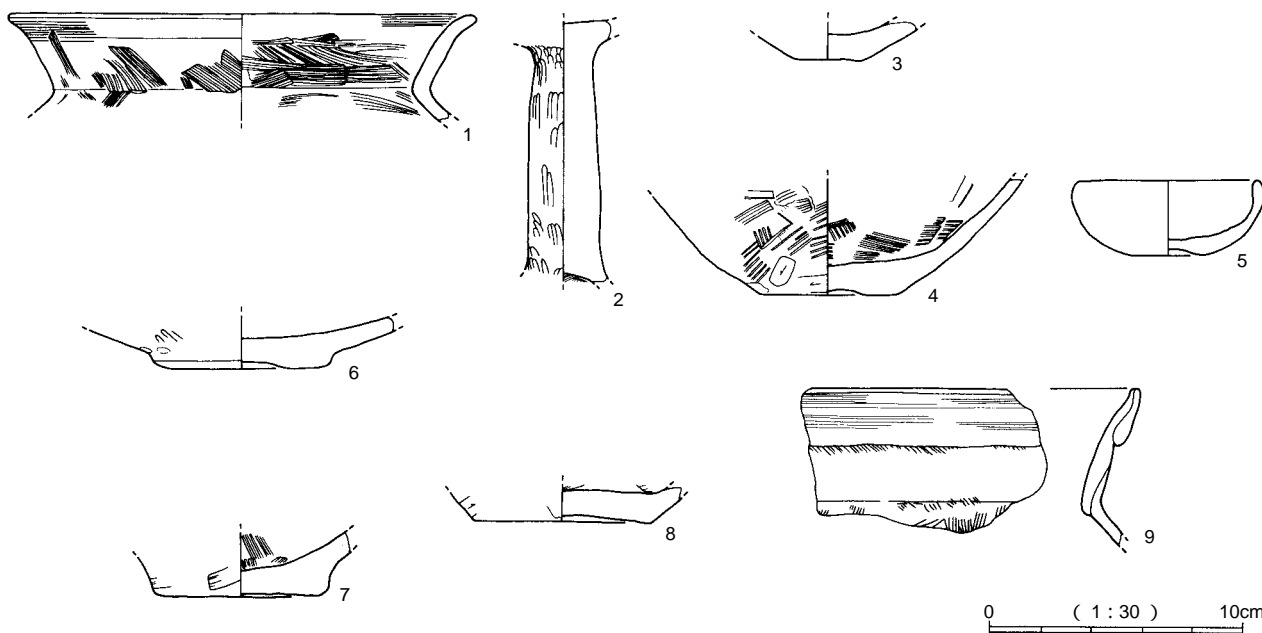


第17図 ST1019・1020竪穴住居跡、ST1020出土遺物



S T 1021	1	10 Y R 5/2	灰黄褐色	微砂質粘土	(褐色粘土ブロック・粒子を多量に含む。)	
1022	2	10 Y R 5/4	鈍い黄褐色	微砂質粘土	(褐色粘土ブロックを多量に含む。)	以上 S K 1135
	3	10 Y R 4/4	褐色	微砂質粘土	(炭化粒子・粘土粒子を多量に含む。やや堅くしまる。)	
	4	10 Y R 5/3	鈍い黄褐色	微砂質粘土	(炭化粒子と粘土粒子と灰褐色・褐色粘土小ブロックが混じる。)	以上 S K 1136
	5	10 Y R 3/2	黒褐色	微砂質粘土	(炭化粒子と粘土粒子小ブロックを多量に含む。)	
	6	10 Y R 4/2	灰黄褐色	微砂質粘土	(粘土粒子小ブロックを多量含む。)	以上 S T 1021
	7	10 Y R 3/4	暗褐色	微砂質粘土	(炭化粒と粘土粒を含む。やや軟らかい。)	S T 1022

0 (1 : 60) 2m



第18図 ST1021・1022竪穴住居跡、出土遺物

S T 1022 (第18図)

B区20~21-12~13Gで検出された。北角をS D 1040に切られ、南西辺をS T 1021に切られる。規模および平面形は一辺3.2mの方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN - 45° - Eである。床面はほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは検出面が低く確認できない。床面が露出している。径20~40cmのピットが南東角に重なり合うように検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。

遺物は、土師器壺口縁部1点(9)を図化し得た。9は、折り返しの複合口縁である。その他に、甕の口縁部3点、壺の口縁部1点が出土している。

S T 1023 (第19図)

B区18~19-11~13Gで検出された。大半をS T 1029、S D 1134、S T 1020、S T 1024に切られ、北部の一部が残存する。また、北辺でS T 1027を切り、西辺でS T 1025を切る。平面形は方形を呈すると考えられるが、規模は不明である。長軸方位はN - 90° - Eである。床面は硬くしまり、ほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。径30cm、深さ5~15cmのピットが6基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。

遺物は図化し得るものはなかったが、土師器甕の破片が出土している。

S T 1024 (第19図)

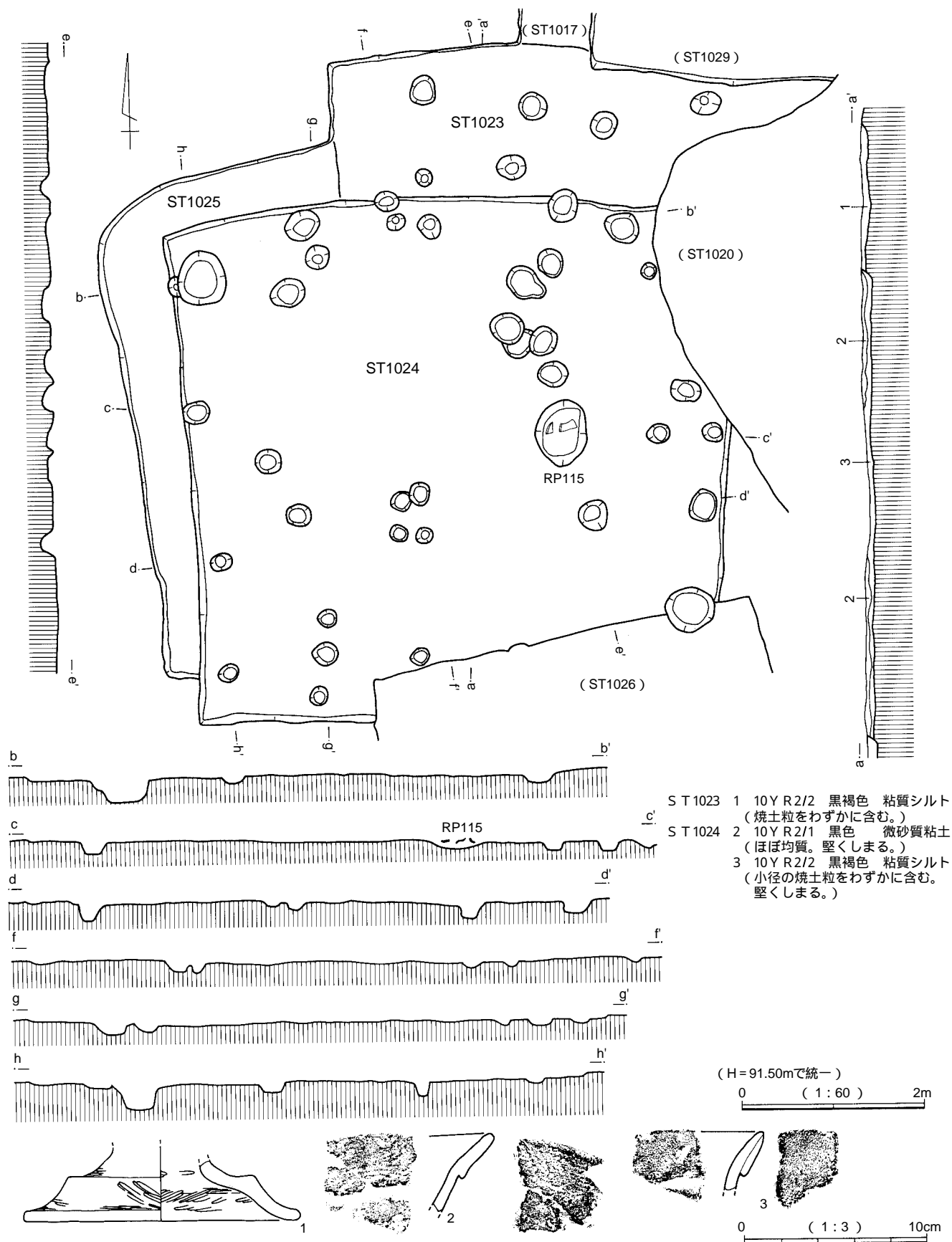
B区18~19-11~13Gで検出された。北東角をS D 1134、S T 1020に切られ、北辺をS T 1026に切られる。また、北西部でS T 1023、S T 1025と重複し、これを切る。規模および平面形は東西5.5m、南北5.4mの不整形方形を呈する。長軸方位はN - 30° - Eである。床面は硬くしまり、ほぼ平坦で貼床は認められない。北西角に径60cm程の範囲で焼土が確認される。壁の立ち上がりは検出面が低く確認できない。床面が露出している。径30cm、深さ5~15cmのピットが四辺の壁沿いを中心に多数検出されたが、住居の大半が他のS T (S T 1023、S T 1025)と重複しているため、本竪穴住居跡の柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。

遺物は、土師器壺口縁部1点(3)と甕口縁部1点(2)を図化し得た。3と2は、複合口縁である。その他に土師器甕の破片が出土している。2は、S T 1020の甕口縁部(2)と同じ形状である。

S T 1025 (第19図)

B区18~19-11~13Gで検出された。大半をS T 1023、S T 1024に切られ、北西辺の一部が残存する。規模および平面形は一辺4.9mの方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN - 4° - Wである。床面は硬くしまり、ほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは、西辺は緩やかであるが北辺は急である。柱穴は認められない。貯蔵穴は認められない。

遺物は、土師器高坏脚部1点(1)を図化し得た。裾部途中の上面に段を持ち、柱状部が筒状を呈すると考えられる。

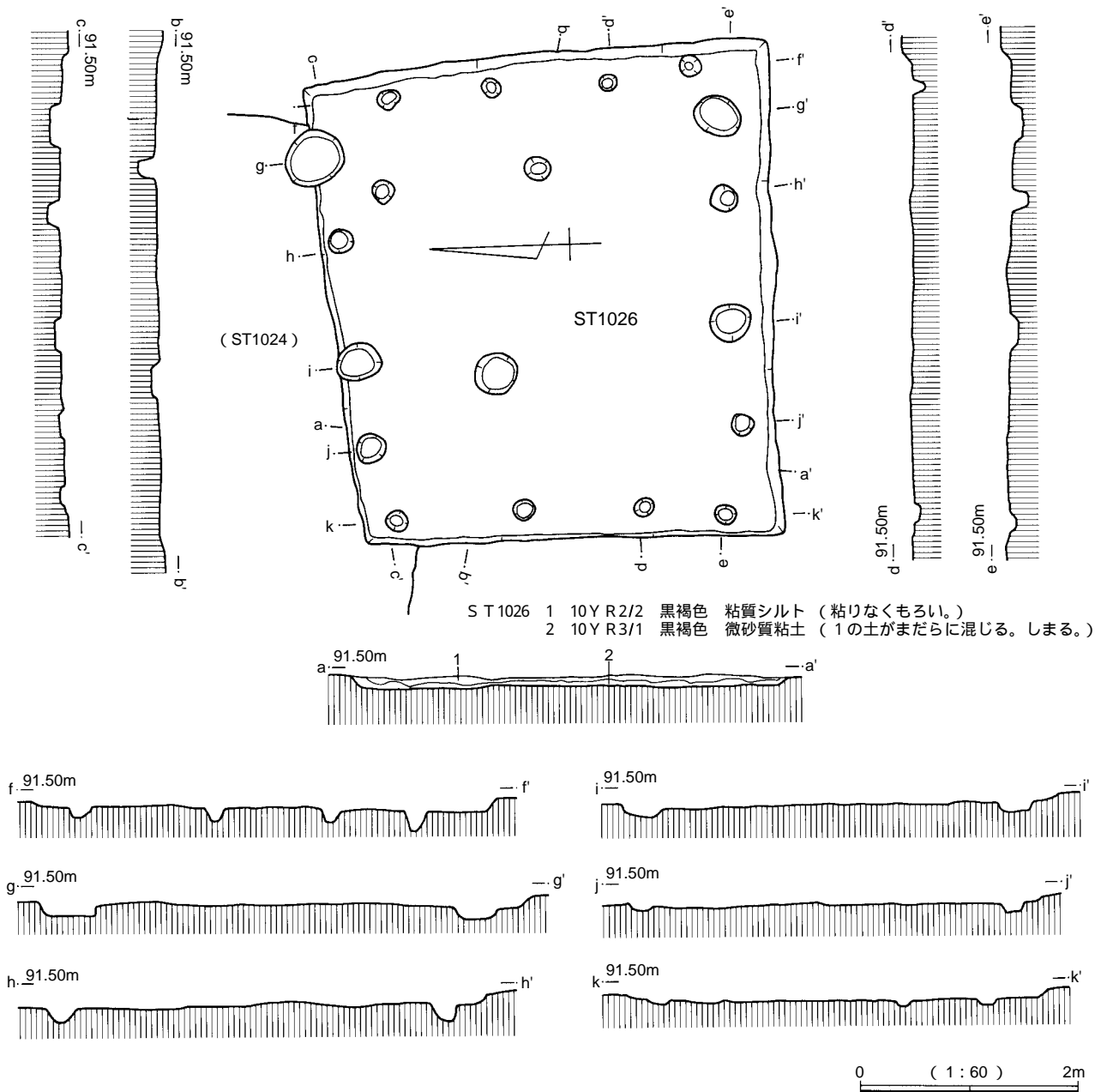


第19図 ST1023・1024・1025竪穴住居跡、ST1024・1025出土遺物

S T 1026 (第20図)

B区18~20-11~12Gで検出された。北辺でS T 1024を切る。規模および平面形は東西4.6m、南北4.3mの不整形を呈する。長軸方位はN-90°-Wである。床面は硬くしまり、ほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。径20cm、深さ10~20cmのピット4基と、径40cm、深さ10~20cmのピット13基が、四辺の壁面に沿って50cm~1mの間隔で検出された。貯蔵穴は認められない。

遺物は土師器甕の破片5点が出土したが、図化するには及ばない。内1点は短く外傾し、口唇部がつまみ出されて面取りされている。



第20図 ST1026竪穴住居跡

S T 1027 (第21図)

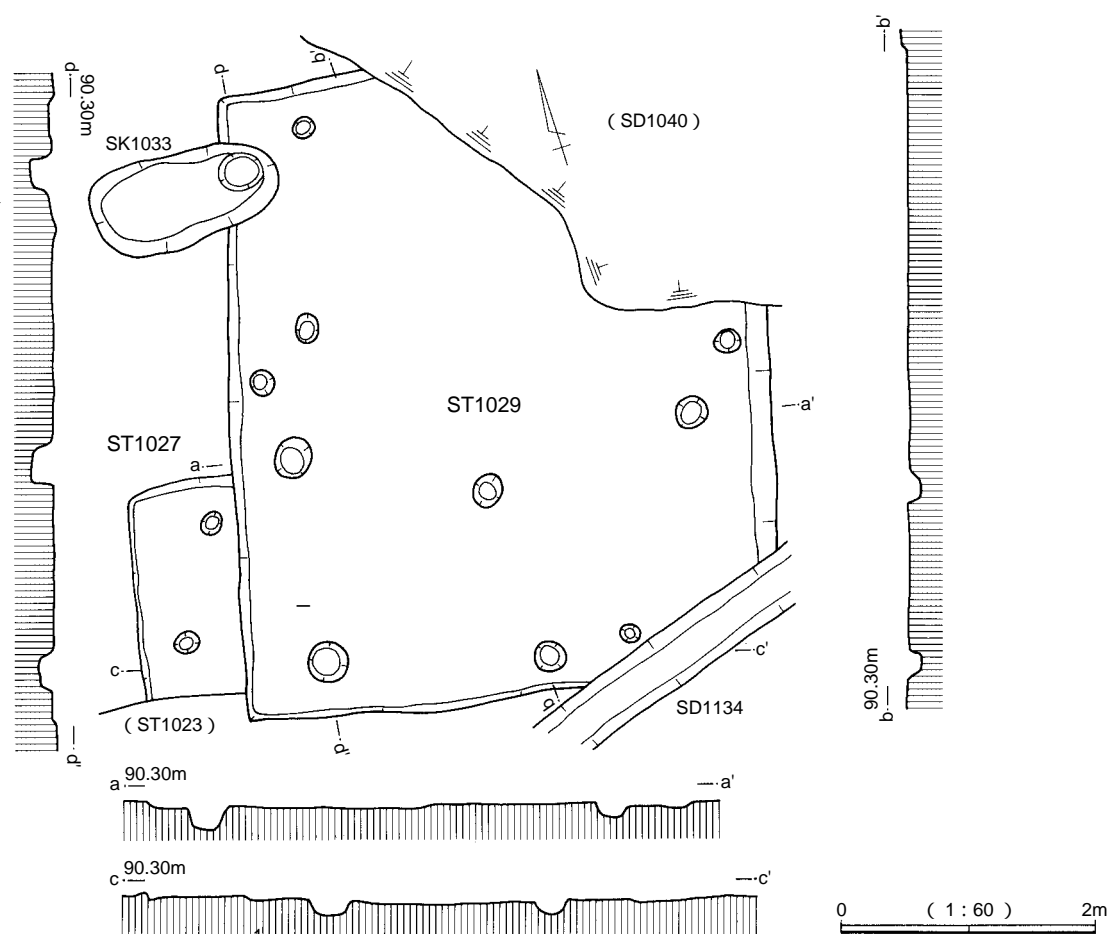
B区18~19-12~13Gで検出された。大半をS T 1023、S T 1029に切られ、南西角の一部が残存する。平面形は方形を呈すると考えられるが、規模は不明である。長軸方位はN - 11° - Eである。床面はほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは急である。径15cmのピットが2基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。

遺物は土師器甕の破片1点が出土したのみで、図化するには及ばない。

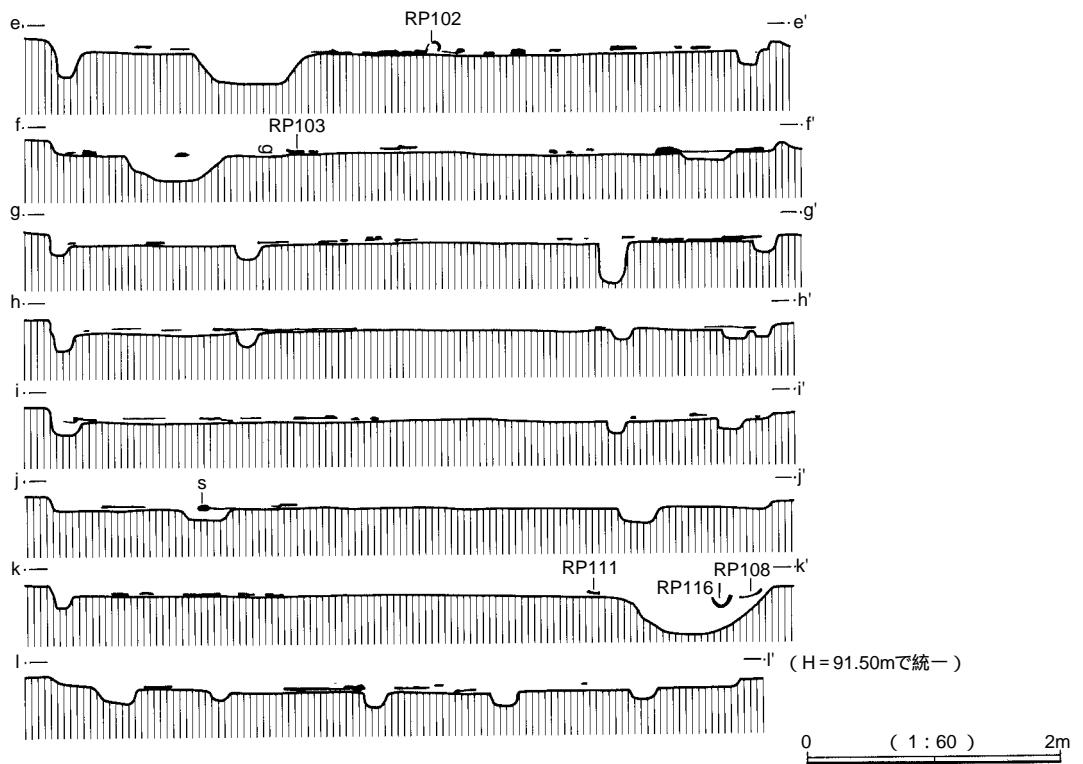
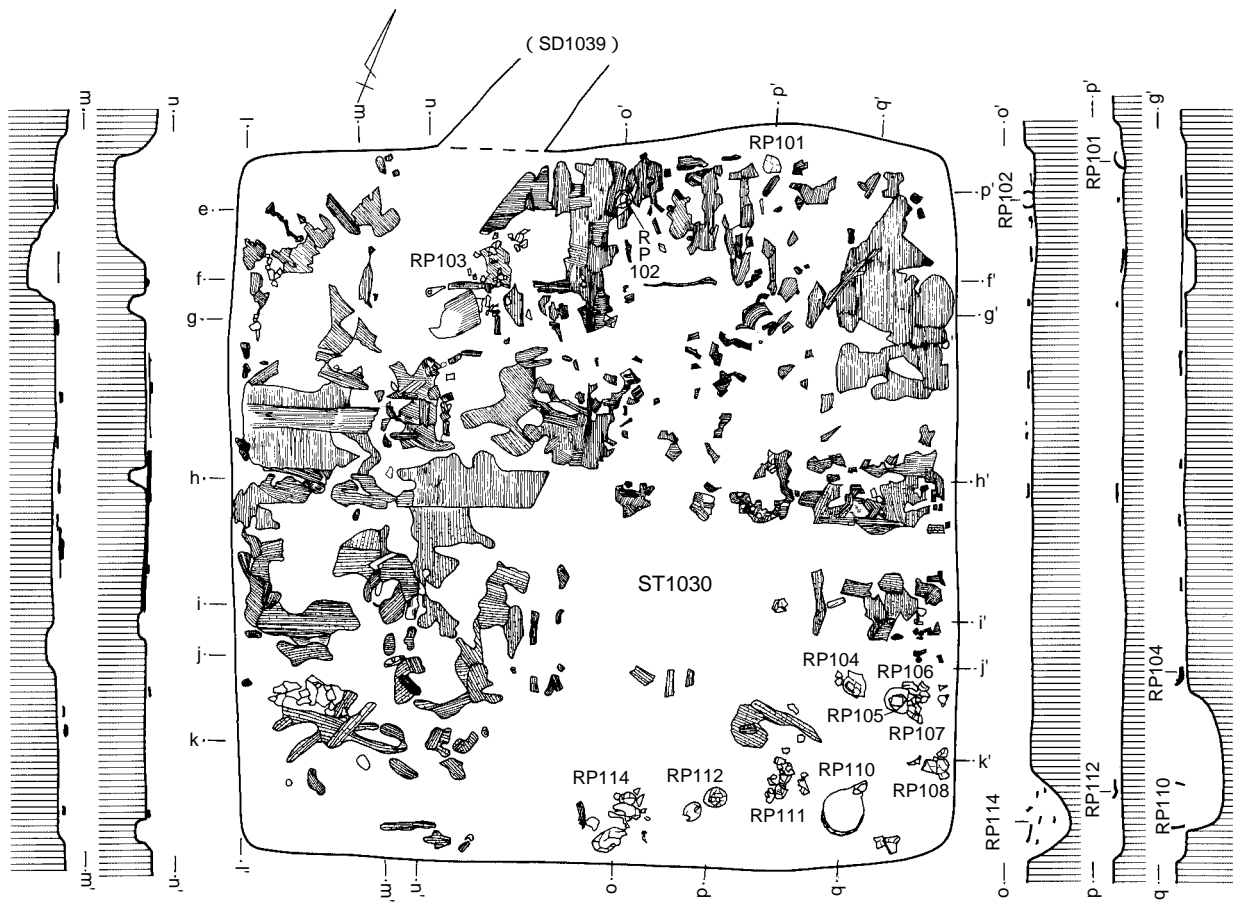
S T 1029 (第21図)

B区18~20-12~13Gで検出された。北東角をS D 1040に切られ、南西角をS D 1134に切られ、西辺北側をS K 1033に切られる。また、南西角でS T 1027、S T 1023を切る。規模および平面形は東西4.2m、南北5.0mの方形を呈する。長軸方位はN - 15° - Eである。床面はほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。径30cm、深さ10~20cmの柱穴が、北西角と南西角と辺の中間部の5基検出された。その他6基のピットが検出されたが、柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴は認められない。

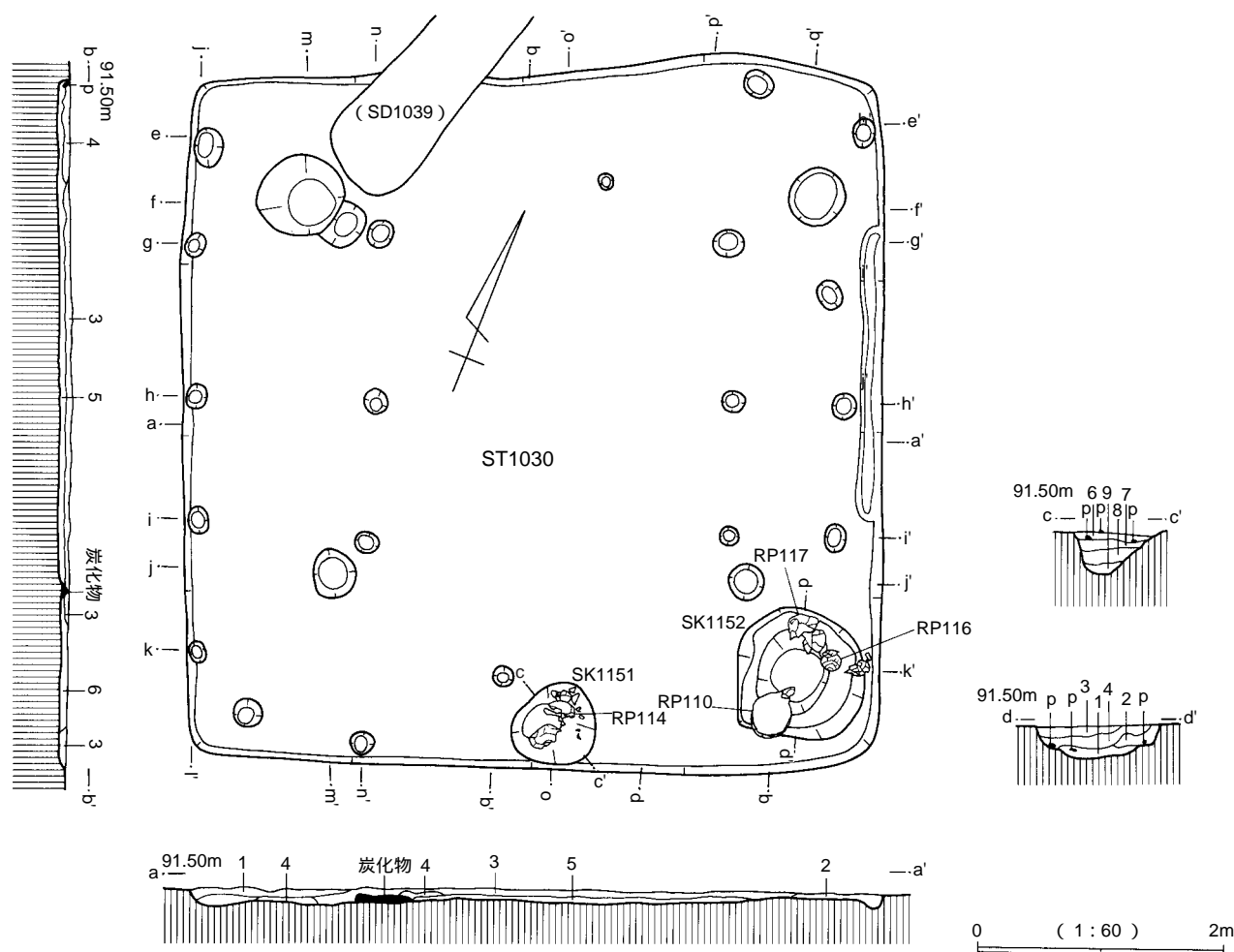
遺物は土師器鉢の口縁部1点、甕の破片3点、壺の底部2点が出土したが、図化するには及ばない。



第21図 ST1027・1029竪穴住居跡



第22図 ST1030竪穴住居跡(1)



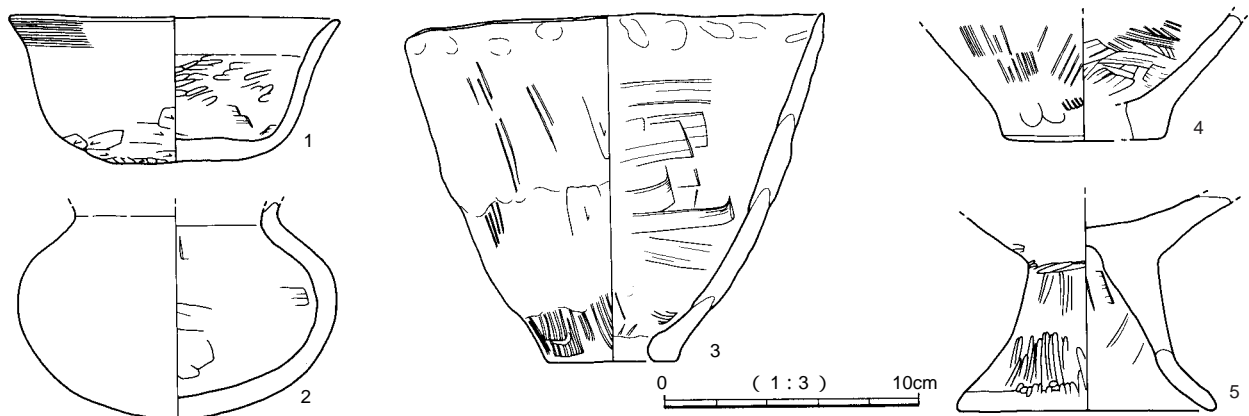
S T 1030	1	10Y R4/3	鈍い黄褐色	粘質シルト	(褐色粘土質シルトがブロック状に混じる。)
	2	7.5Y R2/2	黒褐色	粘質シルト	(焼土粒を40%含む。炭化物の粉末を多量に含むシルトをまだらに混入する。)
	3	10Y R2/2	黒褐色	粘質シルト	(層下部に多量かつ大径の炭化物を含む。)
	4	10Y R2/3	黒褐色	粘質シルト	(暗褐色粘土質シルトがブロック状に30%混じる。)
	5	7.5Y R3/4	暗褐色	粘質シルト	(焼土を70%含む。)
S K 1151	6	10Y R3/3	暗褐色	粘質シルト	(黒褐色粘土質シルトがブロック状に混じる。強くしまる。)
	1	10Y R3/2	黒褐色	粘質シルト	(大径の焼土粒と小径の炭粒をわずかに含む。しまる。)
	2	10Y R3/2	黒褐色	シルト(灰)	(大径の焼土粒を多量に含む。もろい。)
	3	10Y R2/3	黒褐色	粘質シルト	(ほぼ均質。しまる。底部に黒色の灰・炭粒が堆積する。)
S K 1152	4	10Y R4/2	灰黄褐色	微砂質粘土	(E K 1152 4と近似する。ほぼ均質。もろい。)
	1	10Y R2/2	黒褐色	粘質シルト	(ほぼ均質。しまる。)
	2	10Y R2/3	黒褐色	粘質シルト	(大粒の焼土粒を20%含む。)
	3	10Y R2/3	黒褐色	粘質シルト	(1と近似する。)
	4	10Y R4/2	灰黄褐色	微砂質粘土	(わずかに小径の炭粒を含む。もろい。)

第23図 ST1030竪穴住居跡(2)

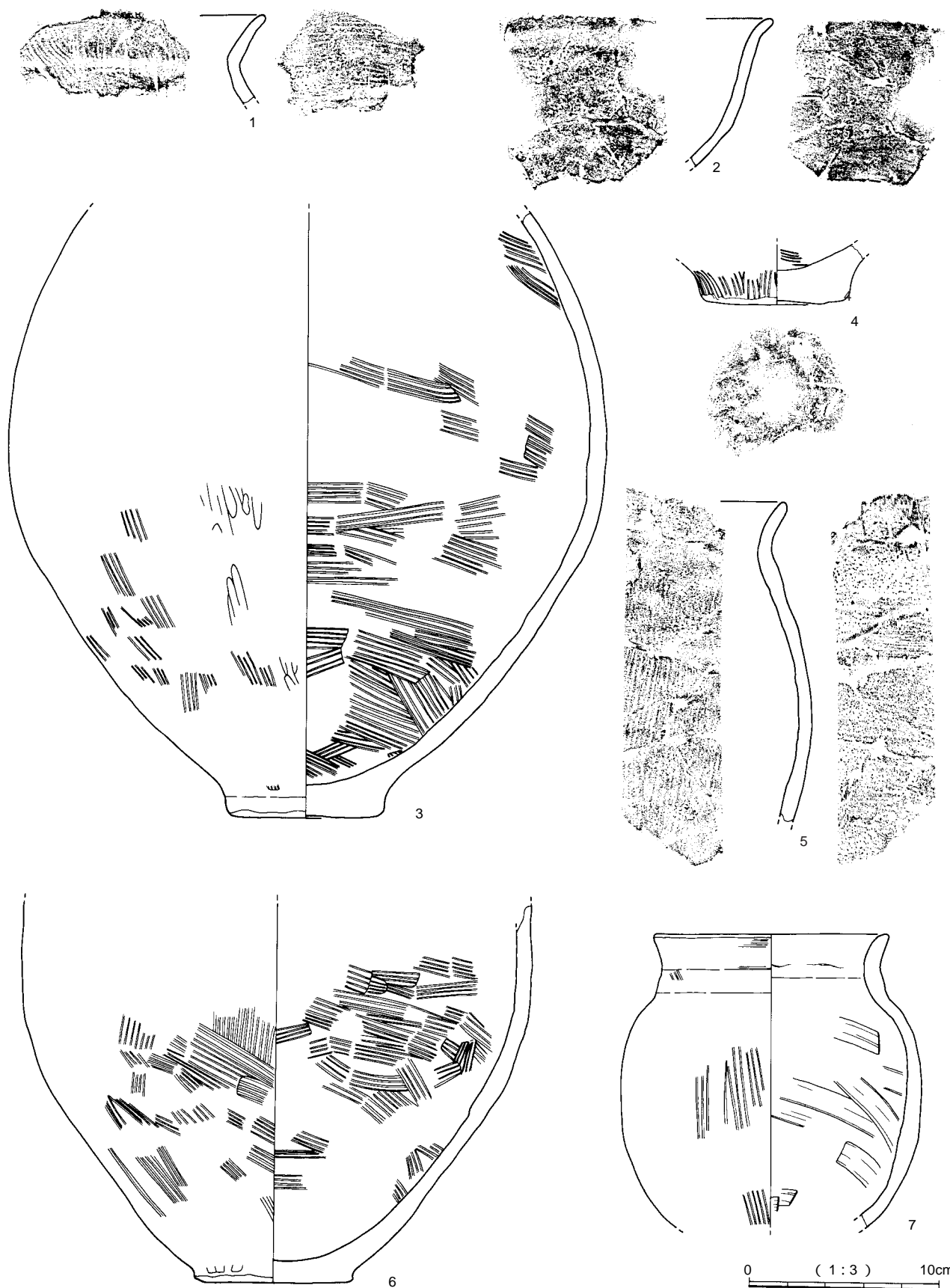
S T 1030 (第22・23・24・25図)

B区17~19-12~13Gで検出された。北辺西寄りをS D 1039に切られる。規模および平面形は東西5.4m、南北5.6mの方形を呈する。長軸方位はN-70°-Eである。床面全体に炭化物及び散在する炭化材が検出された。炭化物層は5cmの厚さで床面を覆う。特に北半に多く確認された。焼失家屋と考えられる。床面は硬くしまり、ほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは急である。壁溝は、幅10cm、床面からの深さ10cm前後で東辺中央部に240cmの長さで掘り込まれている。住居の四隅から約1~2m内側の位置に径30~60cm、深さ10~20cmの主柱穴と思われるピットを4基検出した。また、東西の壁面沿いと両壁面から1m内側に、約1m間隔に小ピットが検出された。炉跡とみられるSKを2基検出した。SK1151は南壁中央部に位置し、径70cm深さ35cmを測る。上層は焼土粒を多量に含み底部には黒色の灰が堆積している。土師器の壺と甕が上層に重なるように検出された。SK1152は南東角に位置し、径1m深さ30cmを測る。上層は焼土粒を多量に含み中層部の淵に土師器甕1点と土師器大型甕2点が検出された。

遺物は、土師器の坏1点(24-1)、高坏1点(24-5)、埴1点(24-2)、甑1点(24-3)、甕8点を図化し得た。24-1はほぼ完形の平底坏で、丸みを呈して立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。外面内面ともに煤が付着している。24-5の高坏脚部は、山形状に開いた裾部から円錐状に立ち上がり、坏部は直線的に開く。輪積み痕が見られ、二次調整が施されている。24-2の埴の体部は算盤玉形を呈する。24-3の甑は、単孔で体部は鉢状に開き、口縁部は段を持たない単純口縁である。外面に煤が付着している。24-4、25-4は甕の底部のみで、どちらも台を形成し、25-4の底部には木葉痕が見られる。25-3、25-6は大型甕の底部から体部である。25-3は台付きの平底で、やや長胴化した球形の体部を持つ。外面に一部煤が付着している。25-6も台付きの平底で、鉢状に立ち上がる。外面に一部煤が付着している。25-4、25-3、25-6はSK1152から出土している。25-7は小型の甕で、頸部に輪積み痕が見られ、口縁部はゆるやかに外反する。体部もなだらかで体部中位に最大径を持つ。25-1は口縁部のみで、くの字に外反する。ハケ目の調整痕が明瞭に確認できる。25-2と25-5は口縁部から体部にかけての土器片である。25-2は口唇部がわずかにつまみ出されるように外反する。25-5も口縁部がゆるやかに外反して長胴的なプロポーションを持つ。外面内面ともにハケ目の調整痕が明瞭に確認できる。



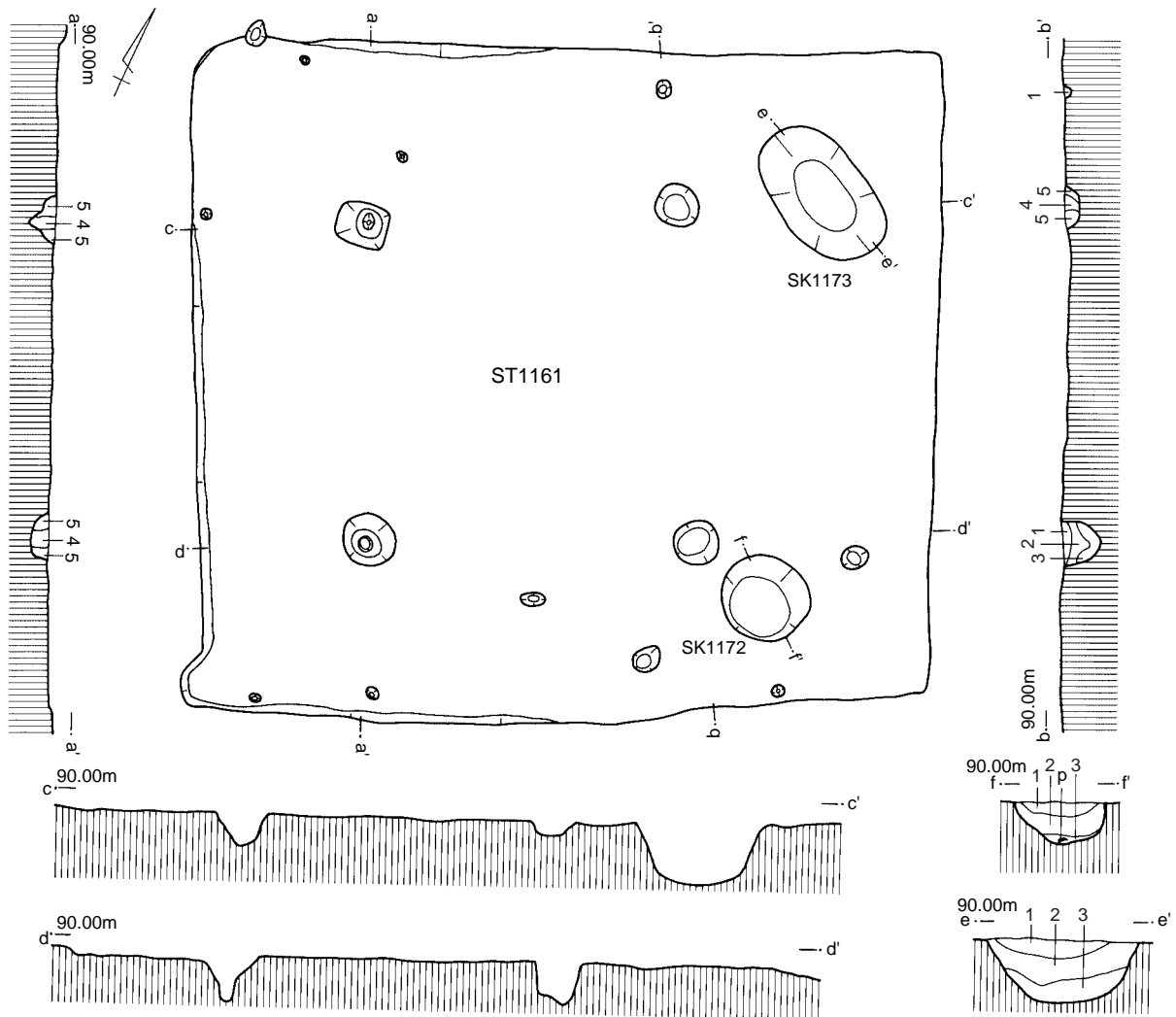
第24図 ST1030出土遺物(1)



第25図 ST1030出土遺物(2)

S T 1161 (第26図)

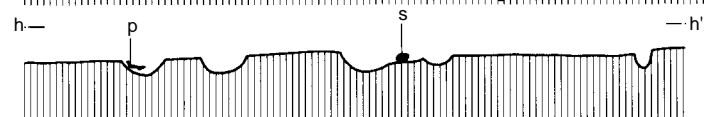
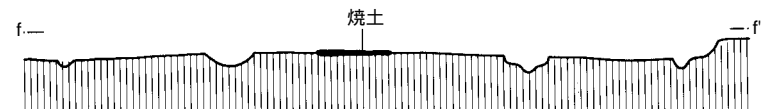
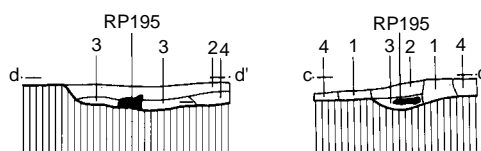
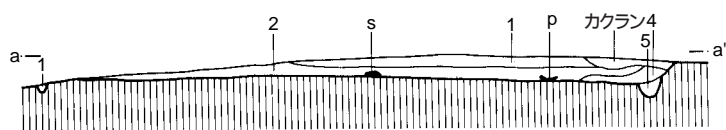
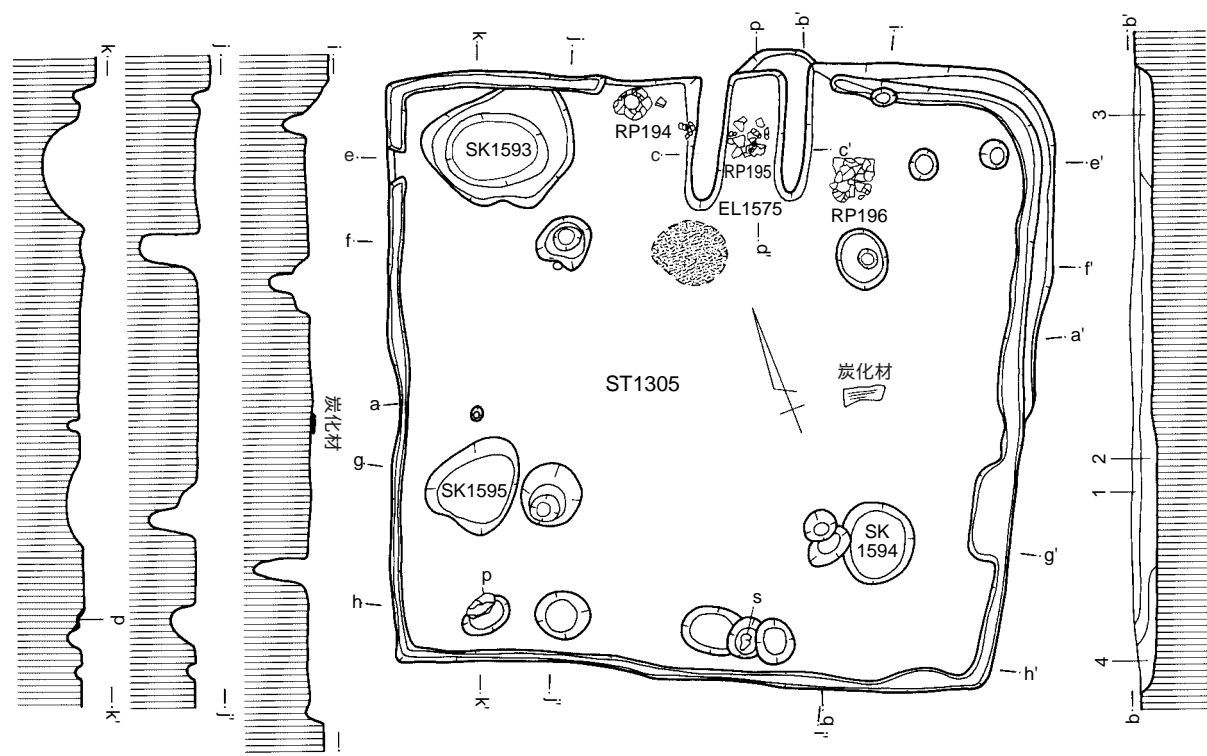
E区15~16-13~15Gで検出された。規模および平面形は東西6.1m、南北5.4mの方形を呈する。長軸方位はN-64°-Eである。床面は地山と同じ高さで、ほぼ平坦で貼床は認められない。壁は、南西角および北辺の一部に緩やかな立ち上がりを確認できる。住居の四隅から約1.5~2m内側の位置に径40cm、深さ20~30cmの主柱穴を4基検出した。2基のEKを検出した。EK1172は南東角に位置し、径70cm深さ50cmを測る。層全体に多量の炭化粒を含み、特に上層部に大型の炭化材が目立つ。底部に土師器甕の土器片が検出された。炉跡と考えられる。EK1173は北東角に位置し、長径125cm短径70cmのだ円形を呈し深さ50cmを測る(わずかに炭化粒と焼土粒を含む)。遺物は、SK1172から土師器の土器片が1、2点出土したが図化するまでには及ばない。



S T 1161	1	10Y R2/1	黒色	細砂質粘土	(ほぼ均質。)
	2	10Y R3/2	黒褐色	粘土	(わずかに極小径の炭粒が混じる。軟らかい。)
	3	10Y R4/2	灰黄褐色	細砂質シルト	(ほぼ均質。)
	4	10Y R5/3	鈍い黄褐色	細砂質シルト	(黒色細砂質粘土が斑状に30%混じる。)
	5	10Y R4/2	灰黄褐色	細砂質シルト	(黄褐色シルトがブロック状に混じる。)
S K 1172	1	10Y R3/2	黒褐色	粘質シルト	(炭化材と焼土を多量に含む。特に上層部に大型の炭化材含む。)
	2	10Y R3/3	暗褐色	粘質シルト	(小径の焼土粒と炭粒を含む。)
	3	10Y R2/1	黒色	粘土	(多量の炭化粒を含む。)
S K 1173	1	10Y R3/1	黒褐色	粘土	(均質。わずかに小径の炭粒を含む。)
	2	10Y R4/3	鈍い黄褐色	粘土	(1がまだらに20%混じる。)
	3	10Y R3/2	黒褐色	粘質シルト	(小径の炭粒と焼土粒を10%含む。)

0 (1:60) 2m

第26図 ST1161竪穴住居跡



0 (1:50) 2m (H=90.10mで統一)

- ST1305
- 1 10Y R3/1 黒褐色 粘質シルト (ほぼ均質。堅くしまる。)
 - 2 10Y R3/1 黒褐色 粘質シルト (暗褐色細砂質シルトがブロック状と粒状に30%混じる。)
 - 3 10Y R4/4 褐色 細砂質粘土 (ほぼ均質。わずかに炭粒を含む。)
 - 4 10Y R3/1 黒褐色 粘質シルト (褐色細砂質粘土がブロック状に50%混じる。)
 - 5 7.5Y R2/3 極暗褐色 細砂質粘土 (焼土・炭粒が混じり全体的に赤黒い。)
- EL1575
- 1 10Y R4/3 鈍い黄褐色 砂質シルト (均質。堅くしまる。)
 - 2 10Y R3/1 黒褐色 粘質シルト (大粒の焼土粒が20%混じる。)
 - 3 2.5Y R2/1 黒色 粘質シルト (全体に炭粒が多数混じる。もろい。)
 - 4 10Y R4/4 褐色 砂質シルト (全体に焼土が混じる。)

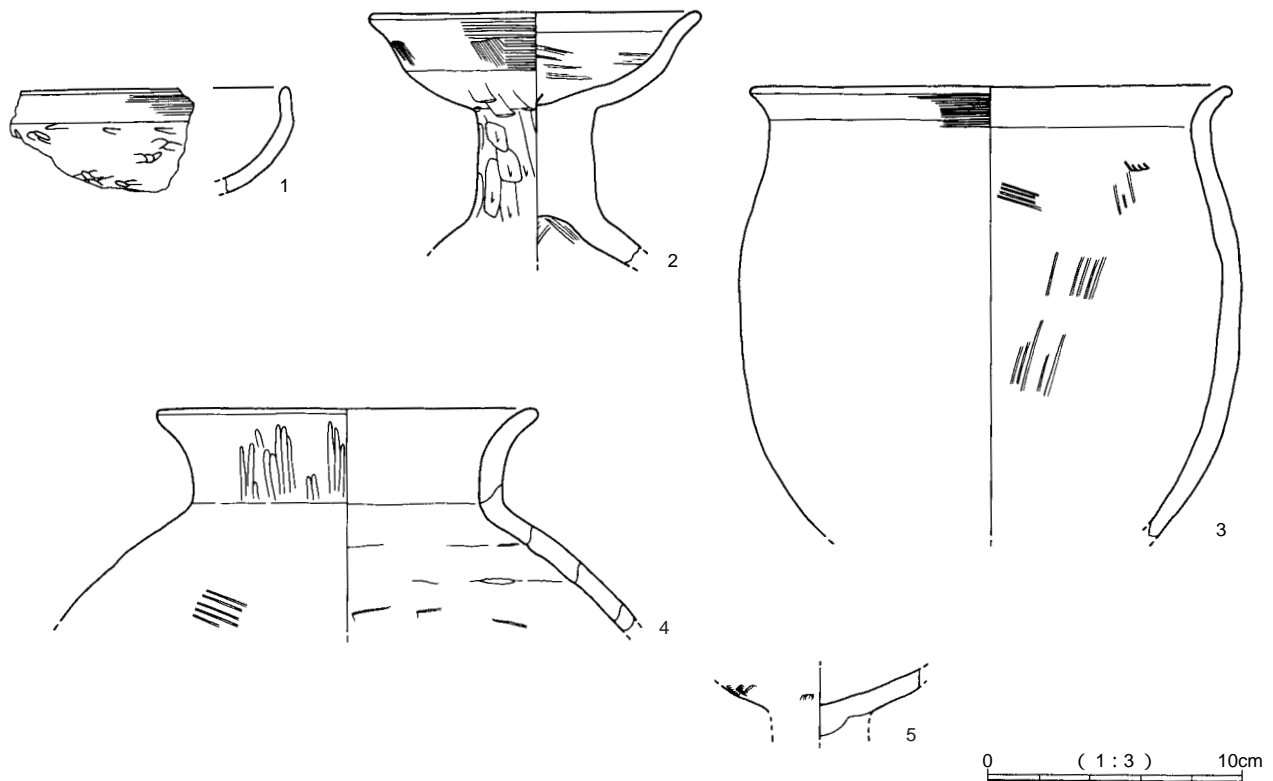
第27図 ST1305竪穴住居跡

S T 1305 (第27・28図)

D区20~21 - 17~19Gで検出された。規模および平面形は東西3.9m、南北4.3mの不整形を呈する。主軸方位はN - 25° - Eである。床面は硬くしまり、ほぼ平坦で貼床は認められない。カマド南側に径50cm程の範囲で焼土が確認される。壁の立ち上がりはほぼ垂直であるが、きわめて浅い。壁溝は、幅10cm、床面からの深さ10cm前後で全周において掘り込まれ、東辺ではやや広くなる。住居の四隅から約1.5m内側の位置に径40~50cm、深さ30~40cmの支柱穴を4基検出した。カマドは北壁ほぼ中央部で検出され、長さ95cm、幅80cmを測り、15cmほど掘り込まれている。両袖は残存しているが、煙道部の貼り出しは確認できなかった。

貯蔵穴としてはS K 1953がある。北西角に位置し、径1m深さ30cmを測り、わずかに炭粒と焼土粒を含む。

遺物は、土師器の坏1点(1)、高坏2点(2、5)、甕1点(3)、壺1点(4)を図化し得た。1は口縁部がほぼ直立する。2は、坏部の中位にゆるやかな稜を持って口縁部が外反し、脚部は棒状にのび裾部が山形状に広がると考えられる。5は坏部の中心だけで輪積み痕がみられ、脚部は棒状にのびると考えられる。3は、頸部のしまりがゆるく口縁部は短く外反し、体部中位に最大径を持つ。底部はない。体部一部に煤が付着している。4は、口縁部から体部にかけてのみで、口縁部で輪積み痕が確認される。頸部は直立してから口縁部が外反する。その他、甕の口縁部が2点出土している。

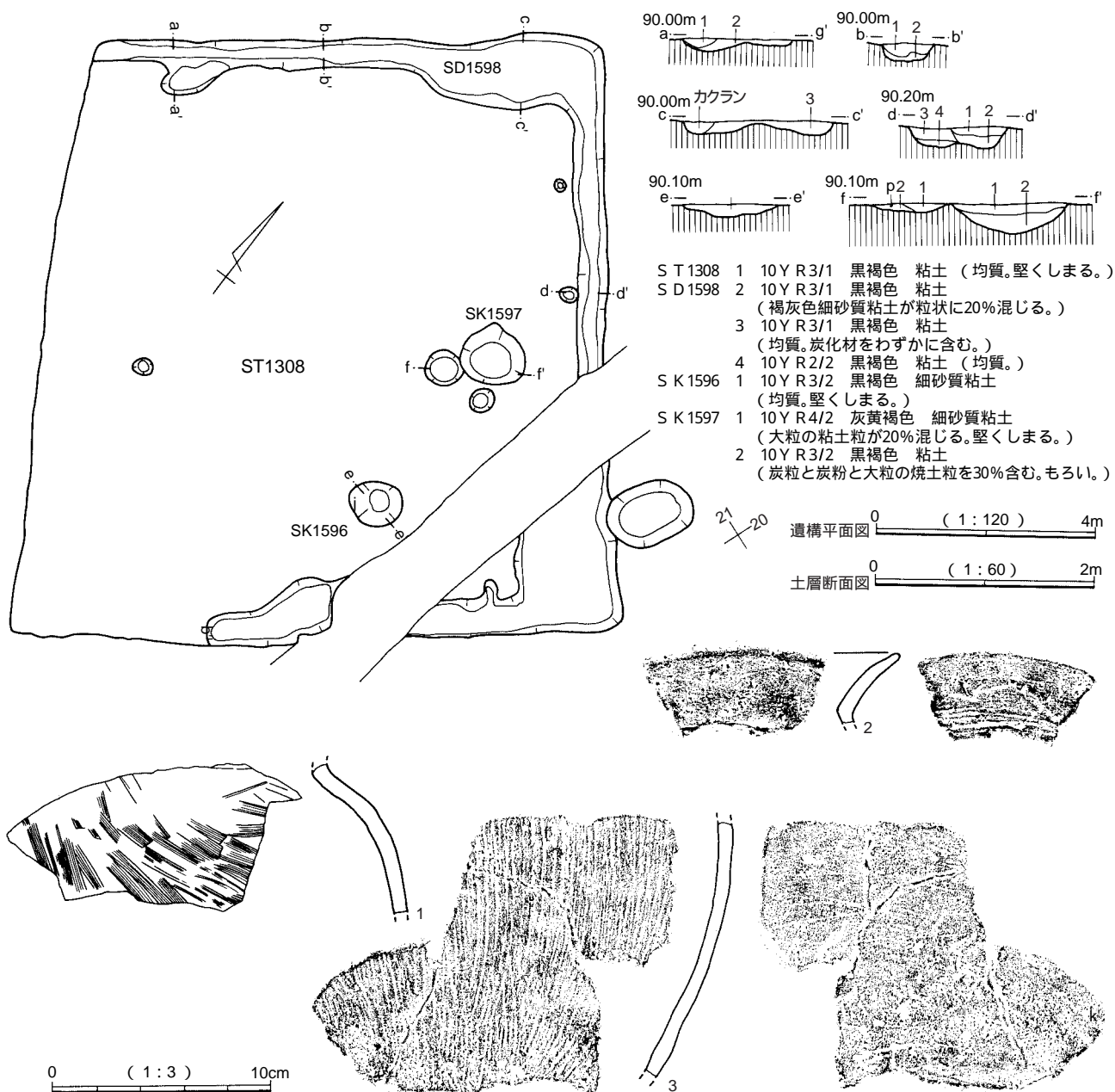


第28図 ST1305出土遺物

ST 1308 (第29図)

D区19~21 - 18~21Gで検出された。東角中央寄りを南北の水路に切られる。規模および平面形は東西5.5m、南北5.7mの不整形を呈する。長軸方位はN - 53° - Eである。床面は地山と同じ高さで、ほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは浅く緩やかで、北辺・東辺・南辺の半ばまで確認できる。壁溝SD1598は、幅50cm、床面からの深さ20cm前後で確認でき、とくに北東角・南東角で広がる。支柱穴は認められない。貯蔵穴は認められない。

遺物は、土師器の甕の破片3点を図化し得た。2は、くの字状に外反する口縁部。2と3はSK1597から出土した甕の体部で、3は八ケ目の調整痕が明瞭に確認でき、1は焼成が硬い。その他、内黒杯の口縁部片が出土している。



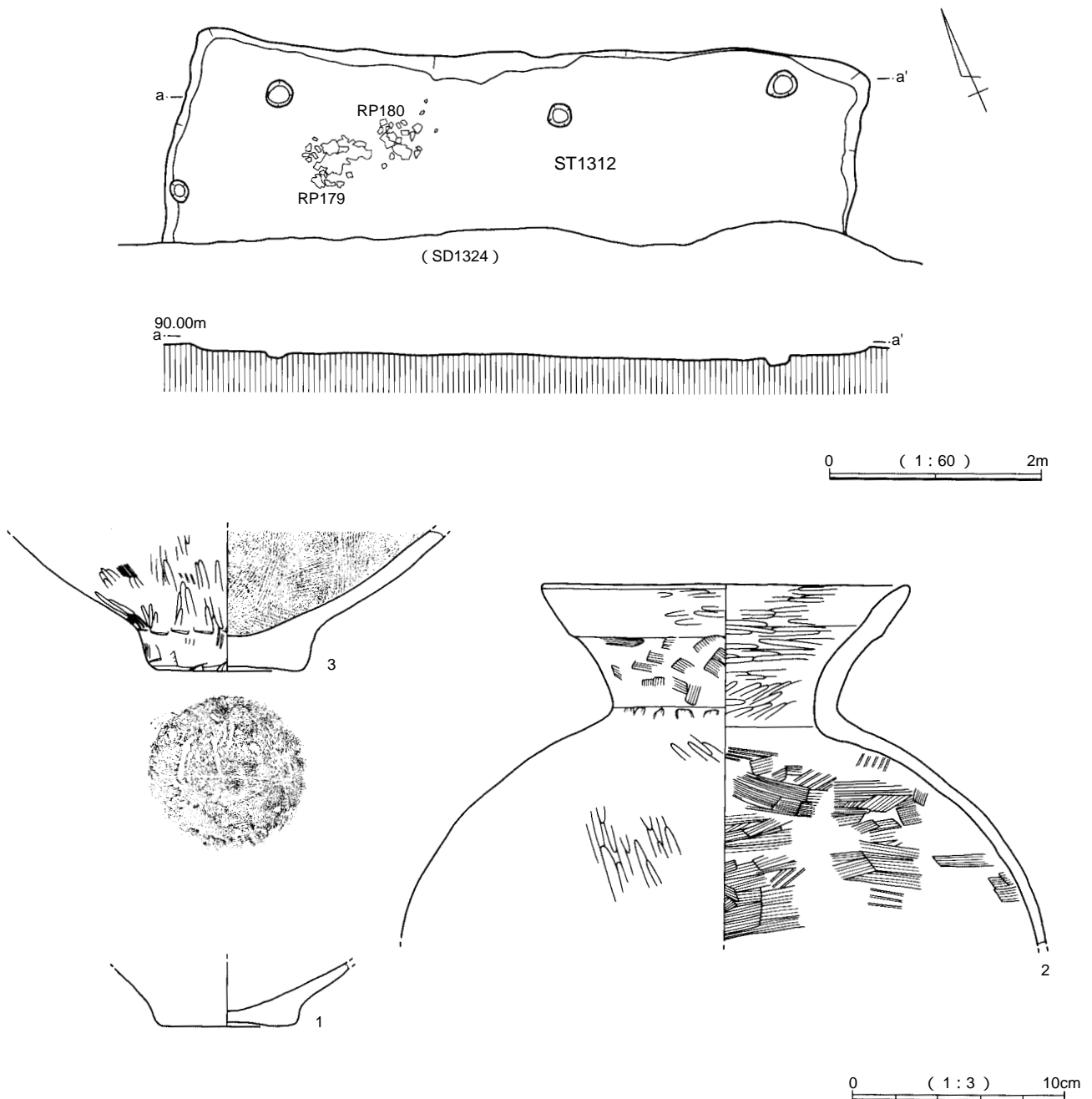
第29図 ST1308竪穴住居跡、出土遺物

S T 1312 (第30図)

D区19~21 - 17~18Gで検出された。南半をS D 1324に切られる。規模および平面形は一辺6.0mの方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN - 66° - Wである。床面は地山と同じ高さで、ほぼ平坦で貼床は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。壁沿いに径20cm、深さ5~10cmのピットが4基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。

貯蔵穴は認められない。

遺物は、土師器の壺の破片3点を図化し得た。2は複合口縁の壺である。口縁部の内側に煤が付着している。1と3は壺の底部で、3の内面はハケ目の調整痕が明瞭に確認できる。



第30図 ST1312竪穴住居跡、出土遺物

2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、調査区南側のA区に重なりながら集中的に検出された。遺物はほとんど出土していない。以下にそれぞれの状況を述べる。

S B 8 (第31図)

A区20~21-2~3Gで検出された。南北3間、東西2間の建物である。西面に庇がつく。長軸4.5m、短軸3.9mのほぼ正方形で、長軸方向はN-12°-Eである。北東側をS X 32、S D 52、53に切られ、北西側のE B 39とE B 40の間にS X 32より古いS X 33がある。身舎柱間は南北が1.1m~2.0m、東西が1.3m~1.7mを測り、庇柱間が南北1.4m~1.8mを測る。身舎各柱穴の規模、平面形は、径35~50cmの隅丸方形を呈し、深さが1~21cmを測る。庇各柱穴の規模、平面形は、径がやや小さい。アタリは確認できなかった。覆土は、黄褐色~黒褐色の粘土質シルトからなる。

S B 10 (第32図)

B区20~22-5~7Gで検出された。南北2間、東西3間の建物である。長軸5.0m、短軸4.2mの東西棟で、長軸方向はN-63°-Wである。身舎柱間は南北が2.0m~2.1m、東西が1.4m~2.0mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径20~35cmのほぼ円形を呈し、深さが5~10cmを測る。アタリは確認できなかった。

S B 110 (第32図)

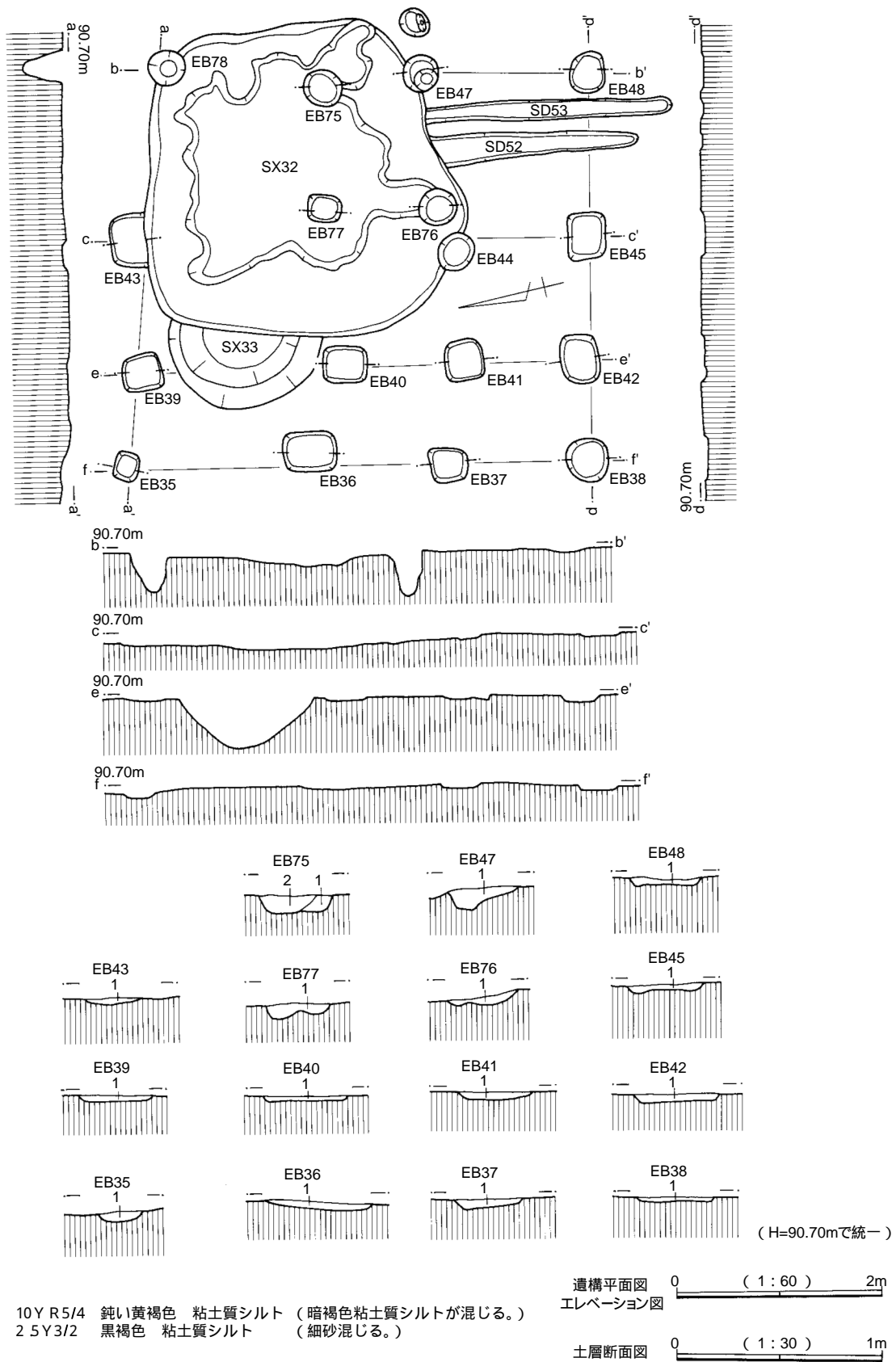
A区14~16-1~3Gで検出された。南北2間、東西4間の総柱の建物である。南北の両面に軒庇を持つ。長軸10.0m、短軸6.4mの東西棟で、蔵増押切遺跡の中では最大規模のものである。長軸方向はN-76°-Eである。中央部を南北にS D 106、S K 109に切られている。東隣に覆屋を持った井戸(S E 105)がある。身舎柱間は南北が1.9m~2.0m、東西が2.4m~2.6mを測り、庇柱間が東西2.5mを測る。身舎・庇各柱穴の規模、平面形は、径10~20cmのほぼ円形を呈し、深さが5~10cmを測る。E B 466~469、E B 476~480、E B 482の計10基の柱穴にアタリが確認できた。覆土は、アタリ・掘り方ともに褐灰色~黒褐色の粘土・砂質粘土からなる。E B 482からは根石と見られる礫が検出された。

S B 111 (第33図)

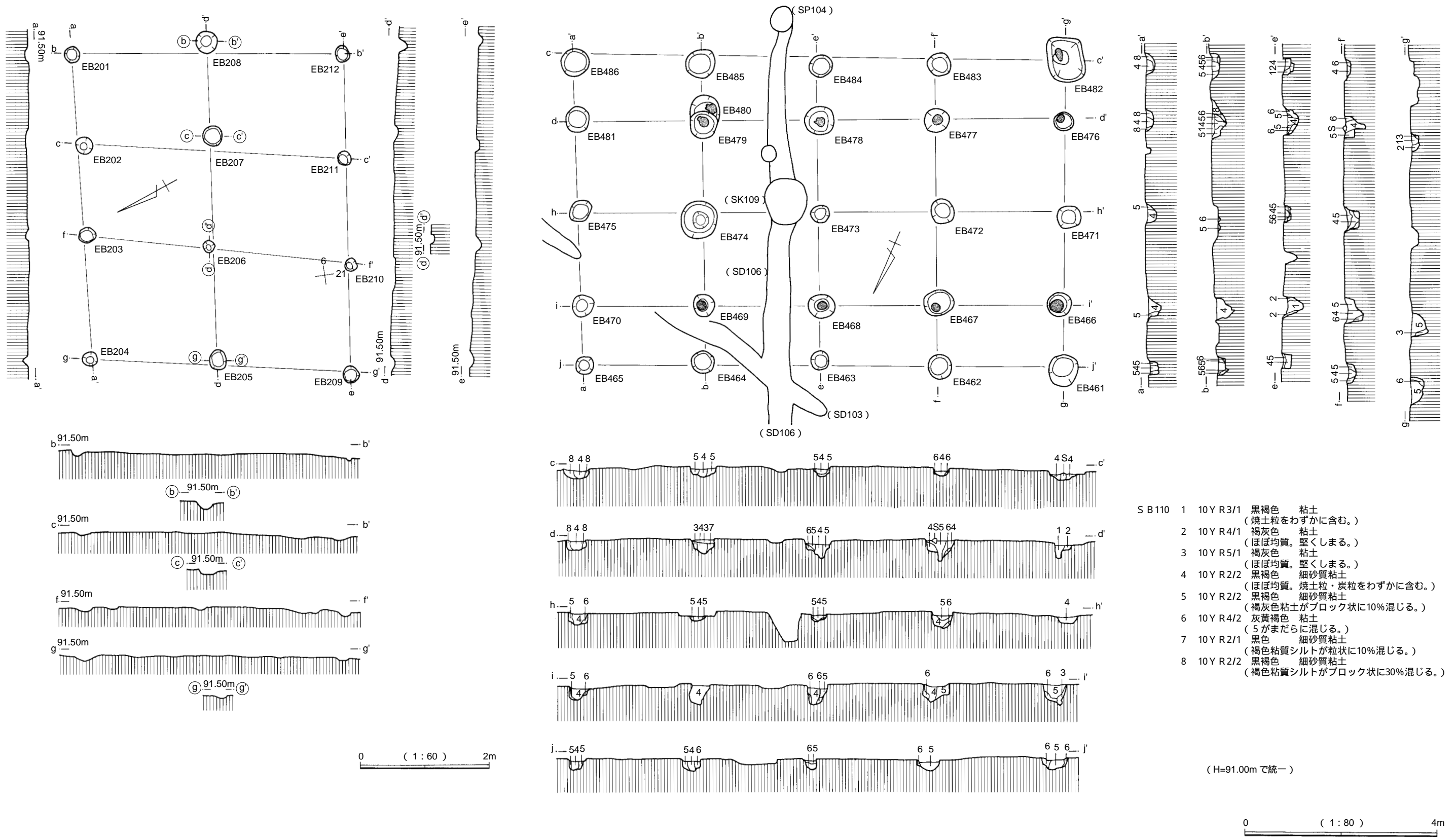
A区16~17-1~3Gで検出された。南北3間、東西2間の建物である。長軸6.3m、短軸4.3mの南北棟で、長軸方向はN-14°-Eである。身舎柱間は南北が2.0m~2.2m、東西が1.7m~2.2mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径25~40cmのほぼ円形を呈し、深さが10~35cmを測る。E B 487・488、E B 494・495、E B 498の西側の柱穴にアタリが確認できた。西側の柱穴が重なることから建て替えがあった可能性が高い。

S B 112 (第34図)

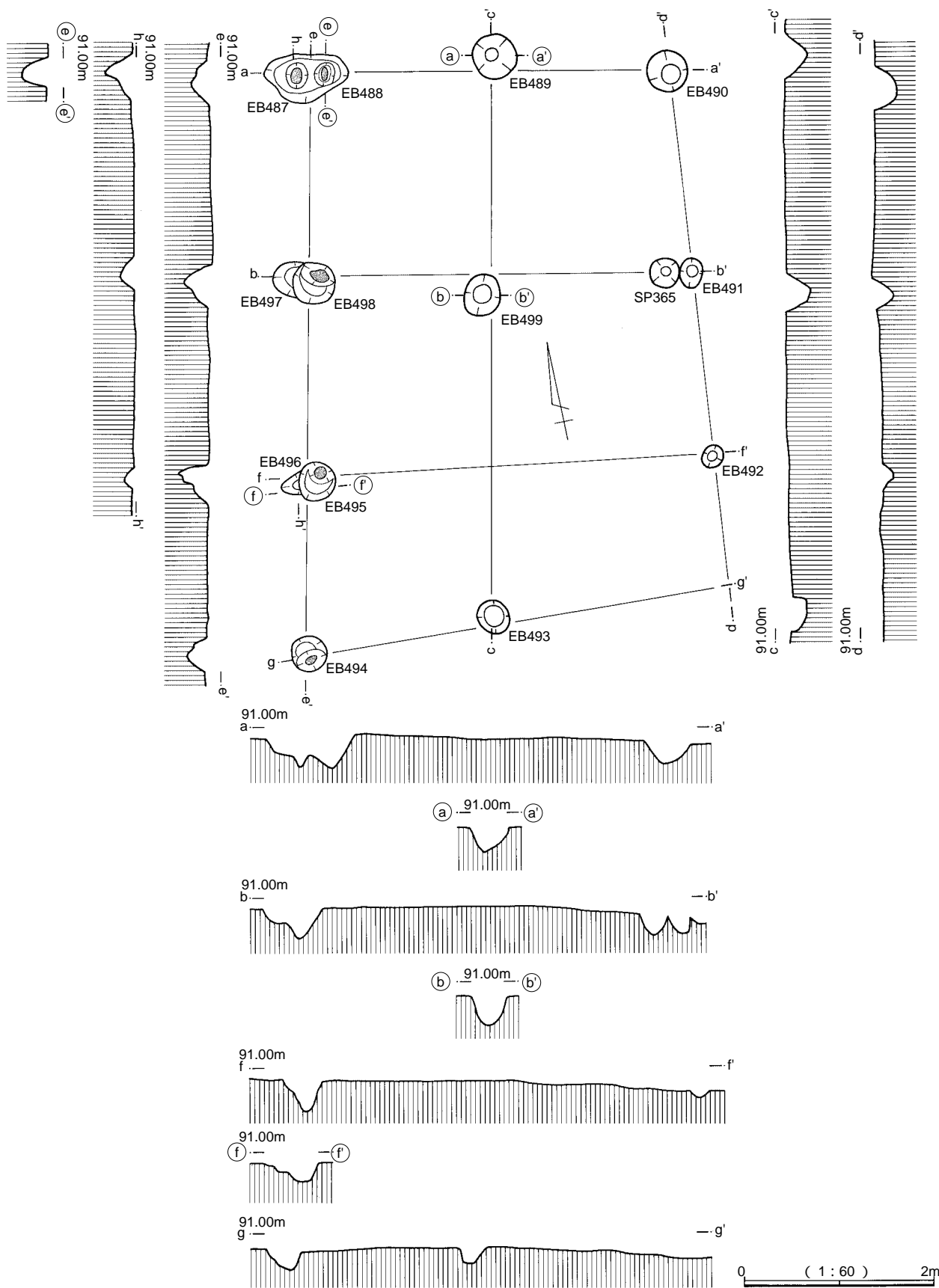
A区16~17-2~3Gで検出された。南北3間、東西2間の建物である。長軸5.8m、短軸3.4mの南北棟で、長軸方向はN-29°-Eである。身舎柱間は南北が1.2m~2.1m、東西が1.6m~1.7mを測る。中央部を東西にS D 102に切られている。各柱穴の規模、平面形は、径20~35cmのほぼ円形を呈し、深さが5~25cmを測る。アタリは確認できなかった。



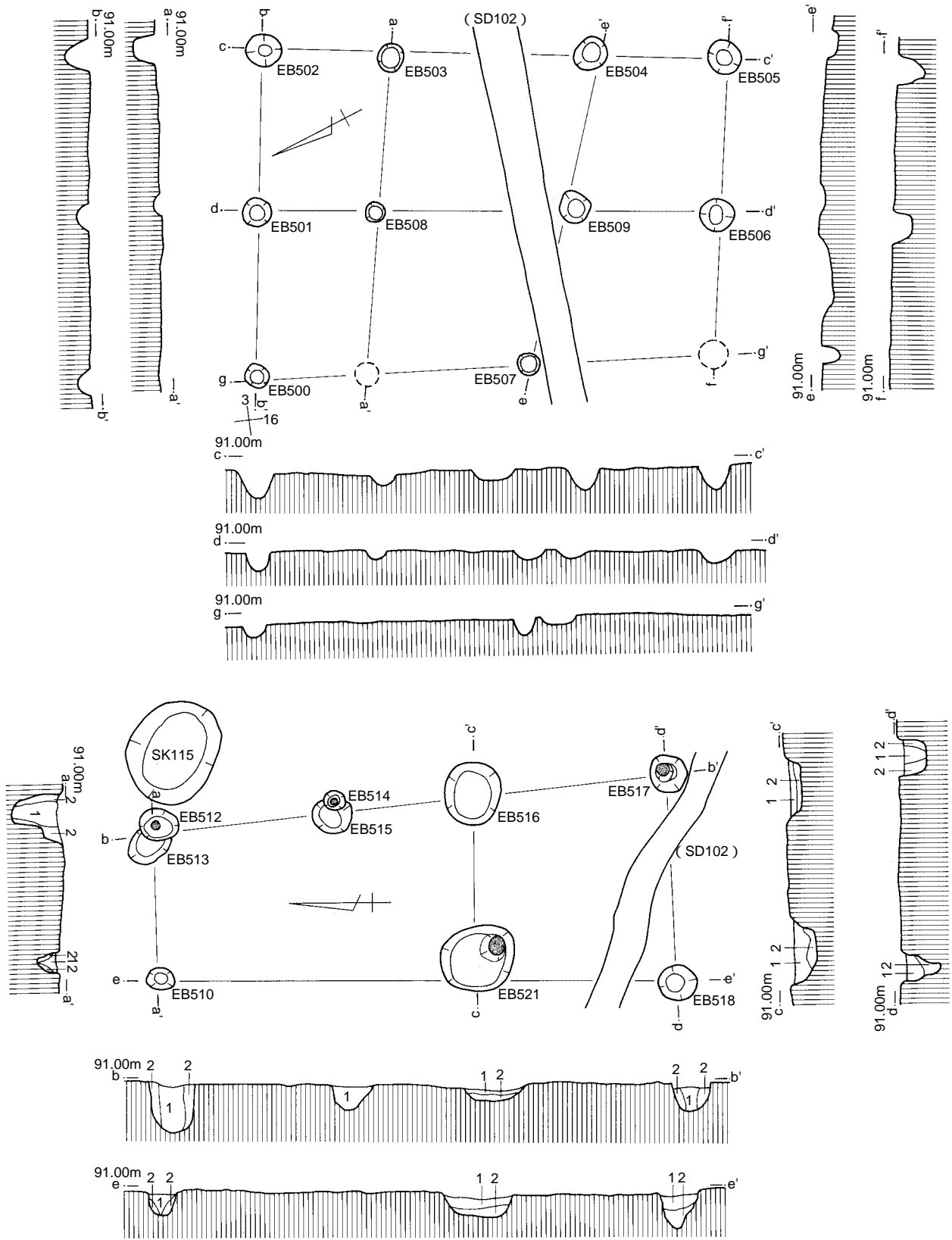
第31図 SB 8 掘立柱建物跡



第32図 SB10・110掘立柱建物跡



第33図 SB111掘立柱建物跡



- S B 113 1 10Y R2/2 黒褐色 微砂質粘土
 (褐色粘土粒・小ブロックと炭化粒子を多量に含む。やや堅くしまる。)
 2 10Y R2/3 暗褐色 微砂質粘土
 (褐色粘土ブロック・粒子を多量に含む。堅くしまる。)

0 (1 : 60) 2m

第34図 SB112・113掘立柱建物跡

S B 113 (第34図)

A区15～16-2～4Gで検出された。南北3間、東西1間の建物である。長軸5.5m、短軸2.0mの南北棟で、長軸方向はN-4°-Wである。南部を東西にS D 102に切られている。S B 110の北東に位置し、倉庫跡と考えられる。身舎柱間は南北が1.5m～2.0m、東西が1.6m～2.2mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径30～70cmの歪な円形を呈し、深さが15～50cmを測る。E B 512・514・517・521にアタリが確認できた。覆土は、暗褐色～黒褐色の細砂質粘土からなる。

遺物はE B 521から珠洲系の甕の体部片が出土した。

S B 125 (第35図)

A区17～18-3～4Gで検出された。南北3間、東西2間の建物である。長軸3.8m、短軸3.2m、長軸方向はN-16°-Eである。南部を東西にS D 92、S K 94に切れ、柱穴は不明である。身舎柱間は南北が1.4m～1.8m、東西が1.8m～2.0mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径25～50cmの歪な円形を呈し、深さが5～40cmを測る。E B 661にアタリが確認できた。

S B 150 (第35図)

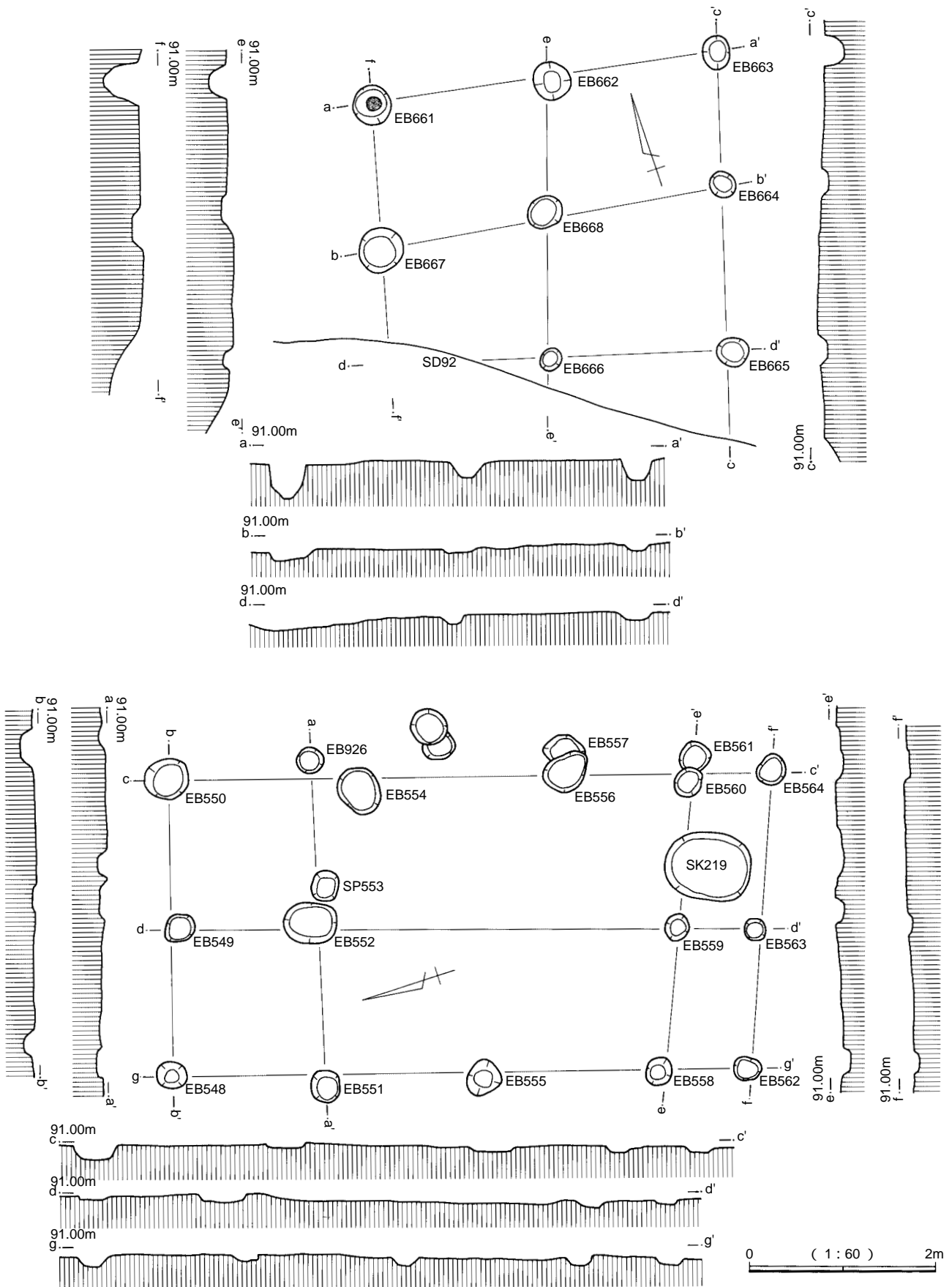
A区19～20-3～4Gで検出された。南北3間、東西2間の建物である。長軸6.4m、短軸3.2mの南北棟で、長軸方向はN-19°-Eである。南部のE B 559とE B 560の間にS K 129が認められ、建物との関連が考えられる。身舎柱間は南北が1.3m～1.9m、東西が1.6m～1.8mを測り、庇柱間が東西1.5m～1.8mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径30～55cmの歪な円形を呈し、深さが5～15cmを測る。アタリは確認できなかった。

S B 151 (第36図)

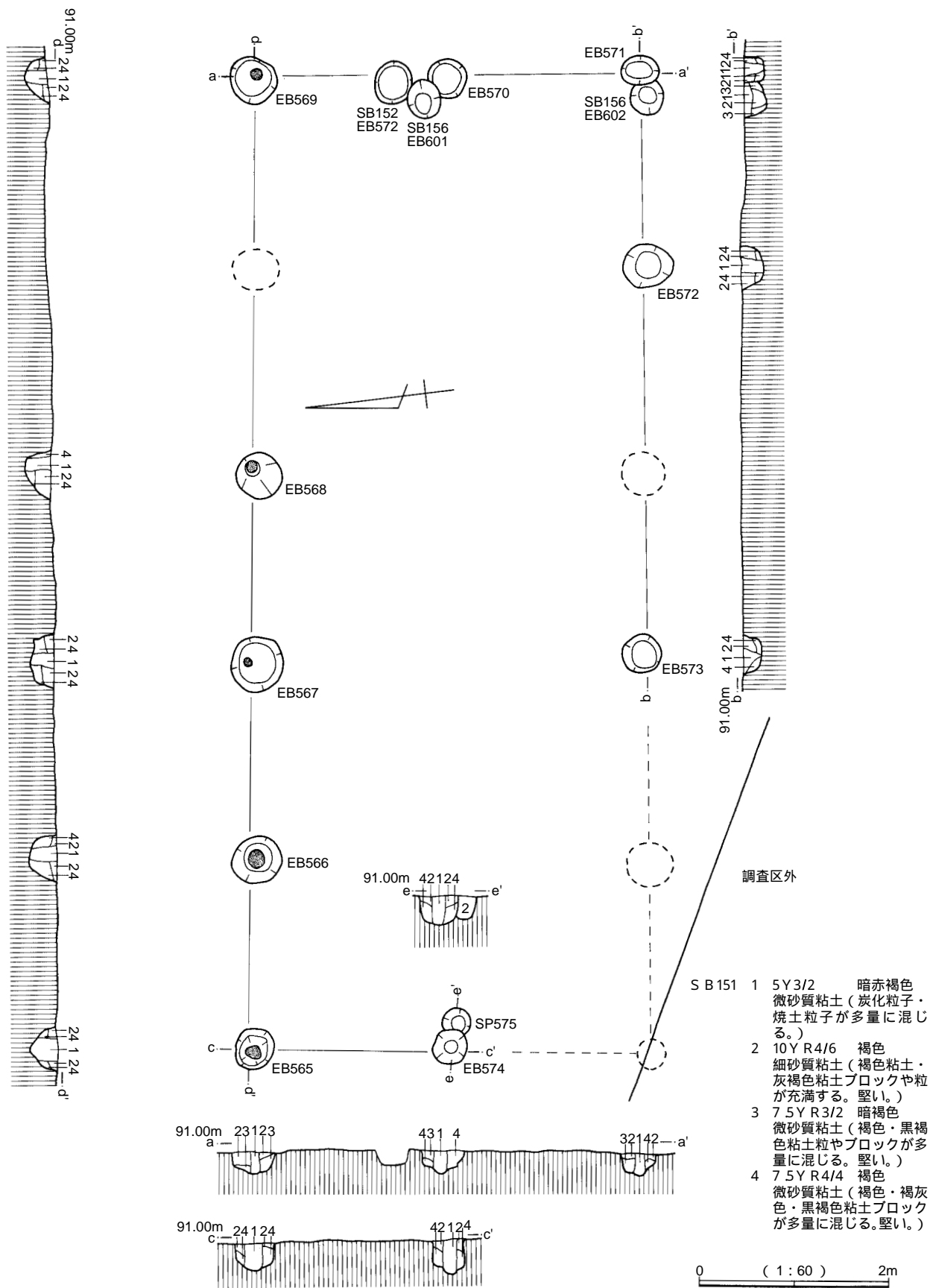
A区18～20-1Gで検出された。南北2間、東西5間の建物である。長軸10.4m、短軸4.1mの東西棟で、長軸方向はN-84°-Wである。E B 571がS B 155のE B 602を切っているため、S B 151の方が新しい。北東角のE B 569の北隣りにS E 136が認められ、建物との関連が考えられる。南西角が調査区外となる。身舎柱間は南北が1.8m～2.3m、東西が2.1mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径35～60cmの歪な円形を呈し、深さが20～30cmを測る。E B 565～569の北側の5基の柱穴にアタリが確認できた。覆土は、アタリが暗赤褐色の砂質粘土で炭化粒子と焼土粒子が多量に混じる。掘り方は上層が橙色の砂質粘土で、下層が褐色の砂質粘土からなる。覆土状況から焼失建物の可能性がある。

S B 152 (第37図)

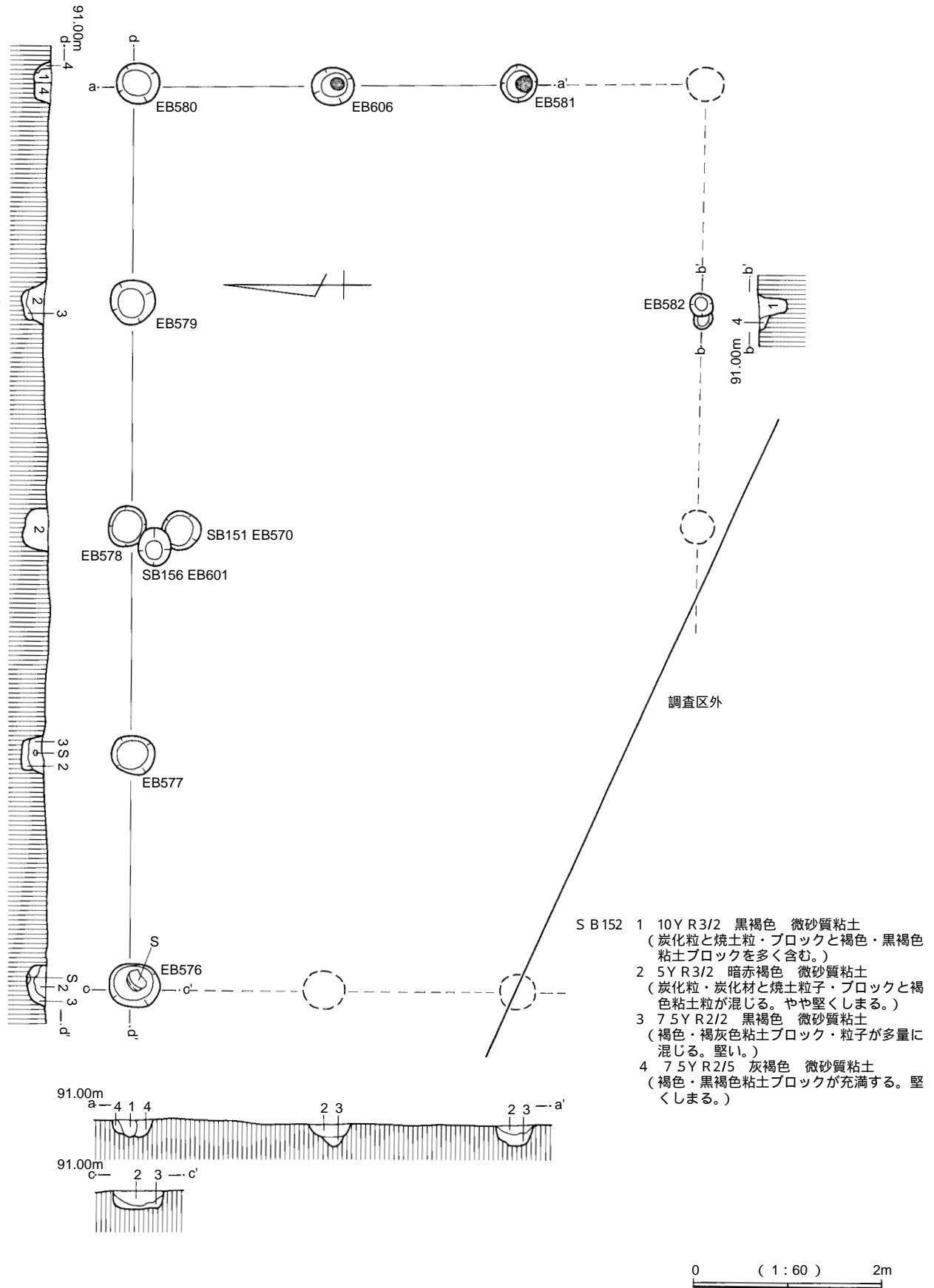
A区18～20-1Gで検出された。南北3間、東西4間の建物である。長軸9.7m、短軸6.0mの東西棟で、長軸方向はN-89°-Wである。西側にS B 151とS B 154が重複して検出されたが、新旧関係は不明である。南西角が調査区外となる。身舎柱間は南北が2.0m～2.2m、東西が2.0m～2.5mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径25～55cmのほぼ円形を呈し、深さが20～30cmを測る。E B 581・E B 606にアタリが確認できた。覆土は、アタリ・掘り方ともに暗赤褐色～黒褐色の砂質粘土からなる。E B 576からは根石と見られる礫が検出された。



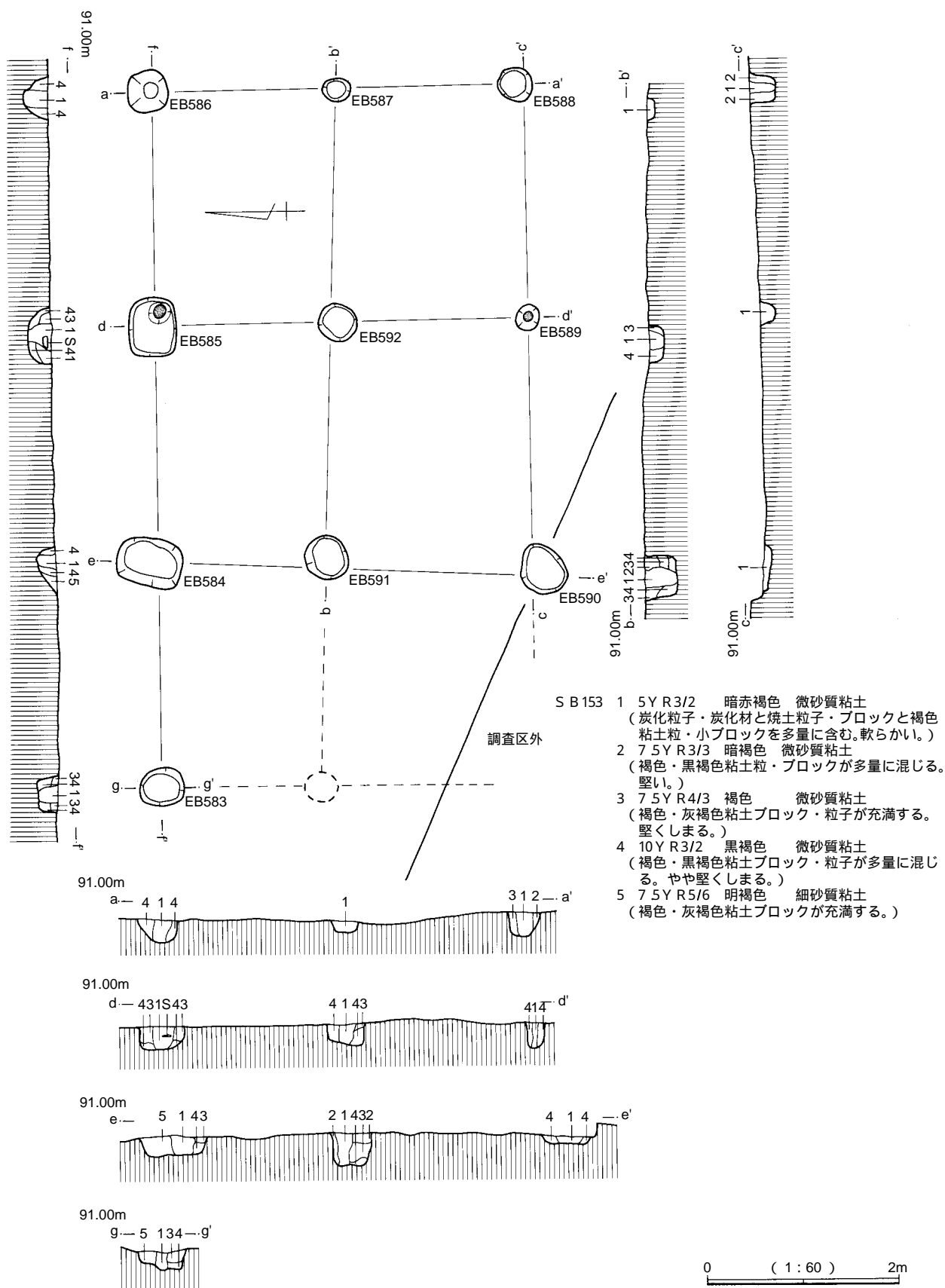
第35図 SB125・150掘立柱建物跡



第36図 SB151掘立柱建物跡



第37図 SB152掘立柱建物跡



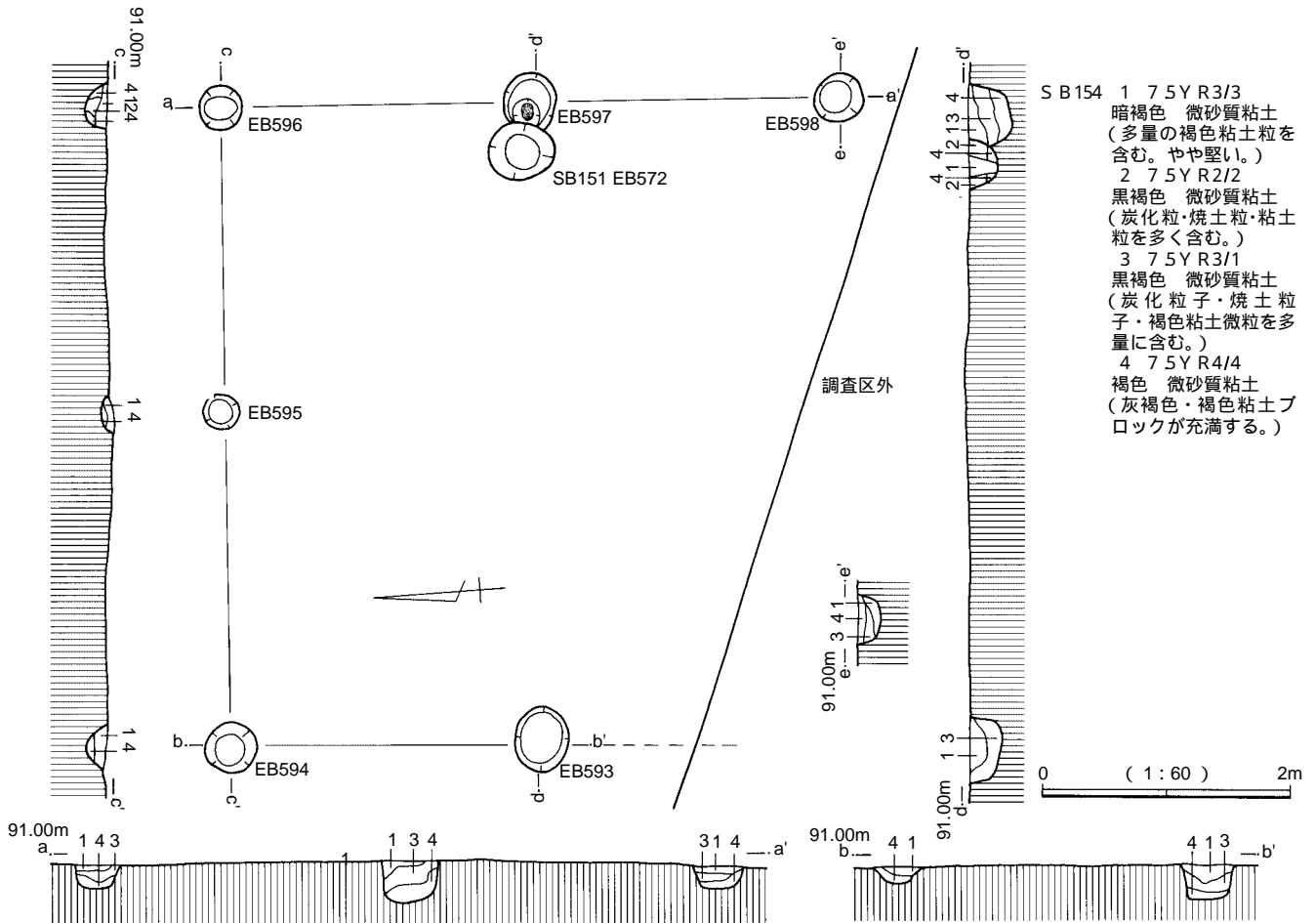
第38図 SB153掘立柱建物跡

S B 153 (第38図)

A区18~20-1Gで検出された。南北2間、東西3間の建物である。長軸7.4m、短軸3.9mの東西棟で、長軸方向はN-87°-Eである。S B 152の内側にあり、また西側でS B 151とS B 154とS B 155が重複して検出されたが、新旧関係は不明である。南西角が調査区外となる。身舎柱間は南北が1.9m~2.3m、東西が2.3m~2.7mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径30~70cmの円形または隅丸方形を呈し、深さが5~35cmを測る。E B 585・589にアタリが確認できた。覆土は、アタリが暗赤褐色の砂質粘土で炭化粒子と炭化材と焼土粒子・ブロックが多量に混じる。掘り方は上層が褐色の砂質粘土で、下層が黒褐色の砂質粘土からなる。覆土状況から焼失建物の可能性がある。

S B 154 (第39図)

A区18~20-1Gで検出された。南北2間、東西2間の建物である。長軸5.2m、短軸5.1m長軸方向はN-35°-Eである。E B 597がS B 151のE B 572に切られているため、S B 154の方が古い。中央より東側でS B 152とS B 153とS B 155が重複して検出されたが、新旧関係は不明である。身舎柱間は南北が2.5m、東西が2.5m~2.8mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径30~55cmのほぼ円形を呈し、深さが10~35cmを測る。E B 597にアタリが確認できた。覆土は、アタリ・掘り方ともに暗褐色~黒褐色の砂質粘土からなる。



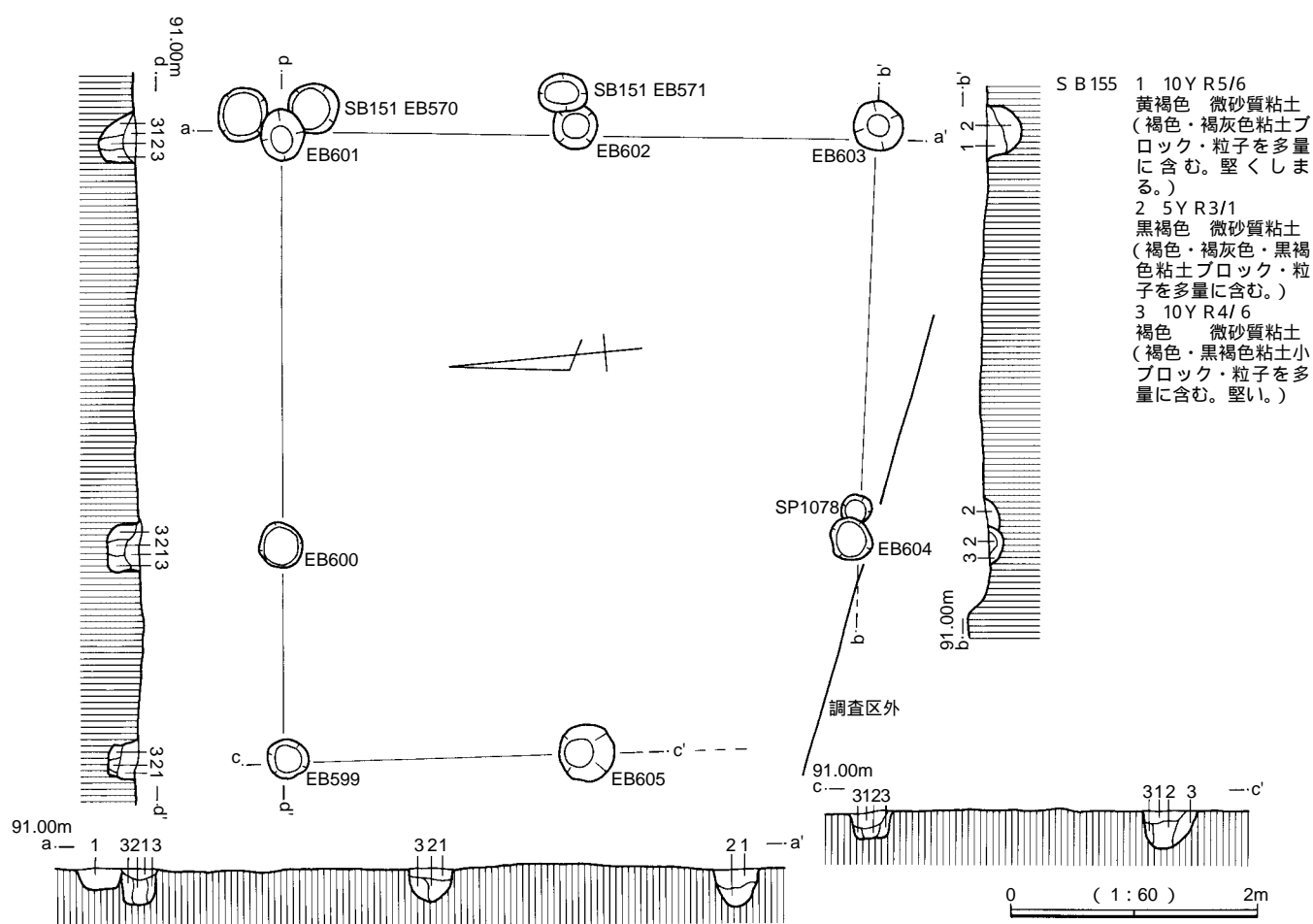
第39図 SB154掘立柱建物跡

S B 155 (第40図)

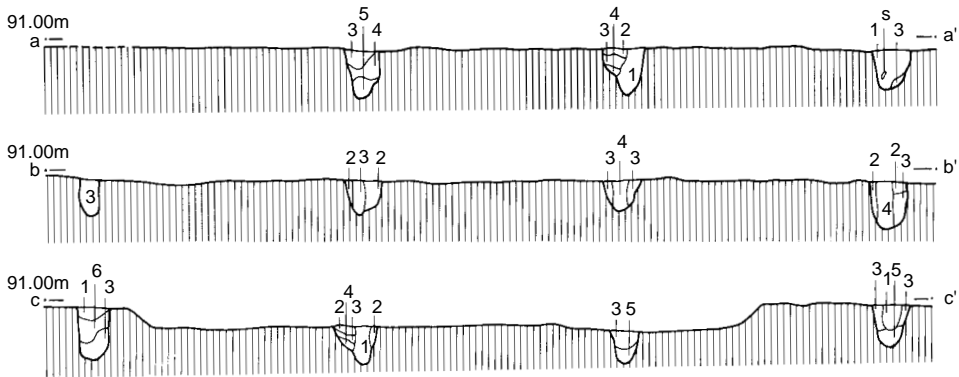
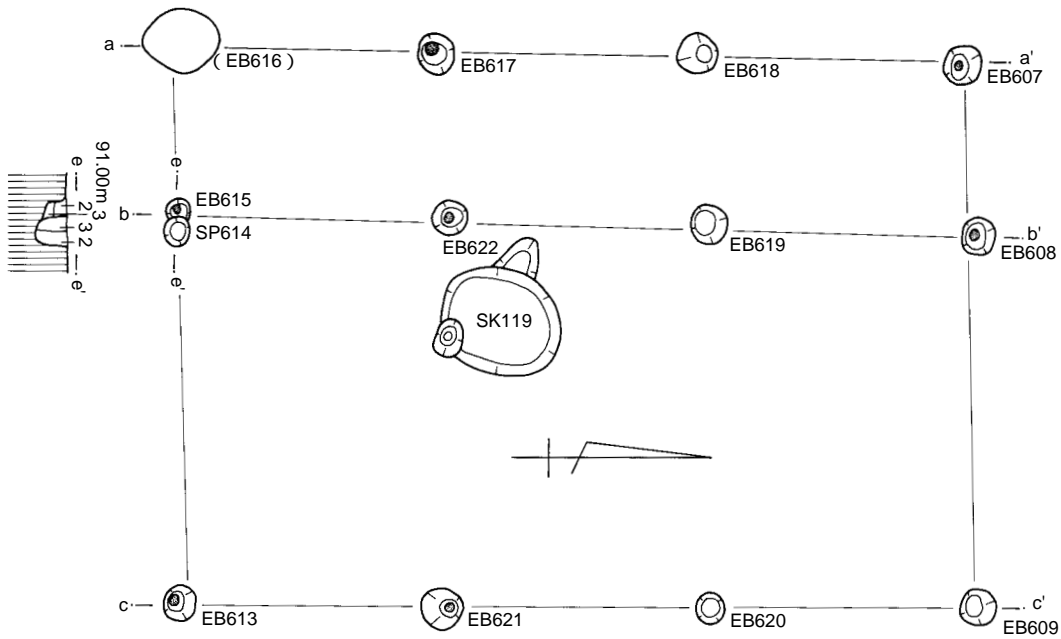
A区18~20-1Gで検出された。南北2間、東西2間の建物である。長軸5.1m、短軸4.9mの正方形で、長軸方向はN-84°-Wである。E B 602がS B 151のE B 571に切られているため、S B 155の方が古い。S B 152とS B 153とS B 154が重複して検出されたが、新旧関係は不明である。南半が調査区外である。身舎柱間は南北が2.4m~2.5m、東西が1.8mと3.3mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径35~45cmのほぼ円形を呈し、深さが10~30cmを測る。覆土は、上層が黄褐色の砂質粘土、下層が褐色・黒褐色の砂質粘土からなる。

S B 156 (第41図)

A区17~19-2~4Gで検出された。南北3間、東西1間の建物である。西面に庇を持つ。長軸6.3m、短軸5.1mの南北棟で、長軸方向はN-2°-Eである。中央部にS B 166の南北棟が重複する。身舎柱間は南北が1.7m~2.2m、東西が1.8m~3.1mを測る。身舎の各柱穴の規模、平面形は、径20~45cmの歪な円形を呈し、深さが5~35cmを測る。庇の各柱穴の規模、平面形は、径30cmの歪な円形を呈し、深さが35cmを測る。E B 607・608・613・615・617・622の6基の柱穴にアタリが確認できた。覆土は、アタリ・掘り方ともに灰黄褐色~黒褐色の砂質粘土・粘土質シルト・粘土からなる。



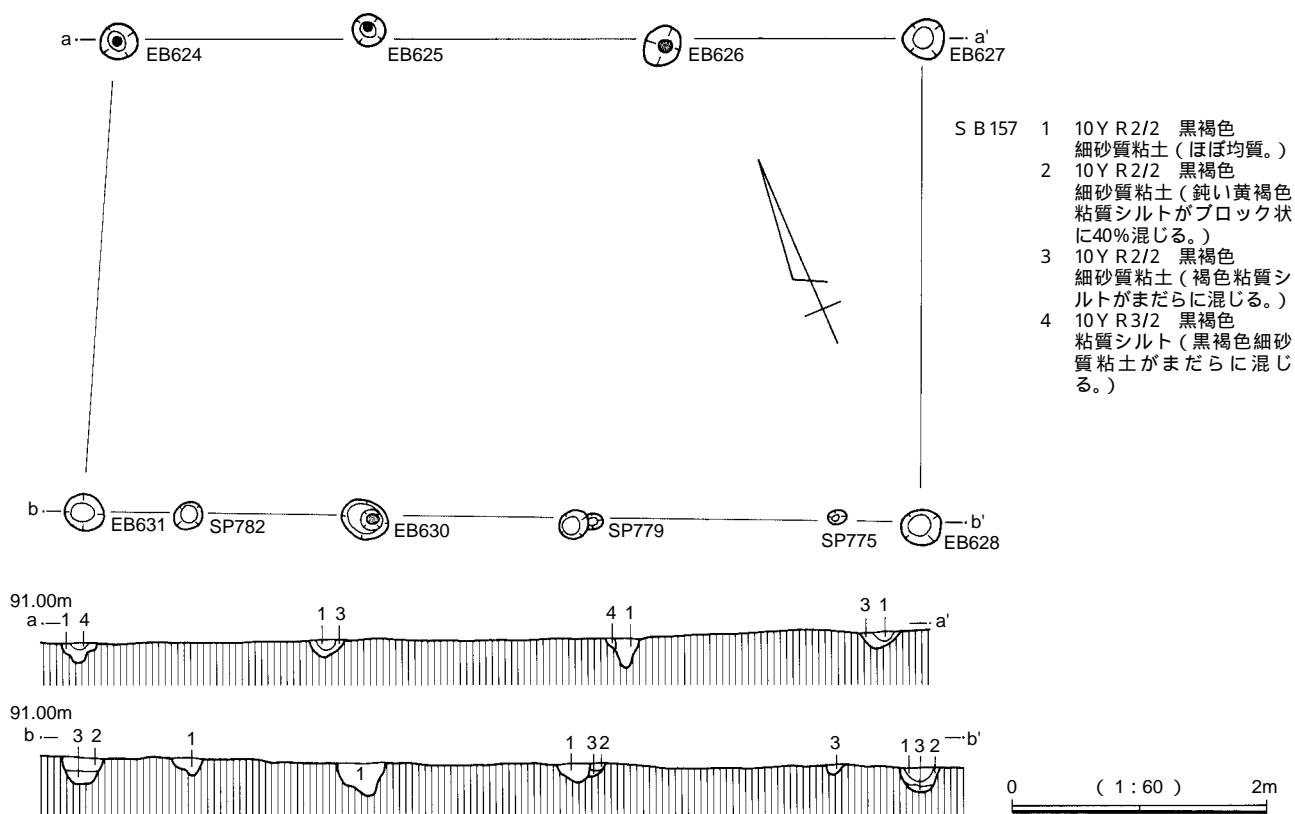
第40図 SB155掘立柱建物跡



S B 156	1	10Y R 2/3	黒褐色	細砂質粘土	(暗褐色粘質シルトと炭粒を少量含む。)
	2	10Y R 2/3	黒褐色	細砂質粘土	(灰黄褐色粘質シルトがブロック状に50%混じる。)
	3	10Y R 4/2	灰黄褐色	粘質シルト	(黒褐色細砂質粘土がまだらに20%混じる。)
	4	10Y R 2/3	黒褐色	細砂質粘土	(大粒の黄褐色粘質シルトを10%含む。)
	5	10Y R 2/1	黒色	粘土	(ほぼ均質。軟らかい。)
	6	10Y R 2/2	黒褐色	細砂質粘土	(褐色粘質シルトがブロック状に20%混じる。)

0 (1 : 60) 2m

第41図 SB156掘立柱建物跡



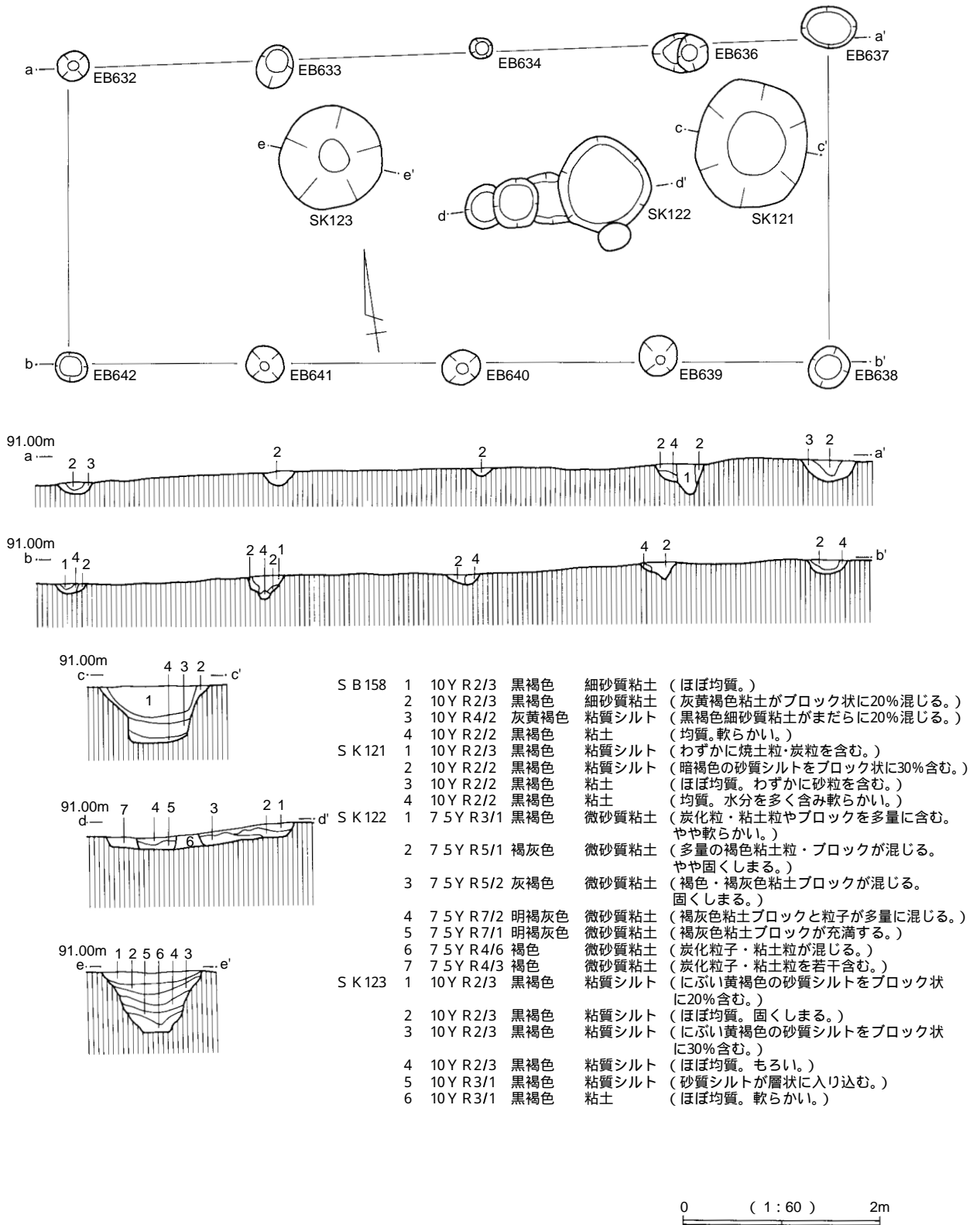
第42図 S B 157掘立柱建物跡

S B 157 (第42図)

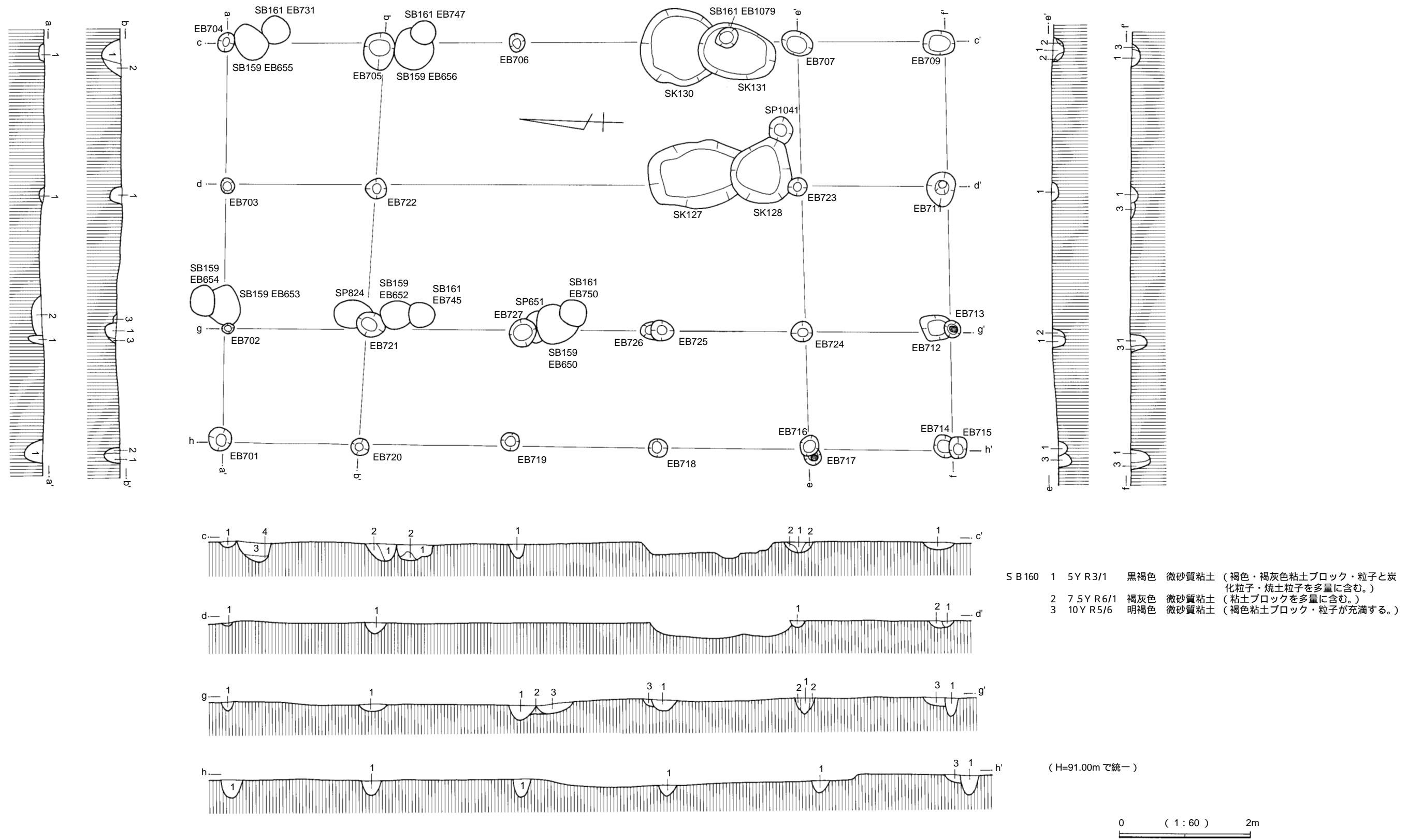
A区16~18-2~3Gで検出された。南北1間、東西3間の建物である。長軸6.4m、短軸3.8mの東西棟で、長軸方向はN-67°-Wである。身舎柱間は南北が3.8m~3.9m、東西が2.0m~2.4mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径25~35cmの歪な円形を呈し、深さが15~25cmを測る。EB624~626、EB630にアタリが確認できた。覆土は、アタリ・掘り方ともに黒褐色の砂質粘土・粘土質シルトからなる。

S B 158 (第43図)

A区16~17-1~2Gで検出された。南北1間、東西4間の建物である。長軸7.8m、短軸3.2mの東西棟で、長軸方向はN-79°-Wである。身舎柱間は南北が3.1m~3.5m、東西が1.5m~2.1mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径25~55cmの円形またはだ円形を呈し、深さが10~30cmを測る。アタリは確認できなかった。覆土は、灰黄褐色~黒褐色の砂質粘土・粘土質シルト・粘土からなる。建物跡内からは3基の土坑が検出され、建物との関連が考えられる。SK121は建物内北東角に位置し、直径1.1mほどのほぼ円形を呈し、深さ60cmを測る。覆土は、上層が黒褐色の粘土質シルトでわずかに焼土粒・炭粒を含み、下層は黒褐色の粘土層からなる。SK122は建物内中央部東寄りに位置してピットが西に連なる。直径90cmほどのほぼ円形を呈し、深さ10cmを測る。覆土は黒褐色~灰褐色の砂質粘土からなり、上層は炭化粒を多量に含む。SK123は建物内中央部西寄りに位置し、直径1mほどのほぼ円形を呈し、深さ60cmを測る。覆土は黒褐色の粘土質シルト層からなる。



第43図 SB158掘立柱建物跡



第44図 SB160掘立柱建物跡

S B 159 (第45図)

A区17~19-1~2Gで検出された。南北3間、東西1間の建物である。東面に2間、西面に3間の庇を持つ。長軸7.8m、短軸5.4mの南北棟で、長軸方向はN-15°-Eである。南半でS B 160、S B 161が重複する。E B 655がS B 160のE B 704に切られているため、S B 159の方が古い。また、E B 652がS B 161のE B 745に切られているため、S B 159の方が古い。身舎柱間は南北が2.1m~2.7m、東西が4.0m~4.2mを測り、庇柱間が南北2.6m~2.7mを測る。身舎の各柱穴の規模、平面形は、径40~60cmの歪な円形を呈し、深さが10~40cmを測る。庇の各柱穴の規模、平面形は、径20~40cmの歪な円形を呈し、深さが5~40cmを測る。E B 646・649・655・659にアタリが確認できた。覆土は、上層が灰黄褐色の砂質粘土で、下層は黒褐色の炭化粒子を多く含む砂質粘土からなる。覆土状況から焼失建物の可能性がある。

S B 160 (第44図)

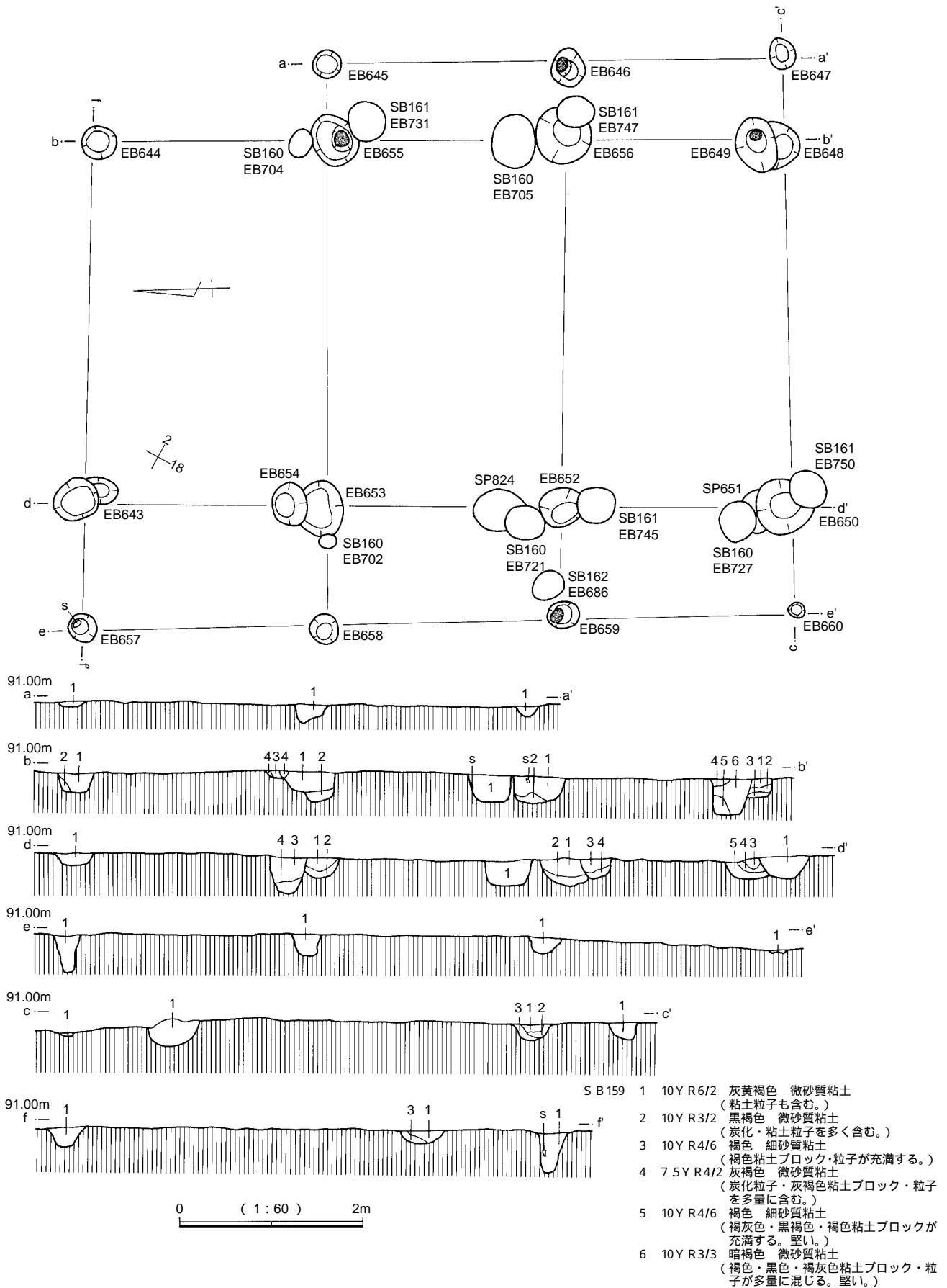
A区17~19-1~2Gで検出された。南北3間、東西5間の建物である。長軸5.0m、短軸6.2mの南北棟で、長軸方向はN-3°-Wである。S B 161と重なるように検出されたが、新旧関係は不明である。南半にS K 127、S K 128とS K 130、S K 131が平行して確認され、建物との関連が考えられる。北半でS B 159と重複する。身舎柱間は南北が2.1m~2.4m、東西が1.7m~2.2mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径20~60cmの歪な円形を呈し、深さが10~60cmを測る。E B 713・717にアタリが確認できた。覆土は、黒褐色の砂質粘土からなり炭化粒子と焼土粒子を多量に含む。覆土状況から焼失建物の可能性がある。

S B 161 (第46図)

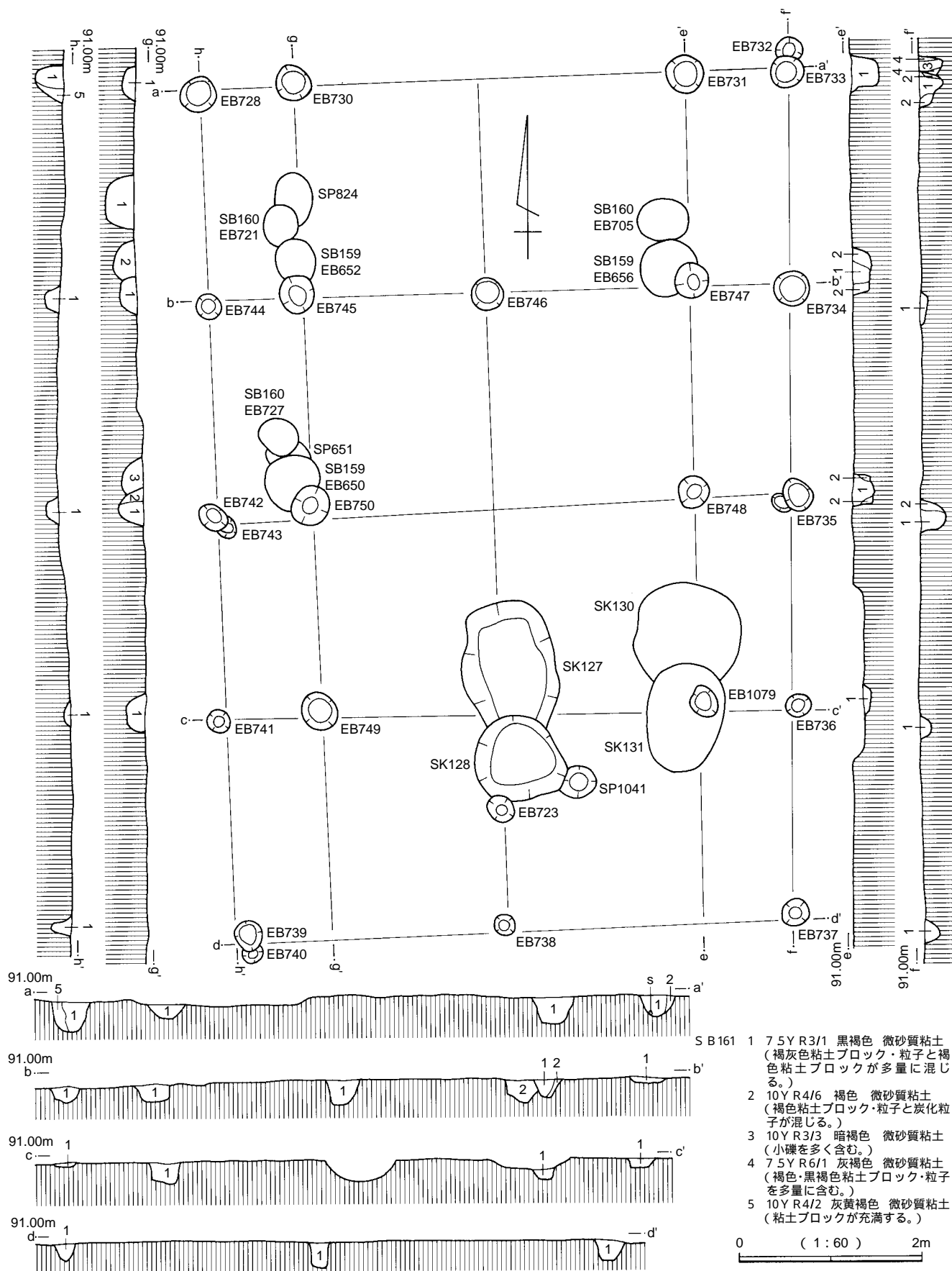
A区17~19-1~2Gで検出された。南北4間、東西2間の建物である。東西両面に庇を持つ。長軸9.4m、短軸6.4mの南北棟で、長軸方向はN-1°-Wである。S B 160と重なるように検出されたが、新旧関係は不明である。北半でS B 159と重複し、E B 745がS B 159のE B 652を切り、E B 747がS B 159のE B 656を切っているため、S B 161の方が新しい。南半にS K 127、S K 128とS K 130、S K 131が平行して確認され、建物との関連が考えられる。身舎柱間は南北が2.3m、東西が2.1m~2.3mを測り、庇柱間が南北2.3m~2.4mを測る。身舎各柱穴の規模、平面形は、径30~40cmの歪な円形を呈し、深さが15~30cmを測る。庇各柱穴の規模、平面形は、径25~40cmの歪な円形を呈し、深さが5~30cmを測る。アタリは確認できなかった。覆土は、黒褐色の砂質粘土からなる。

S B 162 (第47図)

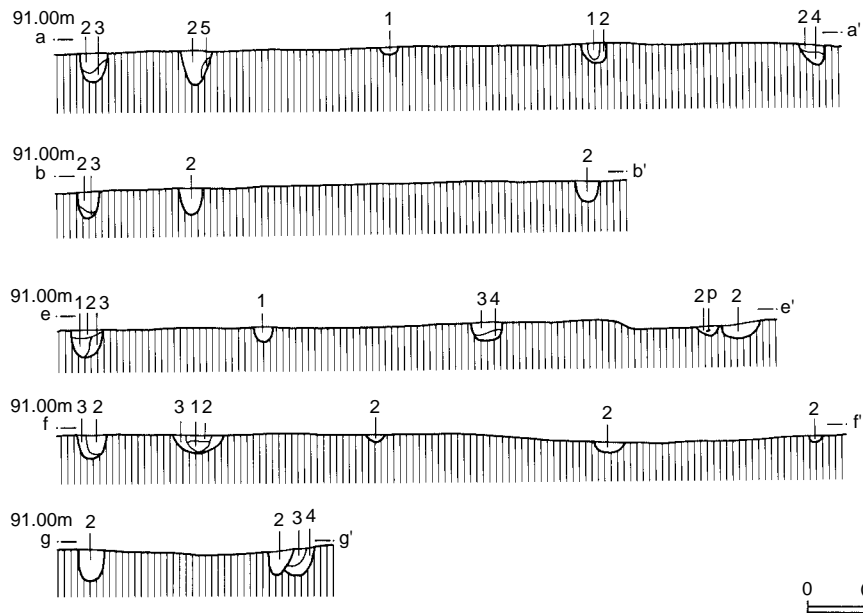
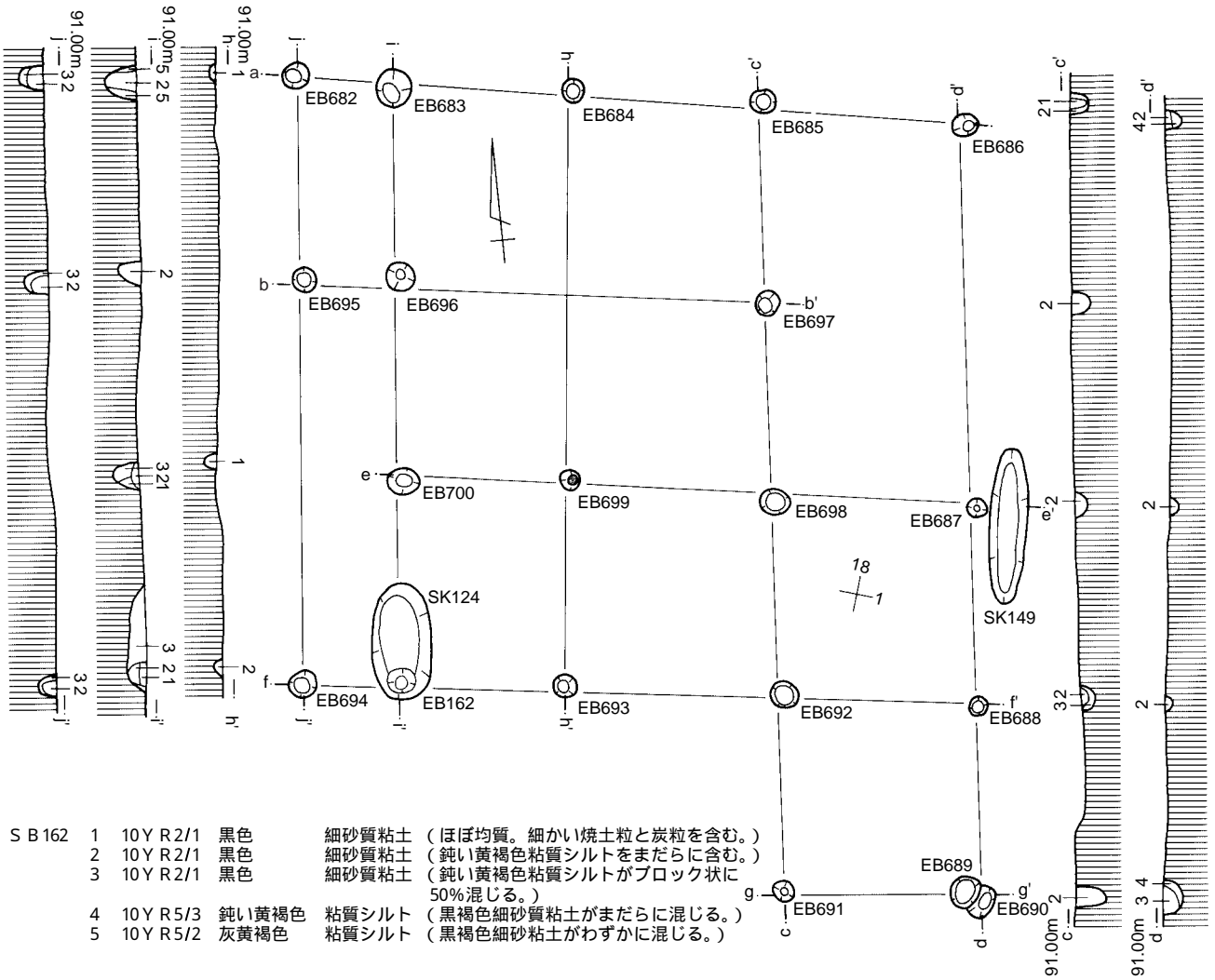
A区17~19-1~2Gで検出された。南北4間、東西3間の建物である。西面に庇を持つ。曲がり屋的な構造を持つ。長軸9.0m、短軸7.7mの南北棟で、長軸方向はN-9°-Eである。内部にS B 163が重複し、北東角にS B 159、S B 160、S B 161が重複するが、新旧関係は不明である。E B 162がS K 124を切っている。身舎柱間は南北が2.1m~2.3m、東西が2.1m~2.5mを測り、庇柱間が南北2.3mと4.6mを測る。身舎の各柱穴の規模、平面形は、径25~40cmのほぼ円形を呈し、深さが1~10cmを測る。庇の各柱穴の規模、平面形は、径8cmのほぼ円形を呈し、深さが5~8cmを測る。E B 699にアタリが確認できた。覆土は黒色の砂質粘土からなる。



第45図 SB159掘立柱建物跡



第46図 SB161掘立柱建物跡

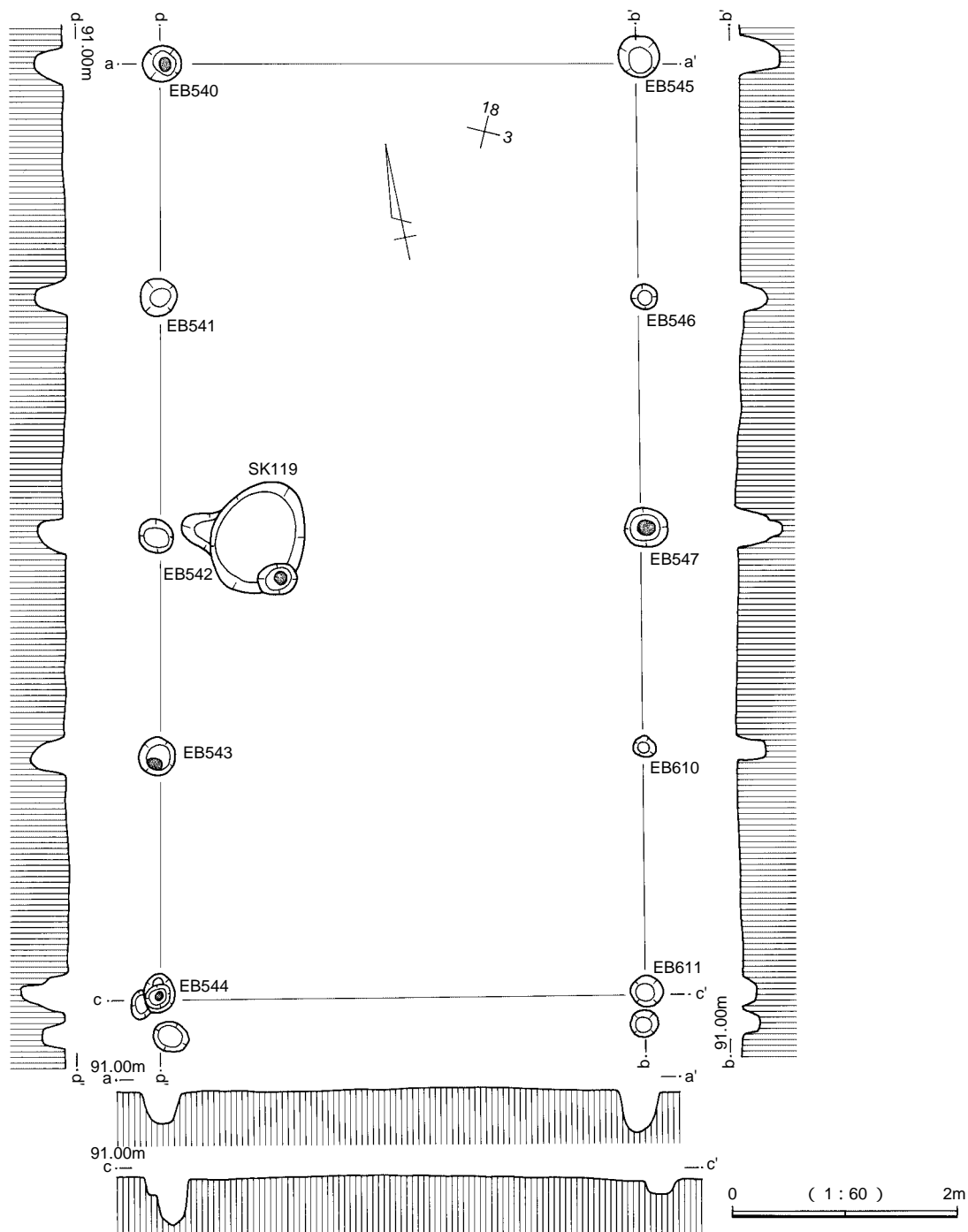


0 (1 : 80) 2m

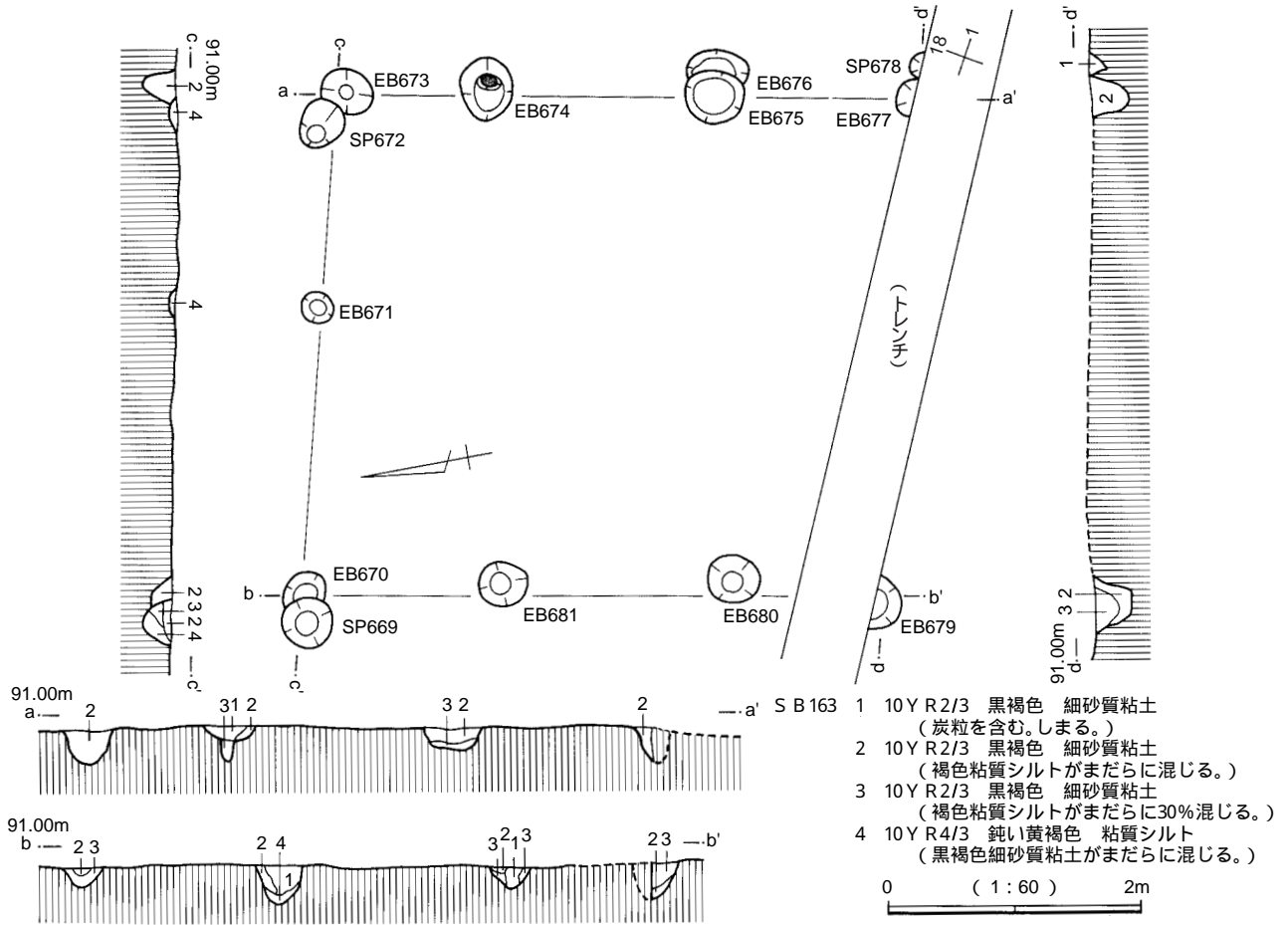
第47図 SB162掘立柱建物跡

S B 166 (第48図)

A区17~19-1~3Gで検出された。南北4間、東西1間の建物である。長軸8.4m、短軸4.3mの南北棟で、長軸方向はN-10°-Eである。S B 156に重複する。中央部EB542の隣りにSK119が認められ、建物との関連が考えられる。身舎柱間は南北が2.0m~2.2m、東西が4.4mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径20~40cmのほぼ円形を呈し、深さが10~40cmを測る。



第48図 SB166掘立柱建物跡



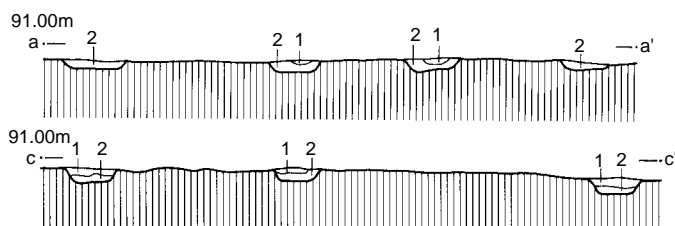
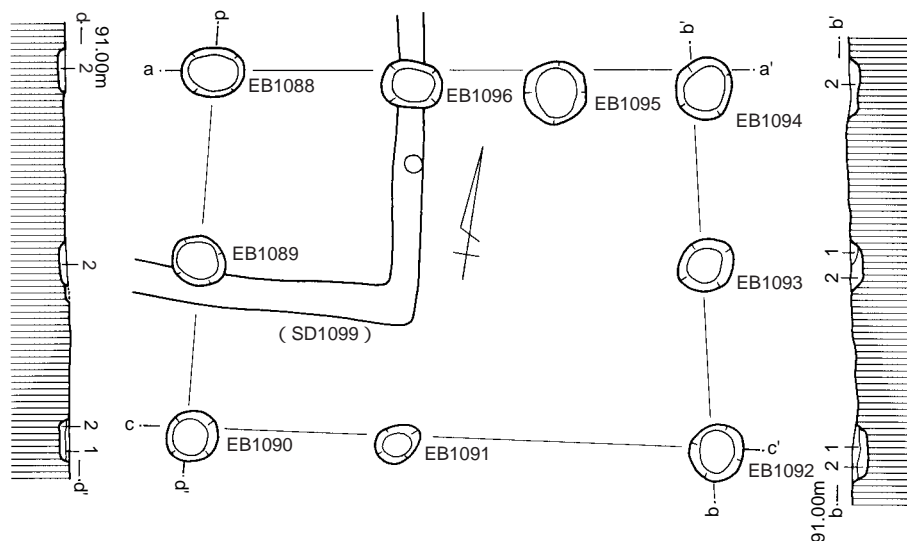
第49図 SB163掘立柱建物跡

S B 163 (第49図)

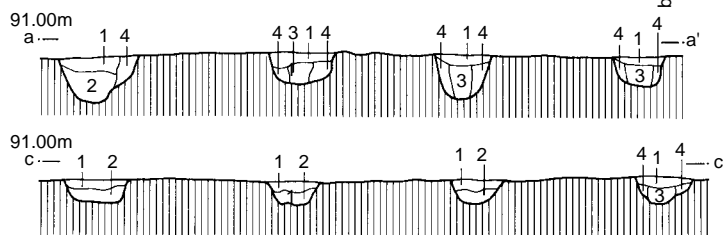
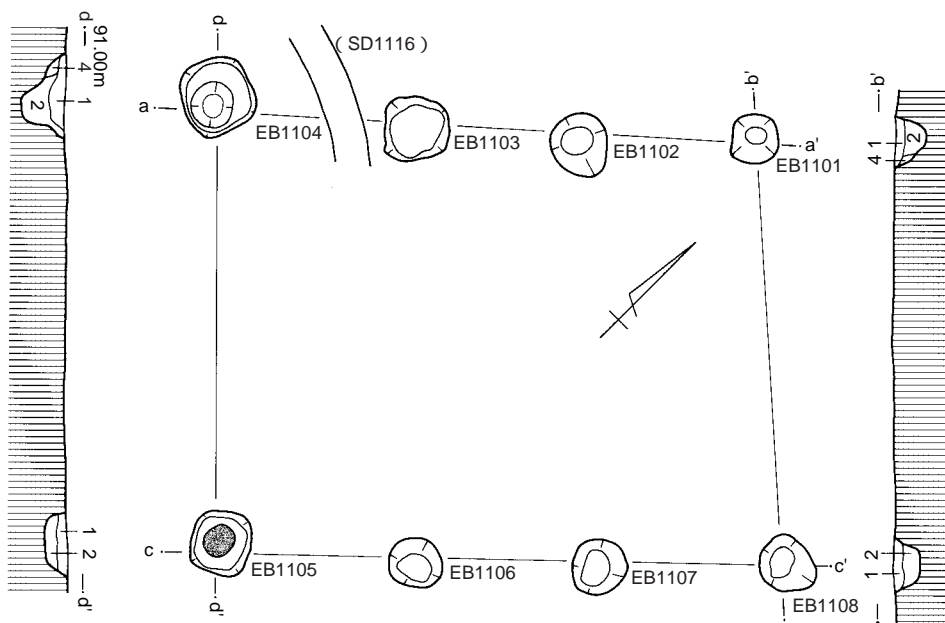
A区16~17-2~3Gで検出された。南北3間、東西2間の建物である。長軸4.7m、短軸4.0mの南北棟で、長軸方向はN-6°-Eである。S B 162の内側に重複する。南側がトレンチで切られる。身舎柱間は南北が1.1m~1.8m、東西が1.8mと2.3mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径25~50cmの歪な円形を呈し、深さが10~30cmを測る。E B 674にアタリが確認できた。覆土は、アタリ・掘り方ともに黒褐色の砂質粘土からなる。柱穴が重なることから建て替えがあった可能性が高い。

S B 1008 (第50図)

B区20~21-10~11Gで検出された。南北2間、東西3間の建物である。長軸4.0m、短軸3.0mの東西棟で、長軸方向はN-85°-Eである。北西部でS X 1007と重複する。身舎柱間は南北が1.5m、東西が1.6m~2.5mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径35~50cmの歪な円形を呈し、深さが5~15cmを測る。アタリは確認できなかった。覆土は、暗褐色~黒褐色の砂質粘土からなり、炭化粒子を多量に含む。



- SB1008
- 1 7.5Y R3/2 黒褐色 微砂質粘土
(炭化粒子と褐色・黒色粘土粒・小ブロックが多く混じる。)
 - 2 7.5Y R3/4 暗褐色 微砂質粘土
(炭化粒子と褐色・褐灰色粘土ブロックが多量に混じる。やや軟らかい。)



- SB1011
- 1 7.5Y R4/2 灰褐色 微砂質粘土
(やや堅くしまる。やや砂質性。)
 - 2 7.5Y R4/3 褐色 微砂質粘土
(炭化粒子、褐色・褐灰色粘土ブロックを多量に含む。軟らかい。)
 - 3 7.5Y R3/3 暗褐色 微砂質粘土
(炭化粒子・粘土粒子を多量に含む。軟らかい。)
 - 4 7.5Y R4/6 暗褐色 微砂質粘土
(褐色粘土小・大ブロックが多量に混じる。やや堅くしまる。)

0 (1:60) 2m

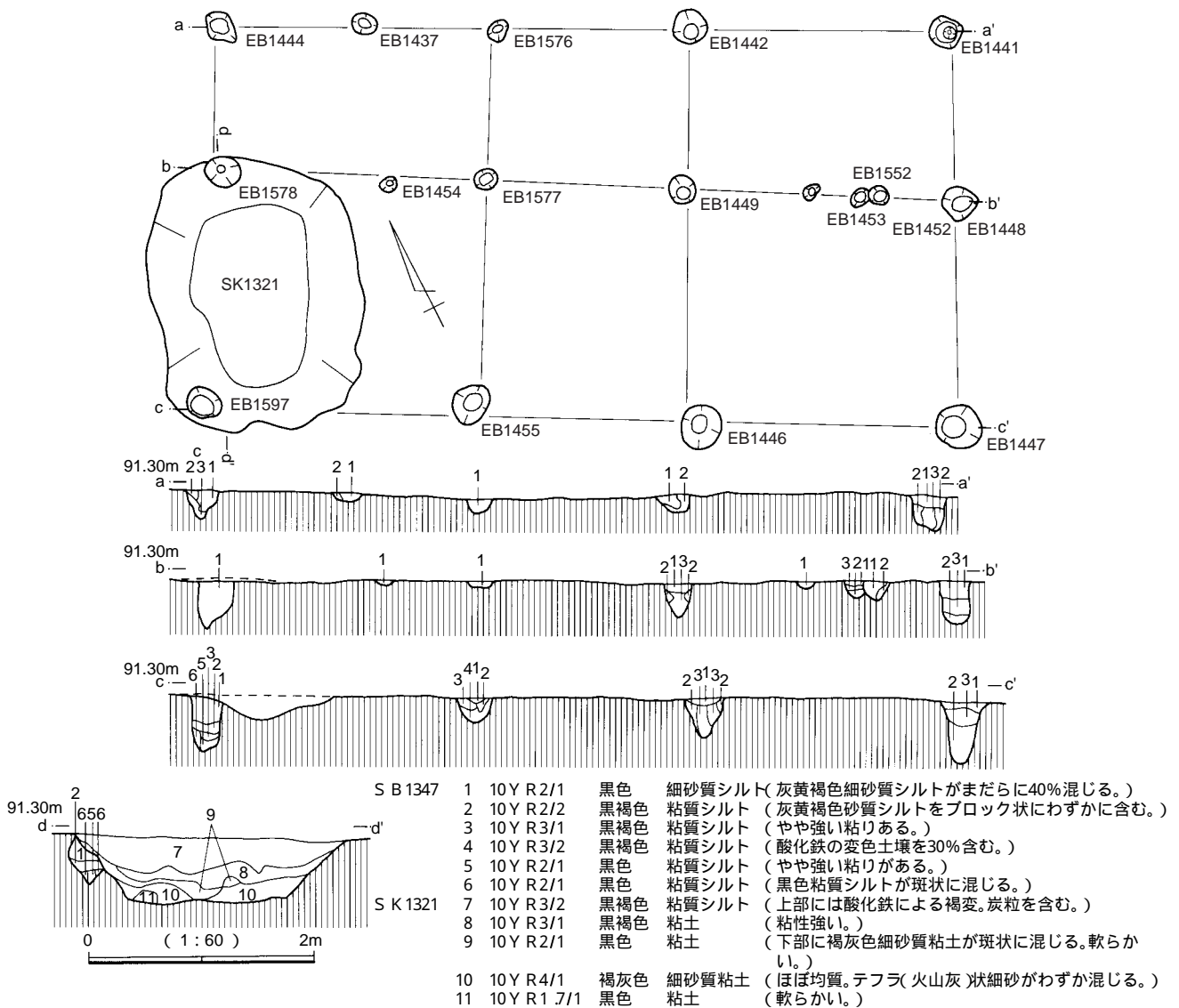
第50図 SB1008・1011掘立柱建物跡

S B 1011 (第50図)

B区20~22-11~12Gで検出された。南北4間、東西1間の建物である。長軸4.3m、短軸3.4mの南北棟で、長軸方向はN-46°-Eである。西辺の一部がS D 1116に切られる。身舎柱間は南北が1.3m~1.6m、東西が3.4mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径40~65cmの歪な円形または隅丸方形を呈し、深さが15~35cmを測る。E B 1105にアタリが確認できた。覆土は、上層が灰褐色の砂質粘土からなる。下層は褐色~暗褐色の砂質粘土からなる。

S B 1347 (第51図)

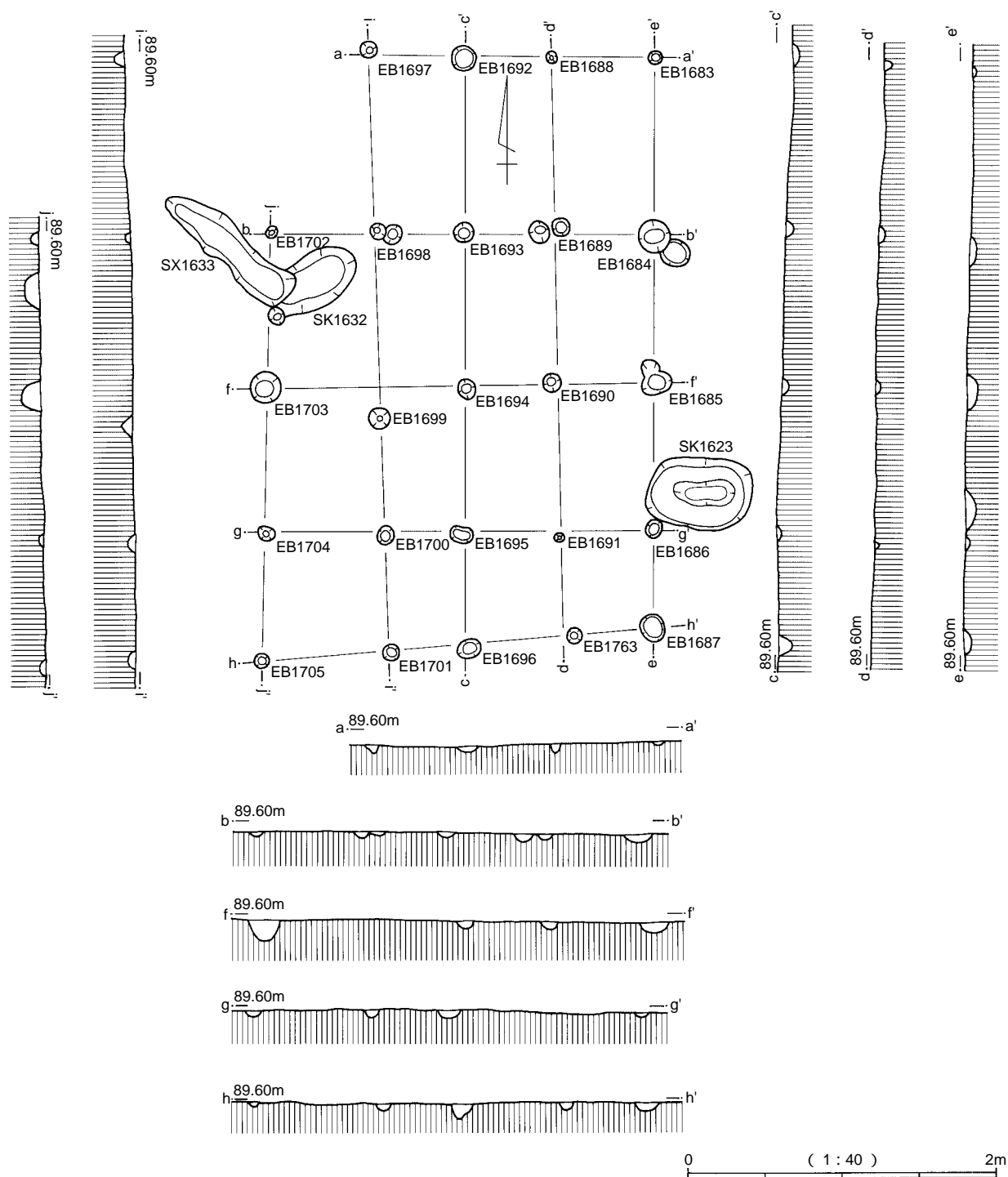
D区18~20-20~21Gで検出された。南北2間、東西4間の建物である。長軸6.6m、短軸3.5mの東西棟で、長軸方向はN-60°-Wである。E B 1578とE B 1597がS K 1321に切られる。身舎柱間は南北が1.5m~2.0m、東西が1.8m~2.5mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径20~40cmの歪な円形を呈し、深さは、四隅の柱穴が40~55cm、それ以外の柱穴は10~30cmを測る。アタリは確認できなかった。覆土は、黒褐色~黒色の砂質粘土・粘土質シルトからなる。



第51図 SB1347掘立柱建物跡

S B 1682 (第52図)

C区11~12-11~13Gで検出された。南北4間、東西4間の建物である。長軸3.9m、短軸2.6mの南北棟で、長軸方向はN-0°-Eである。身舎柱間は南北が0.6m~1.2m、東西が0.5m~0.8mを測る。各柱穴の規模、平面形は、径10~20cmの歪な円形を呈し、深さが5~20cmを測る。覆土は、灰黄褐色の粘土質シルトからなる。



S B 1682 1 10Y R 4/2 灰黄褐色 粘質シルト
 (黒褐色粘土質シルトのブロックを30%含む。さらさらしている。)

第52図 SB1682掘立柱建物跡

3 井戸跡・土坑跡・柵跡

S E 105 (第53図)

A区16-3Gで検出された。掘立柱建物跡S B 110の東側にあり、S B 110、S B 111、S B 112、S B 113、S A 114の中央に位置する覆屋を持つ井戸である。規模および平面形は、径2.4mほどの南北に長い楕円形を呈し、深さ1.1mを測る。覆土は、上層が黄褐色の砂質粘土、中層・下層が黒褐色の砂質粘土からなり、中層は炭化粒子を多く含む。覆屋跡と考えられる柱穴は、南・西・北側を囲うように並び、列の長さは9m、柱間は30cm～1mを測り、不定間隔で並ぶ。各柱穴の規模、平面形は、径30～50cmのほぼ円形を呈し、深さが10～30cmを測る。

S E 135 (第53図)

A区20-2Gで検出された。S B 151～S B 155の建物群の北側に隣接し、S E 136が西に位置する。S K 134を切っている。規模および平面形は、径2.3mほどの円形を呈し、深さ1.3mを測る。覆土は砂質粘土で色調は様々である。

S E 136 (第53図)

A区20-2Gで検出された。S B 151の北東角に位置し、S B 151のE B 569に切られている。規模および平面形は、径1.5mほどの円形を呈し、深さ7.8mを測る。覆土は砂質粘土で色調は様々である。須恵器の甕の口縁部が検出された。頸部が短く外反し、口唇部を面取りしている。外面は自然釉と灰かぶりが認められ、内面は口縁部にのみ灰かぶりが確認される。流れ込みの可能性が高い。

S K 1034 (第54図)

B区18-12Gで検出された。S T 1030の南側、S T 1023～S T 1029群の西側に位置する。東端をピットに切られる。規模および平面形は、径2.3mほどの歪な円形を呈し、深さ16cmを測る。東側に径50cmと径20cmほどの炭化物が検出された。覆土は、黒褐色と灰黄褐色の砂質粘土からなる。

S K 2001 (第54図)

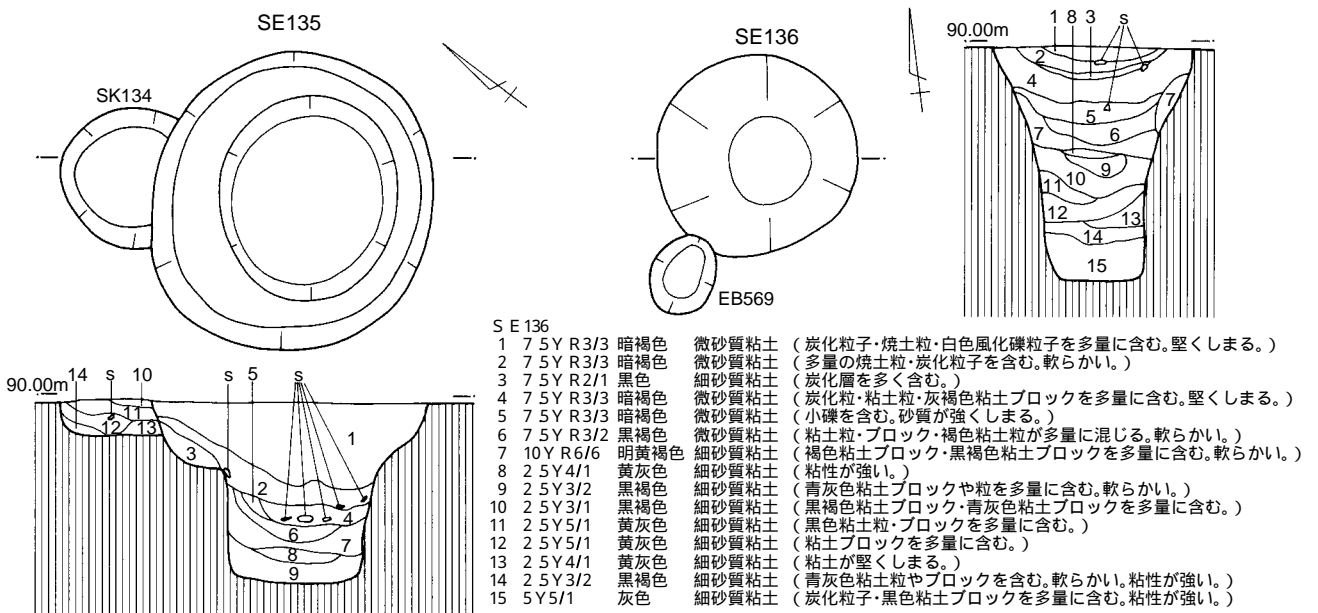
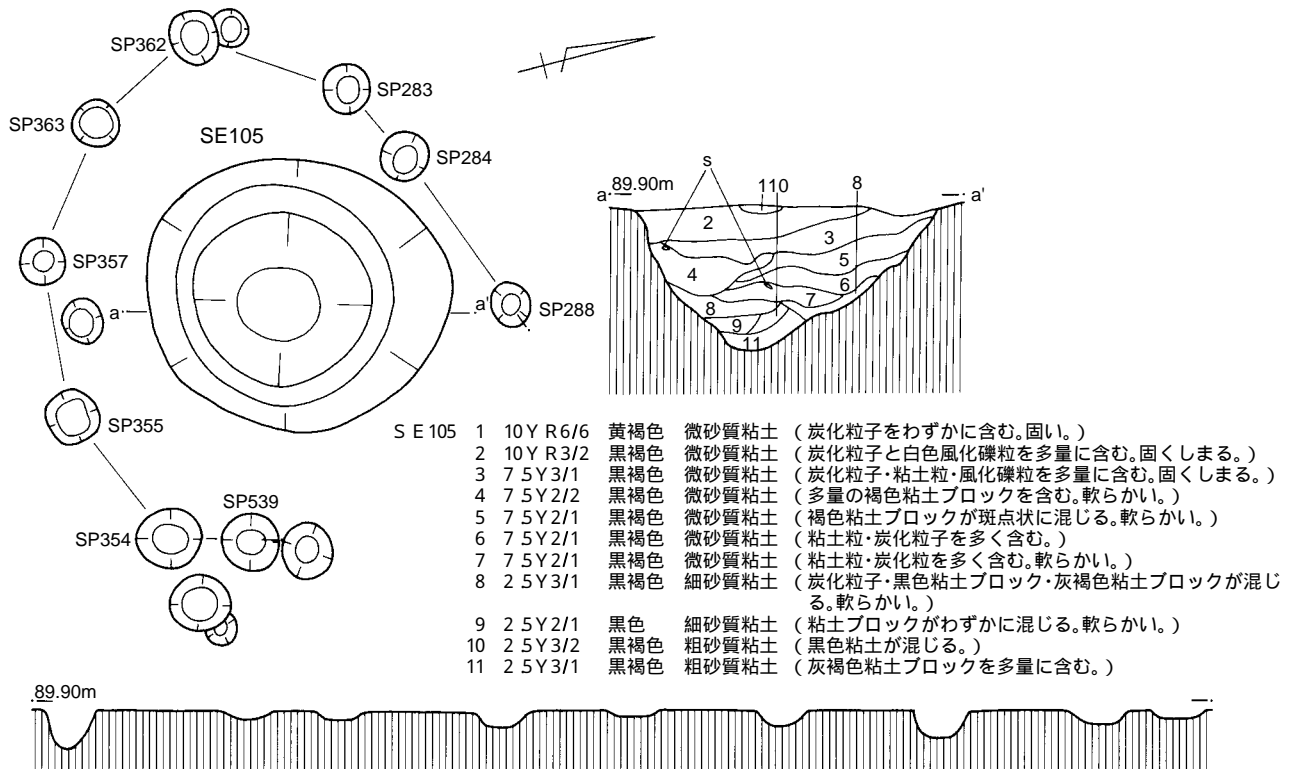
F区16-34Gで検出された。規模および平面形は、長径2.6m、短径92cmほどの東西に長い円形を呈し、深さは30cmで東部が落ち込み50cmを測る。覆土は、黒褐色のシルト～粘土が主なものである。

S K 2017 (第54図)

F区16-31Gで検出された。規模および平面形は、軸80cmほどの円形を呈し、深さ40cmを測る。覆土は、黒褐色のシルト・砂質粘土・粘土からなる。

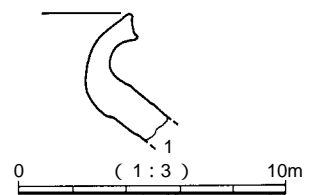
S A 114 (第54図)

A区15～17-1～3Gで検出された。最大規模の掘立柱建物跡S B 110と井戸跡S E 105の間の南側に南北に位置する。軸方向はN-90°-Eである。列の長さは10.4m、柱間は1.0m～3.6mを測り、不定間隔で並ぶ。各柱穴の規模、平面形は、径6～12cmの歪な円形を呈し、深さが3～8cmを測る。7基中5基にアタリが確認できた。覆土は、暗褐色～黒褐色の砂質粘土からなり、炭化粒子を多量に含む。

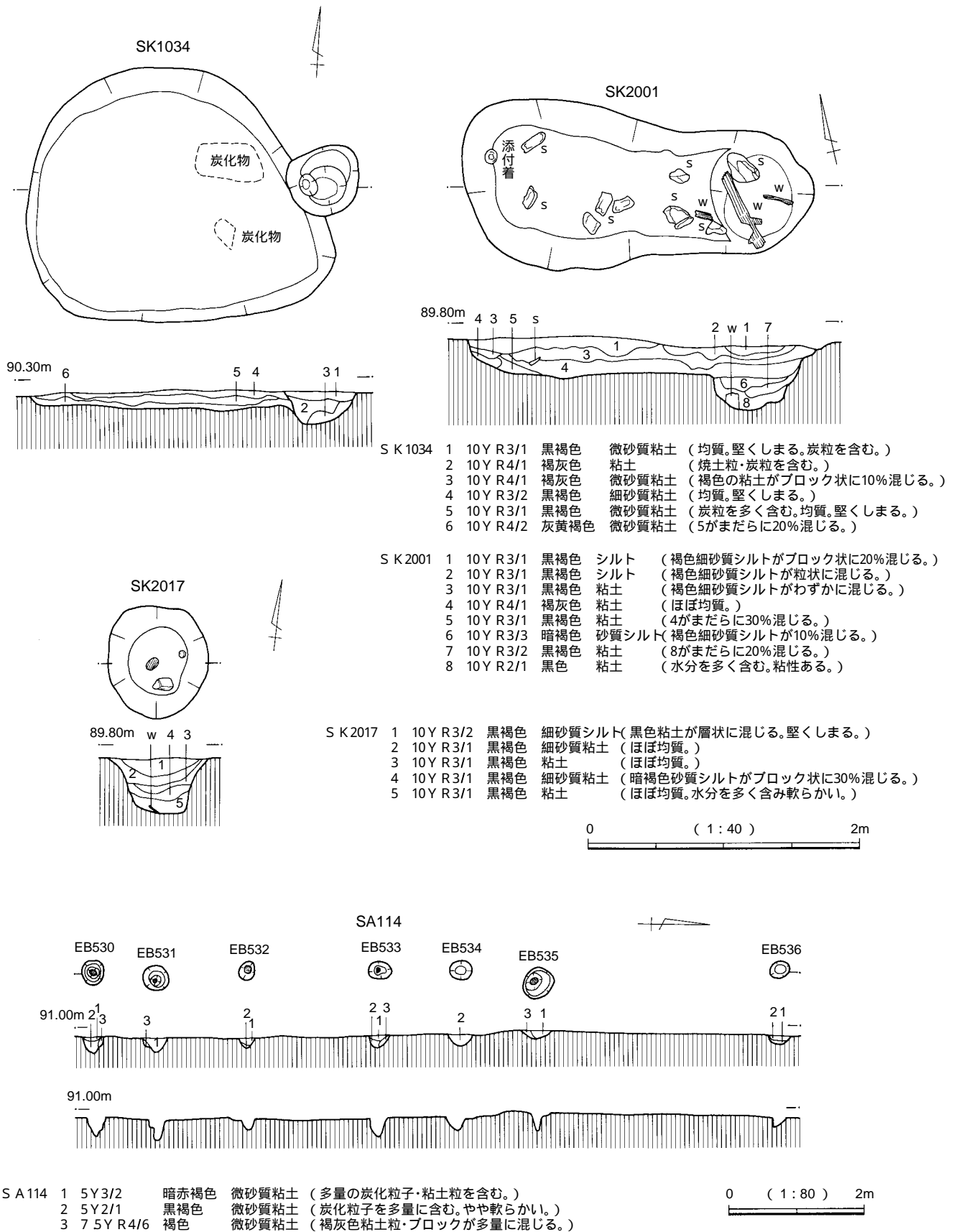


S E 135	1	2.5Y 6/6	明黄褐色	微砂質粘土	(褐灰色粘土・黒褐色粘土・褐色粘土ブロックを多量に含む。固くしまる。)
S K 134	2	5Y R3/1	黒褐色	微砂質粘土	(炭化粒子・粘土粒・小礫群を下層に含む。軟らかい。)
	3	7.5Y 5/2	灰褐色	細砂質粘土	(炭化粒子・粘土粒を含む。堅くしまる。)
	4	7.5Y 2/1	黒色	細砂質粘土	(小礫群を多量に含む。黒褐色粘土ブロック・灰色粘土ブロックが混じる。軟らかい。)
	5	7.5Y 2/1	黒色	細砂質粘土	(しまる。)
	6	N3	暗灰色	細砂質粘土	(黒色粘土ブロック・灰褐色粘土ブロックを含む。軟らかく粘質強い。)
	7	N3	暗灰色	細砂質粘土	(黒色粘土・灰褐色粘土ブロックが密に混じる。粘性強い。)
	8	7.5Y 5/1	灰黄色	細砂質粘土	(軟らかい。粘性強い。)
	9	10Y 2/1	黒色	細砂質粘土	(粘質強い。軟らかい。)
	10	5Y R3/2	暗赤褐色	微砂質粘土	(堅くしまる。)
	11	5Y R3/2	暗赤褐色	微砂質粘土	(褐色粘土粒子・ブロックを多量に含む。堅くしまる。)
	12	5Y R3/1	黒褐色	微砂質粘土	(砂質強い。)
	13	5Y 3/1	黒褐色	微砂質粘土	(褐色粘土粒ブロックを多量に含む。)
	14	7.5Y R4/6	褐色	細砂質粘土	(粘土ブロック・粒子を多量に含む。)

0 (1:60) 2m



第53図 SE105・135・136井戸跡、SE136出土遺物



第54図 SK1034・2001・2017土坑跡、SA114柵跡

4 溝跡

S D 2 (第55図)

B区の南東角から南北にC区・D区へと直線的に走る。S G 1に切られる。溝幅は60～80cm、深さ30cmを測る。覆土は、黄褐色粘土と褐色粘土からなる。

遺物は、土師器破片がまとまって検出されたが、図化し得たのは、土師器の鉢2点、埴の口縁部1点、甕の口縁部1点、底部3点、壺の口縁部1点、底部3点、手捏土器1点である。埴は球体の体部に外傾する長頸の口縁部を持つ。鉢は体部に最大径があり、短くくの字に外傾する単純口縁を持つ。甕の口縁部は、わずかに外傾して先端部を強く外反させる逆コの字形が特徴である。壺の口縁部は複合口縁で、外反せずに直線的に立ち上がる。

S D 4 (第56図)

A区の西側中央部からB区のS G 1までの溝跡である。溝幅は1.2m～2m、深さ20cmを測る。覆土は、灰黄褐色～黒褐色の砂質シルトと砂からなる。

S D 1040 (第57図)

B区の北側をS G 1155に沿って蛇行する。溝幅は2m～3m、深さ60cm～80cmを測る。覆土は、褐色～黒色の砂質粘土と砂からなる。

土師器は、坏1点と鉢1点である。坏は全体に丸みをもって立ち上がり、口縁部がくびれて外反する。甕はロクロを使用している。須恵器は、坏6点と蓋1点を図化し得た。坏はすべて底部の切り離しが回転ヘラ切りで、底径が大きい。

S D 1201 (第59図)

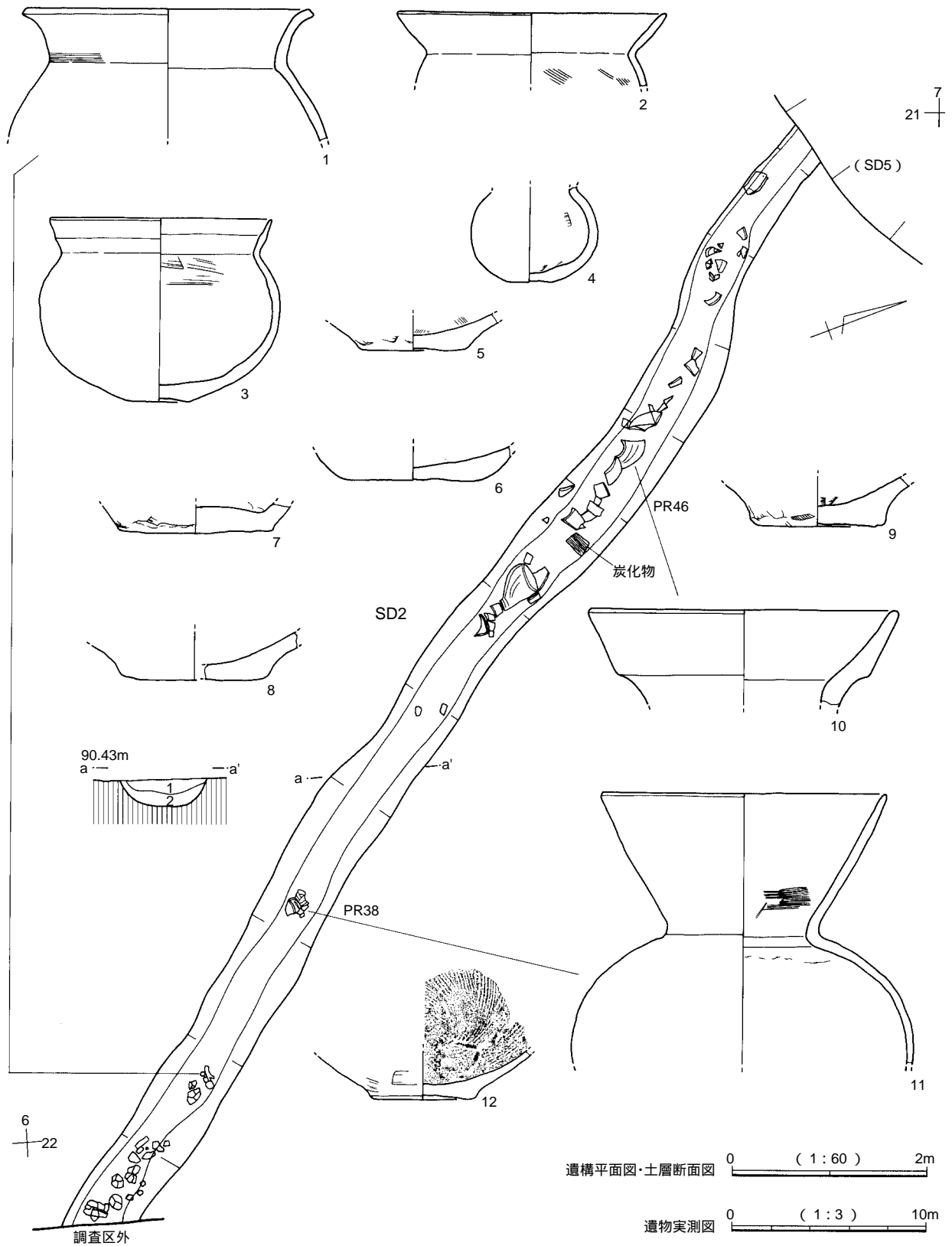
E区北西部を東西に走る。溝幅は1m～1.6m、深さ20cm～60cmを測る。覆土は、褐色～黒褐色の粘土質シルトと粘土からなる。

遺物は、土師器の鉢1点と石製品の紡錘車片を図化し得た。鉢は小ぶりでロクロを使用し、底部の切り離しは回転系切りで、口縁部は短く外反する。体部に煮炊きに使われたと思われる煤が付着している。

S D 1329 (第58・59図)

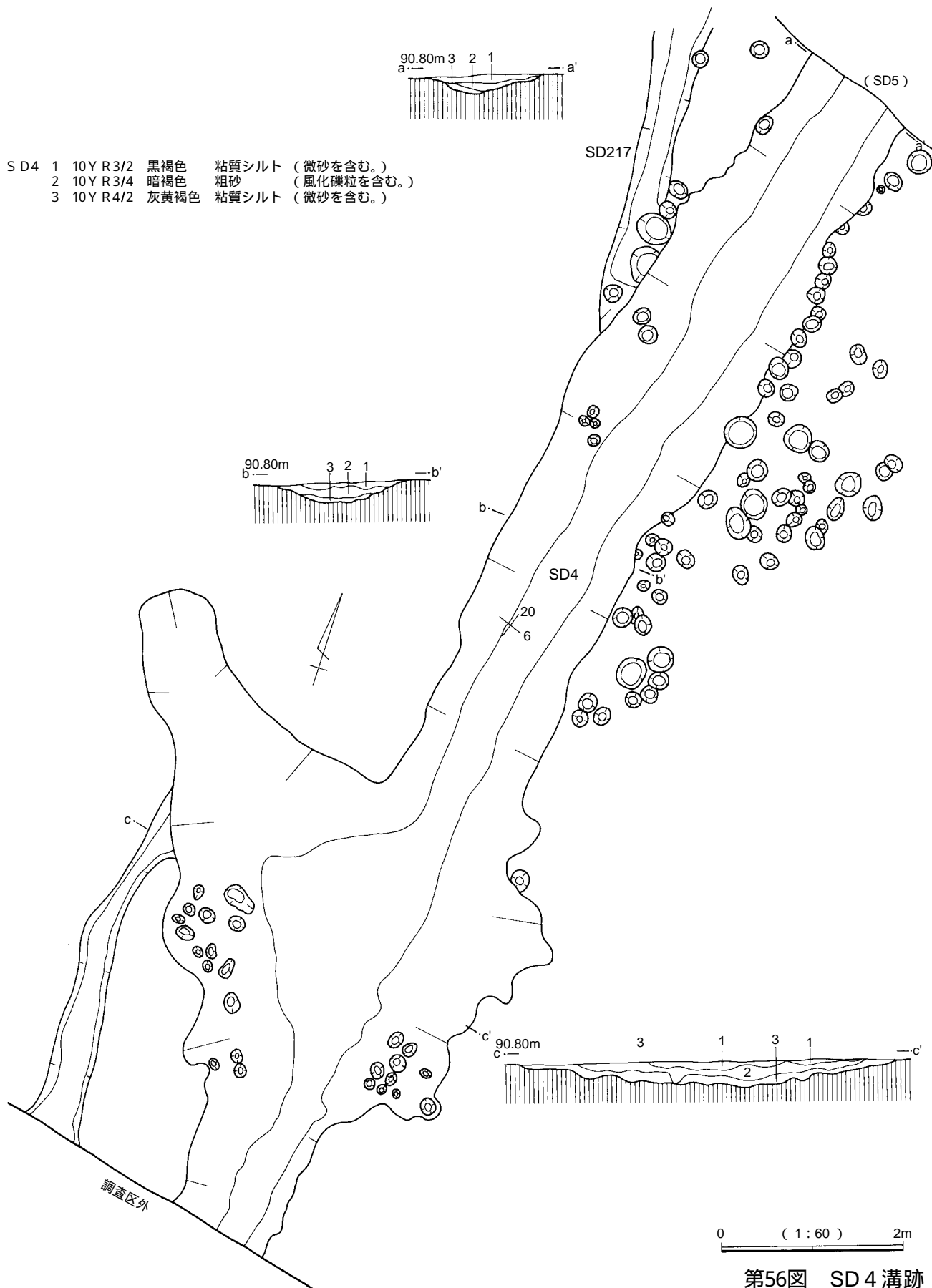
D区S G 1301の南東端部から分かれてS G 1301に平行して北東に走り途中で切れている。溝幅は35cm～80cm、深さ40cmを測る。覆土は、黒褐色の粘土質シルトからなる。

須恵器は、坏6点と甕の口縁部部片1点、体部片3点を図化し得た。坏は底部の切り離しが回転ヘラ切り2点、回転系切り3点である。59-1は、外面に3本の櫛描き波状文が描かれ、先端部の断面は両端に引き伸ばされT字形をとる。59-2は、調整は外面が条線状のタタキが交差しており、内面は同心円のアテ痕が施されている。59-3・4は大甕の破片で、59-3の調整は外面が条線状のタタキが交差しており、内面はヘラ状工具でナデが施されている。59-4の調整は外面が条線状のタタキが一定方向で、内面は青海波のアテ痕が施されている。

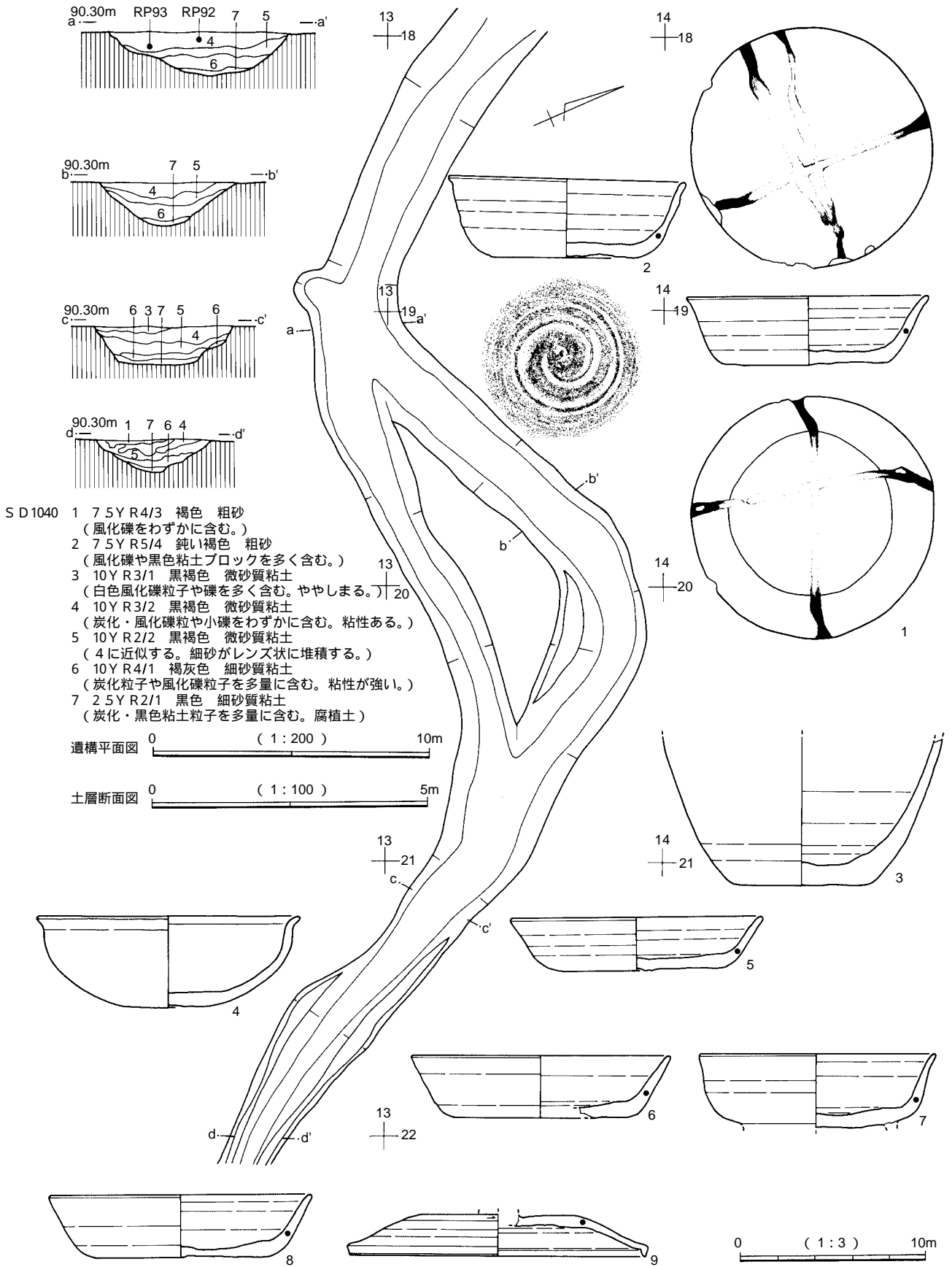


- S D 2 1 10Y R4/3 鈍い黄褐色 粘土 (層上部に炭化粒含む。堅くしまる。)
 2 10Y R4/4 褐色 粘土 (大きめの炭化粒を少々含む。粘性強い。)

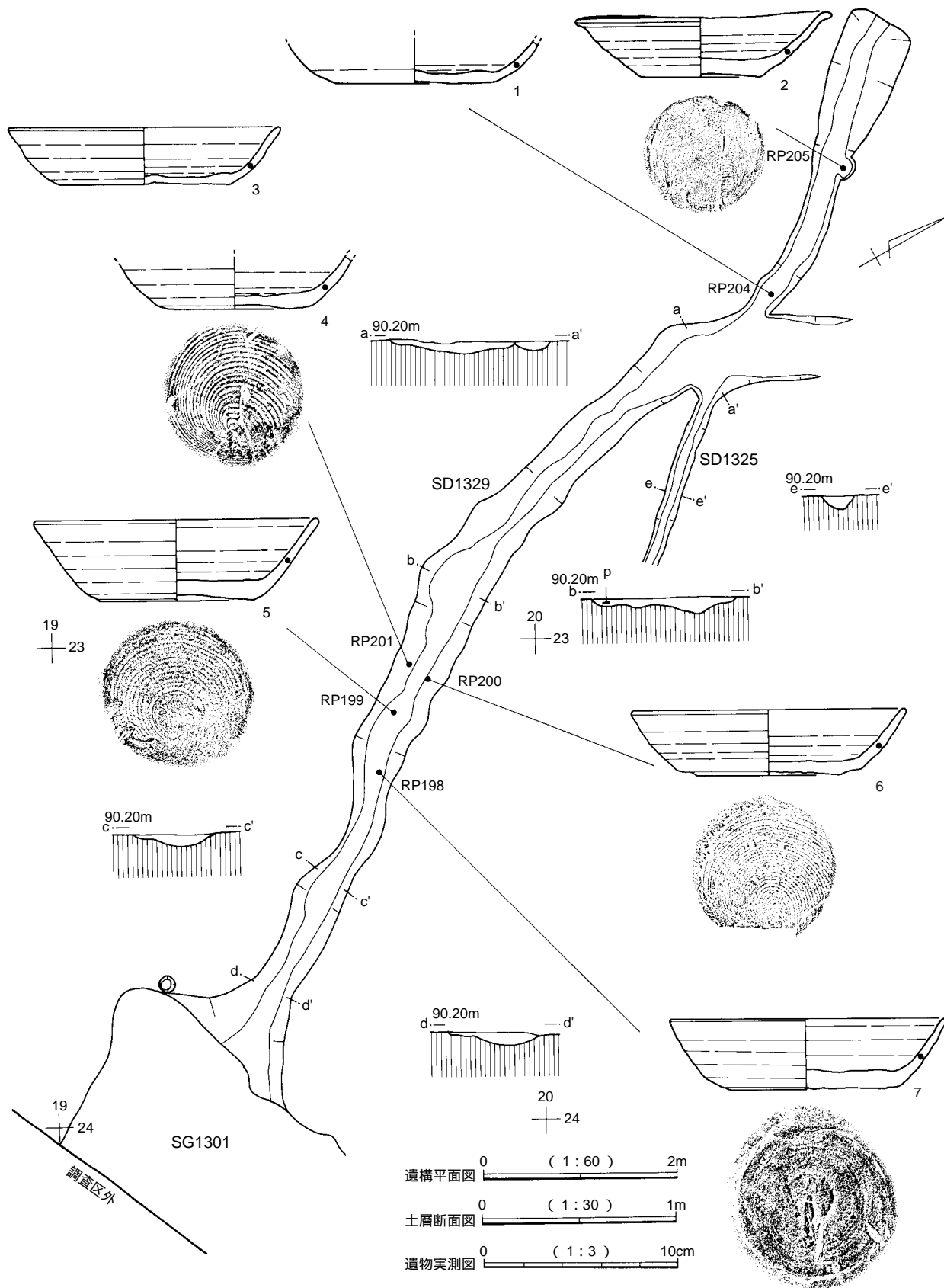
第55図 SD 2 溝跡、出土遺物



遺構と遺物



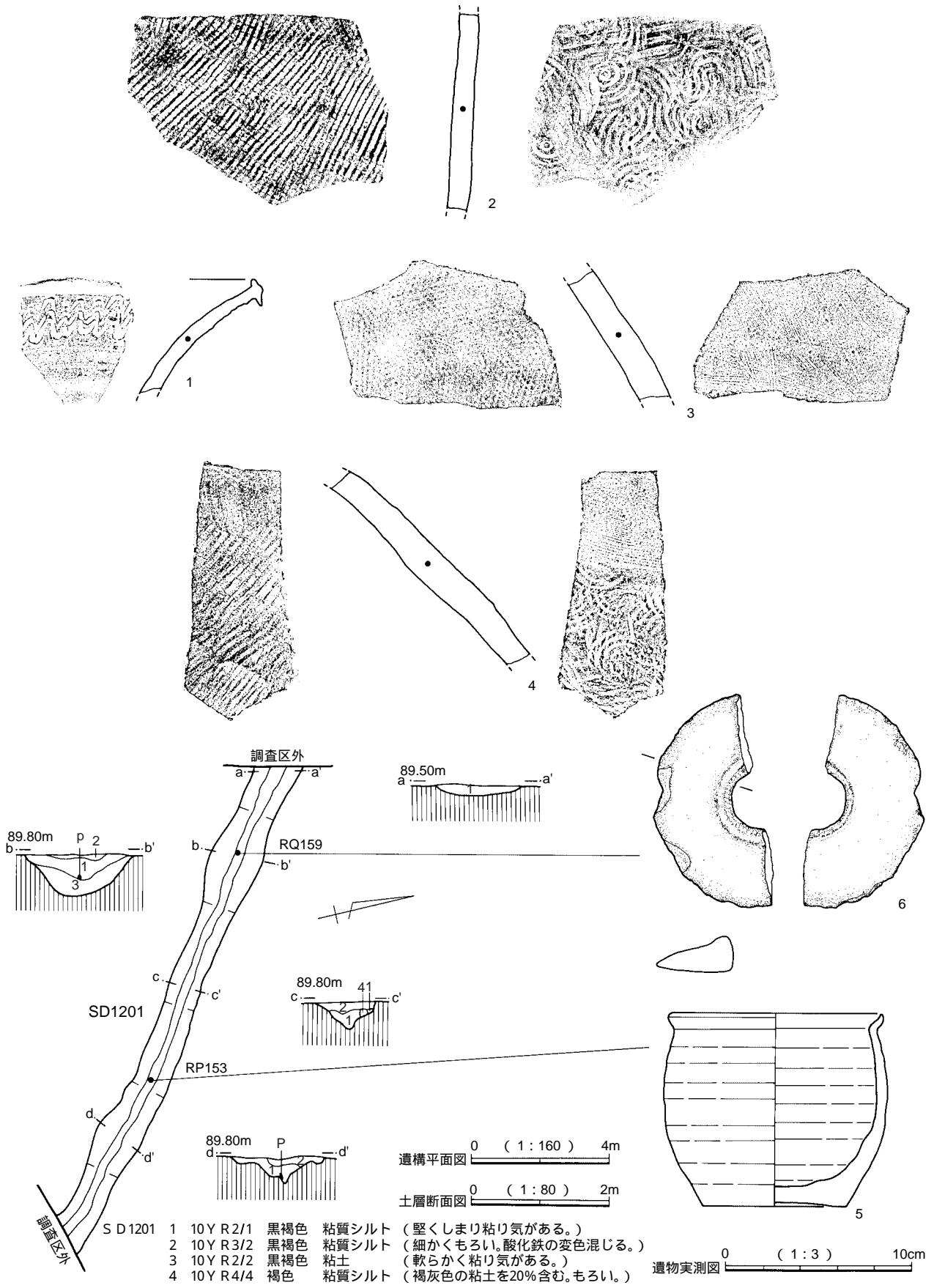
第57図 SD1040溝跡、出土遺物



S D 1325 10Y R2/2 黒褐色 粘質シルト
(均質。粘り少なめ。わずかに土器片を含む)

S D 1329 10Y R2/2 黒褐色 粘質シルト
(ほぼ均質で堅くしまる。焼土粒をわずかに含む。)

第58図 SD1325・1329溝跡、出土遺物(1)



第59図 SD1329出土遺物(2)、SD1201溝跡、出土遺物

5 河川跡

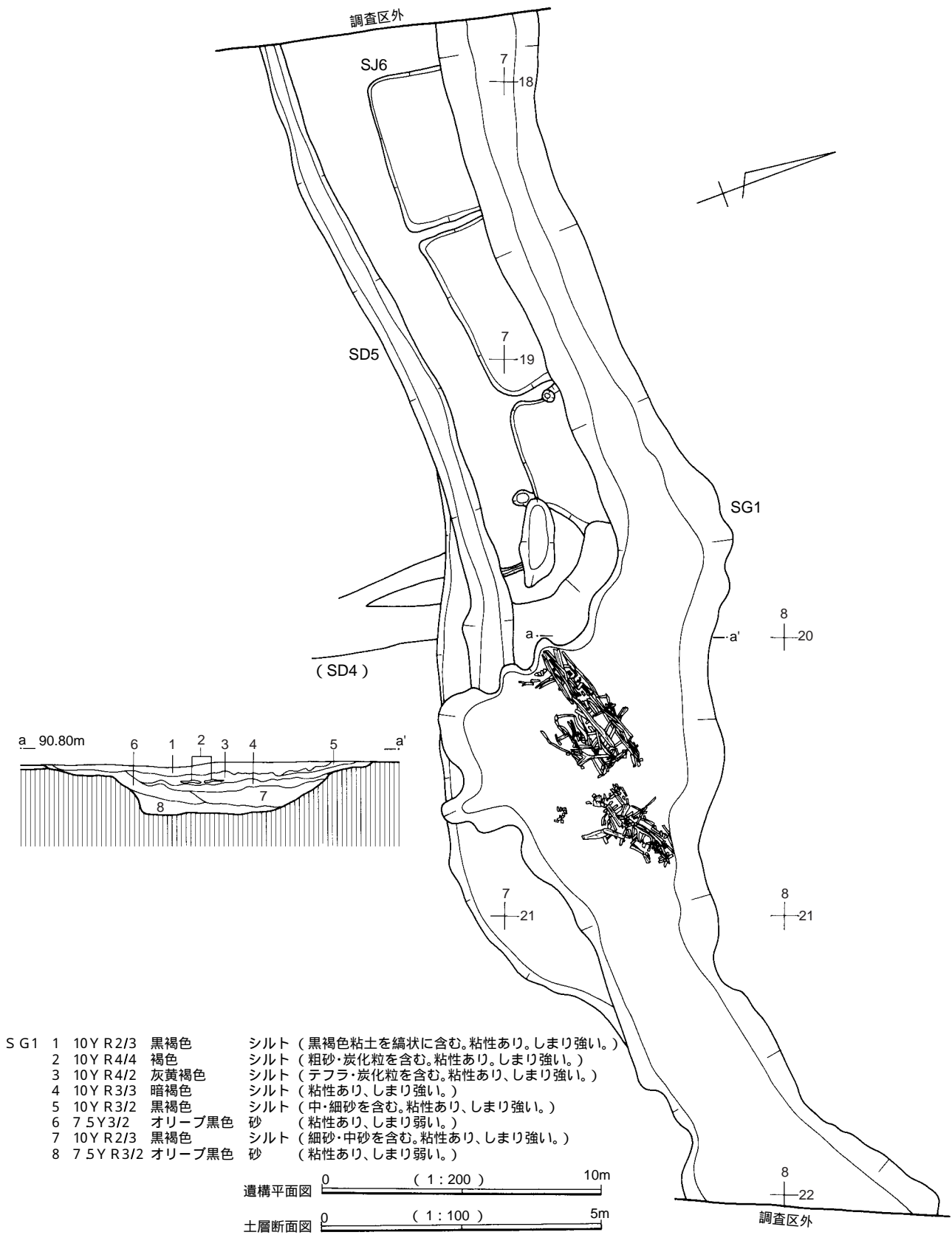
SG 1 (第60・61・62・63・64・65・66・67・68・69・70・71・72・73図)

調査区B区、C区の南側をやや蛇行しながら東西に流れる。B区のSG 1の中央部から南西方向にSD 5がC区中央部まで流れる。川幅は3m～4m、深さ70cm～150cmを測るが、B区の東端から15mのところ川幅10mと広く、ここに木組の遺構が検出された。木組遺構は、川幅の最も長い位置に北東から南西に河川の流れに対して約45度の角度でかけられ、長さ9m、幅は西端が1mと狭く、中央部が2.5mと広い。木組みのかけ方は一直線ではなく、途中でずらして継ぎ合わせたような形で検出された。この状況から橋というより木道に近いような構造であるが、あるいは洗い場として使用したものかは不明である。木組の西端からSG 1に沿ってSD 5がのび、またその間には水田跡(SJ 6)の畦畔と水口が検出された。河川の覆土は、灰色～黒褐色を基調とした粘土と細砂の互層からなる。また上層部の下には火山灰の堆積が確認され、理化学分析により、十和田aテフラと同定された。

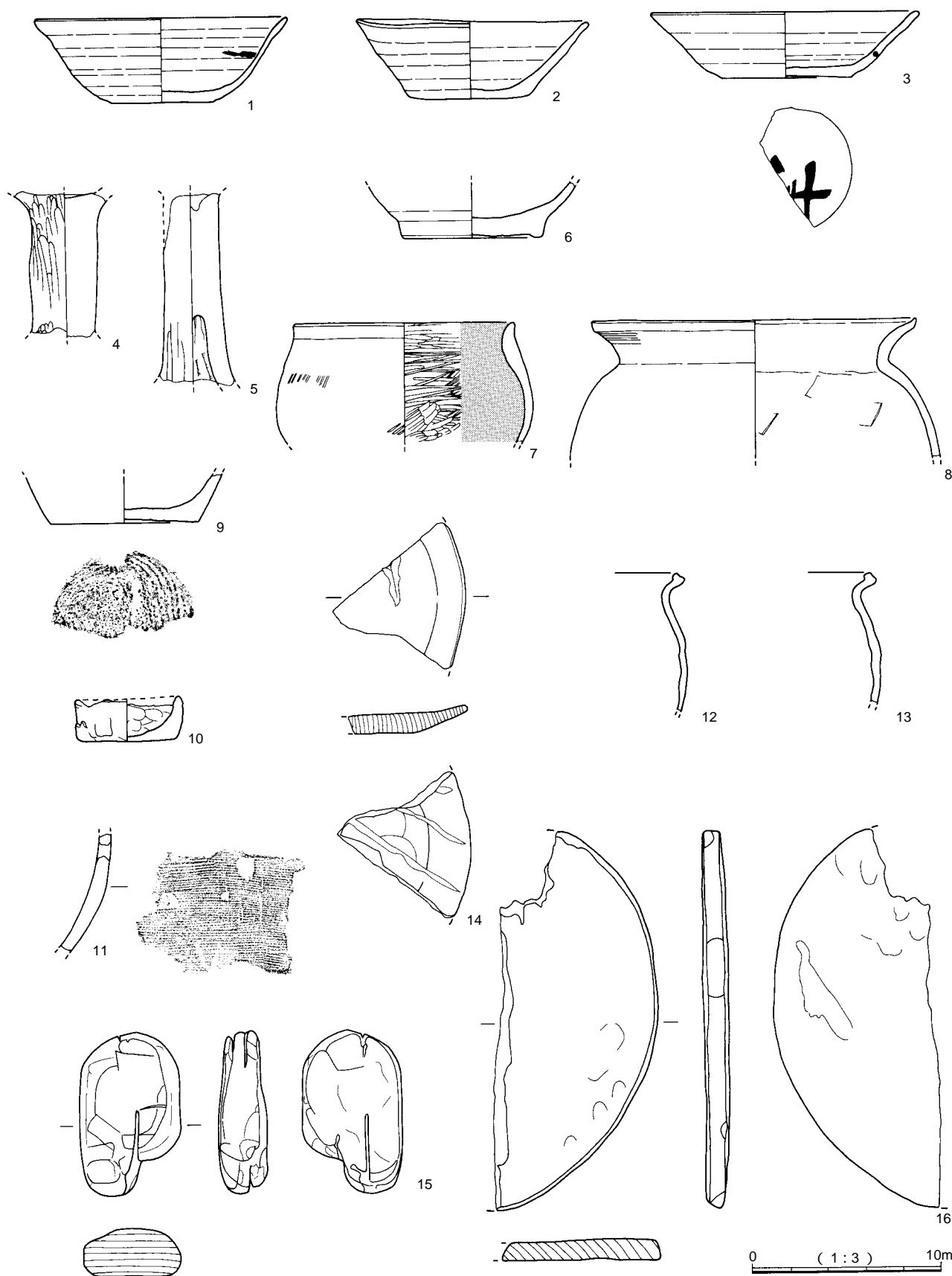
土師器は、坏4点、高台坏1点、高坏3点、鉢1点、甕10点、手捏土器3点を図化し得た。坏はいずれも口口を使用しており、小ぶりで底径が小さいのが特徴である。体部から口縁部にかけては、直線的に開くものと口唇部でわずかに外反するものがある。高坏は脚部のみ3点で、棒状、やや短く丸みがある棒状、短く坏部内黒に分かれる。鉢は、内黒の黒色土器で丸みをおびた体部に最大径を持ち口唇部がわずかに外反する破片(61-7)である。甕の口縁部には、その他口縁部が外反して口唇部をつまみ上げているもの(61-8)と、口縁部が短く外反して口唇部をつまみ出して段をつくるもの(61-12、61-13)がある。62-11の甕の体部には補修孔と思われる孔がある。

須恵器は、無台坏21点、有台坏1点、小型甕1点、壺2点を図化し得た。坏は底部の切り離しが回転ヘラ切り1点、回転糸切り20点と後者が主である。墨書土器は6点であるが、うち1点は底部に「女」の文字が確認される。また、2点は体部に同じ文字が確認された。坏の形状の特徴は、全体的に小ぶりで底径が小さく、口縁部がやや外反する。

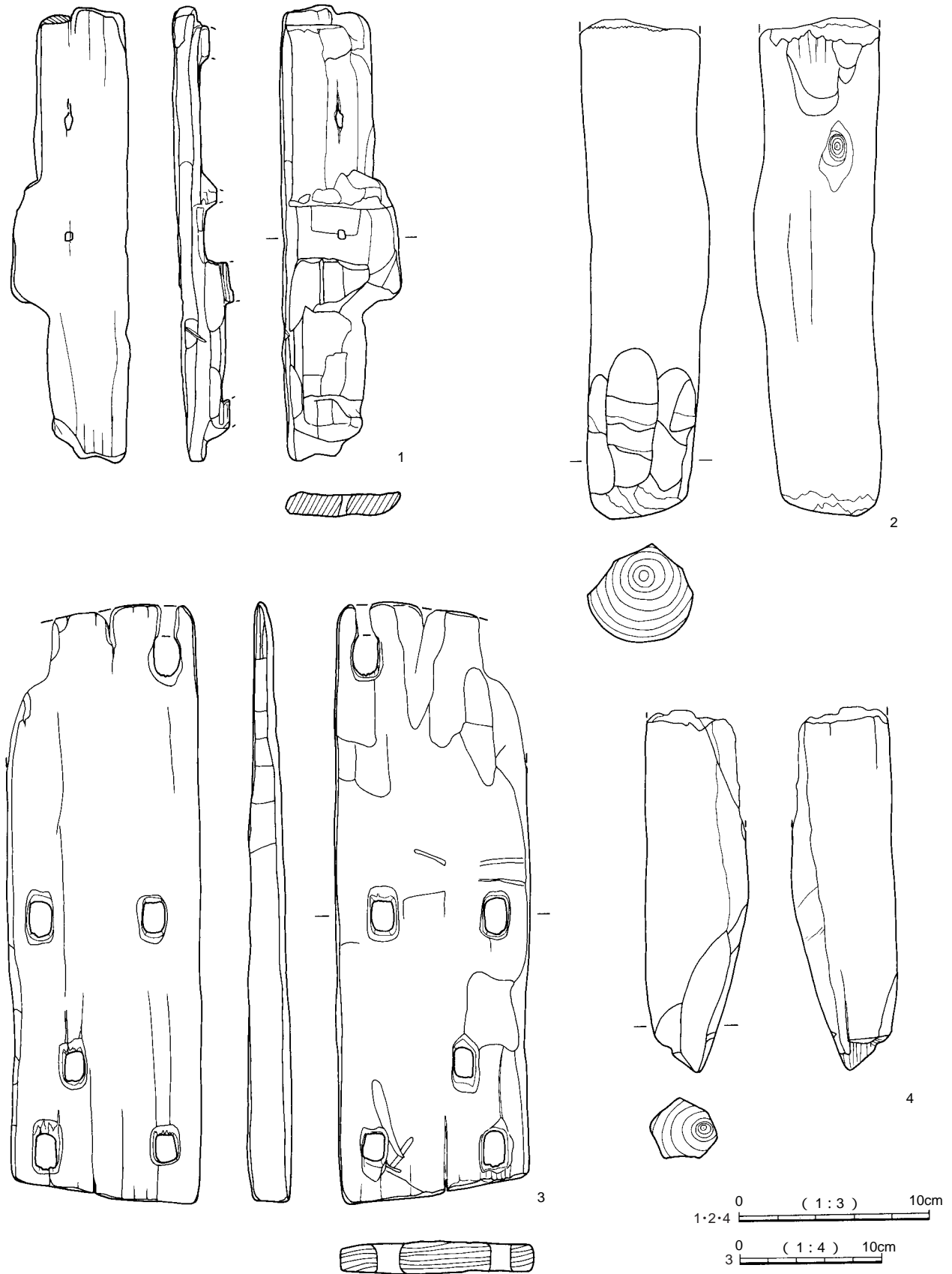
木製品は、曲物に特定できた容器3点、容器2点、田下駄3点、織機具1点、杭4点、加工材その他21点を図化し得た。68-1の容器は、加工されている孔が確認される。62-1の田下駄は歯の数4カ所で残存値は0.5～1cmである。62-3の田下駄は孔の数6カ所である。64-1は2つの山形の突起が特徴である。欠損により全体形状は不明であるが田下駄の可能性が高い。類例としては、新保遺跡(新潟県埋蔵文化財調査事業団2001)出土の横長の板型田下駄がある。U字状に足枠を削り出して結緒を通す孔を両側に開け、裏面に円錐状の突起を削り出す形状である。68-3は糸巻の腕木に類似する。63-1は梯子の可能性が高い。63-3は、建築部材と考えられる。65-3は、先端部と中央部に加工された孔が認められ、側面は四角錐状に加工されている。67-16も似たような形状である。68-5と70-2には方形の孔がある。71-1は、方形の孔と円形の貫通孔が規則的に2カ所ずつ開いている。70-1と71-4には、U字型の溝がある。



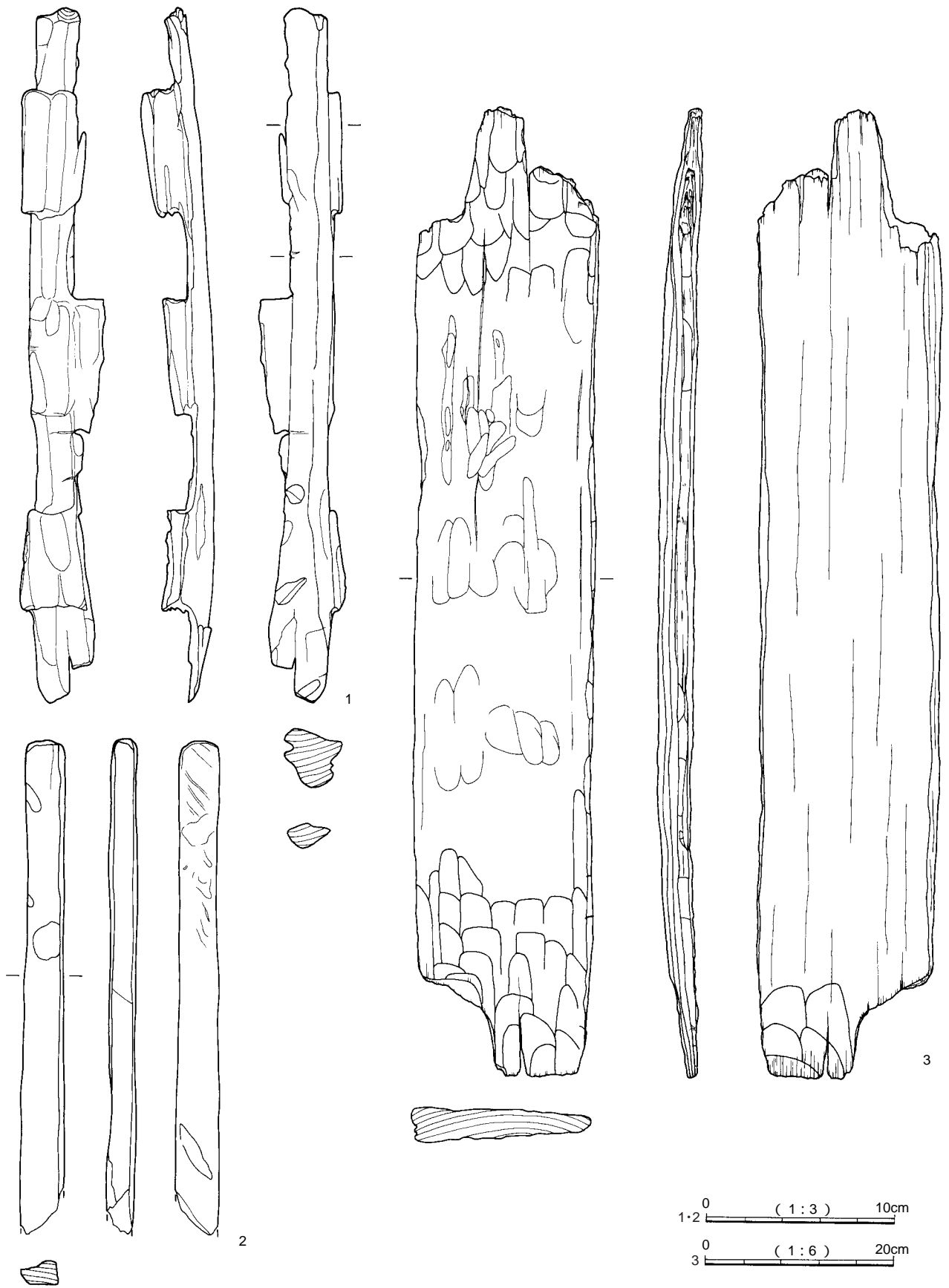
第60図 SG1 B区河川跡



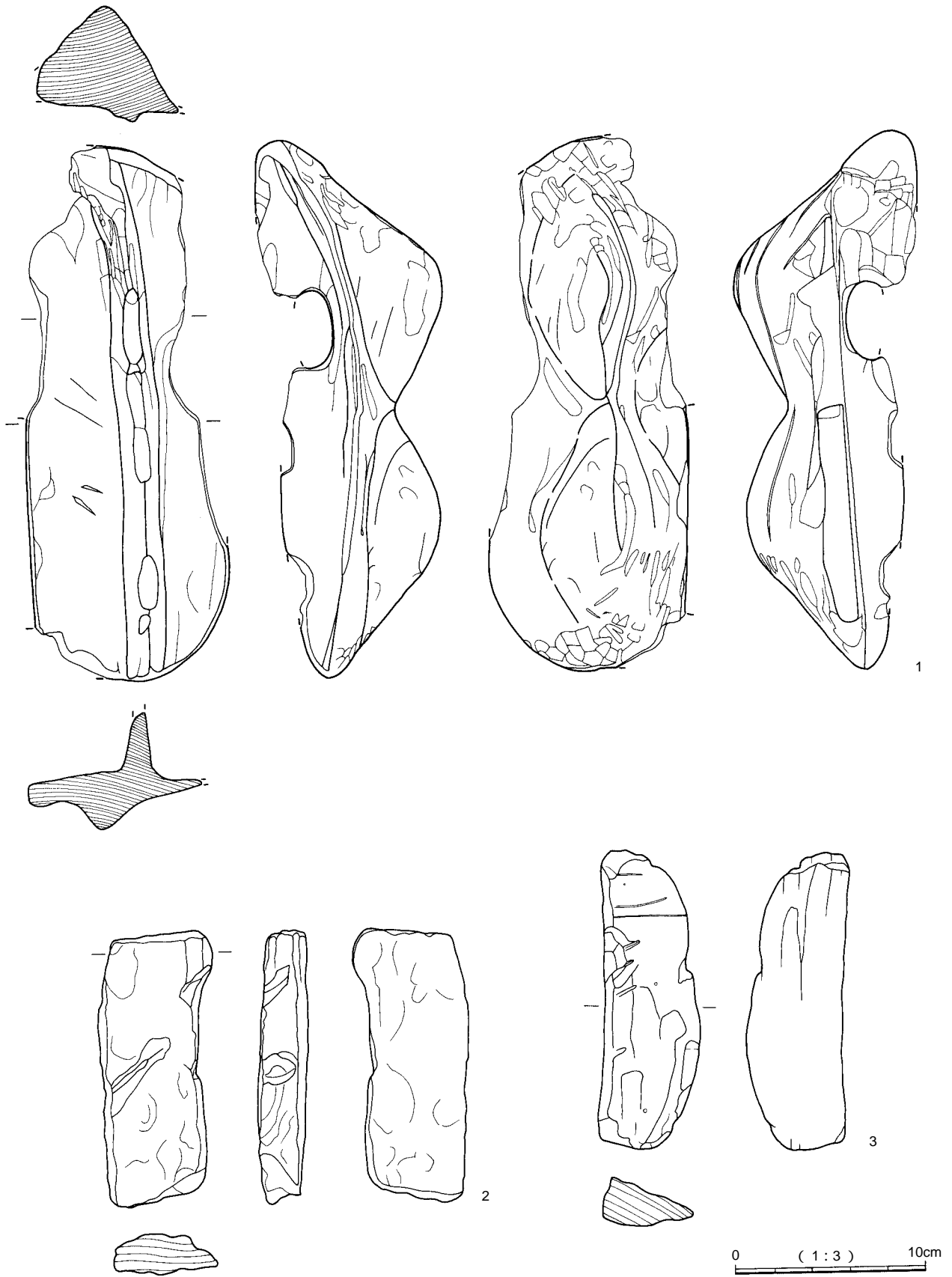
第61図 SG 1 B区出土遺物(1)



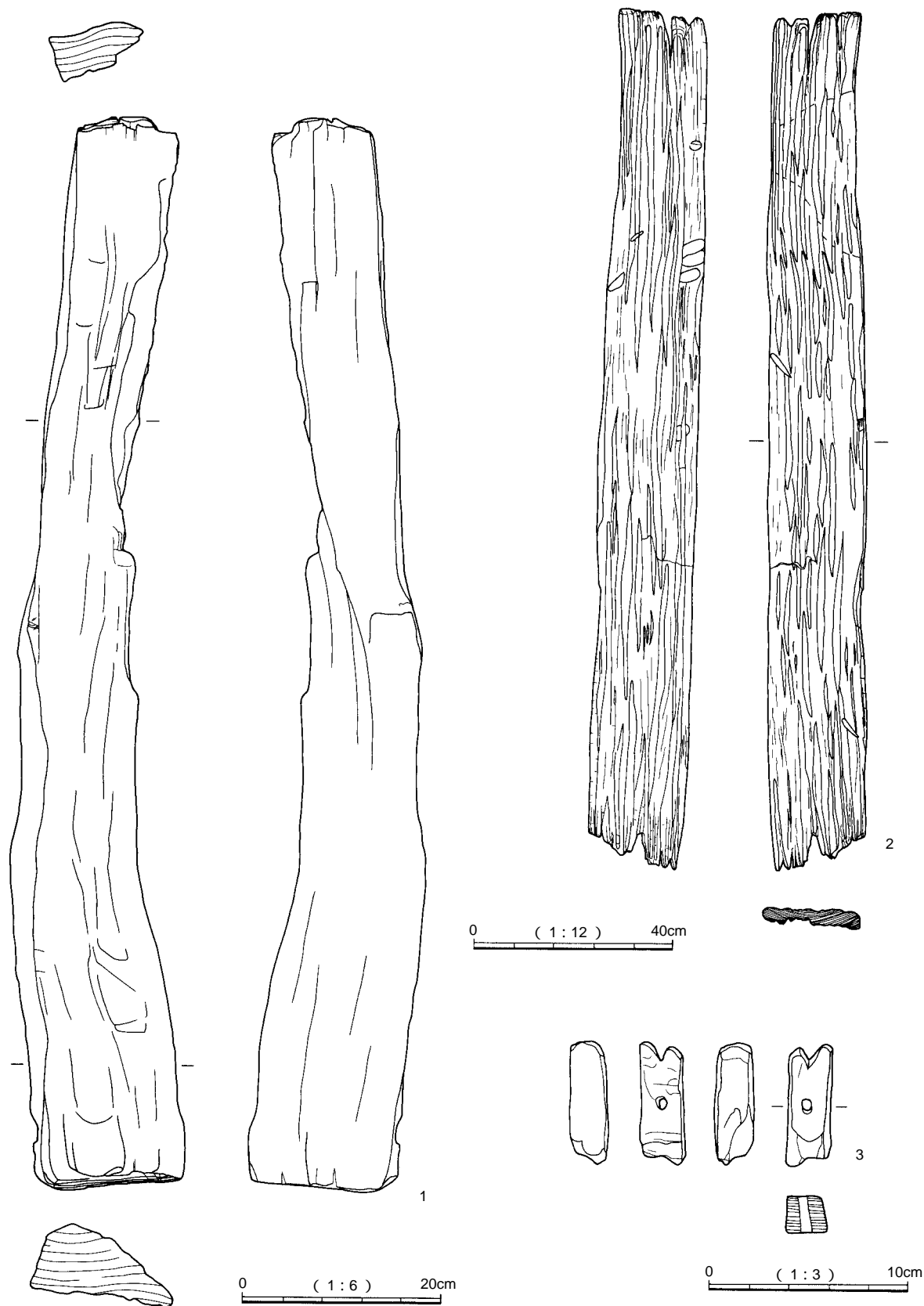
第62図 SG 1 B区出土遺物(2)



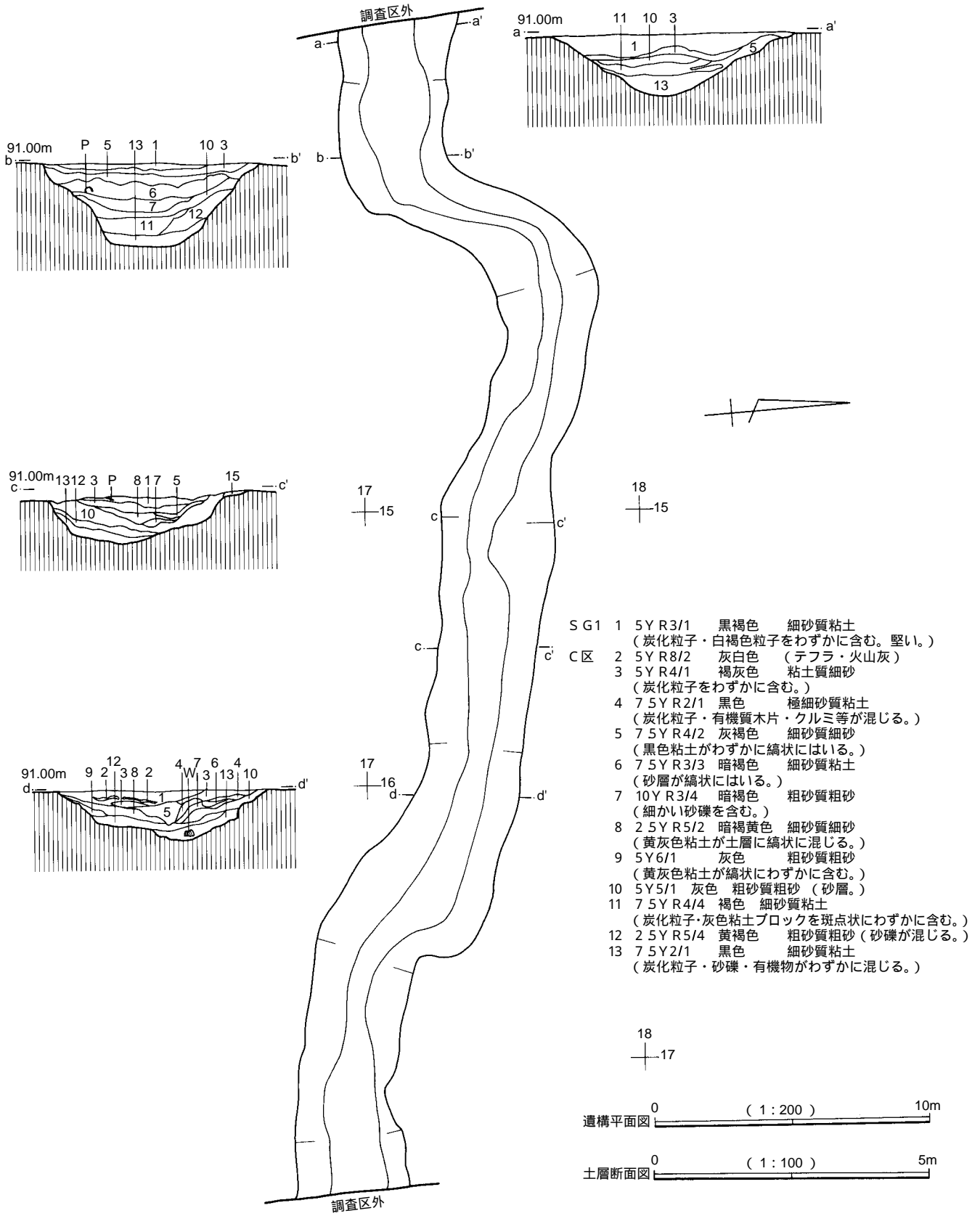
第63図 SG 1 B区出土遺物(3)



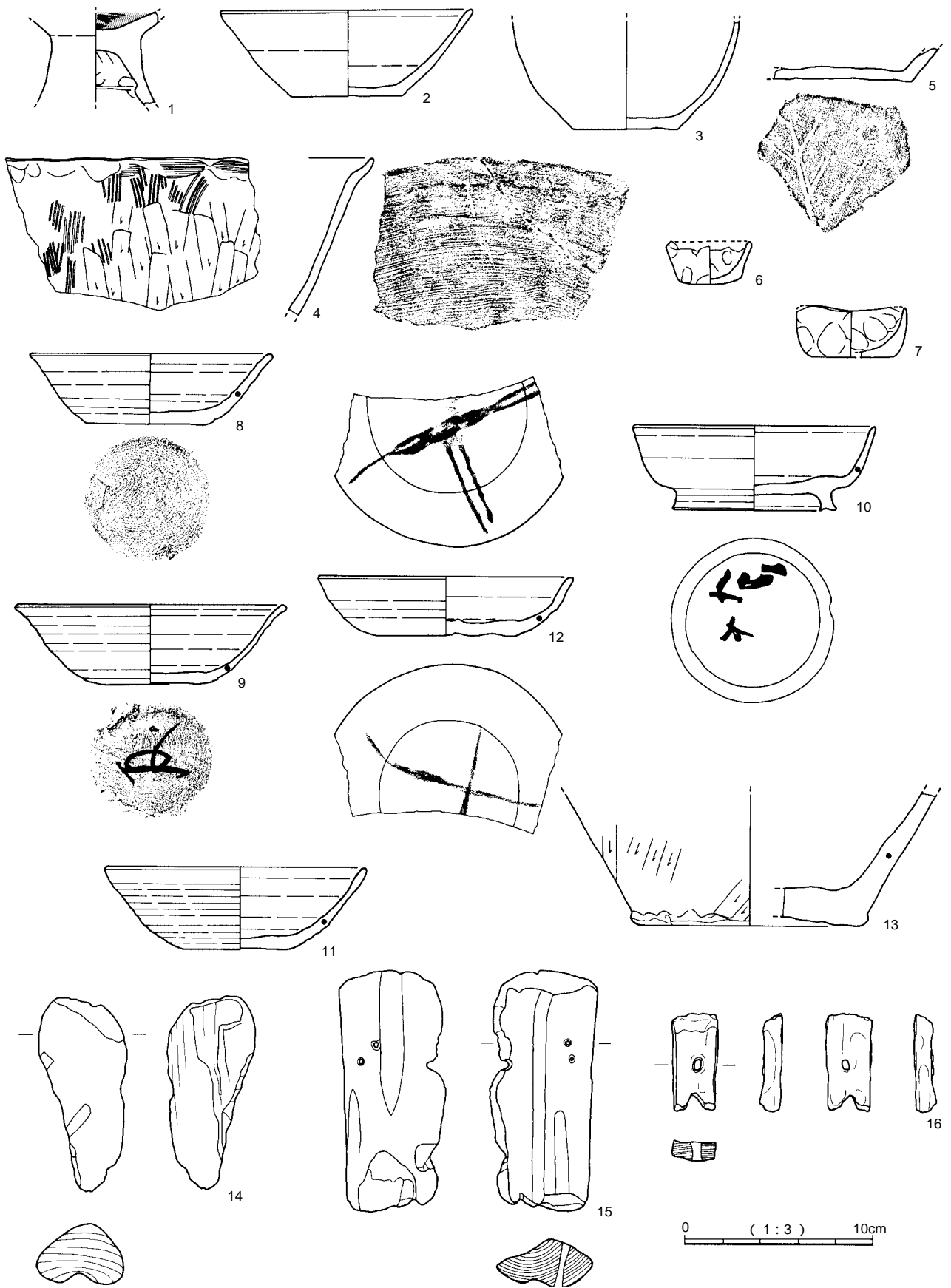
第64図 SG 1 B区出土遺物(4)



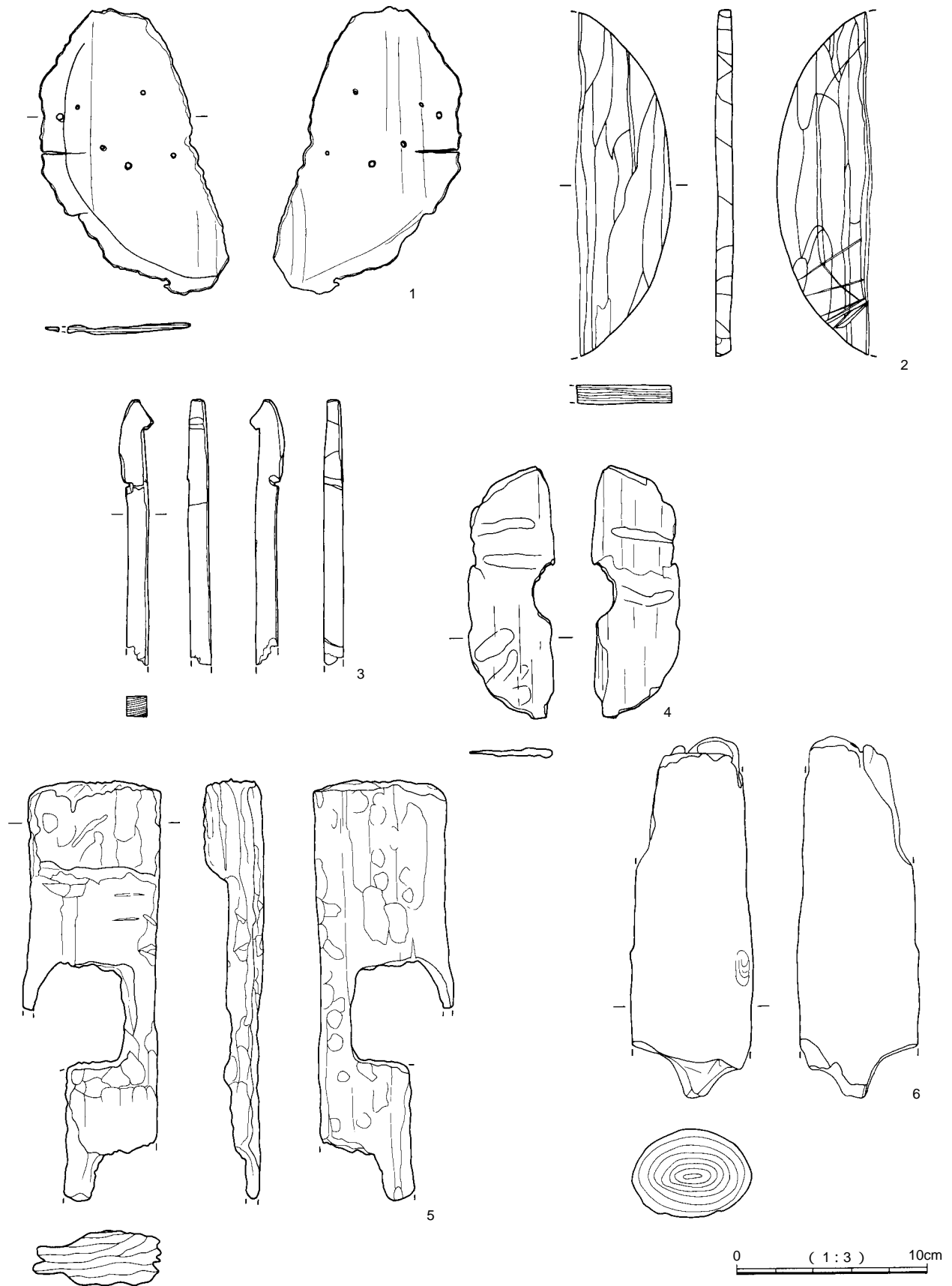
第65図 SG 1 B区出土遺物(5)



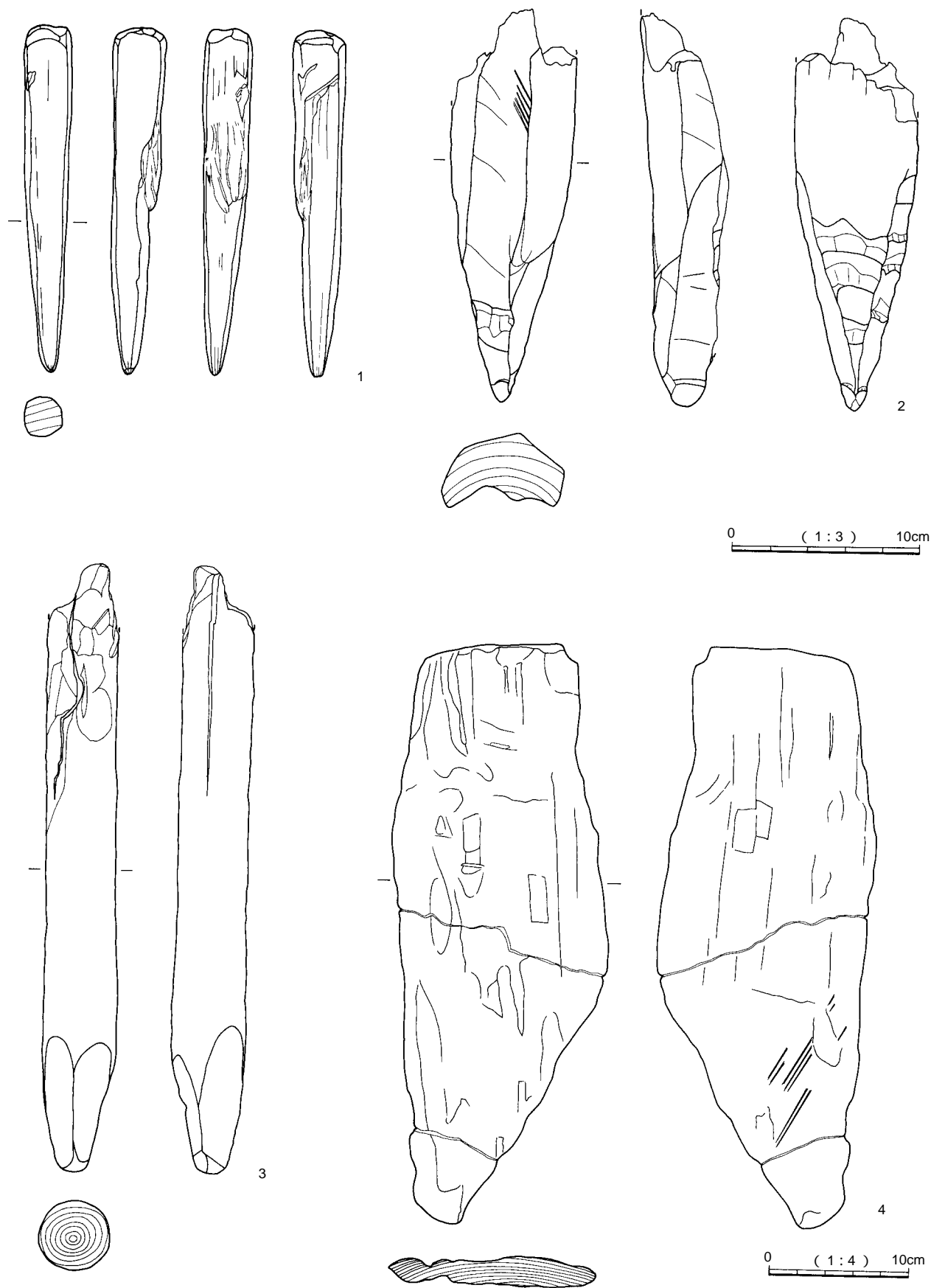
第66図 SG 1 C 区河川跡



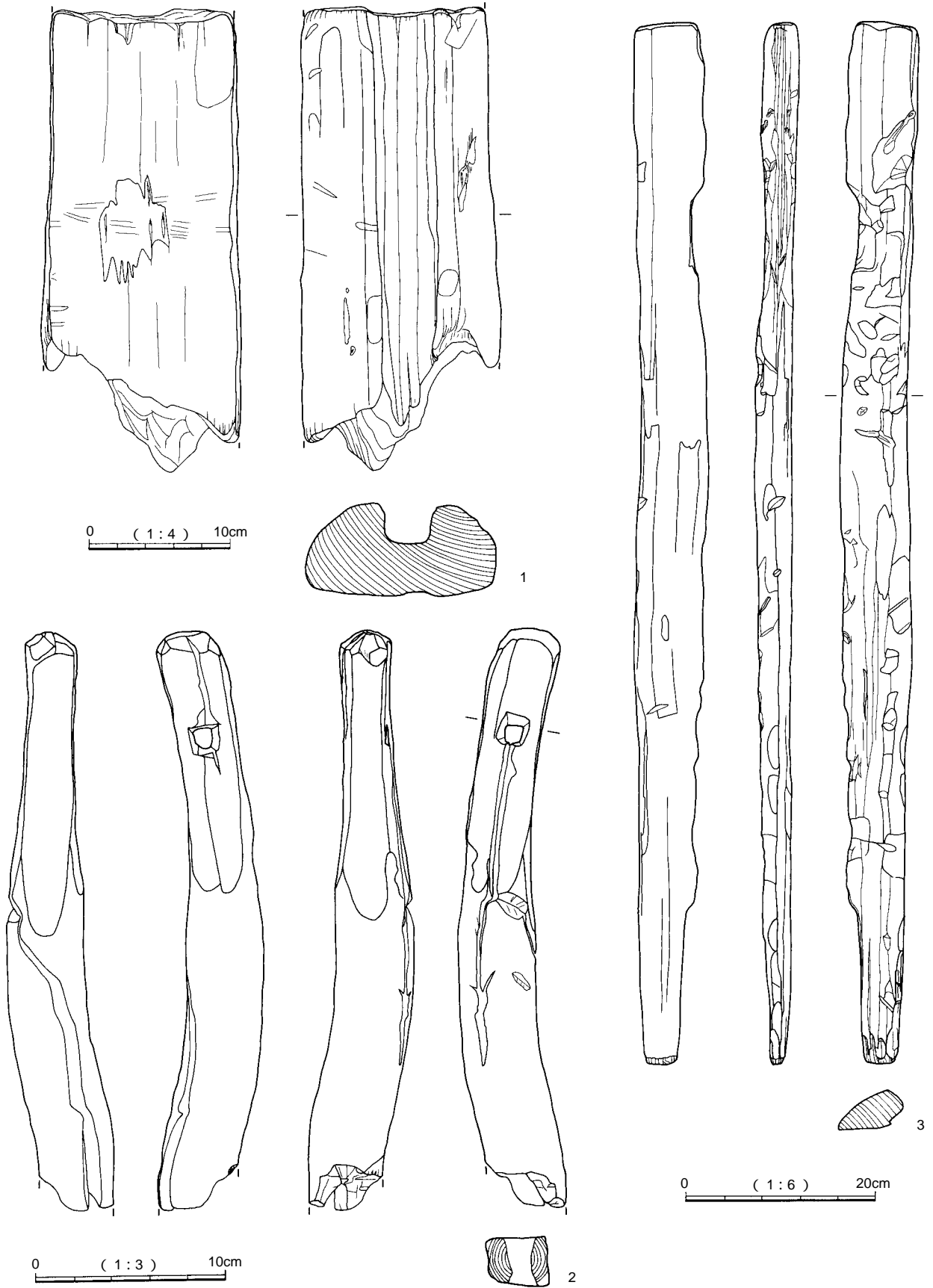
第67図 SG 1 C区出土遺物(1)



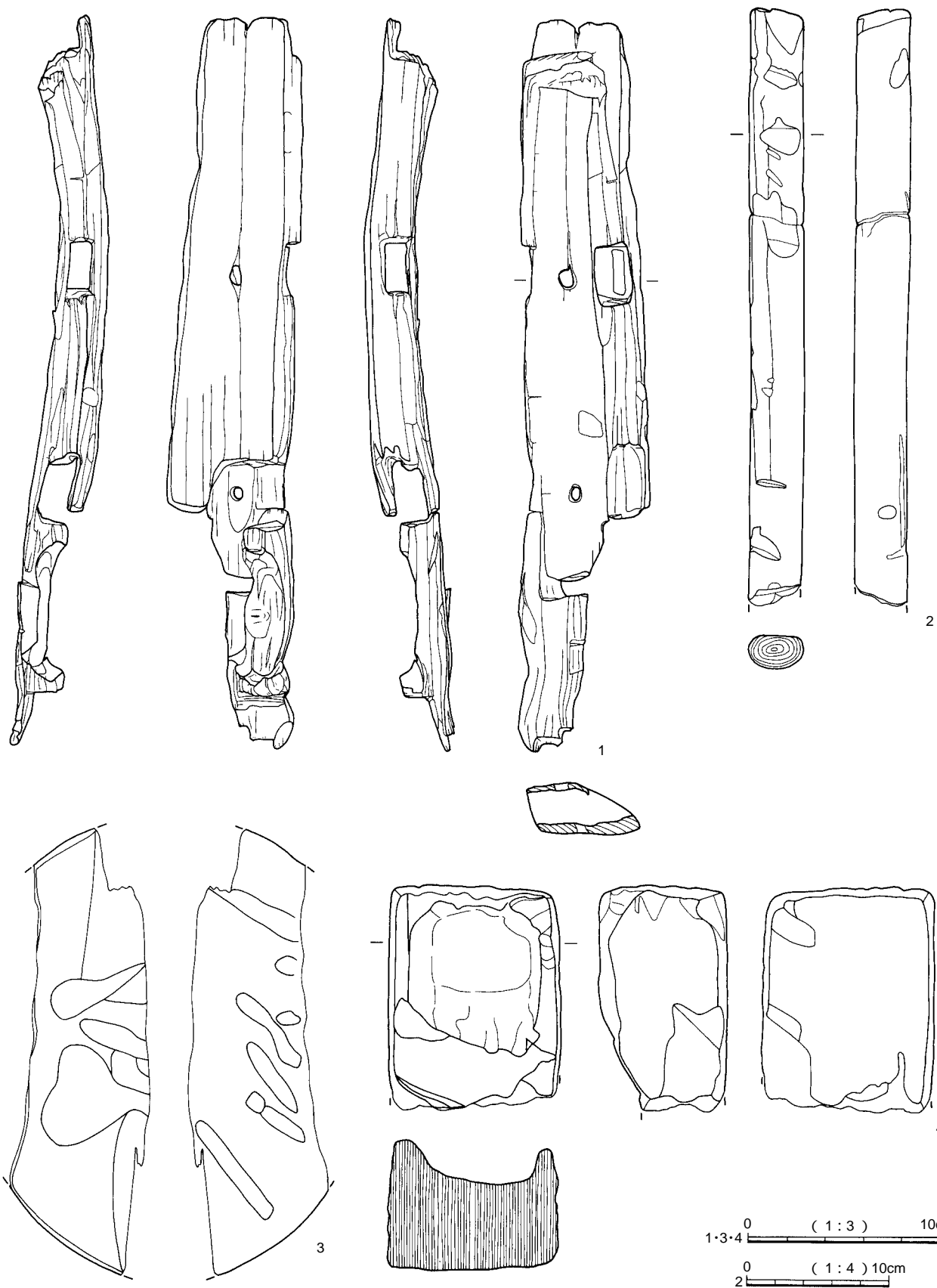
第68図 SG 1 C区出土遺物(2)



第69図 SG 1 C区出土遺物(3)

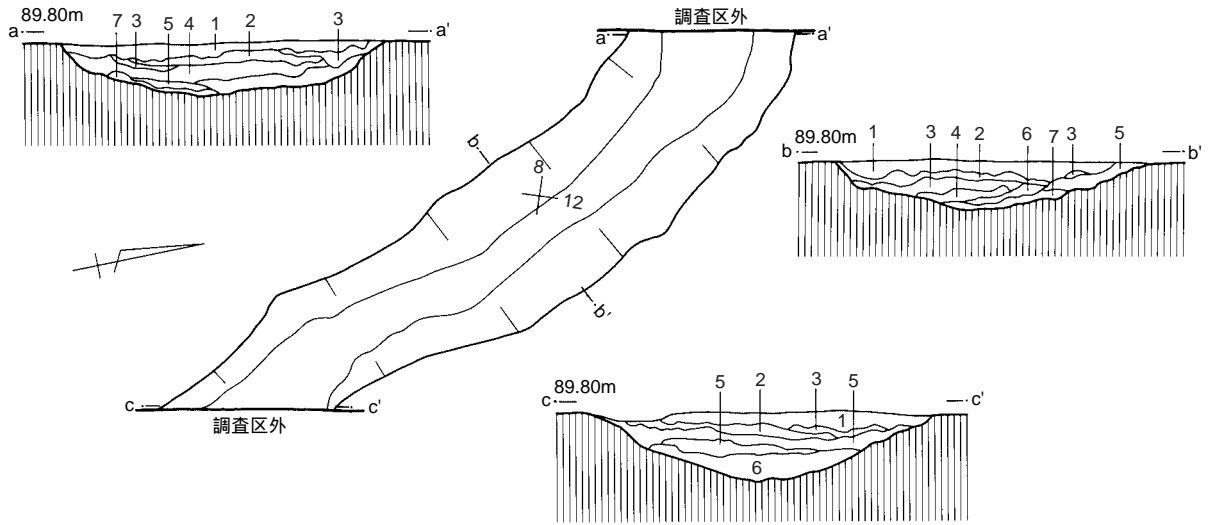


第70図 SG 1 C区出土遺物(4)



第71図 SG 1 C区出土遺物(5)

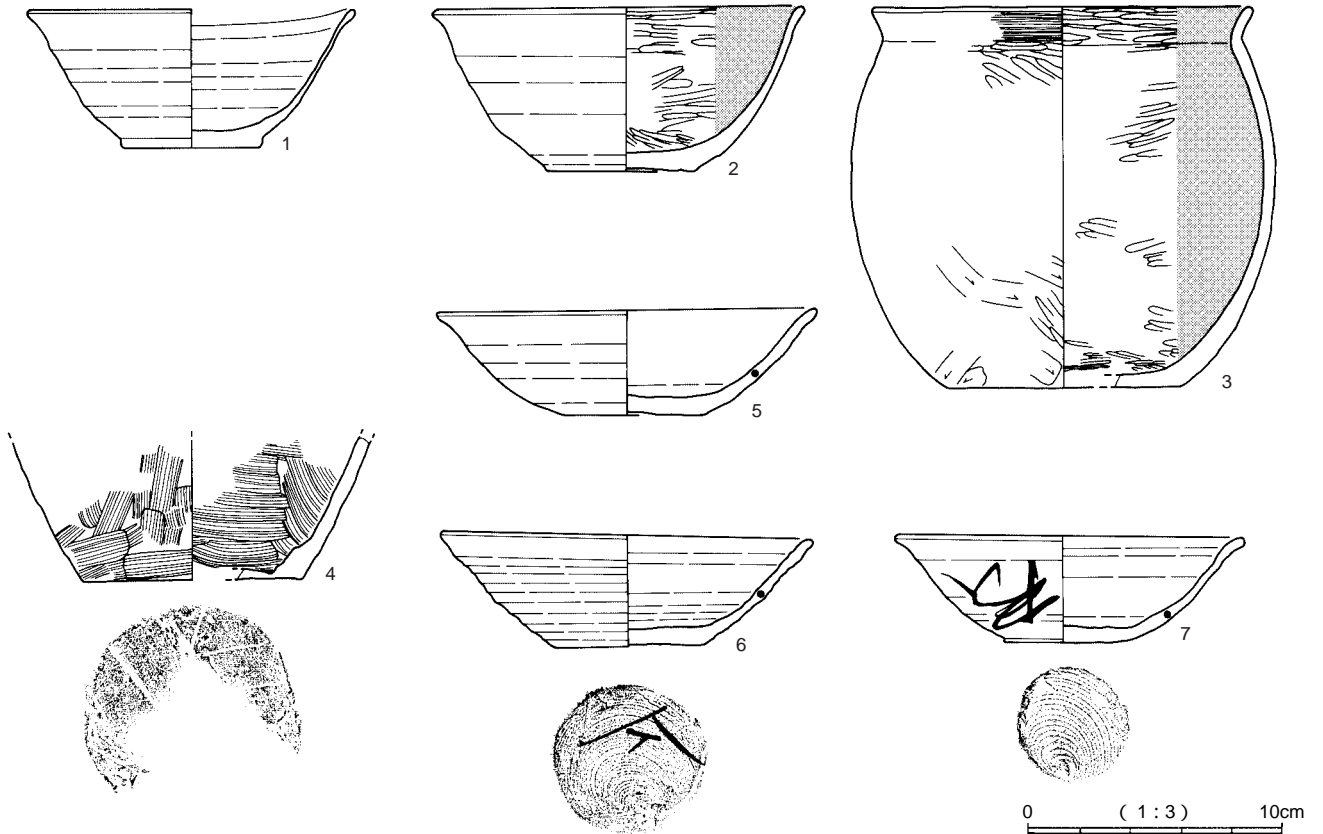
遺構と遺物



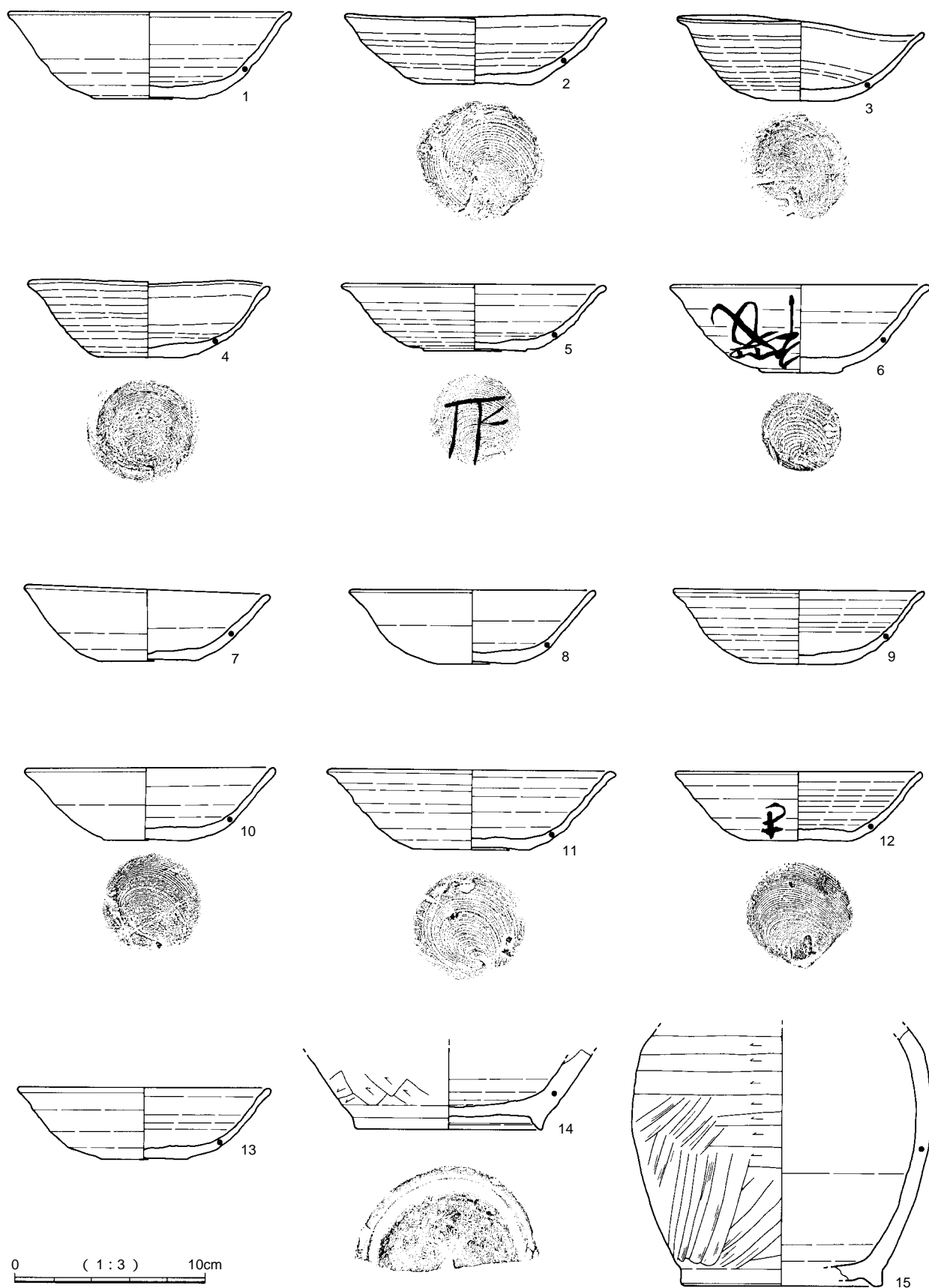
遺構平面図 0 (1 : 200) 10m

土層断面図 0 (1 : 100) 5m

SG1	1	10Y R2/2	黒褐色	粘質シルト (固くしまる。)
C区	2	7.5Y R4/1	褐灰色	細砂質シルト(砂層。)
	3	2.5Y R5/2	暗灰黄色	砂 (大粒の砂がざっしり堆積する。)
	4	2.5G Y4/1	暗オリーブ灰色	砂 (灰色粘土がわずかに混じる。)
	5	10Y R5/4	鈍い黄褐色	粘質シルト (褐灰色粒子混じる。固い。)
	6	5Y3/1	オリーブ黒色	粘質シルト (オリーブ灰色粘土をブロック状に30%含む。)
	7	10Y R2/2	黒褐色	粘土 (粘性あり。)



第72図 SG1 C区(4次)河川跡、出土遺物(6)



第73図 SG 1 C 区出土遺物(7)

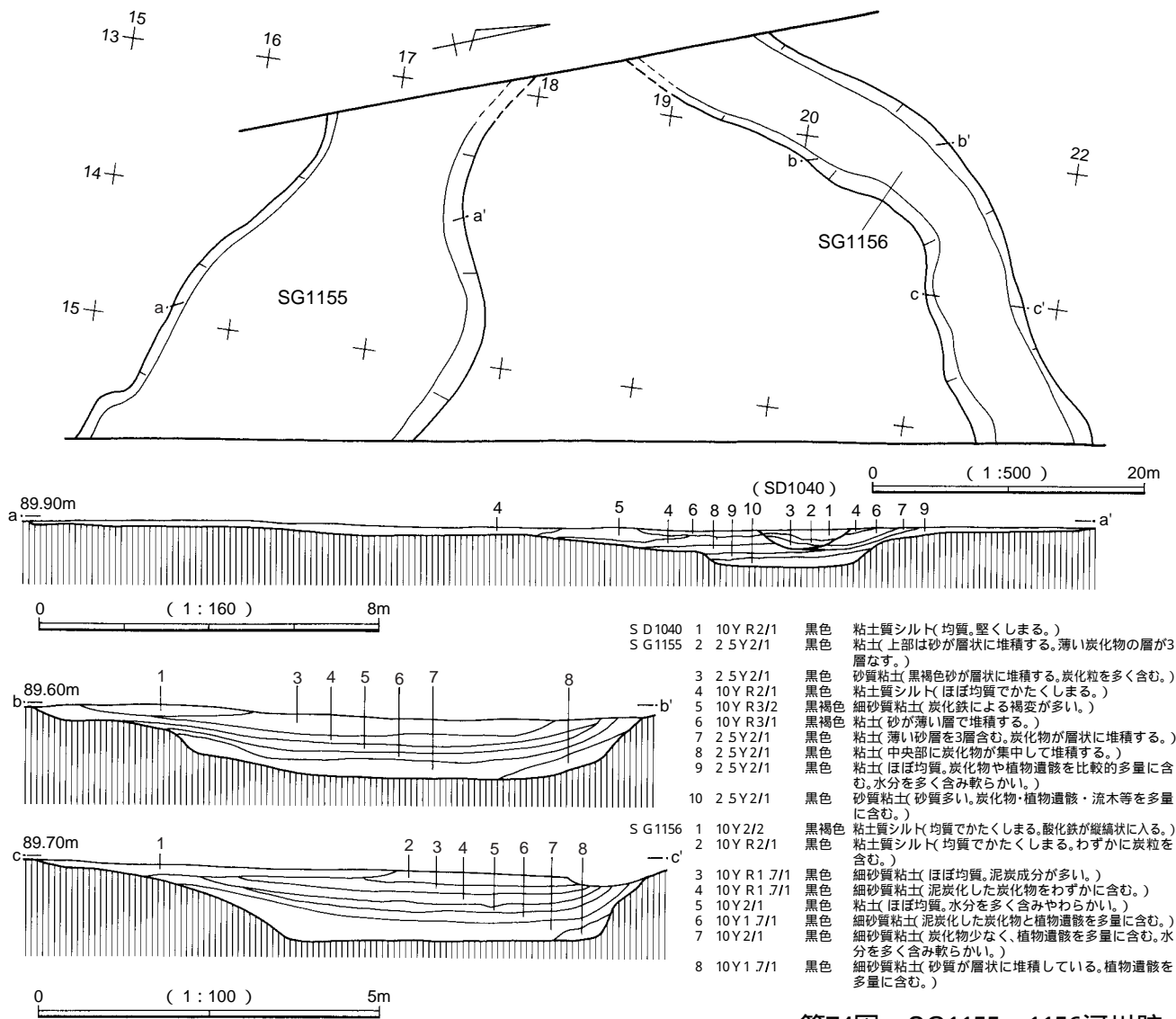
S G 1155 , S G 1156 (第74・75・76・77・78・79・80・81・82図)

S G 1155は、調査区中央部のC区北側、D区南側、E区南側にかけて検出された。河川の両岸は浅く湿地のような状況であったと推定され、川幅は不明瞭である。断面確認面では、深さ0.8mの川底が3.6mほどの幅で平らに検出された。また、C区北側の河川南側に確認されたS D 1040が、E区のS G 1155の断面のやや北側に幅2m深さ0.4mで検出された。覆土は、黒褐色～黒色の砂質粘土～粘土からなる。

土師器は、器台2点、高坏5点、坏4点、鉢4点、甕9点、壺20点（うち小型壺5点）、甑1点、手捏土器2点、紡錘車2点、羽口数点を図化し得た。器台の脚部は直線的に広がるもの（75-7）とやや外反しながら八の字形に広がるもの（75-8）がある。高坏の坏部は、体部の下端に角を持ち、ほぼ直線的に口縁が大きく広がるもの（75-5）と、体部が丸みをおびて立ち上がり、中位に明瞭な段を形成してヨコナデの調整があり、口縁部が外反するもの（75-3）がある。脚部は、穿孔が3つあり八の字形に開くもの（75-10）と、体部から短く棒状にのびて裾部は大きく外反してほぼ水平に広がるもの（75-12）がある。坏は、丸みをおびた体部が内湾して口縁部が短くくびれて外反し内面に稜を持つもの（75-2）と、底部が平らで丸みをおびて立ち上がり、口縁部が緩く内湾するもの（75-1、75-4）と、底部の切り離しが回転系切りでろくろを用いた坏（75-6）がある。鉢は底部が丸底のもの（75-14）と平底のもの（75-9、76-3、76-5）がある。甕はいずれも形状が異なる。75-16は球形の体部が特徴で、平底で短めの口縁部はくの字に外反する。79-4の口縁部はゆるやかに外反し、76-1の体部は紡錘形を呈する。いずれも外面内面ともにハケ目が明瞭で、外面には煮炊きで使われたと思われる煤が付着している。75-15は長胴形を呈し、口縁部はゆるやかに外反する。77-3の口縁部は直立ぎみに立ち上がりながら外反し、体部はなだらかに広がる。壺は、底部はいずれも平底で、明瞭な台を形成しているのは9点ある。口縁部は複合口縁3点と単純口縁4点を確認したが、いずれも形状が異なる。77-1は折り返しの複合で、先端部は大きく外反して開く。76-9と76-10は中位に段を持ち、76-9は先端部が緩く外反し、76-10は内湾する。77-2は長い単純口縁で、緩やかな逆S字形をして先端部がわずかに内湾する。77-5はくの字に外反する。77-6は短い単純口縁でくの字形に外反し、指圧痕が明瞭である。76-8は口縁部が直立してから先端部でわずかに外反する。

須恵器は、無台坏10点、有台坏1点、双耳坏1点、甕の体部片2点を図化し得た。坏は底部の切り離しが回転ヘラ切り11点、回転系切り1点と前者が主である。坏の形状の特徴は、全体的に器高が低い。底径は大きいものと小さいものがあるが、前者のほうが多い。78-20の高台坏は、いびつに歪んでいる。また、その他に古墳時代の5世紀末頃の坏の受部片が2点検出された。79-3と79-6は大甕の破片で、79-3はS D 1329の59-3と同じ調整が施されている。79-6はS D 1329の59-4と同一個体である。木製品は、容器1点、織機具2点、加工材2点を図化し得た。80-2は、2列に合計14の孔が開いている。

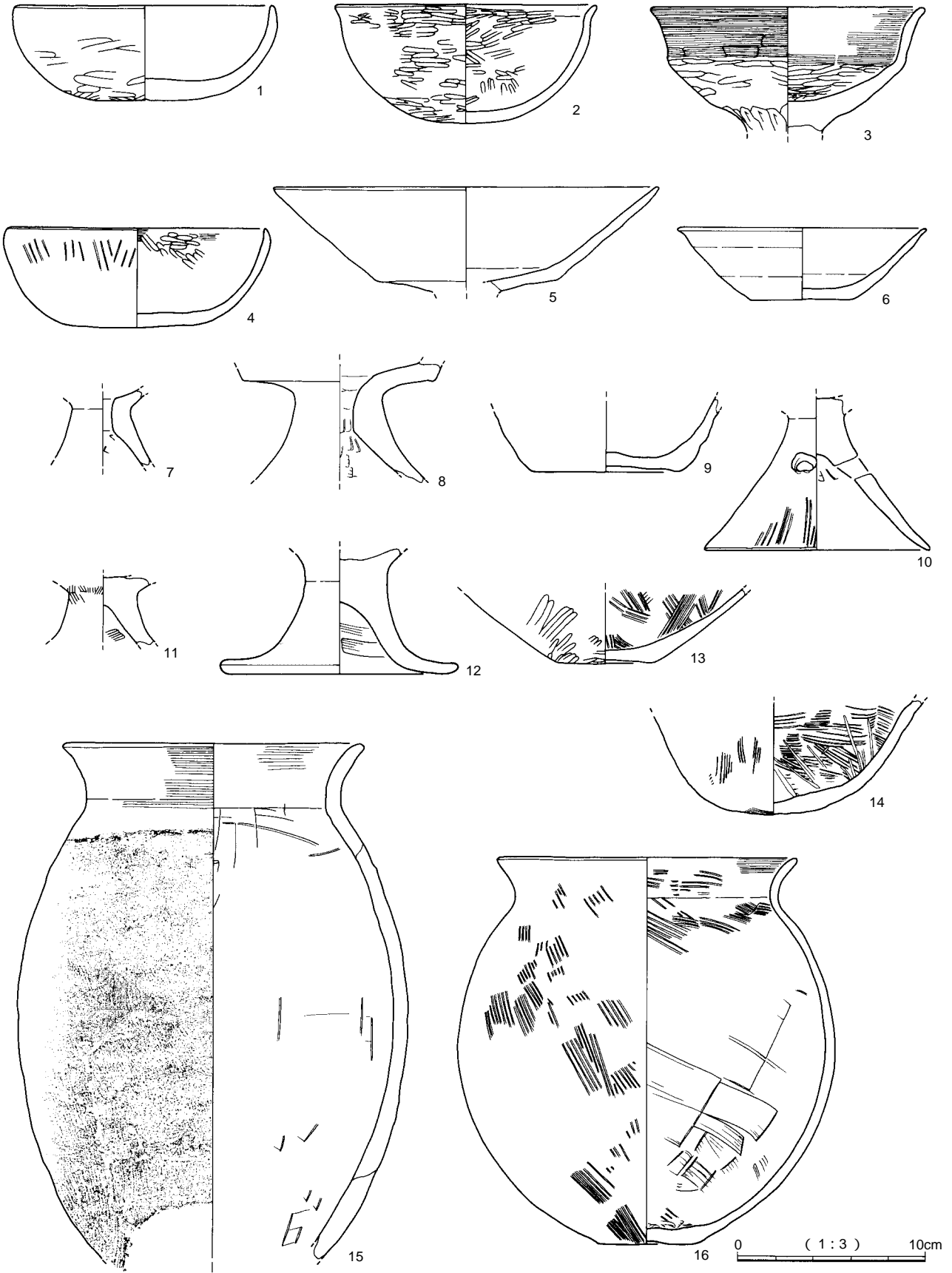
S G 1156は、E区北側、D区北西角、F区南西角にかけて検出されたが、特にD区では川岸が湿地のような状況で川幅は不明瞭である。検出状況から河川は大きく蛇行しており、洪水な



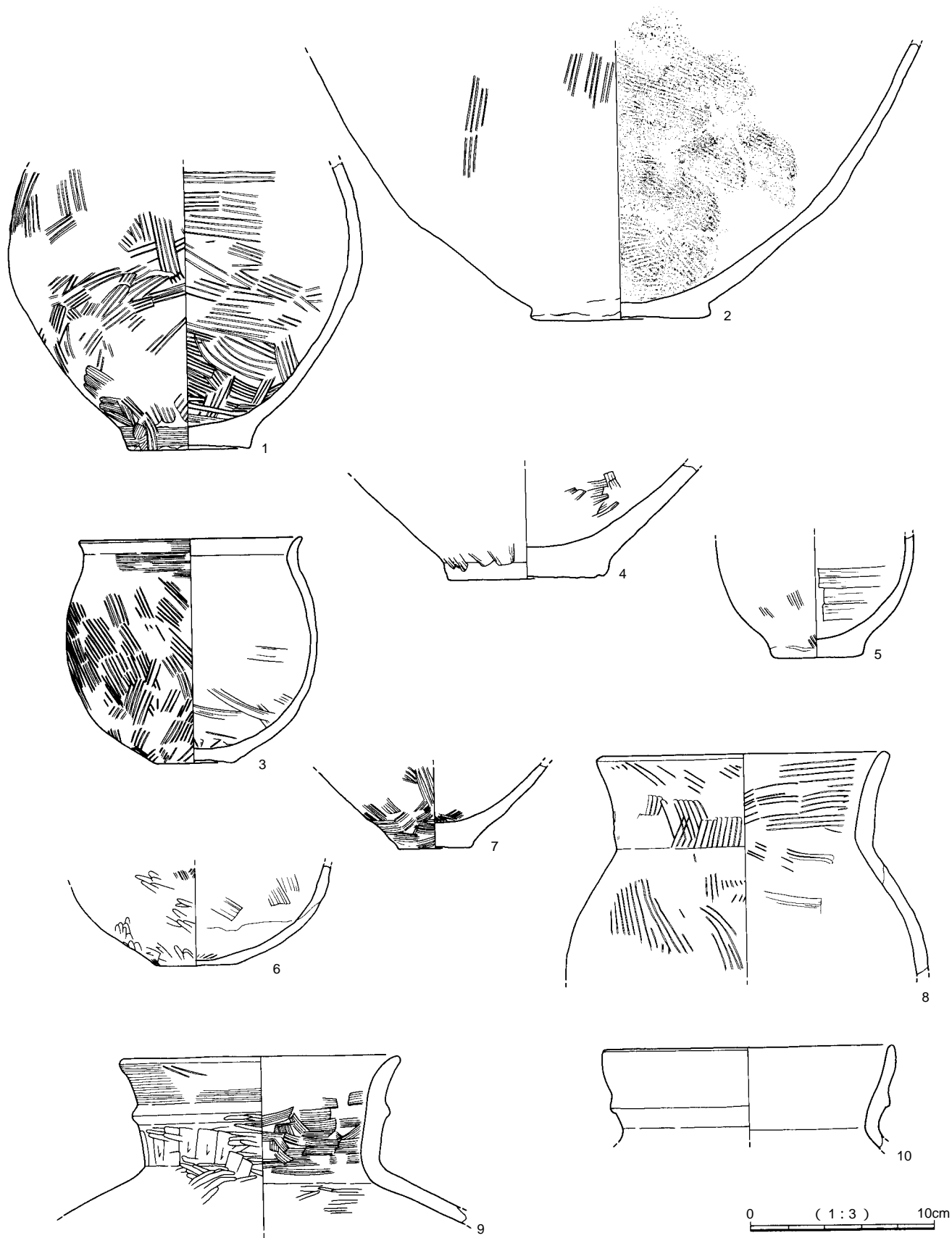
第74図 SG1155・1156河川跡

どによる流路変更により形成された可能性がある。また、D区北西角、F区南西角のS G 1156の断面からは、S G 1301の断面が確認された。

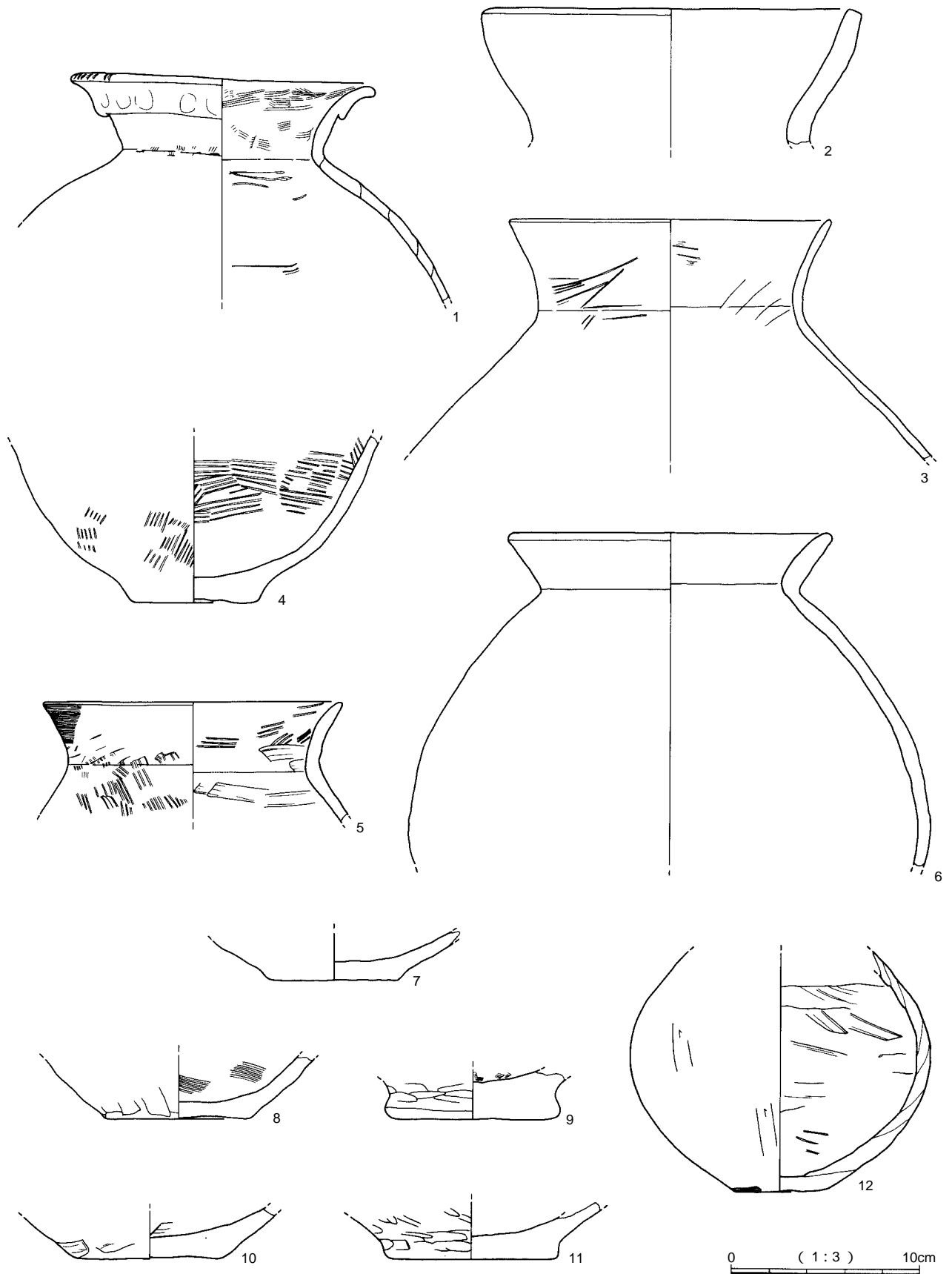
土師器は、器台1点、高坏5点、坏1点、小型鉢1点、埴3点、甕12点、壺7点、手捏土器1点を図化し得た。坏は丸底で丸みをおびて立ち上がり口縁部は直立する。高坏は脚部穿孔が5つのもの(81-19)と、坏部が小さいもの(81-15)と、坏部が体部下端に角を持つもの(81-16・17)に分かれる。甕は、口縁部が下部に稜線を持ちながら外反するもの(82-7)と、口縁部が短く外反して口唇部をつまみ出して面どりしているもの(82-1・2・4)と、くの字に外反するものに分かれる。82-7は、紡錘形の体部上位に最大径を持ち、表面は煤、内面には炭化米が付着している。82-11の体部は紡錘形から球形に近くなり、82-5の体部は球形で底部がやや大きくなる。壺は、複合口縁3点と単純口縁2点に分かれる。複合口縁は中位に段を形成しており、段の下部が強くとびれて上部がゆるやかに外反するもの(81-5・6)と、段の下部は逆コの字になり上部は大きく外反して開くもの(81-4)がある。単純口縁は、くの字状に外反するものと、直立状に長く外傾するもの(82-8)がある。



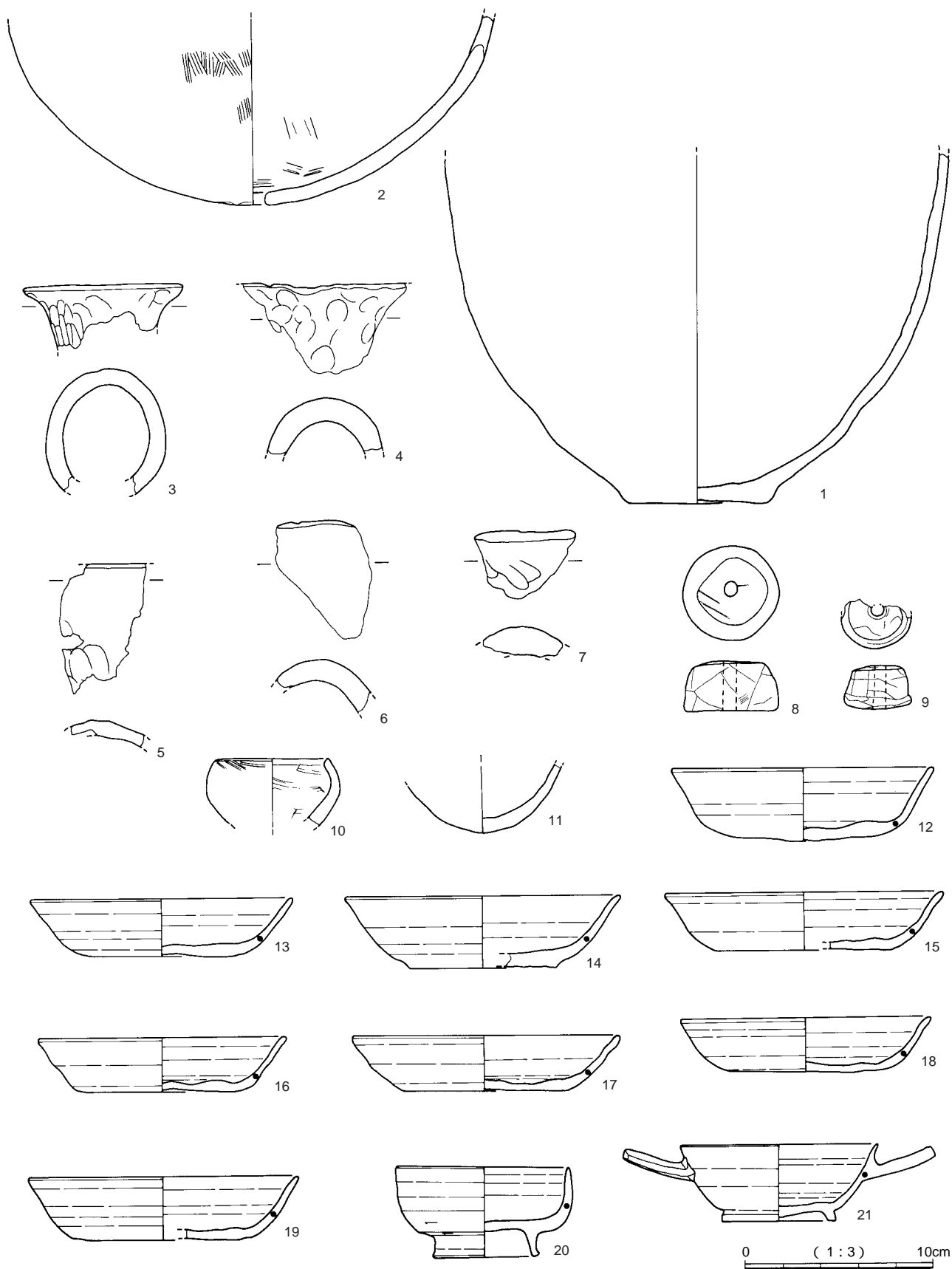
第75図 SG1155出土遺物(1)



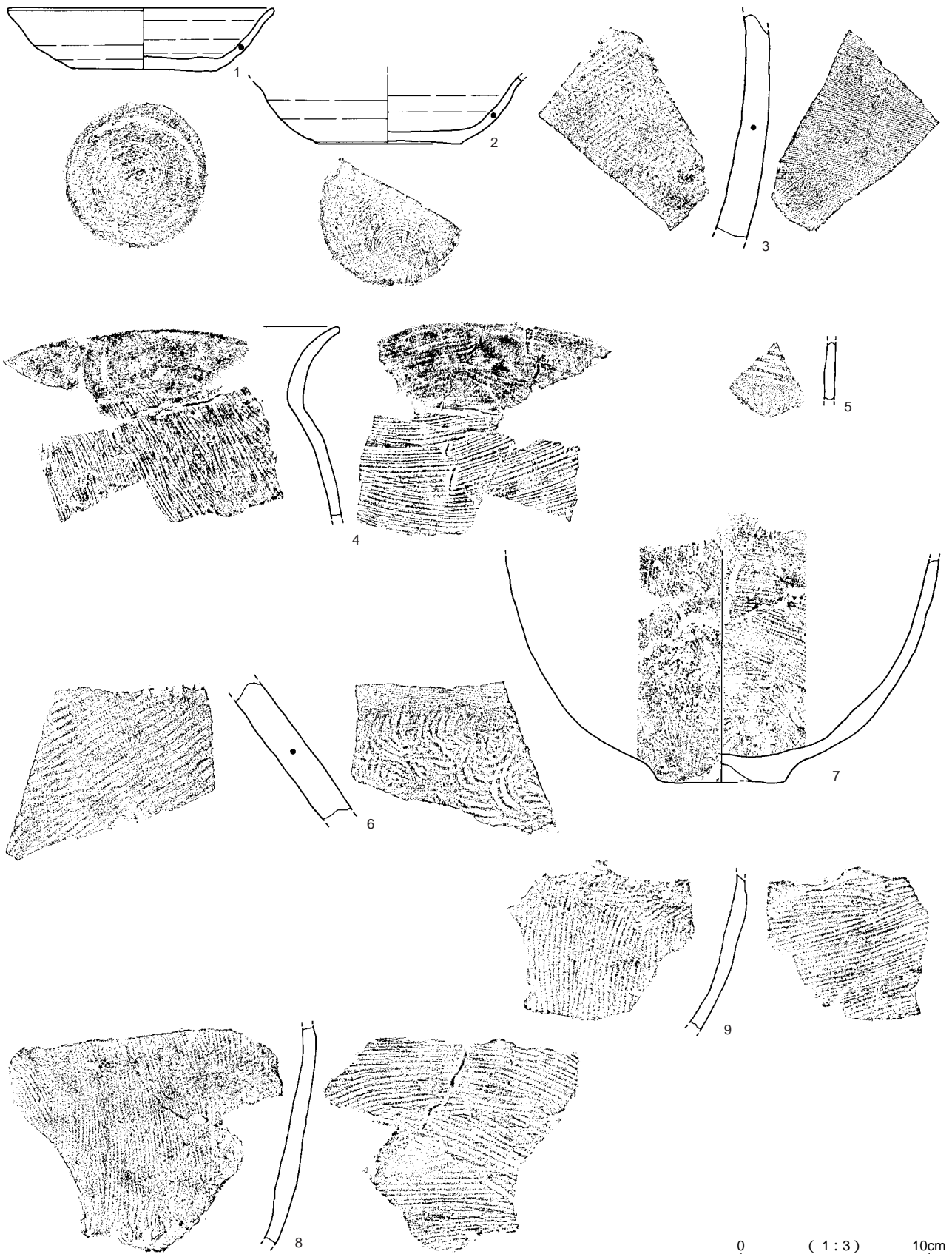
第76図 SG1155出土遺物(2)



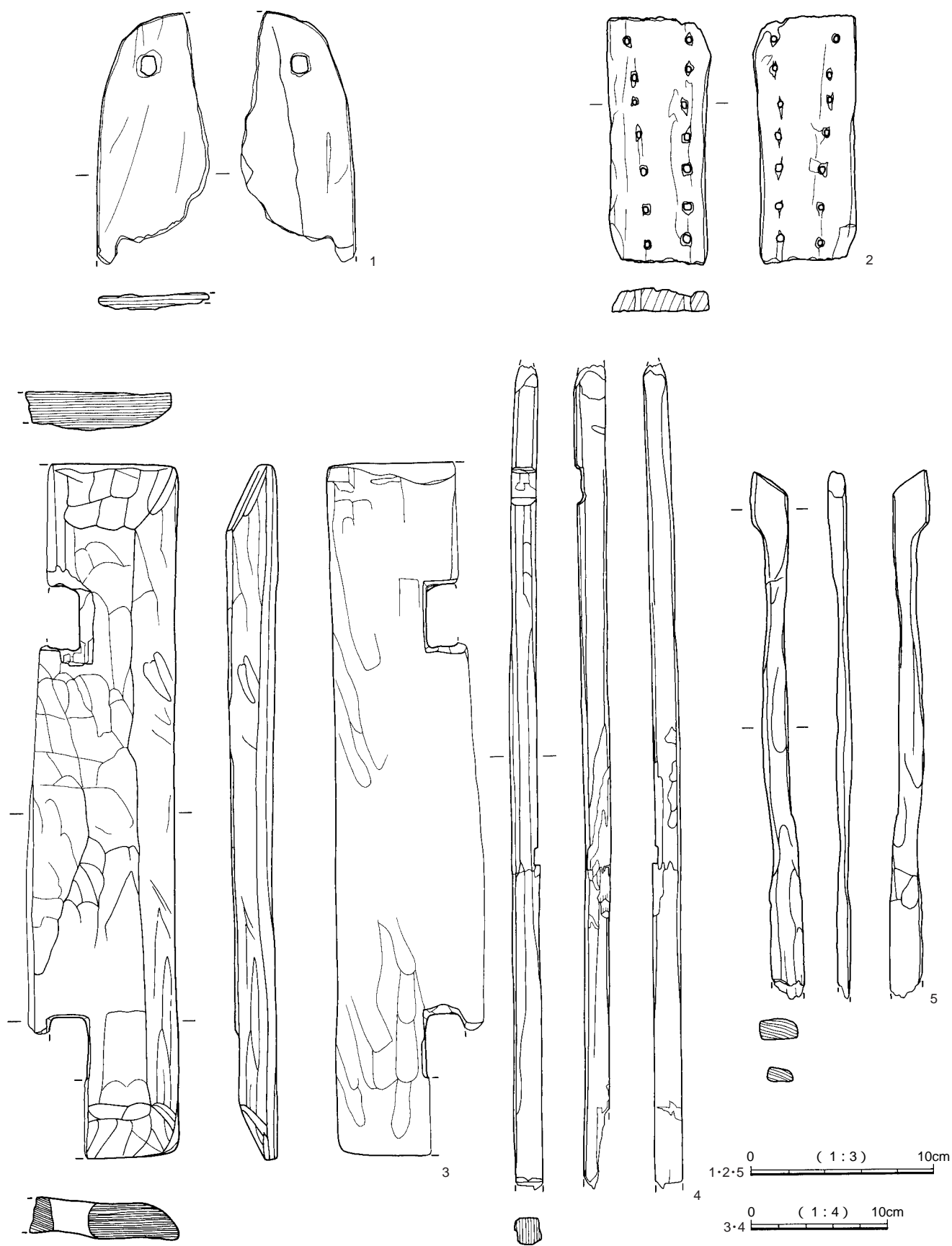
第77図 SG1155出土遺物(3)



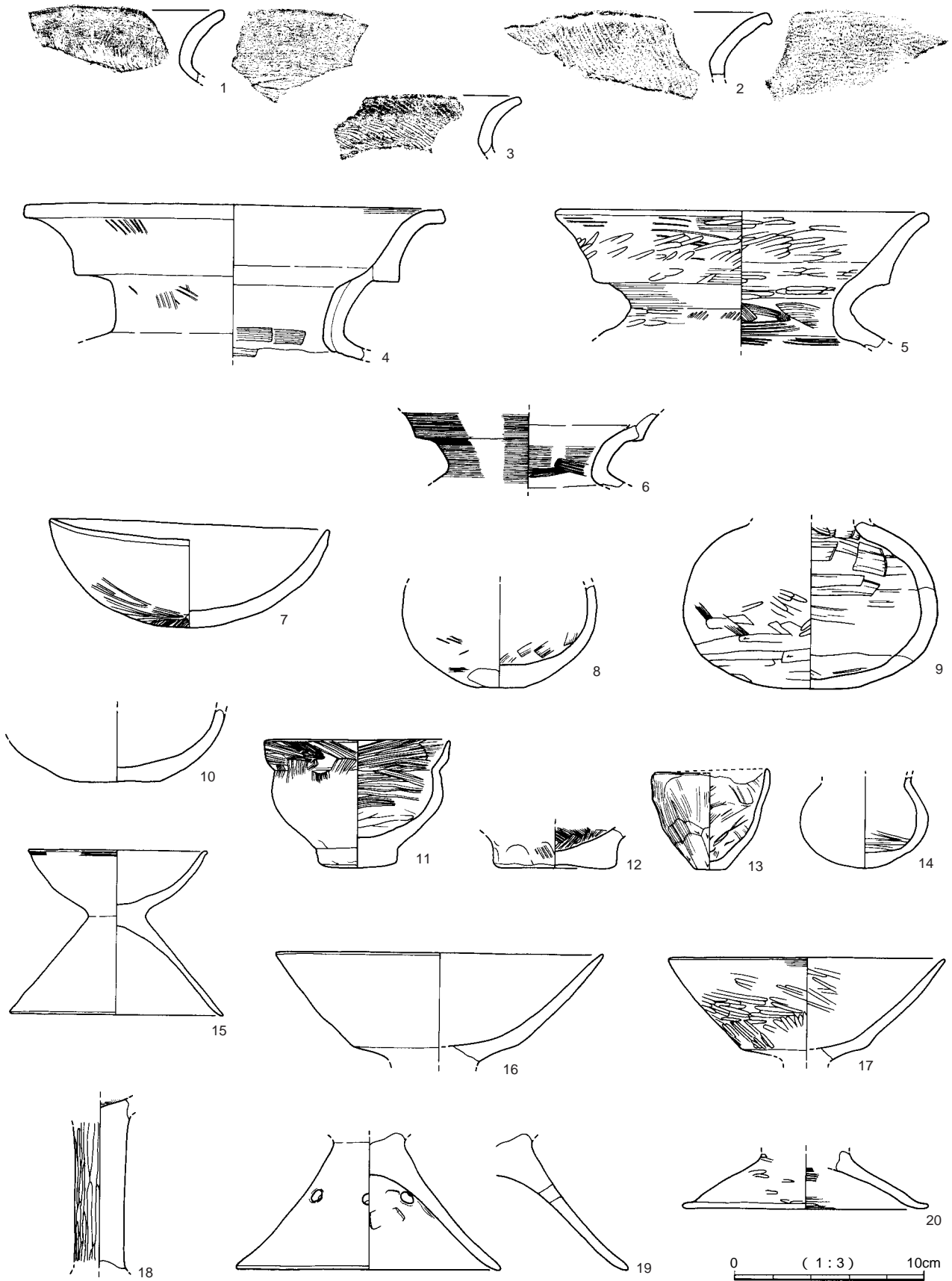
第78図 SG1155出土遺物(4)



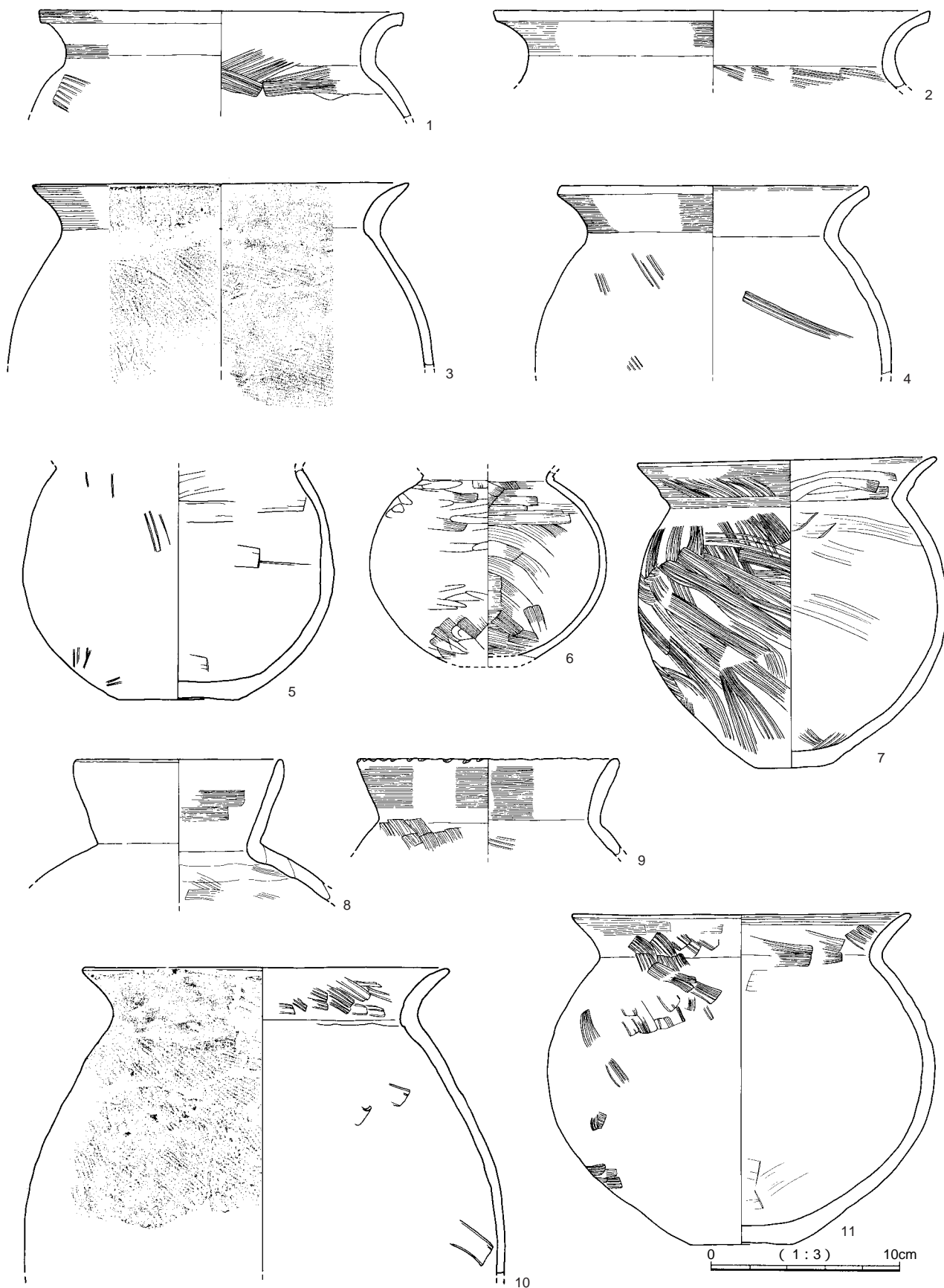
第79図 SG1155出土遺物(5)



第80図 SG1155出土遺物(6)



第81図 SG1156出土遺物(1)



第82図 SG1156出土遺物(2)

S G 1301 (第83・84・85・86・87・88・89・90図)

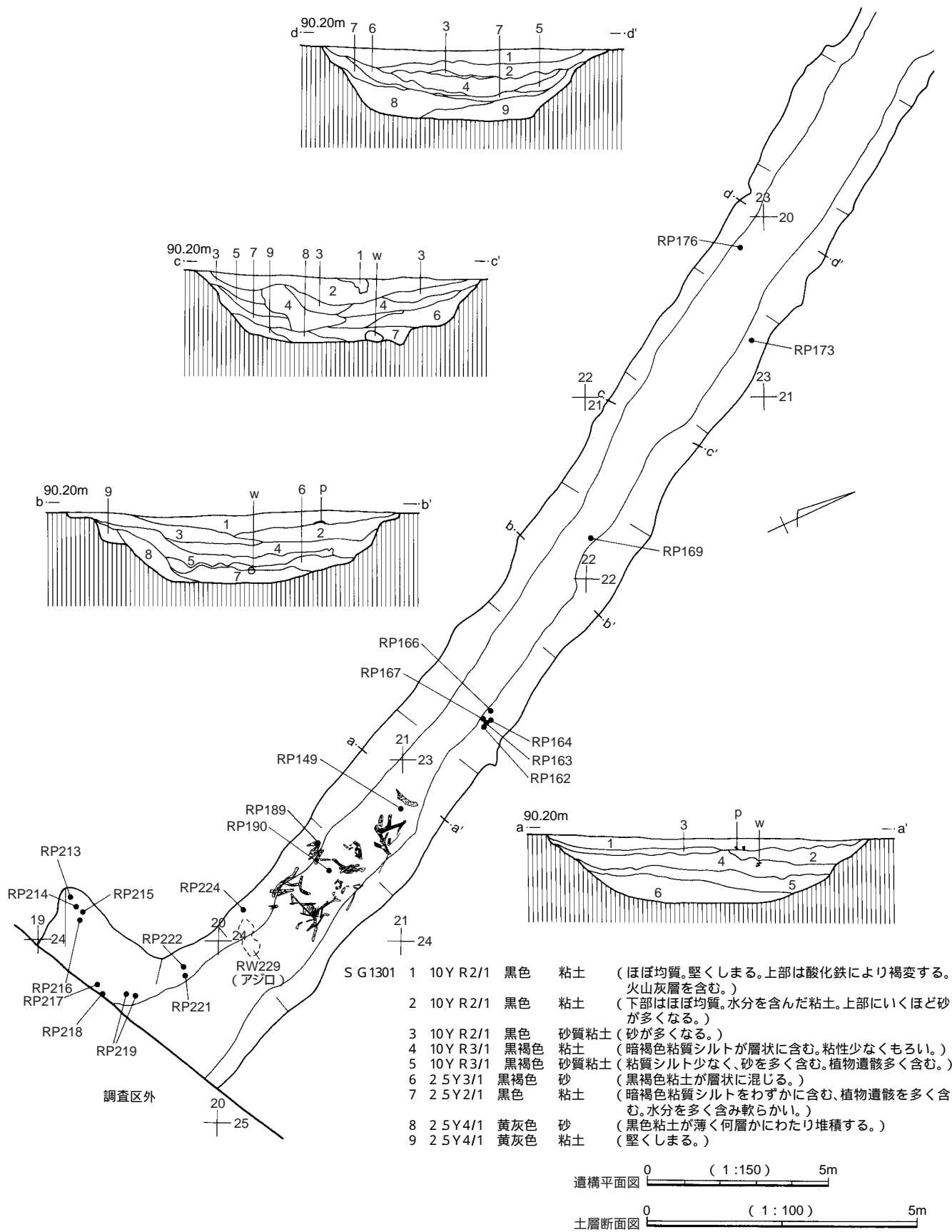
D区東からF区南西角にかけて北西に向かって検出された河川跡であるが、他の河川跡と大きく異なり、ほぼ直線的に流れているのが特徴である。D区東端の南側にはS D 1329がS G 1301から枝分かれするようなかたちで確認された。D区北西角、F区南西角では、S G 1156の中に検出された。川幅は6m、深さ1.2mを測る。覆土は、上層から中層が黒褐色～黒色の砂質粘土と粘土、下層が黄灰色の砂と粘土からなる。上層には火山灰を含む。D区東部23～24 - 20～21Gの川底から木組が検出され、木組の上には網代も検出された。この河川が流れる方向を地図上で直線的に延長すると、最上川と寒河江川が合流する地点にぶつかる。

土師器は、坏2点、高坏1点、鉢1点、甕6点を図化し得た。坏(85-1)は、平底から丸みを持って立ち上がり、口縁部はやや内湾する。坏(85-2)は、ろくろを使用し底部の切り離しは回転系切りである。高坏(85-4)は、脚部が中実棒状で体部下端に角を持つ。鉢(85-5)は内黒の非ろくろで、平底から丸みを持って立ち上がり、口縁部はやや内湾する。甕(85-7)の口縁部は、強く外反しほぼ水平に開く。口唇部は面どりが中途であるのが確認される。85-17の底部には網代痕が認められる。85-3の底部は切り離しが回転系切りである。

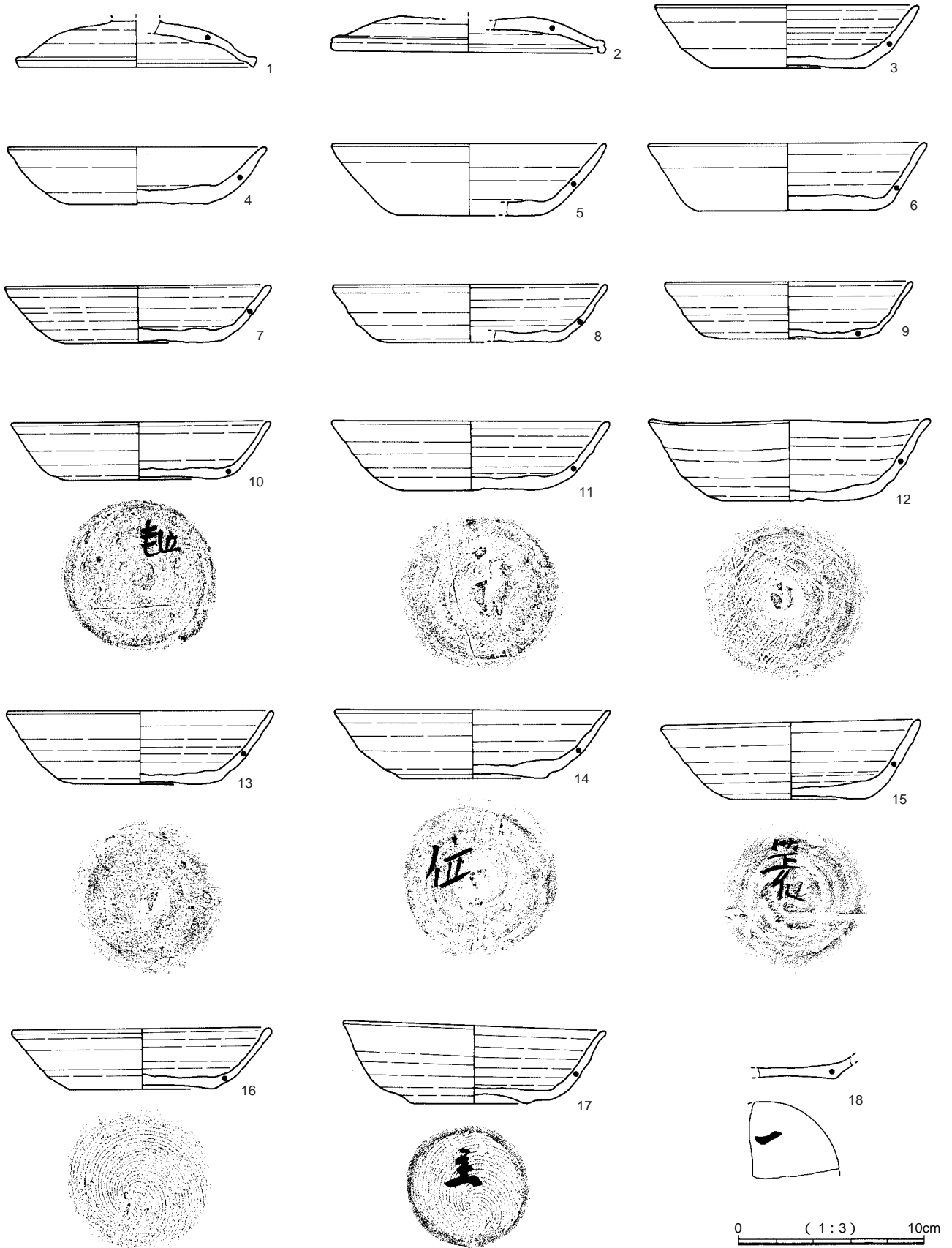
須恵器は、坏23点、壺1点を図化し得た。坏の内分けは、無台坏16点・有台坏6点・双耳坏1点で、底部に墨書が確認されたのは4点である。また、底部の切り離しは、ヘラ切り16点、糸切り7点である。形状は、底径が大きく器高が低いものから底径が小さく器高が高いものまで見られる。85-12の坏は、平野山古窯跡群第12地点遺跡2次調査S Q 33出土と類似する。墨書は文字が明らかに確認できるものはない。壺は短頸壺で短い口縁部がやや外反し、体部が丸みを持って体部上半に最大径を持つ。

大甕は、口縁部最大径61cm、頸部最小径48cm、体部最大径92cmを測る。口縁部の先端部下端が屈曲して引き伸ばされ、外反した頸部から肩が張り出して、体部上半部に最大径を持ち、下部にかけて細くなる。調整は、外面は条線状のタタキで、内面は青海波のアテ痕が施されている。頸部は3本の櫛描き波状文が2段に描かれている。焼きは良好で、二次的加熱を受けて火はねして表面が剥離している状況が見られる。

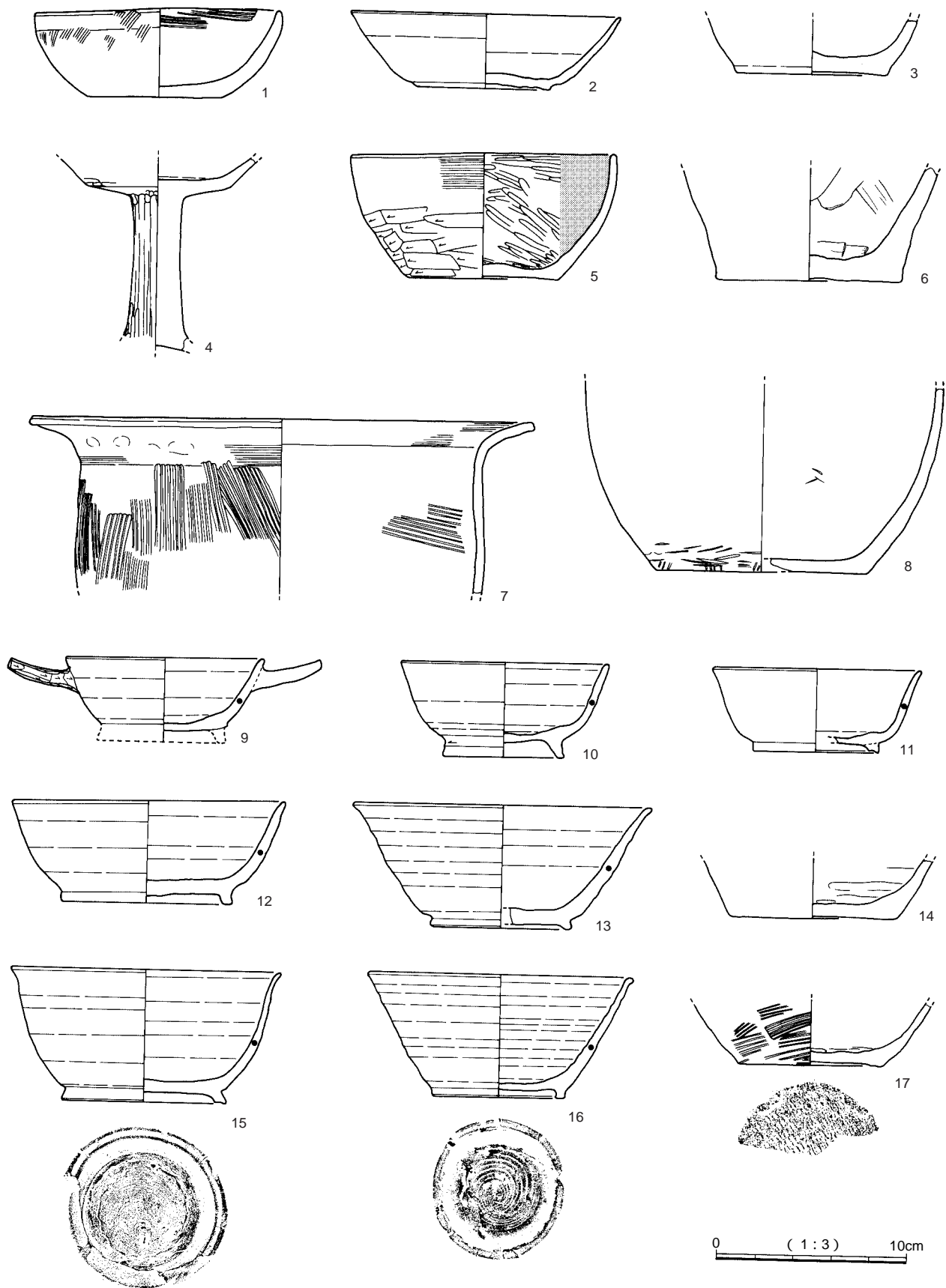
木製品は、曲物3点、容器4点、田下駄1点、加工材1点、網代3点を図化し得た。89-1の曲物は、二重の側板に1カ所の樺皮の綴合せの結合孔が認められる。側板内面には、縦平行のケビキを入れる。欠損のため全体の構成は不明である。89-2の曲物は、側板の下部にもう一重の箍をはめた釘結合曲物で、木釘が2本箍のうえから円板に打込まれた状態で出土した。側板の綴合せは1カ所で、上部欠損のため段は1段しか確認できない。側板内面には、斜格子のケビキを入れる。箍の綴合せは1カ所で1列外2段階綴じを1本の樺皮でつないで綴じる。結合釘孔は5カ所がほぼ均等に確認された。87-2の曲物底円板には使用痕が多数認められ、まな板転用と考えられる。90-4の容器底板には周囲に24カ所の孔が認められる。88-4の加工材は、長野県石川条里遺跡(1997)出土の鳥形木製品に類似するが検討を要する。88-1、2、3の網代は、軸木がある砂泥質土の上に、葦などの草本類の葉や茎による「敷葉」状の層があり、その上に薄い樹皮で格子状に編まれたものが何層かに重なっていた。



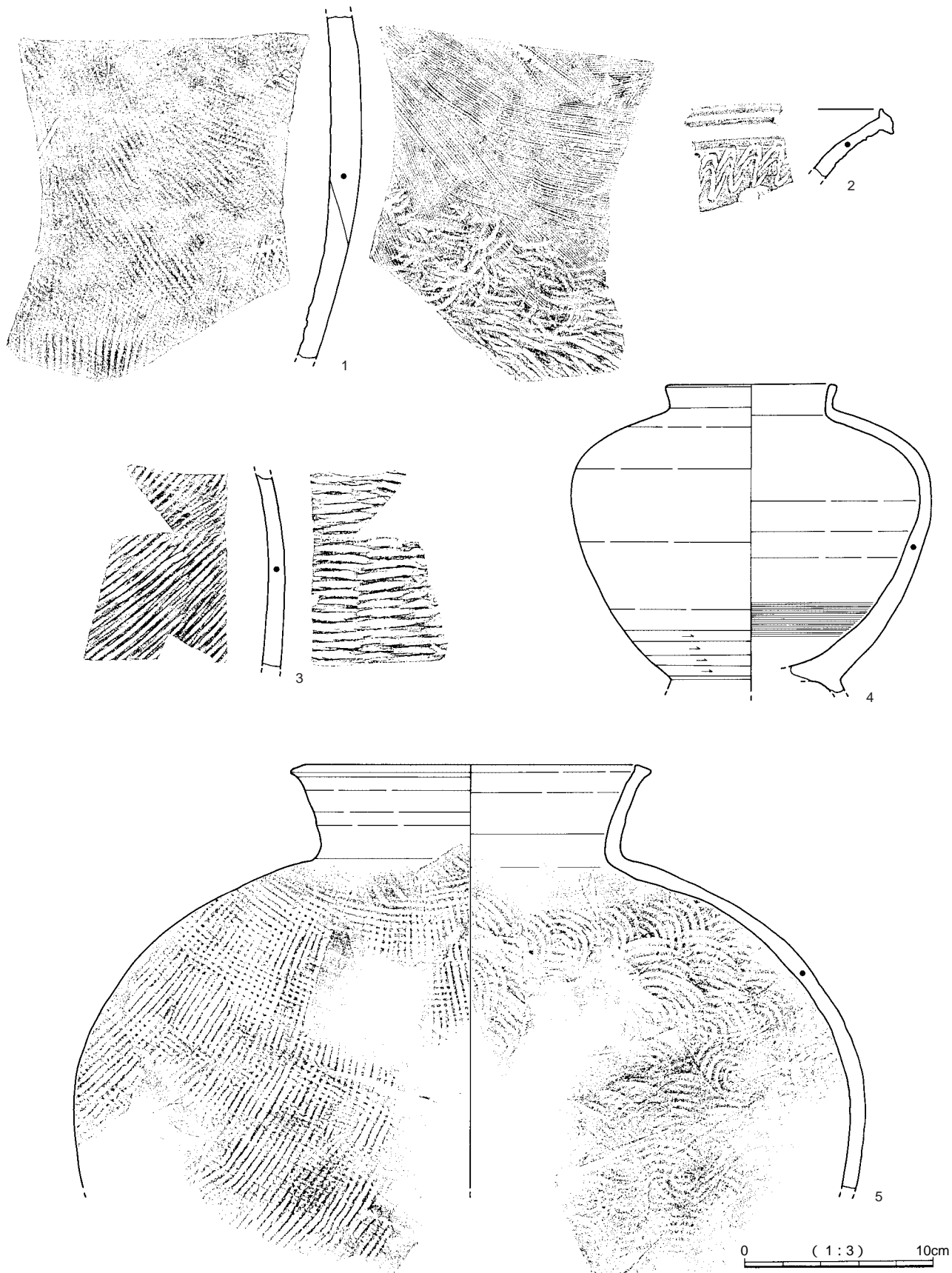
第83図 SG1301河川跡



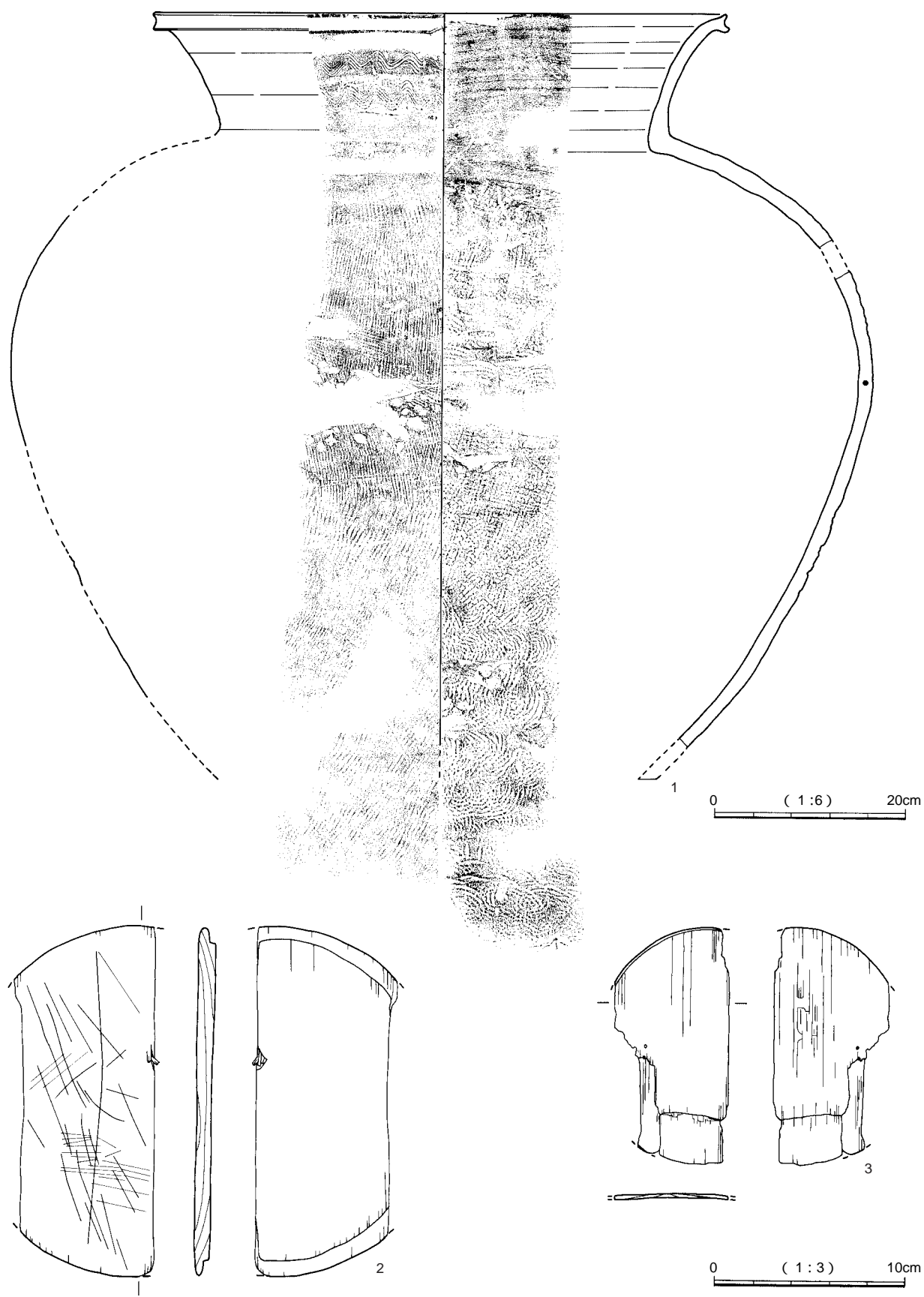
第84図 SG1301出土遺物(1)



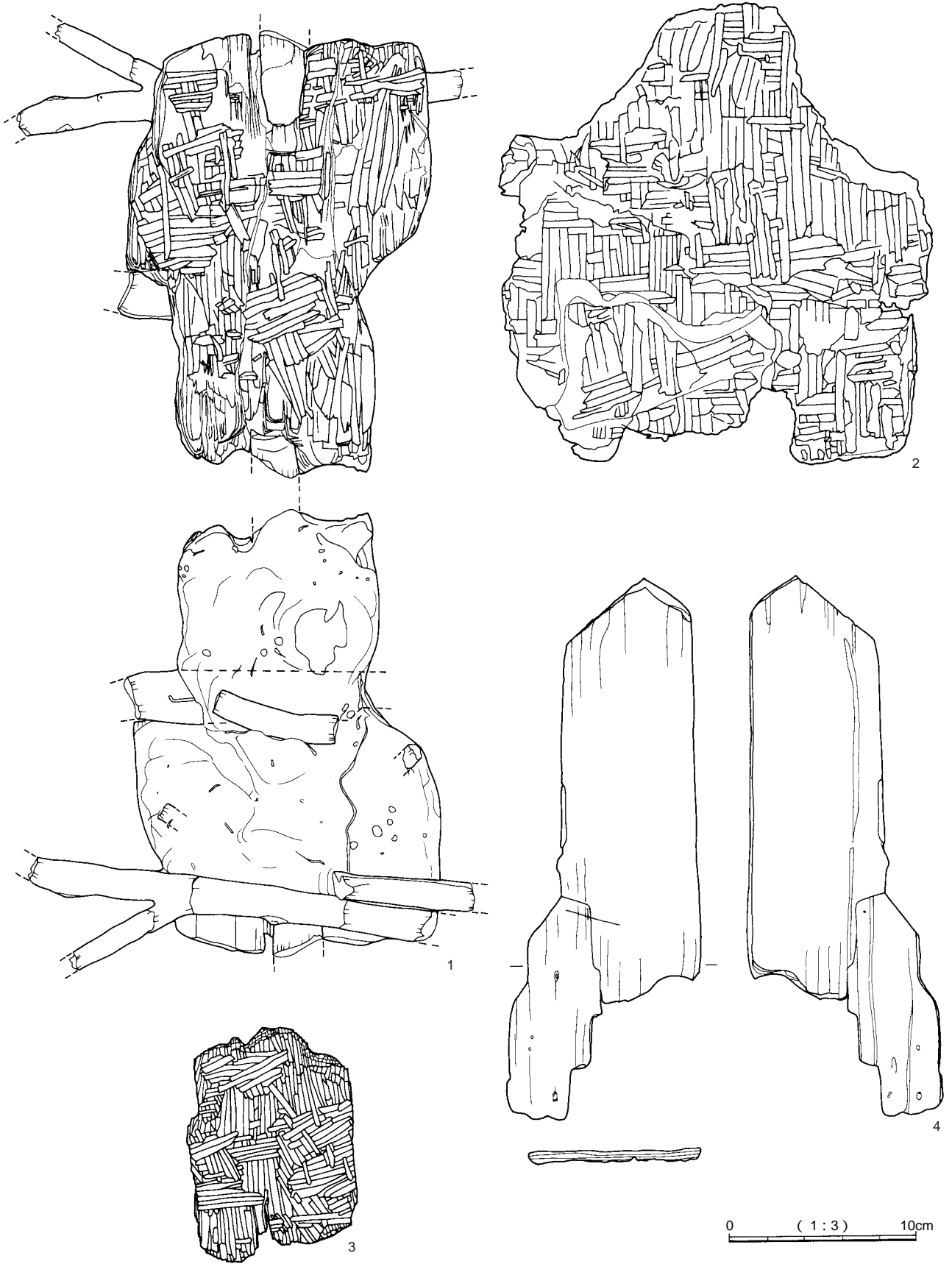
第85図 SG1301出土遺物(2)



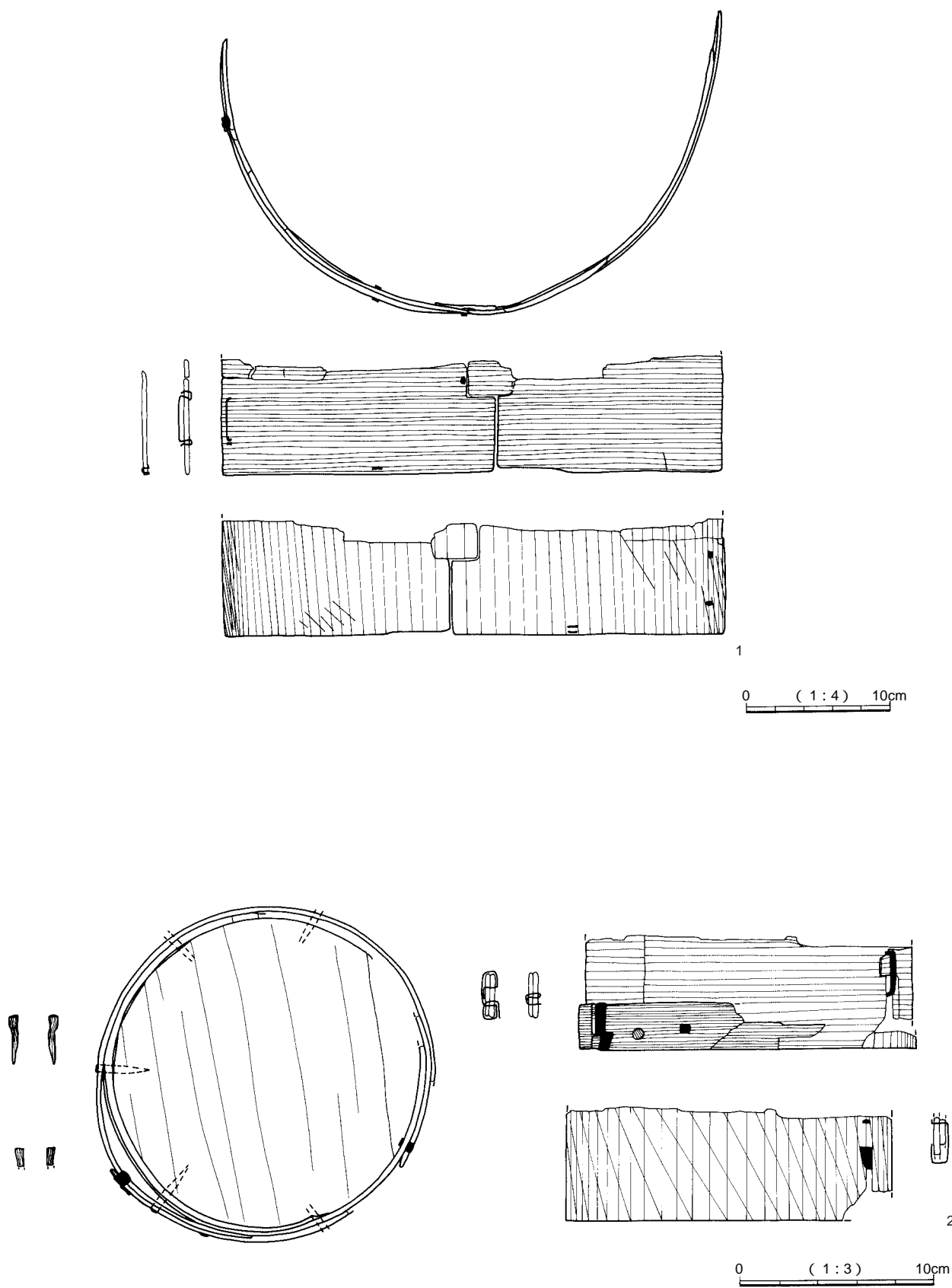
第86図 SG1301出土遺物(3)



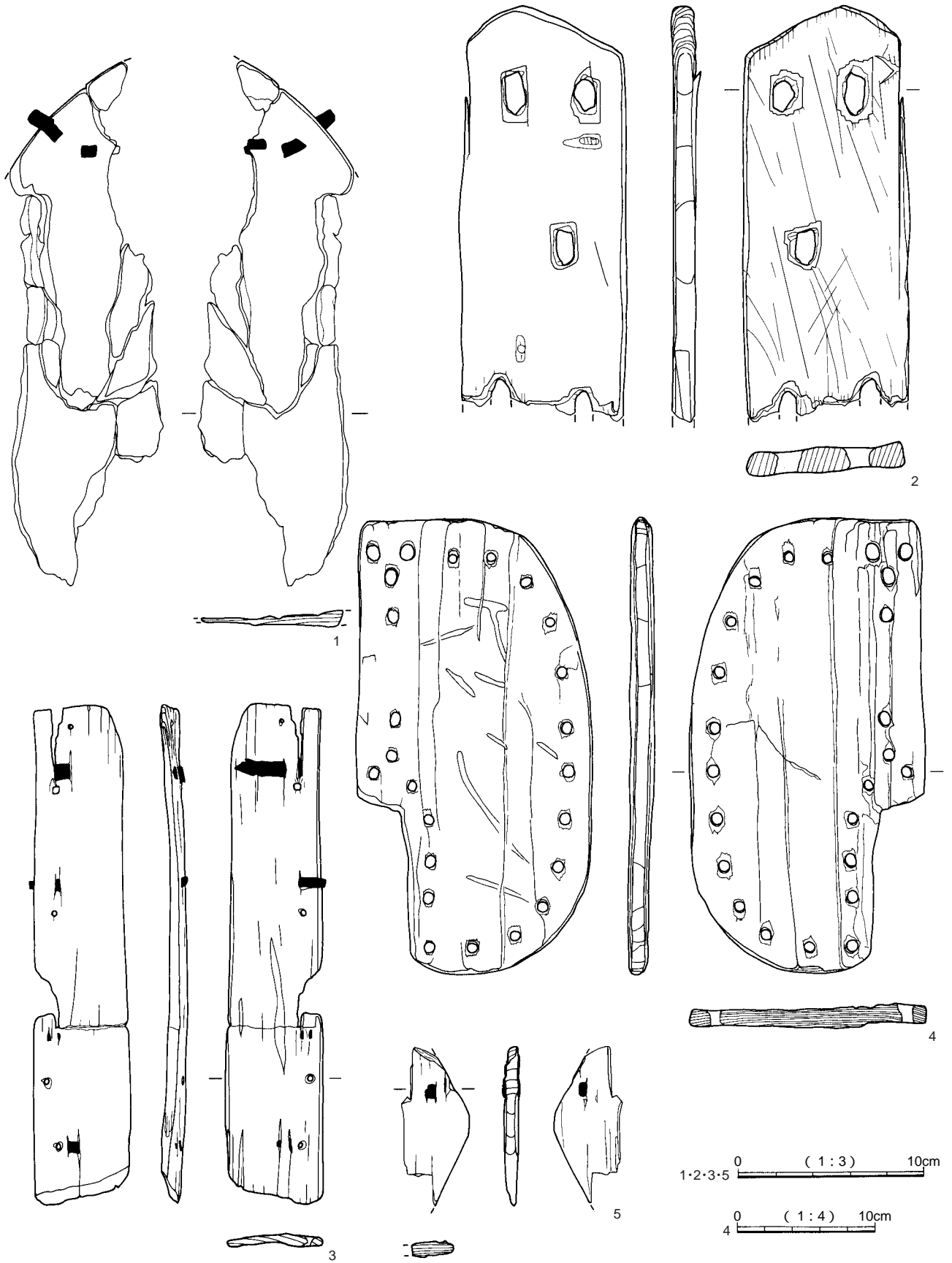
第87図 SG1301出土遺物(4)



第88図 SG1301出土遺物(5)



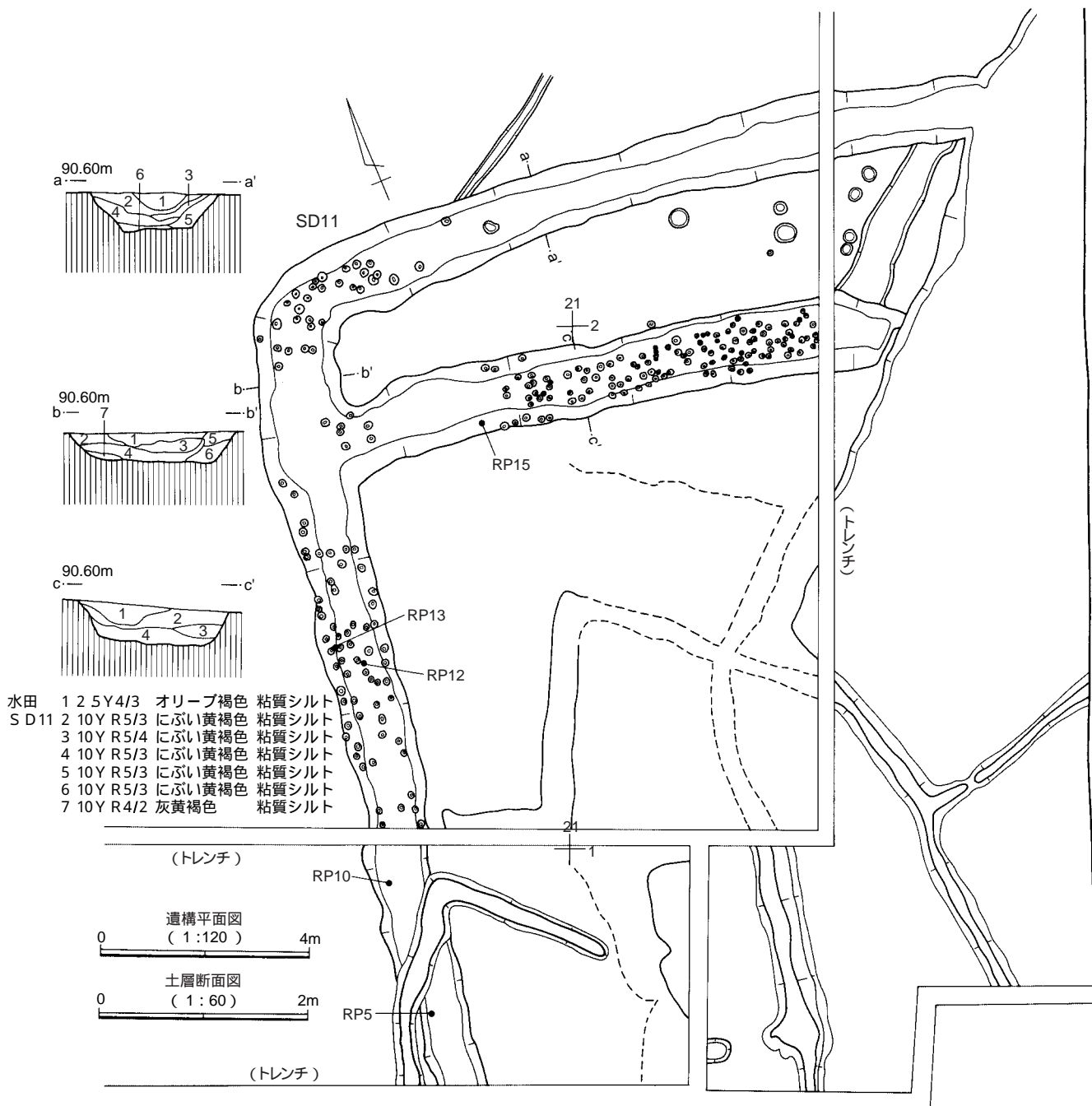
第89図 SG1301出土遺物(6)



第90図 SG1301出土遺物(7)

6 水田跡 (第91図)

A区東側には第一次調査で水田跡が検出された。調査区南東角に畦畔と水田床面が確認され、その水田を囲むようにSD11がほぼ長軸を南北にとり、方形の区画になるように水田跡を巡り、北側で2条平行に走る。溝の底面には多数の杭跡が認められた。水田耕作とみられる層は、黒褐色・暗褐色の粘土質シルトで酸化が著しい。プラント・オパール分析の結果からも稲作が行なわれていたことが確認された。畦畔の幅は70cm、高さは10cm、溝幅は130cm、深さは40cmを測る。畦畔は、暗褐色ないし黒褐色の粘土質シルトと黄褐色粘土を混ぜ合わせてつくられ、一部水口も検出される。溝の覆土は、にぶい黄褐色の粘土質シルトからなる。



第91図 水田跡

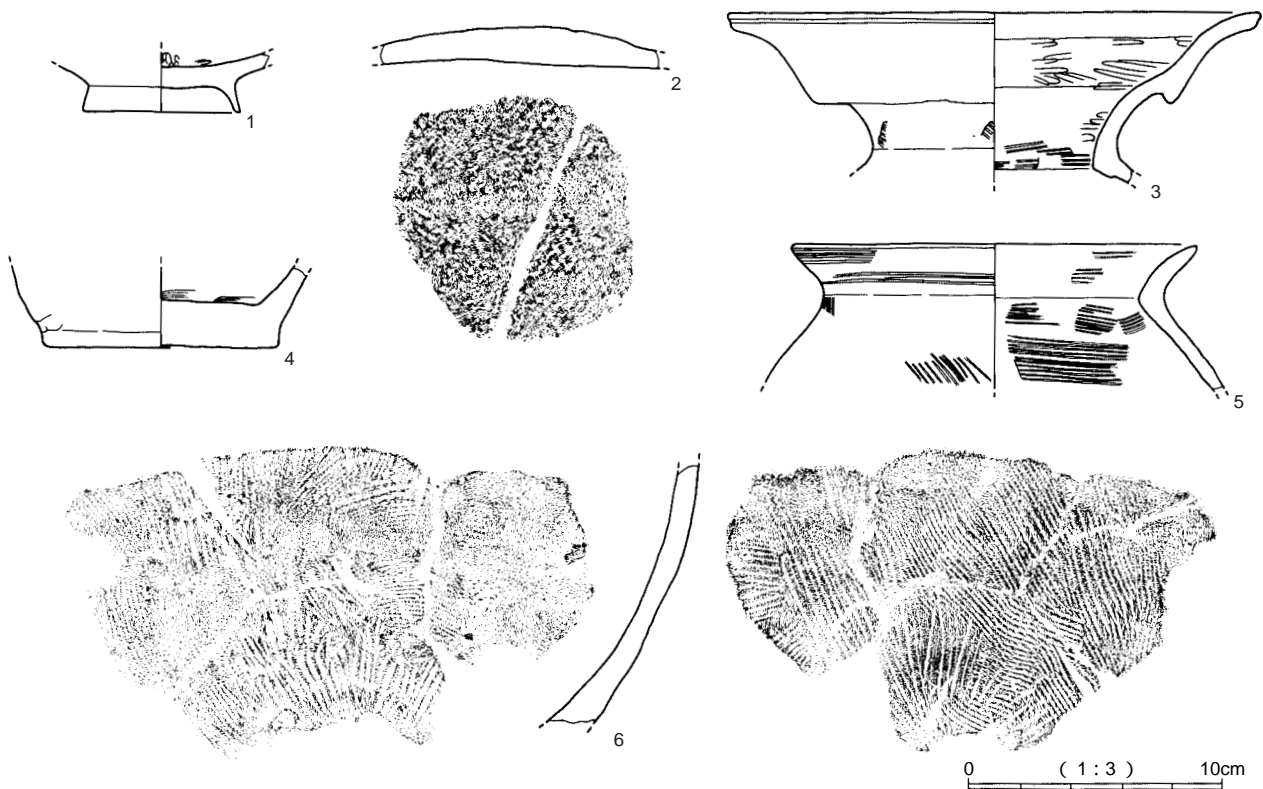
7 その他の遺構と遺物（第92・93・96図）

その他の遺構として、B区及びD区で竪穴住居跡群とともに検出された15の遺構についてであるが（付図参照）検出段階では方形のプランが確認されたものもあり、竪穴住居跡と思われたが、遺構の残存状態が非常に悪く、壁や床面が明確に認められず柱穴・カマド等も未検出のため判断材料にとぼしく、性格不明遺構とするにとどめた。

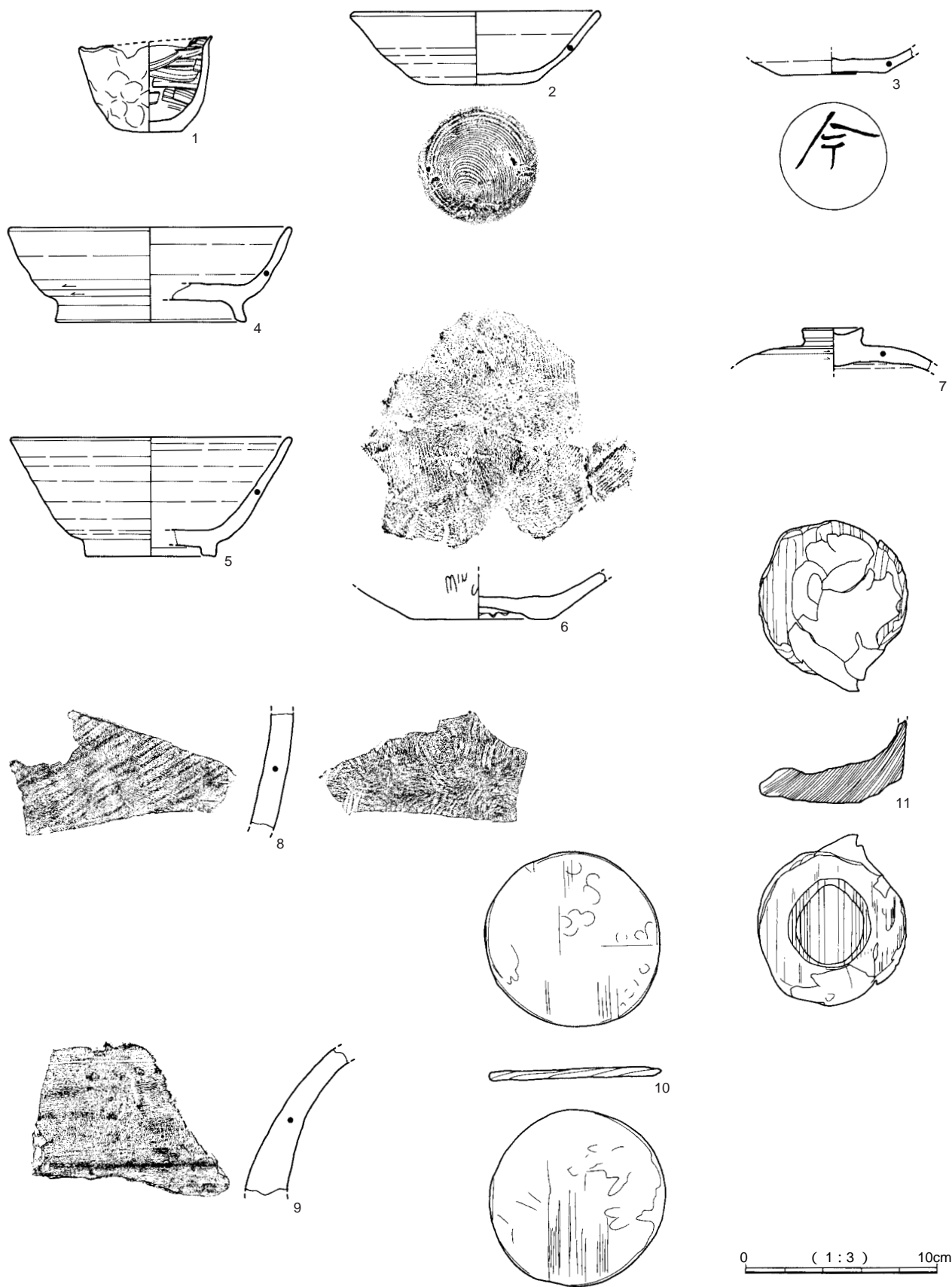
92 - 1は、E区北のS D 1198出土の高台坏で、内面が黒色処理されている。台の脚部は細い。92 - 3は、D区S D 1326出土の土師器壺の口縁部で、折り返しの複合口縁である。92 - 5は、D区S T 1305南東側のS P 1484出土の土師器甕口縁部でくの字に外反する。93 - 1は、B区南端のS K 213出土の手捏土器である。93 - 2は、B区S D 3出土の須恵器の坏である。93 - 3は、D区S D 1330出土の須恵器坏の底部で切り離しは回転糸切りで、「今」という墨書文字が確認される。93 - 4は、B区S D 191出土の須恵器の高台坏で、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、底径が大きく器高が低く箱型に近い形状を呈する。胎土中に海綿骨針が認められる。木製品は、2点を図化し得た。93 - 10は、S K 2017出土の曲物の底の円板である。93 - 11は、S D 194出土の容器で、外面に黒漆、内面に朱漆が施されている。柱状に削り出しを持つ高台付きで底径は4.5cmを測る。体部下半が厚く作り出されている口ク口整形が特徴である。

陶磁器は、3点を図化し得た。96 - 13は、S E 93出土の青磁の無文椀片で、口縁端がやや肥厚する。96 - 14は、肥前磁器の染付皿片で、見込に菊花と思われる文様が描かれている。96 - 15は、景德鎮窯の染付皿片で、両面に植物文と思われる文様が描かれている。

古銭は、寛永通宝4点、元豊通宝1点、一銭4点である。



第92図 その他の出土遺物（1）



第93図 その他の出土遺物(2)

8 縄文時代の遺物（第94・95図）

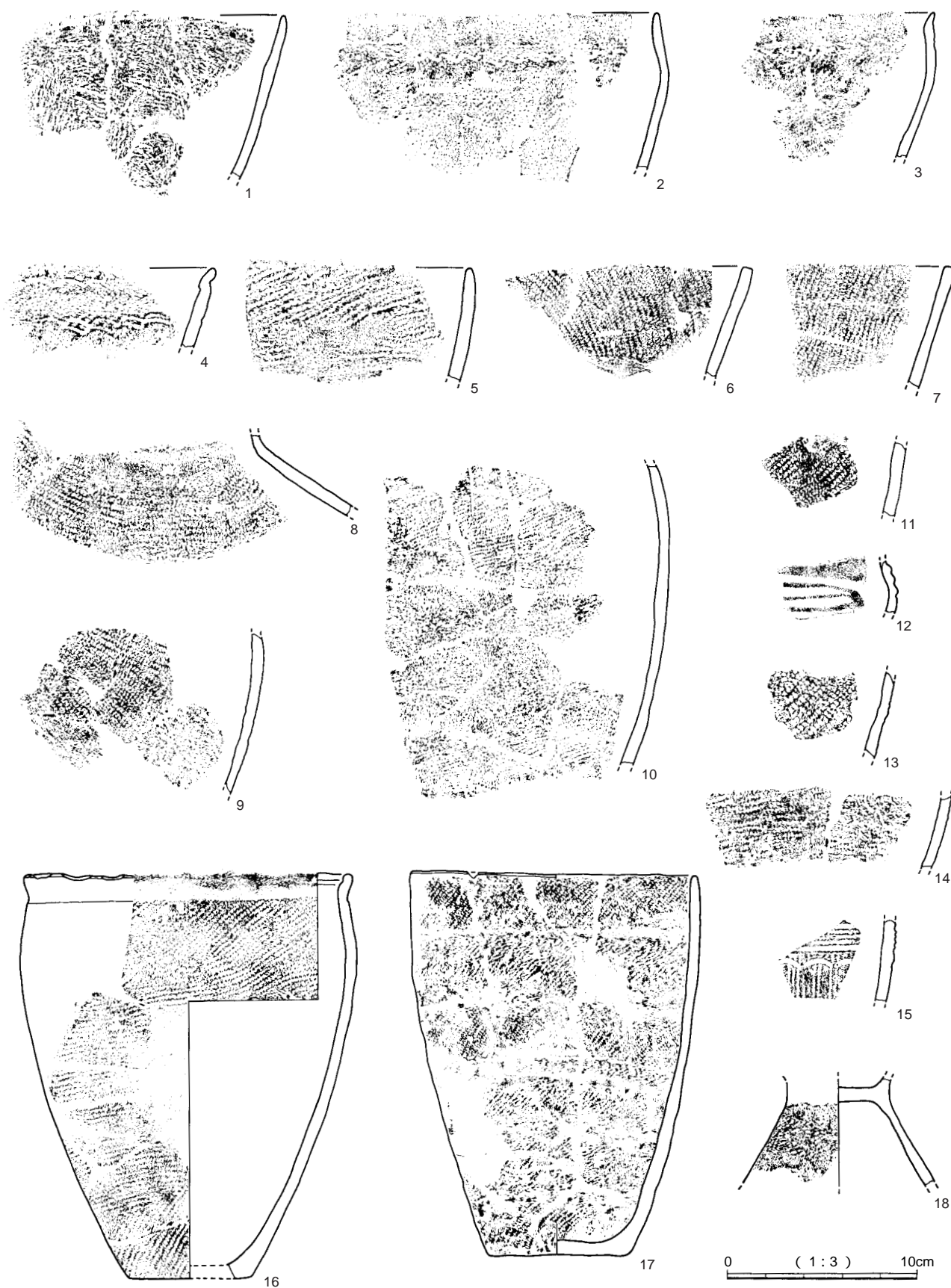
94 - 16は、E区13 - 23G出土の深鉢である。口端は小波状、頸部は幅広の無文体で粘土紐を貼り付けて上から押圧している。頸部と体部の境界には沈線が1条ひかれるがミガキにより段差が失われている。また、口内にも1条の沈線ひかれている。体部は内湾ぎみに立ち上がり、頸部で屈曲して幅広の無文体を持つ。体部上位に最大径を持つ。体部の地文は上位がLR横、中位以下がLR斜め右下である。底部は欠損しているが平底と思われる。内外面に煤が付着している。内面に棒状工具の跡が認められる。胎土は小砂礫と海綿骨針と石英を含む。

94 - 17は、C区SD171の14 - 13G覆土出土の深鉢である。砲弾型で口縁部がやや内湾する。口縁部に最大径を持つ。口縁部は口端に押圧なく、平縁で無文体はなく口縁直下まで地文が施されている。地文はLR横位回転と撚糸を上下交互に施している。底部の直上は張り出さずにそのまま立ちあがる。底部は平底で圧痕が認められる。胎土は、小砂礫と海綿骨針を多量に含み、金雲母と石英を含む。焼成は良好である。

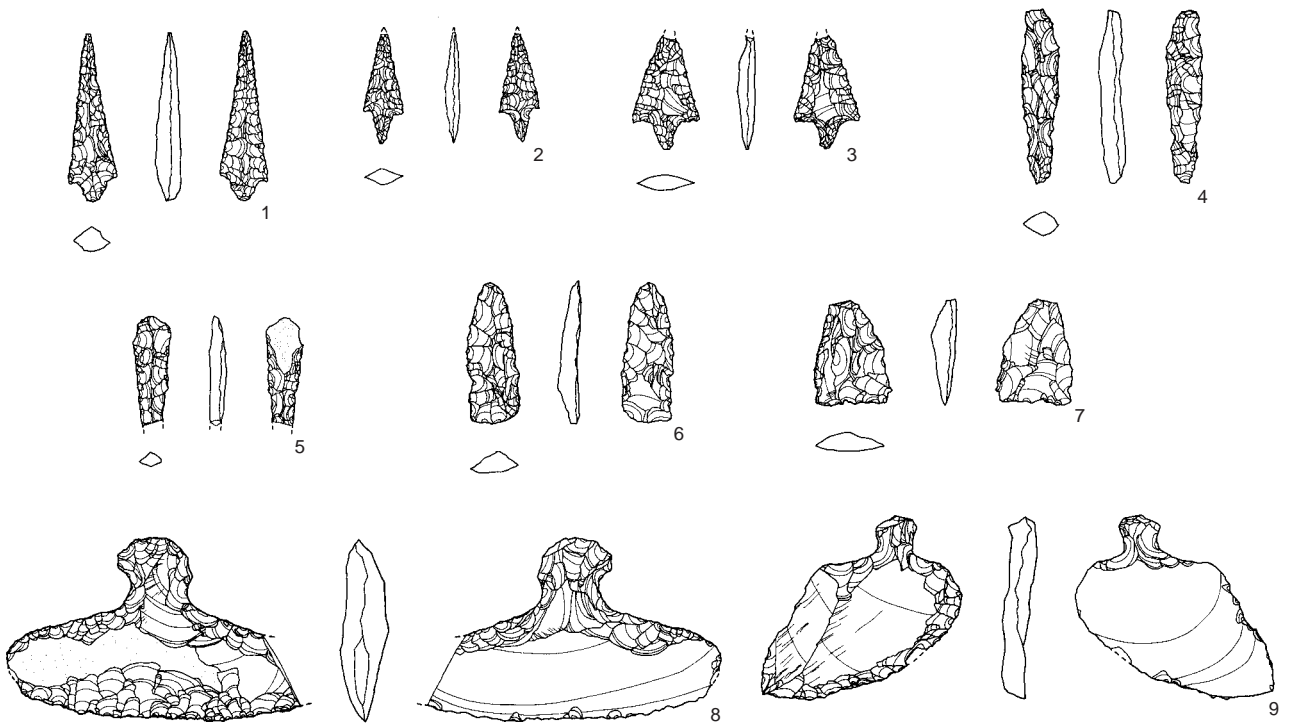
94 - 3は、頸部でくびれて幅広の無文体を持つ深鉢の小波状の口縁部である。頸部から下には結節を持つLR横の地文が認められる。94 - 1は、砲弾型の粗製深鉢の破片。撚糸Lを横と斜め右下に交互に施し、羽状縄文にやや似ている。内外から口端が指で押圧されている。94 - 4は、粗製壺か深鉢の破片である。口端の作り出しは、内側からつけている。頸部で一旦くびれて短い丸棒状の口縁部を持つ。地文は結節を持つLRで、附加縄文の可能性もある。94 - 6は、頸部でくびれて外に広い粗製深鉢の破片である。口縁部は平縁で、口端および口縁直下にRL横の地文が見られ、頸部に無文体が確認できる。94 - 12は、浅鉢頸部の破片である。4条の平行沈線によって文様を描いている。左端に匹字状彫去に似た文様が見られるが欠損のため不明である。94 - 7は、平縁で、口端がていねいに調整され、口端直下からLR横地文が始まる。94 - 5は、やや小波状の平縁の口縁部片で、口縁直下までLR斜め右下の地文が認められる。SG1156から出土した94 - 15は、異系統の甕の体部の土器片である。沈線の上に3本のR側面圧痕が施され、沈線の下には連弧文が見られ下位はRLの縦位施文が施されている。胎土は砂粒が多く石英を含む。焼成は良好で黒色を呈し、表面に煤が付着している。

石器は、石鏃3点、石錐2点、石匙2点を図化し得た。石鏃は、いずれも基部を持ち、95 - 1と95 - 2は、稜線が明確でていねいな作りである。95 - 2は長く厚みがある。95 - 3は稜線がない平らな形状である。石錐95 - 5は、先端部が欠損しているが、側面が直線的で稜線も明瞭で作りがていねいである。石匙95 - 8は、横長でつまみ部の作り出しが大きい。片面に調整が施され、刃部に使用痕と思われる光沢を有する。

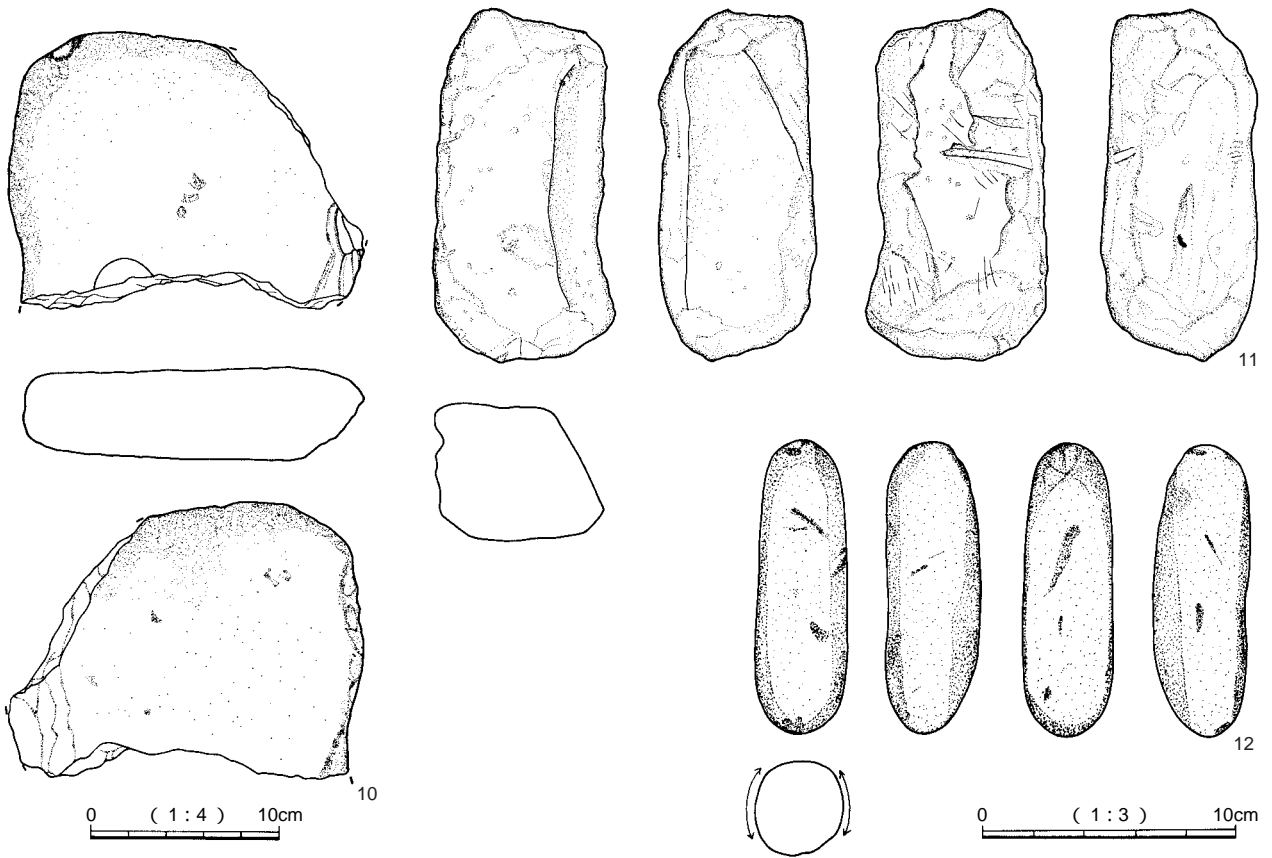
石製品は、管玉2点、砥石1点、石製模造品1点を図化し得た。SG1出土の管玉(96 - 3)は、丸みがかった三角に近い円形で、ガラス性の透き通った青色をする。SG1155出土の管玉(96 - 2)は、孔が途中までで作りかけの未製品である。SG1301出土の砥石(96 - 1)は、全ての面を使用した痕跡が見られる。SG1155出土の石製模造品(96 - 4)は、穿孔が2箇所ある。



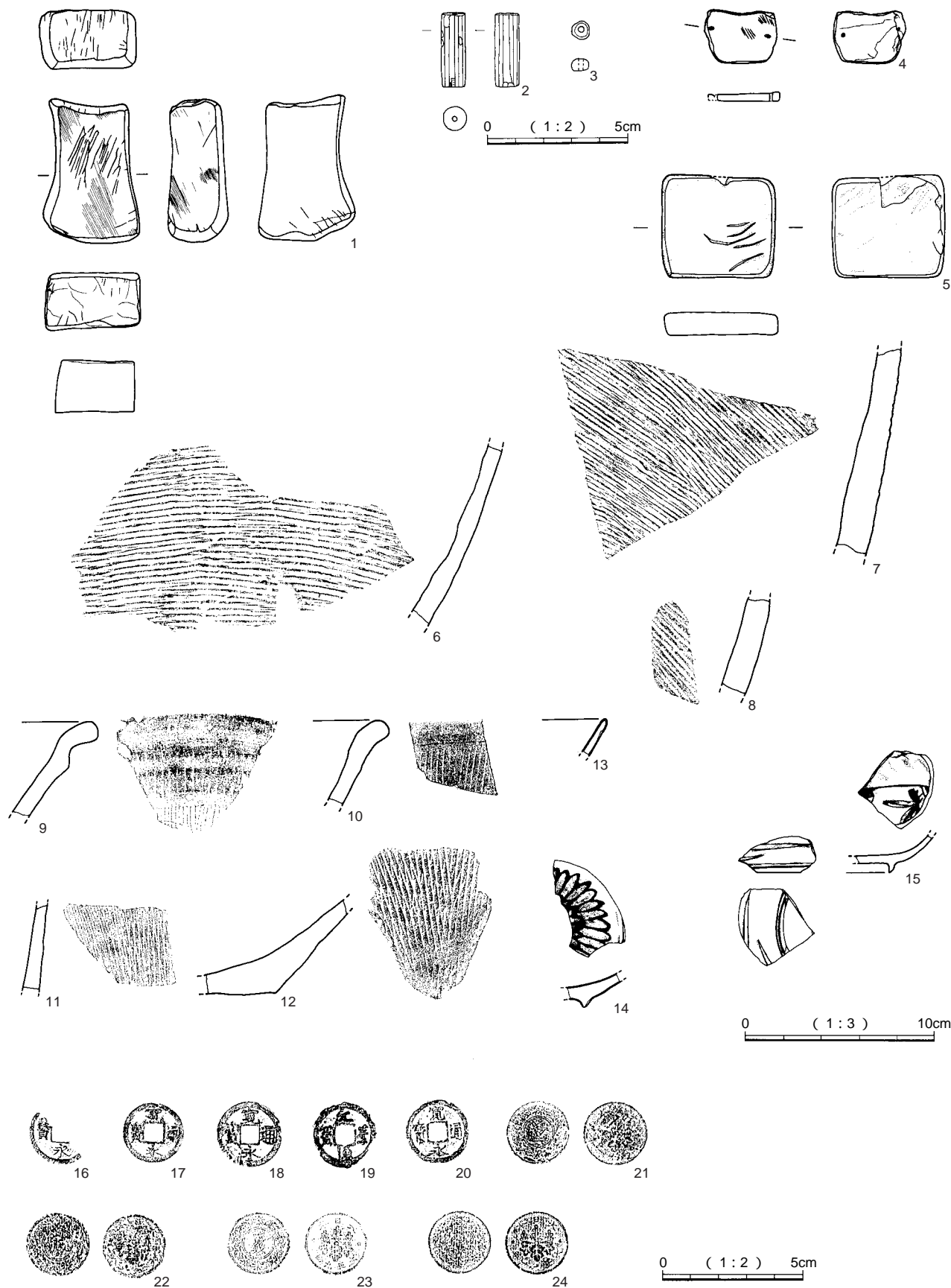
第94図 縄文時代の出土遺物(1)



0 (1 : 2) 10cm



第95図 縄文時代の出土遺物(2)



第96図 石製品・陶磁器・古銭

表3 遺物観察表(1)

挿図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	計測値(mm)				底部切離	調整技法		出土地	備考	
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面			
3図	1	32 5	土師器	壺	200		(57)	10		ハケ目、ヨコナデ	ハケ目、ナデ	S T 169		
	2		土師器	壺		32	(28)	8		ハケ目	ハケ目			S K 170
4図	1	37 13 10	土師器	壺	60	30	6.6	5.5				S T 178		
	2		土師器	壺			(66)	6.5		ハケ目、ナデ				
5図	1		土師器	高坏			(96)	29		ミガキ		S T 184	R P 64、脚部のみ	
6図	1		土師器	甗	(176)		(28)	10		横ナデ	横ナデ	S T 188		
	2		土師器	壺			(55)	23.5						
	3	33 1	土師器	壺				10		ナデ				R P 65、頸部のみ
10図	1		土師器	甗			(57)	5		ハケ目、横ナデ	ハケ目	S T 1002	R P 73	
	2		土師器	甗			(48)	5		ハケ目、横ナデ	ハケ目、横ナデ			
	3	25 12 4	土師器	鉢		35	(34)	6		ミガキ	ハケ目、ヘラナデ			R P 66
	4	28 1	土師器	鉢	141	42	100	6		ミガキ、ケズリ	ヘラナデ			S K 1115、R P 71輪積痕
	5	34 7	土師器	甗	195	50	111	6		ハケ目	ハケ目			S K 1109、R P 69指頭圧痕
11図	1		土師器	甗		48	(34)	6		ミガキ	ヘラナデ	S T 1005		
12図	1	26 4	土師器	高坏	179		(59)	4				S T 1015	E P 1122、R P 74	
	2	26 5	土師器	高坏				5		ミガキ	ミガキ			E K 1119、R P 75
15図	1	25 1	土師器	坏	144	60	64	4.5		ケズリ、横ナデ	ミガキ、ナデ	S T 1018	R P 99	
	2		土師器	坏	(143)	(50)	40	5.5		ケズリ、横ナデ	ミガキ			R P 100、外面煤付着
	3		土師器	坏	(144)		(52)	4.5		横ナデ	ナデ			R P 83
	4	29 4	土師器	甗	105	64	120	5		ケズリ、ハケ目、横ナデ	ヘラナデ			R P 83
	5	29 5	土師器	甗	121	48	116	7		ナデ	ハケ目、横ナデ、ヘラナデ			R P 84
	6	29 3	土師器	甗	(144)	50	217	6		ハケ目、横ナデ	ヘラナデ			R P 85、輪積痕
16図	1	29 6	土師器	甗	139	60	156	5		ハケ目、横ナデ	ハケ目、横ナデ、ヘラナデ		R P 97	
	2	30 2	土師器	甗	(139)		(154)	7		ハケ目、横ナデ	ハケ目、ナデ		R P 83	
	3	30 3	土師器	甗	155		(159)	7		ハケ目、横ナデ	ハケ目、横ナデ、ヘラナデ		R P 87	
	4	32 1	土師器	甗	(223)		(130)	6		ハケ目、横ナデ	ハケ目、ヘラナデ		R P 89	
	5		土師器	甗	(256)		39	9		ハケ目、横ナデ	ハケ目		R P 84	
	6	25 12 3	土師器	甗		71	(68)	7		ハケ目	ハケ目			
	7	34 5	土師器	壺		68	(142)	9		ハケ目、ミガキ	ハケ目、ミガキ		R P 90	
17図	1		土師器	甗			(40)	6		ハケ目	ハケ目	S T 1020		
	2	32 6	土師器	甗	195		38.5	6.5						R P 98、指頭圧痕
	3	27 1	土師器	高坏			(101)	6.5		ミガキ	ヘラナデ			R P 80
	4	37 6	土師器	甗		76	(39)	6.5	ヘラ切					S X 1014
	5	36 7 2	土師器	埴		32	20	4.5		ケズリ	ミガキ			E D 1134
	6	37 7	土師器	甗		74	(68)	3		ケズリ	ヘラナデ			R P 80
18図	1		土師器	甗	(184)		(41)	7		ハケ目、横ナデ	ハケ目、横ナデ	S T 1021	S K 1135	
	2		土師器	高坏			(103)	28		ミガキ	ハケ目			S K 1135、脚部のみ
	3		土師器	鉢		25	15	9						
	4	28 8	土師器	甗	(145)	(53)	45	6		ハケ目、ケズリ	ハケ目			
	5	37 13 1	土師器	手捏	(69)	26	29.5	4.5		ナデ				
	6	36 7 7	土師器	壺		70	(20)	6.5		ミガキ				S K 1136
	7		土師器	甗		68	(23)	10		ナデ	ハケ目			S K 1136
	8	36 7 5	土師器	甗		70	(14)	10	ヘラケズリ	ケズリ	ナデ			S K 1135
	9	33 6 3	土師器	壺			(62)			ハケ目、ナデ	ナデ		S T 1022	
19図	1	26 6	土師器	高坏		153	(43)	7		ミガキ、ナデ	ミガキ	S T 1025	R P 115	
	2		土師器	甗			(42)	7.5		ハケ目		S T 1024		
	3		土師器	壺			(32)	9		ハケ目、ナデ				
24図	1	25 2	土師器	坏	130	50	59	6.0		ケズリ、ナデ	ミガキ	S T 1030	R P 101、内面に煤付着	
	2	28 4	土師器	埴		4	(86)	8		ミガキ	ヘラナデ			R P 102
	3	27 6	土師器	甗	165	51	137	7.5		ケズリ、ハケ目	ハケ目、ヘラナデ			S K 1152、R P 116輪積痕
	4	37 1	土師器	甗		(61)	(49)	7		ケズリ	ハケ目			R P 112

表4 遺物観察表(2)

挿図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	計測値(mm)				底部切離	調整技法		出土地	備考
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面		
25図	5		土師器	高坏		102	(84)	11		ミガキ	ナデ	S T 1305	R P 103
	1		土師器	甗			(47)	7		ハケ目、ナデ	ハケ目		R P 114
	2		土師器	甗				6.5		ハケ目、ナデ	ヘラナデ		R P 110、S K 1152
	3	30 4	土師器	甗		82	(320)	8	ヘラ切り	ハケ目、ミガキ	ハケ目		R P 114、底部木葉痕
	4	37 2	土師器	甗		73				ハケ目	ハケ目		R P 108
	5		土師器	甗			(169)	7		ハケ目	ハケ目		R P 117、S K 1152
	6	35 1	土師器	甗		84	(200)	9	ヘラ切り	ハケ目	ハケ目		R P 104、輪積痕
28図	1		土師器	坏			(41)	5.5		ミガキ、ナデ		S T 1305	R P 195
	2	27 2	土師器	高坏	(130)		(99)	8		ケズリ、ナデ	ハケ目、ナデ		R P 195
	3	30 6	土師器	甗	(190)		(178)	8		ハケ目、ナデ	ハケ目、ミガキ		R P 196
	4	34 1	土師器	壺	150		(84)	8		ハケ目、ミガキ			R P 194、輪積痕
	5		土師器	高坏			(28)	8		ハケ目、ミガキ			輪積痕
29図	1		土師器	甗				6.5		ハケ目	ハケ目	S T 1308	E K 1597
	2		土師器	甗			(33)	6		ナデ	ハケ目		
	3		土師器	甗				6		ハケ目	ハケ目		E K 1597
30図	1	25 12 2	土師器	壺		63	(30)	5				S T 1312	R P 180
	2	35 5	土師器	壺	174		(167)	5		ハケ目、ミガキ	ハケ目、ミガキ		R P 179底部ケズリ、ナデ
	3	37 11	土師器	壺		70	(66)	7		ケズリ、ハケ目、ミガキ	ハケ目		R P 179
53図	1		須恵器	甗				13		ロク口痕	ロク口痕	S E 136	
55図	1		土師器	甗	(150)		(68)	5		横ナデ		S D 2	R P 39
	2		土師器	鉢	(138)		(37)	3			ハケ目		
	3	28 2	土師器	鉢	(115)	30	94	45		ミガキ	ヘラナデ		
	4	37 13 6	土師器	手捏		22	(49)	5			ヘラナデ		
	5	36 6 3	土師器	壺		55	(18)	6		ヘラナデ	ハケ目		
	6	36 6 1	土師器	甗		(74)	(18)	5					
	7	36 6 4	土師器	甗		78	(15)	8.5		ナデ	ナデ		
	8	36 6 2	土師器	壺		(75)	(25)	8					
	9	36 6 6	土師器	壺		65	(25)	7.5		ナデ	ナデ		底部ハケ目調整
	10	33 7 3	土師器	壺	(160)		48	10					R P 46
	11	29 2	土師器	壺	(146)		(139)	5		ハケ目	ハケ目		R P 38
	12	36 6 5	土師器	甗		54	(25)	4		ヘラナデ	ハケ目		
57図	1	38 1	須恵器	坏	131	86	37	5	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕	S D 1040	R P 95、火だすき
	2	38 2	須恵器	坏	128	80	43	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		R P 94
	3	35 3	土師器	甗		76	(80)	6.5		ロク口痕	ロク口痕		R P 118
	4	25 3	土師器	坏	142	15	49	5.5					
	5		須恵器	坏	(140)	(88)	29	5.5	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		R P 93
	6		須恵器	坏	(140)	(88)	34	6	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		
	7	38 3	須恵器	高台坏	128		(40)	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		R P 96
	8	38 4	須恵器	坏	(140)	98	34	5	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		R P 92、墨書か
	9	41 10 2	須恵器	蓋	(160)		(22)	3.5		ケズリ	ロク口痕		
58図	1		須恵器	坏		(80)	(21)	3	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕	S D 1325	R P 204
	2	40 7	須恵器	坏	133	62	34	4.5	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 205
	3	38 5	須恵器	坏	(141)	(88)	29.5	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕	S D 1329	R P 201
	4	38 6	須恵器	坏		70	(27)	7	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 199
	5	38 7	須恵器	坏	(148)	78	42	6.5	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 200
	6	38 8	須恵器	坏	(142)	75	34	5	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 198
	7	38 9	須恵器	坏	(144)	82	37	7	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		
59図	1		須恵器	甗			(61)	8		ロク口痕、櫛描文			
	2		須恵器	甗				11.5		タタキ	アテ		
	3		須恵器	甗				16		タタキ	カキ目		
	4		須恵器	甗				16		タタキ	アテ、カキ目		
	5	31 1	土師器	甗	(117)	(78)	104	5.5	ヘラ切り	ロク口痕	ロク口痕	S D 1201	R P 153、154
	6	46 1	石製品	紡錘車	(外径)114(内径)30			21					R Q 159

表5 遺物観察表(3)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	種別	器種	計測値(mm)				底部切離	調整技法		出土地	備考	
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面			
61図	1	26 3 4	土師器	坏	(134)	(54)	(45)	3	回転系切	口ク口痕、ナデ	口ク口痕	S G 1 B 区	R P 59、体部墨書	
	2	25 4	土師器	坏	123	60	42	5		口ク口痕	口ク口痕		R P 60	
	3		須恵器	坏	(143)	(69)	34	4	回転系切	口ク口痕	口ク口痕		R P 57、底部墨書	
	4		土師器	高坏				6.5		ミガキ				
	5		土師器	高坏				10		ミガキ	ヘラナデ			
	6		土師器	高台坏		73	(29)	4.5	回転系切	口ク口痕	口ク口痕		R P 49	
	7		土師器	鉢	(118)		(63)	6		ハケ目	ミガキ		内面黒色処理	
	8		土師器	甗	(171)		(74)	4		ナデ	ヘラナデ			
	9	36 7 3	土師器	甗		(72)	(25)	5	回転系切					
	10	37 13 2	土師器	手捏	57	54	23						外内面指頭圧痕	
	11	33 10	土師器	甗				8.5			ハケ目		体部穿孔	
	12	33 6 6	土師器	甗	57		(73)	3		口ク口痕	口ク口痕			
	13	33 6 5	土師器	甗			(68)	4		口ク口痕	口ク口痕			
	14		木製品	容器	広葉樹	(最大長)75 (最大幅)63.5 (最大厚)10								
	15	44 3 2	木製品	部材		(最大長)86 (最大幅)54 (最大厚)25								
	16	45 4 2	木製品	容器	針葉樹	(最大長)200.5 (最大幅)84 (最大厚)11.5								R W 373
62図	1	45 8 3	木製品	部材	広葉樹	(最大長)240 (最大幅)62 (最大厚)26							2個の穿孔	
	2		木製品	部材	広葉樹	(最大長)263.5 (最大幅)64 (最大厚)66								
	3	45 5	木製品	田下駄	広葉樹	(最大長)119 (最大幅)136 (最大厚)27							方形の孔6カ所	
	4		木製品	部材	広葉樹	(最大長)191 (最大幅)47 (最大厚)40								
63図	1	44 4 1	木製品	織機	針葉樹	(最大長)87 (最大幅)40 (最大厚)32								
	2		木製品	織機	針葉樹	(最大長)263.5 (最大幅)21 (最大厚)14								
	3		木製品	部材	針葉樹	(最大長)112 (最大幅)18 (最大厚)37								
64図	1	44 1	木製品	道具	針葉樹	(最大長)81 (最大幅)9 (最大厚)104							R W 621	
	2	45 9 2	木製品	部材		(最大長)145 (最大幅)5 (最大厚)23								
	3	45 9 4	木製品	部材		(最大長)155 (最大幅)50.5 (最大厚)22.5								
65図	1		木製品	部材		(最大長)107 (最大幅)15 (最大厚)73								
	2		木製品	部材	広葉樹	(最大長)173 (最大幅)19 (最大厚)36								
	3	44 3 4	木製品	部材	針葉樹	(最大長)62 (最大幅)22 (最大厚)18							中央に穿孔	
67図	1		土師器	高坏			(48)	7			ミガキ、ナデ	S G 1 C 区	内面黒色処理	
	2	26 3 3	土師器	坏	(134)	58	46	4		口ク口痕	口ク口痕		R P 251	
	3	37 8	土師器	甗		54	(57)	3.5	回転系切				口縁部指頭圧痕	
	4		土師器	甗				5		ハケ目、ケズリ、ナデ	ハケ目		底部木葉痕	
	5		土師器	甗			(18)	6.5			ハケ目		外内面指頭圧痕	
	6	37 13 3	土師器	手捏	(46)	32	23	3.5					外内面指頭圧痕	
	7		土師器	手捏	(58)	(44)	27.5	5					外内面指頭圧痕	
	8	38 8	須恵器	坏	130	65	39	4.5	回転系切	口ク口痕	口ク口痕		R P 54	
	9	38 11	須恵器	坏	(146)	51	44	3	回転系切	口ク口痕	口ク口痕		R P 52、底部墨書	
	10	41 5	須恵器	高台坏	(130)	84	45.5	4	回転ヘラ切	口ク口痕	口ク口痕		R P 53、底部墨書	
	11		須恵器	坏	(140)	(55)	44	4	回転系切	口ク口痕	口ク口痕		R P 58	
	12		須恵器	坏	(136)	(74)	32.5	4.5	回転ヘラ切	口ク口痕	口ク口痕		R P 55、火だすき	
	13	42 3	須恵器	甗		(120)	(71)	10		ケズリ				
	14		木製品	部材	広葉樹	(最大長)103 (最大幅)41 (最大厚)30								
	15		木製品	部材	広葉樹	(最大長)128 (最大幅)54 (最大厚)25								
	16		木製品			(最大長)64 (最大幅)22 (最大厚)11								71図 1と組、中央に穿孔
68図	1		木製品	容器	針葉樹	(最大長)151 (最大幅)84 (最大厚)3								
	2		木製品	容器底	針葉樹	(最大長)181 (最大幅)49.5 (最大厚)10							R W 370	
	3	44 4 4	木製品	織機	針葉樹	(最大長)140 (最大幅)10 (最大厚)10.5								
	4	45 4 3	木製品	祭祀用	針葉樹	(最大長)132 (最大幅)43 (最大厚)4								
	5	45 4 3	木製品		針葉樹	(最大長)221 (最大幅)69 (最大厚)29								
	6		木製品	部材	広葉樹	(最大長)190 (最大幅)65 (最大厚)47								
69図	1	45 7 1	木製品	部材	広葉樹	(最大長)186 (最大幅)42 (最大厚)28								
	2	45 7 2	木製品	部材	広葉樹	(最大長)210 (最大幅)65 (最大厚)36								

表6 遺物観察表(4)

挿図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	計測値(mm)				底部切離	調整技法		出土地	備考	
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面			
70図	3	45 7 3	木製品	部材	広葉樹	(最大長)43(最大幅)53(最大厚)50								
	4		木製品	部材	広葉樹	(最大長)414 5(最大幅)150(最大厚)23								
	1	45 6	木製品	部材		(最大長)324(最大幅)140(最大厚)66								
	2	44 3 5	木製品	部材	広葉樹	(最大長)30(最大幅)42(最大厚)40								
	3		木製品	部材		(最大長)1100(最大幅)74(最大厚)37								
71図	1	44 3 1	木製品	部材	針葉樹	(最大長)330(最大幅)63(最大厚)28								
	2		木製品	道具(柄)		(最大長)491(最大幅)38(最大厚)31								
	3	45 8 4	木製品	部材		(最大長)237(最大幅)64(最大厚)8								
	4	45 2	木製品	部材		(最大長)117(最大幅)90(最大厚)67								
72図	1	25 5	土師器	坏	(130)	54	53 5	3	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕	S G 1 C 区	R P 251	
	2	26 2	土師器	高台坏	(147)	58	65	3 5	回転糸切	ロク口痕	ミガキ		R P 248、内面黒色処理	
	3	31 2	土師器	甗	(150)	92	150	5	ヘラケズリ	横ナデ、ケズリ、ミガキ	ミガキ		R P 244、内面黒色処理	
	4	37 5	土師器	甗	88	55 5	5	(5)		ハケ目	ハケ目		底部木葉痕	
	5	38 12	須恵器	坏	(150)	56	42 5	4 5	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 248	
	6	39 1	須恵器	坏	147	59	41 5	4	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 245、底部外面墨書	
	7	39 2	須恵器	坏	138	46	42	3	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 246、底部外面墨書	
73図	1	39 3	須恵器	坏	(150)	55 5	46	4 5	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 248	
	2	39 4	須恵器	坏	(138)	60	36	4	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 247	
	3	39 5	須恵器	坏	(131)	55	45	3 5	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 247	
	4	39 6	須恵器	坏	128	48	40	3	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 247	
	5	39 7	須恵器	坏	(140)	54	35	4	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 247、底部外面墨書	
	6	39 6	須恵器	坏	(138)	42	47	4	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 247、体部外面墨書	
	7	39 9	須恵器	坏	(130)	52	41	4	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 247	
	8	39 10	須恵器	坏	(130)	42	39	3	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 247	
	9		須恵器	坏	(132)	42	39	4	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 247	
	10		須恵器	坏	(132)	45	40	3	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 247	
	11		須恵器	坏	(152)	62	42	3	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 247	
	12		須恵器	坏	(130)	54	36 5	4	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 247、体部外面墨書	
	13		須恵器	坏	(134)	(44)	38	3	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		R P 247	
	14		須恵器	壺		(98)	(43)	10		ロク口痕、ケズリ	ロク口痕			
	15	43 2	須恵器	壺		102	(135)	8 5		ケズリ、ナデ	ロク口痕			
75図	1	25 6	土師器	坏	(138)	70	50 5	5 5		ミガキ		S G 1155 D 区	R P 211	
	2	25 7	土師器	坏	(140)		63	5		ケズリ、ミガキ	ミガキ	S G 1155 E 区		
	3	26 1	土師器	高坏	146		(67)	6		横ナデ、ケズリ、ミガキ	横ナデ、ミガキ	S G 1155 D 区	R P 178	
	4	25 8	土師器	坏	138	75	53	4 5		ハケ目	横ナデ、ミガキ	S G 1155 E 区	R P 123	
	5		土師器	高坏	(205)		(55)	5				S G 1155 D 区		
	6	26 3 1	土師器	坏	(133)	54	38 5	4	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕			
	7		土師器	器台			(39)	7			ヘラナデ			
	8	26 11	土師器	器台			(63)	10			ヘラナデ			
	9		土師器	鉢		(80)	(38)	8						底部木葉痕
	10	27 3	土師器	高坏		(120)	(81)	8		ハケ目	ヘラナデ		R P 228、脚部に3穿孔	
	11		土師器	高坏			(35 5)	8		ハケ目	ハケ目			
	12	27 4	土師器	高坏		126	(67)	10			ヘラナデ			
	13	37 9	土師器	壺		50	(39)	5		ミガキ	ハケ目			
	14	28 3	土師器	鉢			(70)	(6)		ハケ目	ハケ目、ミガキ	S G 1155 B 区	R P 122	
	15	31 3	土師器	甗	(160)		(276)	8		ハケ目、横ナデ	ヘラナデ、横ナデ	S G 1155 D 区	R P 124	
	16	31 4	土師器	甗	(160)	50	206	5		ハケ目	ハケ目、ヘラナデ、横ナデ		R P 120	
76図	1	35 4	土師器	甗		65	(154)	6		ナデ、ハケ目	ハケ目	S G 1155 D 区		
	2	36 5	土師器	壺		98	(147)	6		ハケ目	ハケ目			
	3	29 1	土師器	鉢	(121)	44	122	4		ハケ目、横ナデ	ヘラナデ	S G 1155 E 区		
	4	37 10	土師器	壺		86	(60)	9		ヘラナデ	ヘラナデ	S G 1155 E 区		
	5	28 5	土師器	鉢		50	(65)	6		ハケ目	ヘラナデ	S G 1155 E 区		
	6	37 12	土師器	壺		44	(53)	5		ミガキ、ハケ目、ケズリ	ハケ目、ヘラナデ	S G 1155 D 区	R P 120、輪積痕	

表7 遺物観察表(5)

挿図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	計測値(mm)				底部切離	調整技法		出土地	備考
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面		
	7		土師器	壺		40	(44)	7		ハケ目	ハケ目		
	8	32 2	土師器	壺	(160)		(122)	7		ハケ目	ハケ目、ヘラナデ	S G 1155 E 区	
	9	34 2	土師器	壺	(150)		(92)	10		ケズリ、ミガキ、横ナデ、ハケ目	ミガキ、ハケ目	S G 1155 D 区	
	10	33 7 1	土師器	壺	(153)		(55)	6		ナデ		S G 1155 E 区	
77図	1	34 1	土師器	壺	162		(120)	5.5		ハケ目、指頭圧痕	ハケ目	S G 1155 D 区	R P 188、口唇部に刻目
	2	33 6 1	土師器	壺	(202)		(72)	11					
	3	33 4	土師器	甗	(172)		(127)	4.5		ハケ目	ナデ		R P 183
	4	34 6	土師器	壺		66	(88)	6.5		ハケ目	ハケ目	S G 1155 E 区	
	5		土師器	壺	(160)		(63)	7.5		横ナデ、ハケ目	ヘラナデ、ハケ目	S G 1155 E 区	
	6	35 6	土師器	壺	172		(177)	7				S G 1155 E 区	輪積痕
	7	25 11 3	土師器	壺		72	(187)	6.5				S G 1155 E 区	
	8	25 11 1	土師器	壺		70	(26)	7				S G 1155 E 区	
	9	25 11 5	土師器	壺		76	(33)	8		ナデ	横ナデ	S G 1155 D 区	
	10	25 11 2	土師器	壺		94	(26)	21		ナデ	ハケ目		
	11	25 11 4	土師器	壺		(78)	(26)	11		ヘラナデ	ヘラナデ		
	12	36 1	土師器	壺		88	(30.5)	11		ケズリ、ミガキ			
78図	1	34 8	土師器	壺	(99)	50	(127)	7		ケズリ	ヘラナデ	S G 1155 E 区	R P 123、底部ケズリ
	2	36 4	土師器	甗			(99)	8		ハケ目	ヘラナデ	S G 1155 E 区	R P 119、輪積痕
	3		土製品	羽口	(85)		(32.5)	8		ケズリ		S G 1155 D 区	
	4		土製品	羽口	(88)		(48)	11.5					外面指頭圧痕
	5		土製品	羽口	(32)		(68)	8.5					外面指頭圧痕
	6		土製品	羽口	(49)		(63)						
	7		土製品	羽口	(54)		(36)	13					外面指頭圧痕
	8		土製品	紡錘車		51	27						
	9		土製品	紡錘車			23						
	10	37 13 7	土師器	手捏	(60)		(35)	6		ハケ目	ヘラナデ		
	11	37 13 4	土師器	手捏			(34)	5				S G 1155 E 区	R P 151
	12	41 12 2	須恵器	坏	(141)	(94)	39	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕	S G 1155 D 区	
	13	39 11	須恵器	坏	(140)	(82)	31	3.5	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		
	14	41 12 3	須恵器	坏	(147)	(76)	48.5	3.5	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		
	15	41 12 5	須恵器	坏	(148)	(95)	31	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		
	16	41 12 8	須恵器	坏	(128)	90	29	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		
	17	41 12 1	須恵器	坏	(143)	(86)	29.5	4.5	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		
	18	41 12 6	須恵器	坏	(134)	(84)	29	4.5	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		
	19	41 12 4	須恵器	坏	(146)	(86)	34	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		
	20	41 4	須恵器	高台坏	(93.5)	(56)	49	5.5		ロク口痕	ロク口痕		R P 171
	21	42 7	須恵器	双耳坏	(104)	(60)	41	3.5	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		
79図	1	39 12	須恵器	坏	(143)	76	34.5	4.5	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		R P 210
	2	41 12 7	須恵器	坏		(80)	(36.5)	5	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		
	3		須恵器	甗				15		タタキ	カキ目		
	4		土師器	甗			(111)	6.5		ハケ目、ヨコナデ	ハケ目		
	5		土師器	甗				5		タタキ			
	6		須恵器	甗				16.5		タタキ	カキ目、アテ痕		
	7	35 2	土師器	甗		(68)	(119)	6.5		ハケ目	ハケ目	S G 1155 E 区	
	8		土師器	甗				9		ハケ目	ハケ目	S G 1155 D 区	
	9		土師器	甗				6.5		ハケ目	ハケ目		
80図	1		木製品	道具								S G 1155 E 区	形代、孔1ヶ所
	2		木製品	針葉樹	(最大長)130(最大幅)60(最大厚)12							S G 1155 E 区	7ヶ所1対の穿孔
	3		木製品	部材	広葉樹	(最大長)110(最大幅)100(最大厚)86						S G 1155 D 区	
	4	45 3 1	木製品	織機	針葉樹	(最大長)600(最大幅)21(最大厚)23						S G 1155 D 区	
	5	44 4 2	木製品	織機	針葉樹	(最大長)289(最大幅)21(最大厚)11						S G 1155 E 区	
81図	1		土師器	甗			(32)	7		ハケ目、横ナデ	ハケ目	S G 1156 F 区	
	2		土師器	甗			(33)	6		ハケ目	ハケ目	S G 1156 F 区	

表8 遺物観察表(6)

挿図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	計測値(mm)				底部切離	調整技法		出土地	備考	
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面			
	3		土師器	甗			(30)	7.5		ナデ、ハケ目	ハケ目	SG1156F区		
	4	32.7	土師器	壺	222		(82)	10		ハケ目、横ナデ	ヘラナデ、横ナデ			
	5	33.3	土師器	壺	(198)		(73)	8		ハケ目、ミガキ、横ナデ	ミガキ、横ナデ		RP212、輪積痕	
	6	32.8	土師器	壺				7		横ナデ	ハケ目、ナデ			
	7	25.9	土師器	坏	148		54	8	ヘラ切	ハケ目	ミガキ			
	8	25.12.1	土師器	埴		26	(54)	6		ハケ目、ケズリ	ヘラナデ	SG1156F区		
	9	36.2	土師器	壺		36	(89)	9		ケズリ、ミガキ	ヘラナデ	SG1156E区	外面朱彩	
	10	36.7.4	土師器	埴		45	(38)	6.5		ミガキ		SG1156F区		
	11	28.7	土師器	鉢	(98)	42	68	5		ハケ目	ハケ目			
	12		土師器	壺		64	(21)			ハケ目	ハケ目			
	13	37.13.9	土師器	手捏	63	16	53	3.5		ハケ目、ケズリ	ヘラナデ			
	14	37.13.5	土師器	埴			(49)	6			ナデ			
	15	27.5	土師器	器台	(47)	(57)	87	3		横ナデ	ミガキ	SG1156D区		
	16	26.7	土師器	高坏	(173)		(56.5)	9		ミガキ	ミガキ			
	17	26.8	土師器	高坏	146		(53)	5		ミガキ、横ナデ	ミガキ	SG1156F区	RP142	
	18		土師器	高坏				26		ミガキ	ミガキ(杯部)		脚部のみ内面黒色処理	
	19	26.9	土師器	高坏			(64)	8.5		ミガキ	ヘラナデ		脚部に5穿孔	
	20		土師器	高坏		(130)	(31)	5		ミガキ	ミガキ、ハケ目	SG1156F区		
	82図	1	33.2	土師器	甗	194		(55)	8		ハケ目、横ナデ	ハケ目	SG1156D区	
		2		土師器	甗	(232)		(40)	7		横ナデ	ハケ目		
3		32.4	土師器	甗	200		(162)	5		ハケ目、ナデ	ハケ目	SG1156F区		
4		32.3	土師器	甗	(166)		99	6.5		ハケ目、ナデ	ハケ目、ナデ	SG1156D区		
5		31.5	土師器	甗		64	(122)	5.5	ヘラ切	ハケ目	ヘラナデ			
6		36.3	土師器	壺				3.5		ミガキ、ヘラナデ	ヘラナデ	SG1156F区		
7		30.1	土師器	甗	158	(43)	165	7		ナデ、ハケ目	ハケ目、ヘラナデ	SG1156F区	内面炭化米粒付着	
8		33.8	土師器	壺	112		(75)	6		ナデ	ハケ目、ナデ	SG1156D区	輪積痕	
9			土師器	甗	(140)		(51)	8		ナデ、ハケ目	横ナデ		口唇部に刻目	
10			土師器	甗	194		(162)	5		ハケ目、ヨコナデ	ハケ目、ヘラナデ			
11		31.6	土師器	甗	(180)	54	175	7	ヘラ切	ハケ目、横ナデ、ヘラナデ	ハケ目、横ナデ、ヘラナデ			
84図	1	41.10.3	須恵器	蓋	(130)		(25)	5.5		ロク口痕	ロク口痕	SG1301	硯に転用か	
	2	41.10.1	須恵器	蓋			(20)	6		ロク口痕	ロク口痕			
	3	40.10	須恵器	坏	(142)	(80)	34	5	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP216	
	4	40.11	須恵器	坏	(140)	75	31	6	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP217	
	5	40.12	須恵器	坏	(148)	(72)	39	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP162	
	6	41.1	須恵器	坏	150	90	37	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP224	
	7	41.2	須恵器	坏	144	82	31	4.5	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP149	
	8		須恵器	坏	148	90	31.5	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP167	
	9	41.3	須恵器	坏	(134)	(80)	(31)	3	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP167	
	10	40.1	須恵器	坏	140	80	31.5	3	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP187、墨書	
	11	40.2	須恵器	坏	150	75	38	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP213	
	12	40.3	須恵器	坏	(152)	75	44	5	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕			
	13	40.4	須恵器	坏	(144)	70	39.5	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP166	
	14	40.5	須恵器	坏	(148)	78	37	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP221、墨書「位」	
	15	40.6	須恵器	坏	140	71	43	5.5	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP216、墨書	
	16	40.8	須恵器	坏	140	78	33	3.5	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		RP190	
	17	40.9	須恵器	坏	142	62	39	4.5	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		RP189、墨書「主」	
	18		須恵器	坏		(78)	(7)	5.5	回転糸切				墨書	
85図	1	25.10	土師器	坏	129	72	47	7		ハケ目	ハケ目		RP219	
	2	26.3.2	土師器	坏	(142)	69	39	5	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		RP167	
	3		土師器	甗		(78)	(29)	6	回転糸切	ロク口痕			RP214	
	4	26.10	土師器	高坏			(98)	6		ミガキ				
	5	28.6	土師器	鉢	141	80	67	5.5	ヘラケズリ	ケズリ、ヨコナデ	ミガキ		RP156、内面黒色処理	
	6	37.3	土師器	甗		99	(61)	10			ヘラナデ		RP218	

表9 遺物観察表(7)

挿図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	計測値(mm)				底部切離	調整技法		出土地	備考	
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面			
	7	33 4	土師器	甗	(265)		(90)	6.5		ハケ目、ヨコナデ	ハケ目、ヨコナデ		RP169	
	8	37 4	土師器	甗		(113)	(97)	6	ヘラケズリ	ケズリ、ハケ目	ケズリ		RP215	
	9	42 6	須恵器	双耳坏	106			4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP149	
	10	41 9	須恵器	高台坏	(110)	65	(50)	4	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕			
	11	41 6	須恵器	高台坏	(110)	(65)	(44)	4	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		RP164	
	12	41 7	須恵器	高台坏	144	90	55	6	回転ヘラ切	ロク口痕	ロク口痕		RP176	
	13	42 4	須恵器	高台坏	(158)	(71)	64.5	6	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		RP173	
	14	36 7 9	土師器	甗			86	(32)	8			ロク口痕、ナデ		
	15	42 2	須恵器	高台坏	140	70	65	4	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		RP222	
	16	42 1	須恵器	高台坏	142	86.5	70	4	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕		RP163	
	17	36 7 1	土師器	甗		(76)	(33)	4.5		ハケ目	ナデ		RP155、底部網代痕	
	86図	1		須恵器	甗				15		タタキ	アテ痕、カキ目		
		2		須恵器	甗			(36)	7		ロク口痕、櫛描文	ロク口痕		
		3		須恵器	甗				8		タタキ	アテ痕		
		4	43 1	須恵器	壺	(91)		(164)	9		ロク口痕、ケズリ	ロク口痕、カキ目		
		5	42 5	須恵器	甗	(192)		(226)	7		タタキ、ロク口痕	アテ痕、ロク口痕		RP149
	87図	1	43 3	須恵器	大甗	606		(808)	15		ロク口痕、タタキ	ロク口痕、アテ痕		RP149、口縁部櫛描文
2		45 4 1	木製品	曲物	針葉樹	(最大長)184		(最大厚)9					底板	
3			木製品	容器	針葉樹	(最大長)125	(最大幅)60	(最大厚)15						
88図	1		木製品	網代		(最大長)242	(最大幅)163							
	2	44 5	木製品	網代		(最大長)231	(最大幅)223							
	3		木製品	網代		(最大長)117	(最大幅)89	(最大厚)13						
	4		木製品	祭祀用	針葉樹	(最大長)252	(最大幅)92	(最大厚)6.5						
89図	1	44 6	木製品	曲物		(口径)346	(底径)344	(高さ)80	(厚さ)3.5				側板、樹皮留具2ヶ所	
	2		木製品	曲物		(口径)169	(底径)175	(高さ)69.5	(厚さ)3				木釘5、樹皮留具3ヶ所	
90図	1		木製品	容器	広葉樹	(最大長)283	(最大幅)78	(最大厚)9					樹皮留具3ヶ所、穿孔4ヶ所	
	2	45 3	木製品	道具	針葉樹	(最大長)225	(最大幅)90	(最大厚)12					田下駄転用、孔5ヶ所	
	3		木製品	容器	針葉樹	(最大長)270	(最大幅)52	(最大厚)6					樹皮留具3ヶ所、穿孔4ヶ所	
	4	44 2	木製品	容器	針葉樹	(最大長)329	(最大幅)170	(最大厚)15					24ヶ所穿孔	
	5		木製品	祭祀用	針葉樹	(最大長)82	(最大幅)35	(最大厚)8					樹皮留具1ヶ所	
92図	1		土師器	高台坏		(62)	23	6			ミガキ	SD1198		
	2		土師器	甗				15				XO	底部網代痕	
	3	33 7 2	土師器	壺	(210)		(66)	7.5		ハケ目	ミガキ、ハケ目	SD1326		
	4	36 6 2	土師器	壺		94	32	8		ナデ	ナデ	13 23		
	5	36 7 8	土師器	甗	(160)		(57)	5.5		ハケ目	ハケ目	SP1484	RP197	
	6		土師器	甗				8.5		ハケ目、横ナデ	ハケ目	16 18		
93図	1	37 13 8	土師器	手捏	(70)	33	50	4		指頭圧痕	ハケ目、ヘラナデ	SK213	RP35	
	2		須恵器	坏	(131)	56	39	3.5	回転糸切	ロク口痕	ロク口痕	SD5		
	3		須恵器	坏		56	(22)	4.5	回転糸切			SD1330	墨書「今」	
	4	41 8	須恵器	高台坏	(149)	100	50	6	回転ヘラ切	ロク口痕、ケズリ	ロク口痕	SD191		
	5	41 11	須恵器	高台坏	(147)	(70)	63	5.5		ロク口痕	ロク口痕	SD11	RP 5	
	6	36 7 6	土師器	壺		(74)	24	6			ハケ目	23 14		
	7	41 10 4	須恵器	蓋			(23)	7		ロク口痕、ケズリ	ロク口痕	21 9		
	8		須恵器	甗				11.5		タタキ	アテ痕	SD11		
	9		須恵器	甗				12.5		カキ目、ロク口痕	アテ、カキ目、ロク口痕	SD11	RP12	
	10		木製品	容器	針葉樹	(最大長)92	(最大幅)92	(最大厚)4.5					SK2017	
	11	45 1	木製品	容器(漆椀)			(最大幅)42	(最大厚)7.5					SD194	
94図	1		縄文土器	鉢			(85)	5			擦糸L横+右下	13 23、E区		
	2		縄文土器	深鉢			(82)	5		口:小波状、頸:無文	結節LR横	13 23、E区		
	3		縄文土器	深鉢			(76)	4.5		口:小波状、頸:無文	結節LR横	13 23、E区		
	4		縄文土器	壺			(42)	6.5			結節LR	SG1301		
	5		縄文土器	深鉢			(60)	7		口:平縁	LR斜め右下	SD1040、B区		
	6		縄文土器	深鉢			(58)	6		口:平縁、頸:無文	RL横	SD1155、D区		

表10 遺物観察表(8)

挿図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	計測値(mm)				底部切離	調整技法		出土地	備考
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面		
	7		縄文土器	深鉢			(63)	6		口:平縁	LR 横	D 区、XO	
	8		縄文土器	壺				6			LR 右下	ST1026	
	9		縄文土器	深鉢				6			LR 斜め右下	ST1161	
	10		縄文土器	深鉢				5.5			L 横 + 右下	SD1175	
	11		縄文土器	深鉢				6			LR 斜め右下	ST1024	
	12		縄文土器	浅鉢				5		平行沈線		SG1301	
	13		縄文土器	深鉢				5.5				D 区、XO	
	14		縄文土器	深鉢				6			結節 LR 斜め右下	ST1161	
	15		縄文土器	甗				6.5		連弧文 + 縦位施文	R + RL	SG1156、F 区	
	16	42 8	縄文土器	深鉢	(174)	65	(214)	6		口:小波状・頸:無文	LR 横、LR 右下	13 23、E 区	
	17	42 9	縄文土器	深鉢	(150)	74	(205)	5			LR 横 + 燃糸	SD171、C 区	
	18		縄文土器	深鉢			(57)	5			燃糸 L 横	D 区、XO	台付
95図	1	46 4 6	石器	石鏃	頁岩	(最大長)4(最大幅)3(最大厚)6 4					(重さ)5g	SG 1	RQ241
	2	46 4 7	石器	石鏃	玉髓	(最大長)2(最大幅)10 (最大厚)4 2					(重さ)9g	C 区	RQ242、先端部欠損
	3	46 4 5	石器	石鏃	頁岩	(最大長)29 (最大幅)17 (最大厚)4 5					(重さ)1.9g	ST1023	先端部欠損
	4	46 4 9	石器	石錘	頁岩	(最大長)4(最大幅)9 (最大厚)6 2					(重さ)3.0g	SG1301	
	5	46 4 8	石器	石錘	頁岩	(最大長)2(最大幅)9 (最大厚)4 2					(重さ)1.1g	21 6、B 区	RQ63、尖頭部折損
	6	46 4 4	石器	石筥	頁岩	(最大長)3(最大幅)14(最大厚)5 3					(重さ)5g	SG1155E 区	
	7	46 4 3	石器	削器		(最大長)2(最大幅)2(最大厚)6 6					(重さ)2.9g	SG1155D 区	
	8	46 4 2	石器	石匙	頁岩	(最大長)4(最大幅)2(最大厚)8					(重さ)2.4g	SG 1	RQ250、一部欠損
	9	46 4 1	石器	石匙	頁岩	(最大長)4(最大幅)5(最大厚)6 3					(重さ)15.8g	21 6、B 区	RQ62、一部欠損
	10	46 2 2	石器	磨石		(最大長)14(最大幅)18(最大厚)49						SX32	
	11	46 2 1	石器	磨石		(最大長)11(最大幅)8(最大厚)37					(重さ)15.6g	SD11	
	12	46 5 3	石器	磨石		(最大長)13(最大幅)7(最大厚)54						SD1329	RQ207
96図	1	46 5 1	石製品	砥石	凝灰岩	(最大長)7(最大幅)5(最大厚)28						SG1301	
	2	46 3 1	石製品	管玉	碧玉	(最大長)26.1(最大幅)8 (最大厚)8 5					(重さ)3.6g	SG1155D 区	RQ208、穿孔途中
	3	46 3 2	石製品	管玉	ガラス?	(最大長)4 (最大幅)6					(重さ)5g	SG 1	RQ56
	4	46 16	石製品	板状石製品	粘板岩	(最大長)28(最大幅)8(最大厚)5					(重さ)7.8g	16 18、E 区	2 個の穿孔
	5	46 5 2	石製品	板状石製品		(最大長)54(最大幅)6(最大厚)13 2					(重さ)40.4g	C 区 XO	
	6		中世陶器	甗				8		タタキ		SD11	RP15
	7		中世陶器	甗				15.5		タタキ		SD11	RP13
	8		中世陶器	甗				13.5		タタキ		SD11	RP10
	9	46 6 1	中世陶器	播鉢			(49)	9				SD193	
	10		中世陶器	鉢			(44)	9		口ク口痕	口ク口痕	SD2060	
	11		中世陶器	播鉢			(45)	9		口ク口痕	卸し目	SG1156	
	12		中世陶器	播鉢			(48)	15		口ク口痕	口ク口痕	SD2062	
	13	46 6 2	青磁	椀			(19)	4				SE93	中国
	14	46 6 4	陶磁器	皿			(15)	6.7				20 32、F 区	備前
	15	46 6 3	陶磁器	皿			(19)	2.1				21 32、F 区	景德鎮
		遺物番号	銭種	計測値(mm)		初銭年	出土地	備考					
				径	厚さ								
96図	16	寛永通宝	22.5	0.6	寛永13年	21 2G、A 区							
	17	寛永通宝	21.5	0.9	寛永13年	XO							
	18	寛永通宝	23.5	1.1	寛永13年	XO							
	19	元豊通宝	23.5	0.8	北宗元豊元年	XO							
	20	寛永通宝	22.5	1.2	寛永13年	SG 1、C 区							
	21	一銭	22.5	0.9	大正10年	21 2G、A 区							
	22	一銭	22.5	1.0	大正10年	13 15G、E 区							
	23	一銭	22.0	1.0	大正10年	13 16G、E 区							
	24	一銭	22.5	0.9	大正10年	22 20G、D 区							

まとめ

蔵増押切遺跡は、古墳時代の住居跡群と奈良・平安時代の河川跡と中世の建物跡群・水田跡に分かれる複合遺跡である。

古墳時代の遺構は、B区を中心に竪穴住居跡39棟などが検出され、集落が南と北にそれぞれ東西に流れる河川SG1とSG1155とSG1301に挟まれるような形で、中州状の微高地に帯状に延びて営まれていたことがうかがえる。住居跡は、大きく火災にあった焼失住居とそれ以前の住居が重なり合って検出され、切り合い状況から3～5時期にわたって集落が営まれていたことが確認された。B区中央部SD191～194が切っている北側のST群で言えば、ST1003 ST1004またはST1005 ST1002またはST1006となるが、層がきわめて浅く遺物が少ないために集落構造と変遷の全体については明らかにできない。出土遺物から見ると大きく5つの時期が推定される。

SD191～193をはさんで、ST188出土とST197出土の遺物が接合した棒状浮文の複合口縁の壺の口縁部片、ST1022出土の甕の口唇部がつまみ出されて面どりされている口縁部片、壺の折り返し口縁部片は、4世紀前半のものと考えられる。その後の時期に考えられるのは、ST178高坏脚部、ST184高坏脚部、ST188壺口縁部、ST196壺口縁部、ST1015高坏脚部、ST1020壺口縁部・甕口縁部・小型埴底部・高坏脚部・甕口縁部、ST1021内SK1135高坏脚部、ST1312壺が、辻編年の3～4段階、または漆町編年11群に相当し、4世紀後葉と考えられる。次に、ST178小型壺・壺口縁部、ST188甕口縁部、ST1002鉢・甕、ST1025高坏脚部、ST1312壺底部は、5世紀前葉のものと考えられる。

焼失住居は、SG1155の南側に沿うように5棟（東からST1017、ST1018、ST1030、ST169、ST1161）と、SG1155とSG1301の間の微高地にあるST1305である。その中でも、大量の炭化物が充満して出土したST1018とST1030は、かまどがないのが特徴で、器種組成と形態は近い。土師器の坏には、内面に稜を有して外反するものと、口縁部下位に稜を有して直立するものがあり、高坏の脚部は短く八の字状にひらき、甕に長胴化の傾向が見えはじめる特徴は、三軒屋物見台遺跡のST11の器種の形状に比するので、『三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(2)』土師器坏変遷 期に対応し、5世紀末葉から6世紀はじめととらえたい。

ST1305は、基部の作り出しを地山の削り出しによったと思われるかまどを持つ。かまどから出土した坏の口縁部上位が稜を有して直立し、また高坏の形状が、短い棒状の脚部で坏部が中位で稜を有して外反する特徴から、ST1018・ST1030群の焼失住居と時期を異にして、6世紀中葉の時期ととらえたい。なお、その他にかまどが検出された住居跡はST180のみである。

竪穴住居跡の配置関係は、古墳時代前期の住居跡がブロック型に配置しており、また焼失住居跡は川跡に沿うように東西に移動していることがわかる。近辺では、山形市今塚遺跡で検出された川跡に沿う8棟の焼失家屋が古墳時代前期の竪穴住居跡の配置関係を示しており、2棟ずつ並ぶような形で配置されているが、本遺跡の焼失住居は1棟ずつ一列に並んで検出された。各棟の距離は今塚遺跡に近い。一集落の規模としては、周辺の西沼田遺跡や願正壇遺跡や山形市嶋遺跡をみても、同時に存在した住居は4～5軒程度であり、蔵増押切遺跡も検出状況から

同様の集落状況であったと推定される。住居跡の移動は、S D 1040の兩岸の低湿地が乾燥してくることと関係するのではないかと考えられる。低湿地の乾燥にともない住居跡が時期によって移動している事例としては、三軒屋物見台遺跡の住居跡がある。蔵増押切遺跡の焼失住居群は、西沼田・高嶺南・塚野目A・大清水的場などの古墳時代後期の天童市西部の後背湿地をひかえた微高地に散在する集落景観の一つをなしていたと想定することができる。

なお、S T 1019とS T 1020については、S T 1019のS D 1132が壁を支える溝で、S T 1020のS D 1134が排水の溝を構成する1棟の平地式住居の可能性も考えられる。平地式住居については、的場遺跡から古墳時代中期の平地式住居が2棟検出されているが、本遺跡のS T 1019とS T 1020については、今後の検討を要する。また、S T 1305の南側のS T 遺構面は削平されていたため不明であるが、S P 1484内出土の甕をみると4世紀後半のS Tであったと考えられる。その他の古墳時代の遺構としては、出土遺物からS D 2とS D 1326が4世紀中葉の遺構と考えられる。

奈良・平安時代の住居跡は検出されず、溝跡と河川跡からの遺物だけであるが周辺に集落が存在していた可能性がうかがえる。S Dからの出土遺物としては、S D 1325から8世紀前、S D 191から8世紀後半、S D 5とS D 1201から9世紀、S D 1198とS D 1330から9世紀後半の遺物がそれぞれ出土している。S D 1040の出土遺物は、5世紀南小泉式の土師器坏、8世紀末から9世紀の土師器鉢、8世紀第2四半期から第3四半期の須恵器坏にまとめられる。

S G 1は、9世紀後葉を中心に、8世紀・6世紀・4世紀後葉の土師器がわずかに混じり、須恵器坏は9世紀第3四半期の形状がまとまって出土した。また、河川の流れに対して約45度の角度でかけられたS G 1の木組遺構については、橋か洗い場かについては今後の検討を要する。上層部下のテフラは、915年の十和田火山の爆発にともなう火山灰十和田aで、同じテフラは西沼田遺跡のトレンチからも出土している(1994)。S G 1155は、4世紀中葉の土師器の壺、4世紀後葉の土師器の器台・高坏・甕・壺、5世紀後葉の土師器の壺、6世紀前半の土師器の高坏・壺・鉢・甕、8世紀前葉の土師器坏、9世紀後葉のろくろ使用坏が出土しているが、6世紀前半が主である。須恵器は8世紀第2四半期から9世紀第2四半期が主である。S G 1156は、4世紀前葉の土師器の甕・壺、4世紀中葉の土師器の高坏・鉢・壺、4世紀後葉の土師器の甕・器台・高坏・手捏・埴、5世紀前葉の土師器の壺、5世紀後葉の土師器の坏・壺、6世紀の土師器の甕が出土した。S G 1301は、4世紀後葉土師器の高坏、6世紀中葉の土師器の甕、8世紀中葉の土師器の坏・鉢・甕、9世紀後葉の土師器の坏・甕が出土した。河川跡からは木製品が多く出土したが、農具は少ないのが特徴である。

中世の遺構は掘立柱建物跡群と水田跡であるが、中でもS B 110は、建物の構造・規模と井戸跡と柵跡がともに出土していることから、成生荘とつながりのある有力者の屋敷跡ではないかと考えられる。今後の周辺の成生荘関連の調査の成果に期待したい。

縄文土器は、縄文時代晚期中葉から後葉にかけての土器であるが、その中でもS G 1156から出土した94図-15は、続縄文土器片と認められ、山形県内での出土例は少なく、岡ノ台遺跡に類例の土器片が出土している。

参考文献

- 天童市1981『天童市史上巻 原始・古代・中世編』
- 奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録 近畿古代篇』(奈良国立文化財研究所史料第27冊)
- 名和達朗他1985『西沼田遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第101集)
- 石川県埋蔵文化財センター1986『漆町遺跡』
- 阿部明彦1987『三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(2)』(山形県埋蔵文化財調査報告書第107集)
- 辻秀人1993「東北(南部) 東北南部の古墳出現期の様相」『日本考古学協会1993年新潟大会シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 須賀井新人他1994『今塚遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集)
- 名和達朗他1994『岡ノ台遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第15集)
- 天童市教育委員会1994『西沼田遺跡発掘調査概報』(天童市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集)
- 天童市教育委員会1995『西沼田遺跡関連発掘調査報告書』(天童市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集)
- 尾形與典他1996『下柳A遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第38集)
- 長野県埋蔵文化財センター1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15』(長野県埋蔵文化財センター発掘報告書25)
- 佐藤庄一他1998『平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集)
- 1998『東北中央自動車道相馬・尾花沢線関係予備調査報告書(1)』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第60集)
- 阿部明彦・水戸弘美1999「山形県の古代土器編年」(『第25回 古代城柵官衙遺跡検討会資料』)
- 天童市教育委員会1999『天童市西沼田遺跡第1次発掘調査概報』(天童市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集)
- 森谷昌央他2000『北柳1遺跡第2次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第76集)
- 佐藤庄一 2001「山形県における古墳時代の集落」(『山形県地域史研究26』山形県地域史研究協議会)
- 新潟県埋蔵文化財調査事業団2001『国営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 新保遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書 第103集)

報告書抄録

ふりがな	くらぞうおしきりいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	蔵増押切遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第112集							
編集者名	松田道雄・黒坂広美							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999 3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL023 672 5301							
発行年月日	2003年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くらぞうおしきりいせき 蔵増押切遺跡	やまがたけん 山形県 てんどうし 天童市 おおあざくらぞう 大字蔵増 あざおしきり 字押切	06210	平成9年 度登録	38度 21分 40秒	140度 20分 55秒	19970916 ~ 20000609	38,870	東北中央自動車道相馬・尾花沢線建設工事 (上山～東根間)
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
集落跡 水田跡	古墳 奈良・平安 ~ 中世	竪穴住居跡	39	土師器(坏、甕)		古墳時代の竪穴住居が重なりあって出土し、焼失住居が旧河川に沿って数棟検出された。 また、河川をはさんで中世の掘立柱建物跡群が重なって出土し、その中で長軸10.0m、短軸6.4mの総柱の建物が検出された。		
		掘立柱建物	26	須恵器(坏、甕)				
		柵列跡	1	木製品				
		井戸跡	4	中世陶器				
		土坑	3	縄文土器				
		溝跡	5	石製品				
		河川跡	4					
		水田跡	2	(総出土箱数: 50)				

圖 版



遺跡全景



遺跡全景空中写真

図版 2



面整理作業（東から）



表土除去作業（南から）



精査作業（南西から）



精査作業（北東から）



精査作業（南東から）



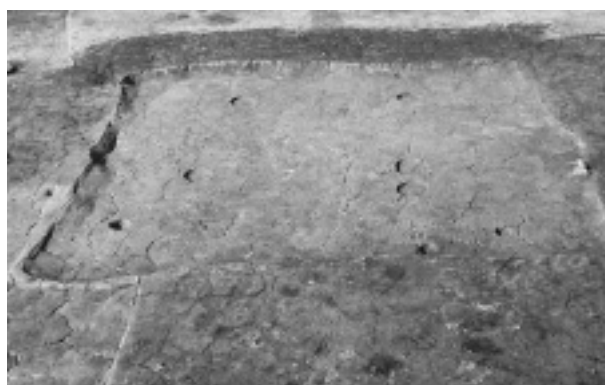
ST169全景（南から）



EL170検出状況（北東から）



SK177土層断面（東から）



ST184全景（南から）



ST185全景（南から）



RP64（ST184）出土状況（南から）



ST188全景（北西から）



RP65（ST188）出土状況（南から）

図版 4



ST197・198全景（西から）



ST199・200（南から）



ST1002・1003・1004全景（東から）



SK1109土層断面（西から）



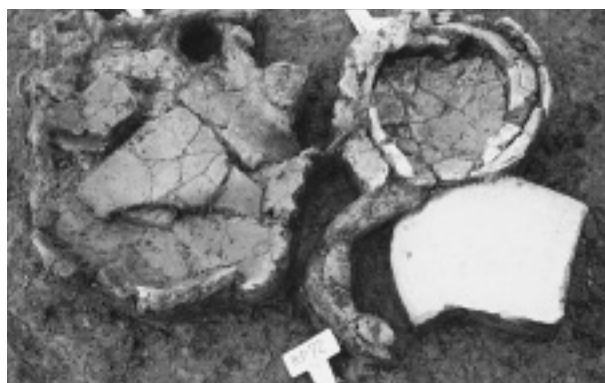
RP68・69・70（SK1109）出土状況（西から）



SK1109全景（南から）



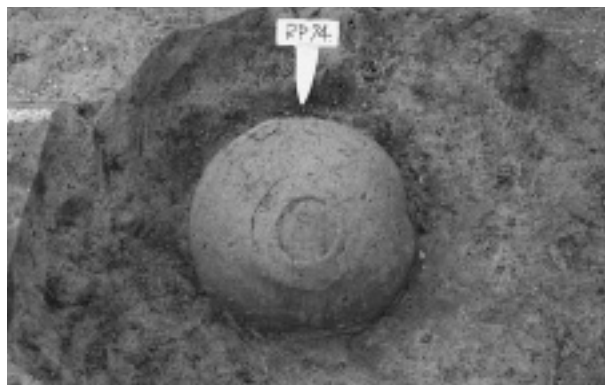
SK1115全景（南から）



RP71・72（SK1115）出土状況（南から）



ST1015全景（南から）



RP74（ST1015）出土状況（南東から）



EK1119（ST1015）土層断面（西から）



RP75・76（EK1119）出土状況（北から）



ST1015全景（西から）



ST1017全景（東から）



ST1161全景（南西から）



ST1308全景（東から）



ST1018土層断面（東から）



RP83～86（ST1018）出土状況（東から）



RP99（ST1018）出土状況（東から）



RP87・88（ST1018）出土状況（東から）



RP90（ST1018）出土状況（東から）



ST1018炭化材出土状況 (西から)



EK1147 (ST1018) 土層断面 (南から)



RP97 (ST1018) 出土状況 (南から)



RP84・85 (ST1018) 出土状況 (南から)



ST1018全景 (南東から)

図版 8



ST1019・1020検出状況（西から）



SX1014全景（南から）



RP80（ST1020）出土状況（西から）



RP91（SK1126）出土状況（北東から）



ST1018・1019・1020全景（南西から）



ST1030土層断面（南東から）



ST1030精査状況（西から）



RP102（ST1030）出土状況（南から）

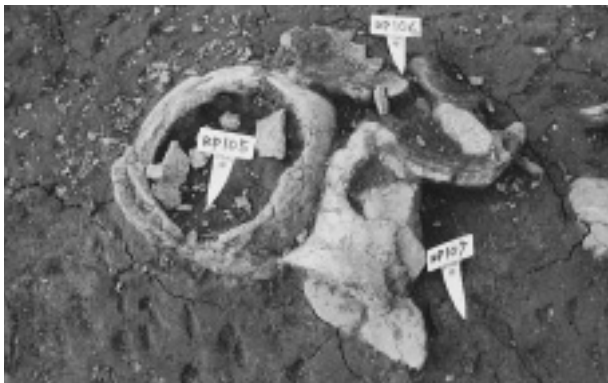


RP114（ST1030）出土状況（南から）

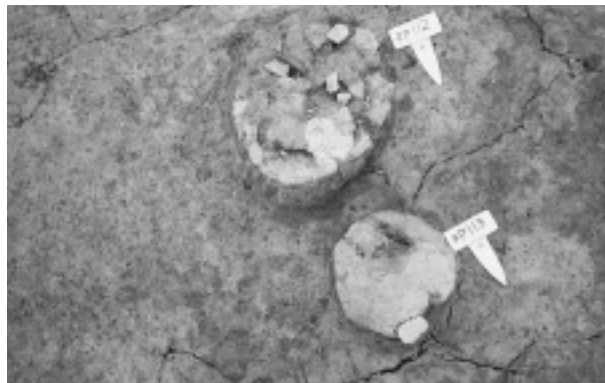


RP101（ST1030）出土状況（南から）

図版10



RP105 ~ 107 (ST1030) 出土状況 (南から)



RP112 ・ 113 (ST1030) 出土状況 (南から)



RP108 ・ 116 (ST1030) 出土状況 (南から)



ST1030全景 (西から)



SK1152 (ST1030) 土層断面 (南から)



ST1305精査状況（西から）



EL1579（ST1305）土層断面（北西から）



EL1575（ST1305）検出状況（北から）



RP195（ST1305）出土状況（南から）

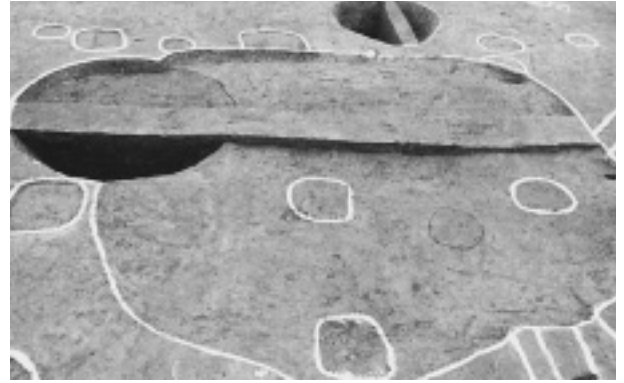


ST1305全景（西から）

図版12



SB 8 検出状況 (南から)



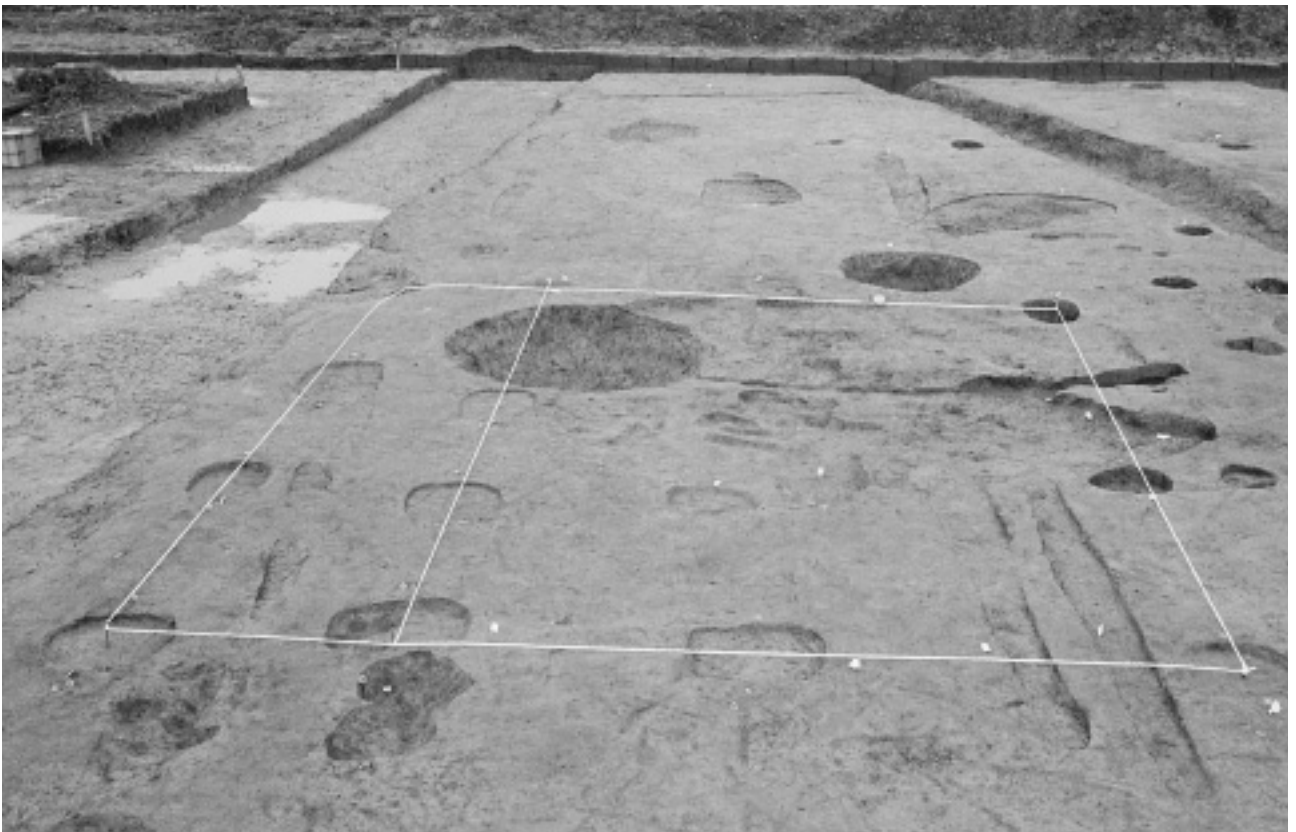
SX32・33検出状況 (南から)



SP40 (SB 8) 完掘状況 (西から)



SX32・33全景 (西から)



SB 8 全景 (南から)



SB158～163全景（北から）



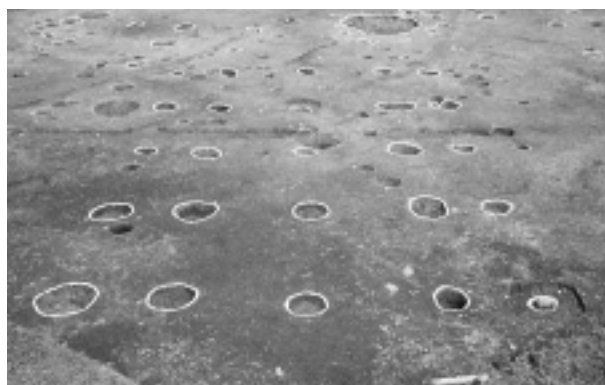
SB151～155全景（南から）



SB110全景（北から）



SB110全景（北東から）

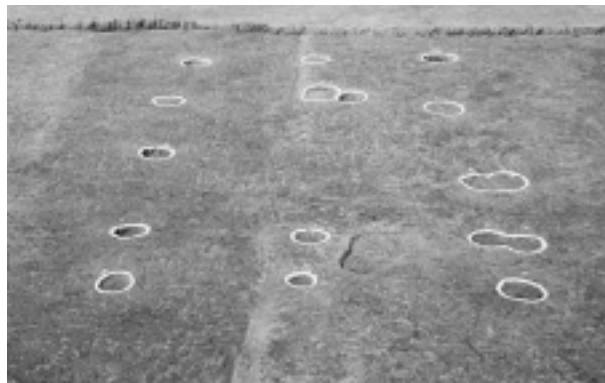


SB110全景（南西から）

図版14



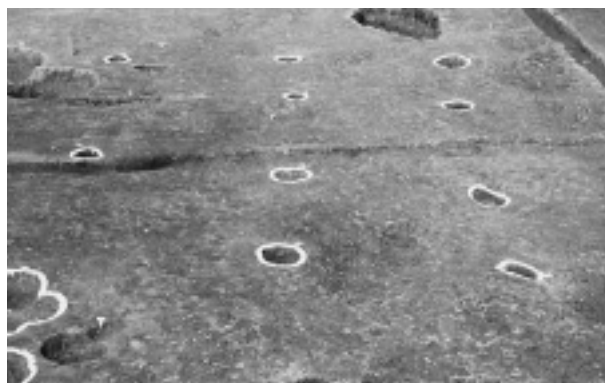
SA114・SB111全景（南東から）



SB112全景（南から）



SB125全景（南から）



SB150全景（南から）



SB151～155全景（北から）



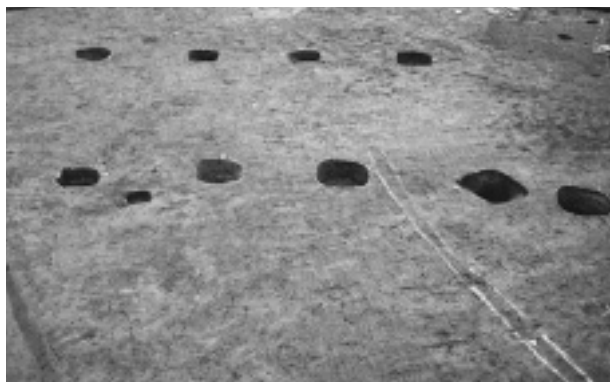
SB157全景（西から）



SB158全景（西から）



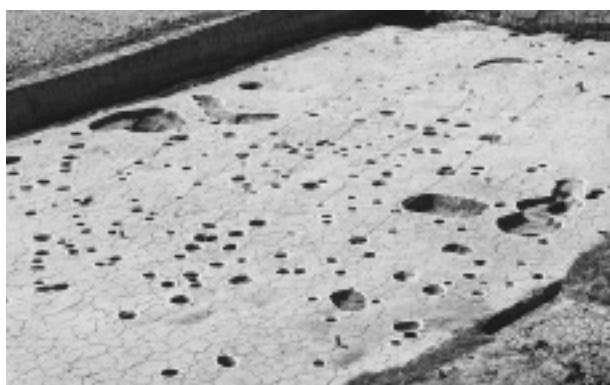
SB159～161全景（南から）



SB1008全景（北西から）



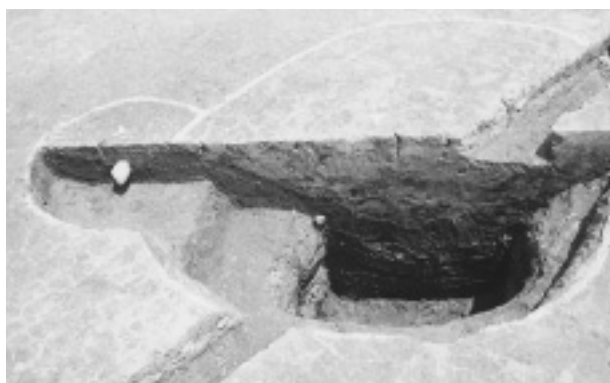
SB1008全景（西から）



SB1682全景（西から）



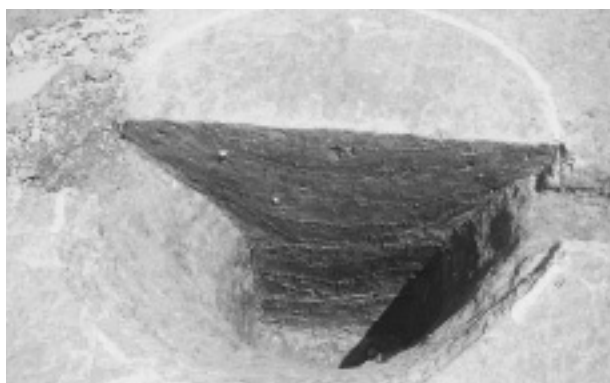
SE105全景（南から）



SE134土層断面（南東から）



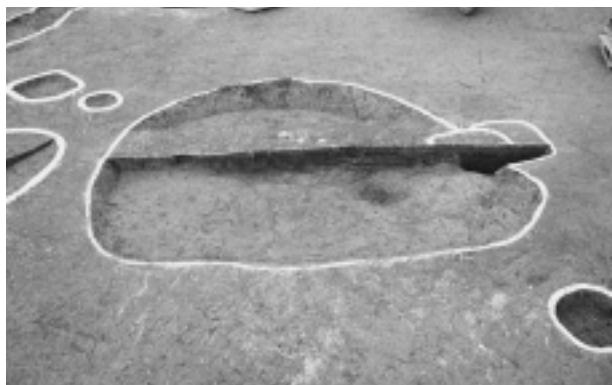
SE135全景（南から）



SE136土層断面（南から）



SE136全景（南から）



SK1034土層断面（南から）



SK207遺物出土状況（南から）



SK2001土層断面（南から）



SK2001漆塗り木製品出土状況（北から）



SD 2 土層断面（西から）



RP38 (SD 2) 出土状況（南から）



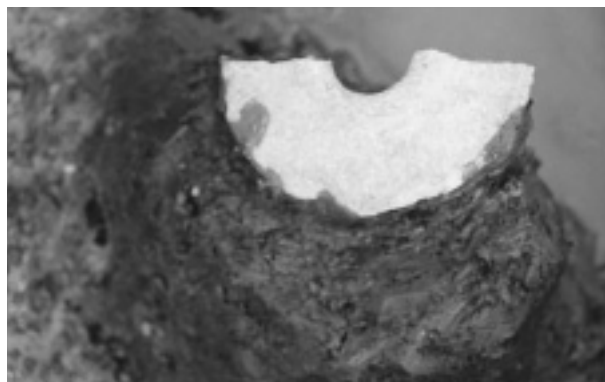
SD 2 遺物出土状況（南から）



SD 2 全景から（東から）



SD1201土層断面（南東から）



RQ159（SD1201）出土状況（西から）



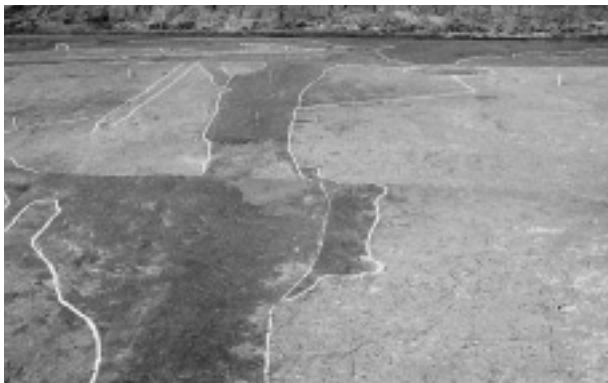
RP200（SD1329）出土状況（南から）



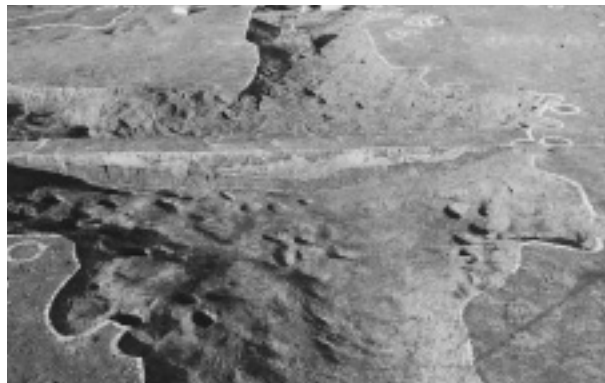
SD1329精査状況（北西から）



SD1329全景（東から）



SD 4 検出状況 (南から)



SD 4 土層断面 (南から)



SD1040土層断面 (西から)



RP94・95 (SD1040) 出土状況 (南東から)



SD1040全景 (西から)



SG 1 木組出土状況 (南東から)



SG 1 土層断面 (北から)



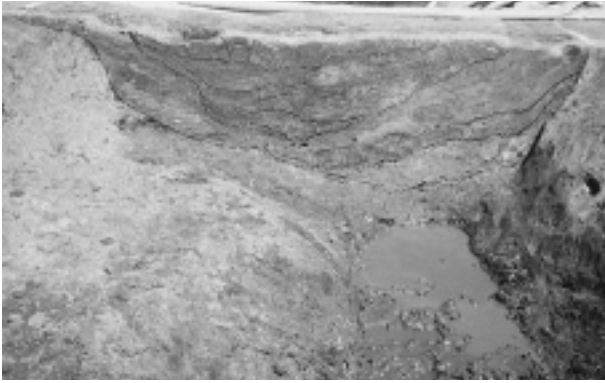
SG 1 全景 (東から)



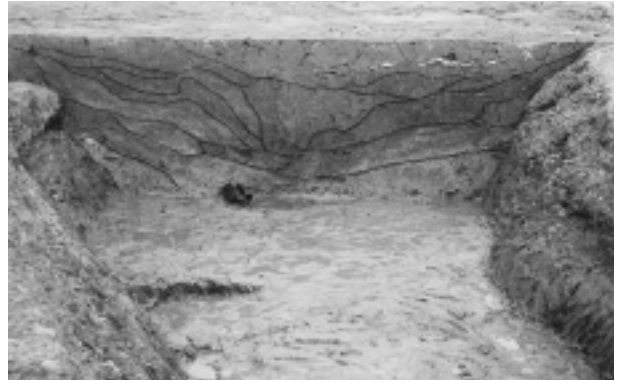
SG 1 精査状況 (東から)



SG 1 全景 (東から)



SG 1 土層断面 (西から)



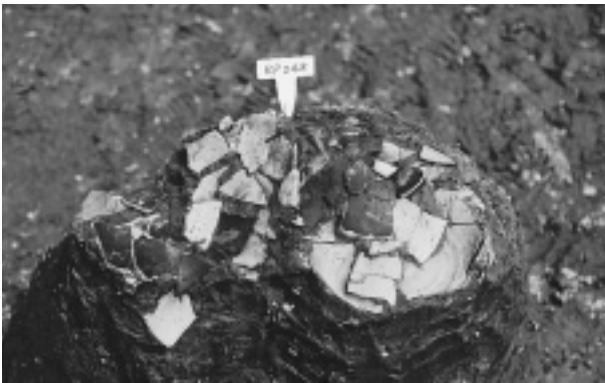
SG 1 土層断面 (西から)



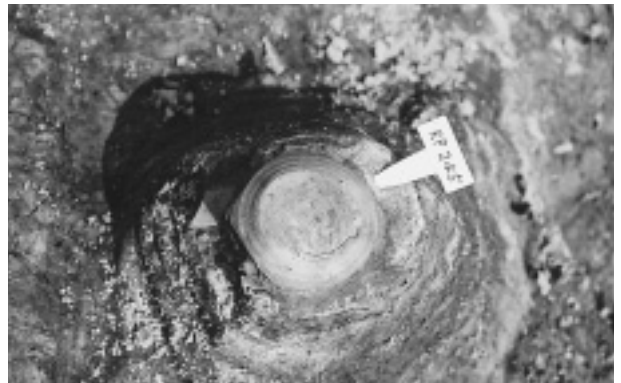
SG 1 検出状況 (北西から)



SG 1 全景 (北西から)



RP248 (SG 1) 出土状況 (南西から)



RP245 (SG 1) 出土状況 (南から)



RP247 (SG 1) 出土状況 (東から)



RP251 (SG 1) 出土状況 (東から)



SG1155全景（東から）



SG1156全景（西から）



RP123 (SG1155) 出土状況（南から）



RP124 (SG1156) 出土状況（北から）



RP119 (SG1155) 出土状況（南から）



RP188 (SG1155) 出土状況（北から）



RP119 (SG1155) 出土状況（北から）



RP212 (SG1156) 出土状況（西から）



SG1301木製品出土状況（南西から）



RP149（SG1301）出土状況（東から）



SG1301網代出土状況（東から）



SG1301木製品出土状況（北から）



SG1301全景（南東から）



水田跡検出状況（東から）



水田跡検出状況（南から）



SD11・水田跡検出状況（南から）



水田跡検出状況（南から）



SD11・水田跡全景（南から）



現地説明会



現地説明会



現地説明会



現地説明会



現地説明会



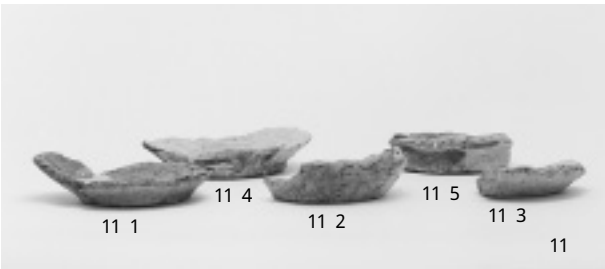
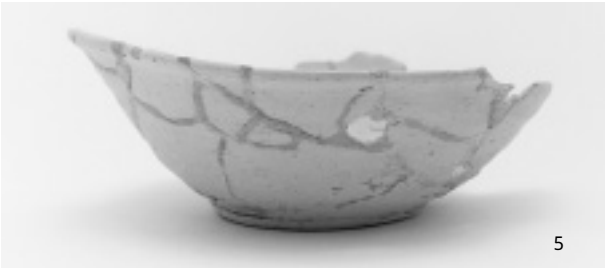
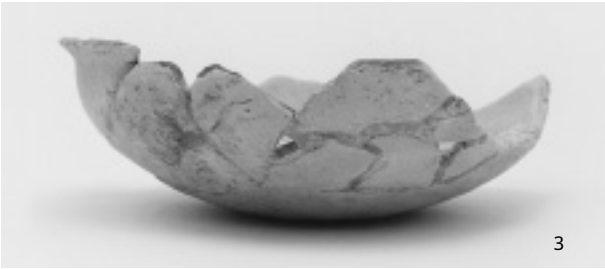
現地説明会



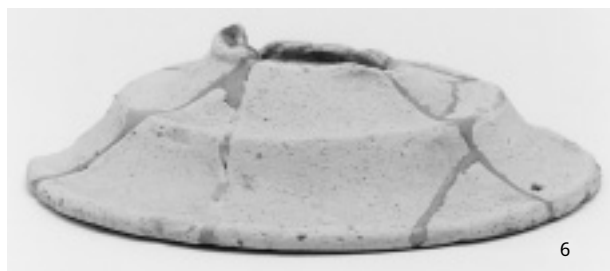
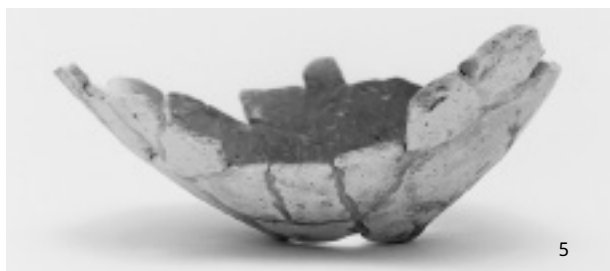
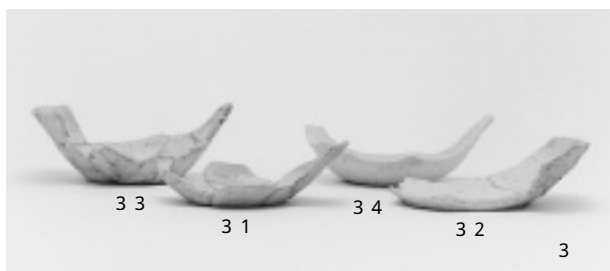
現地説明会



現地説明会



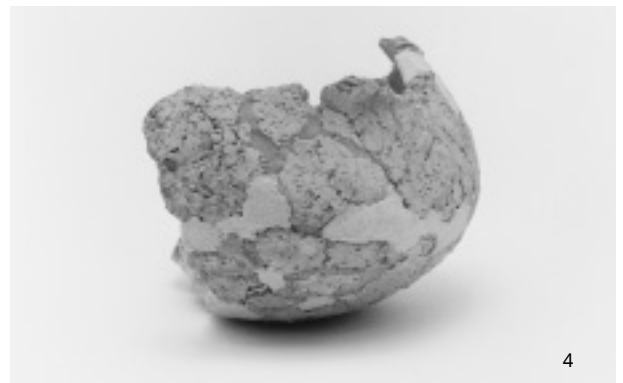
土師器 坏



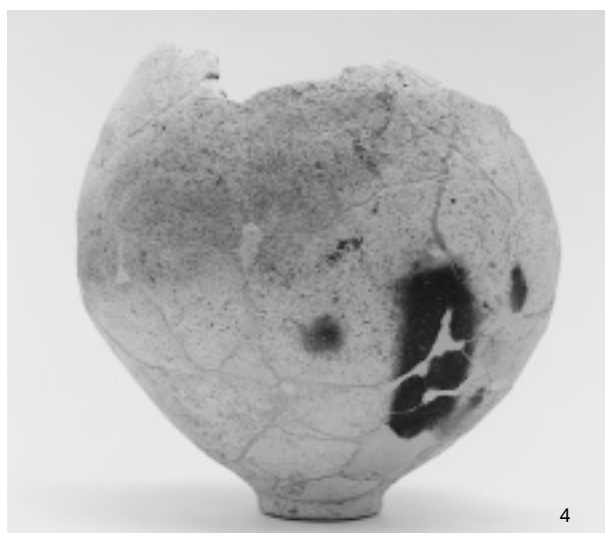
土師器 高坏

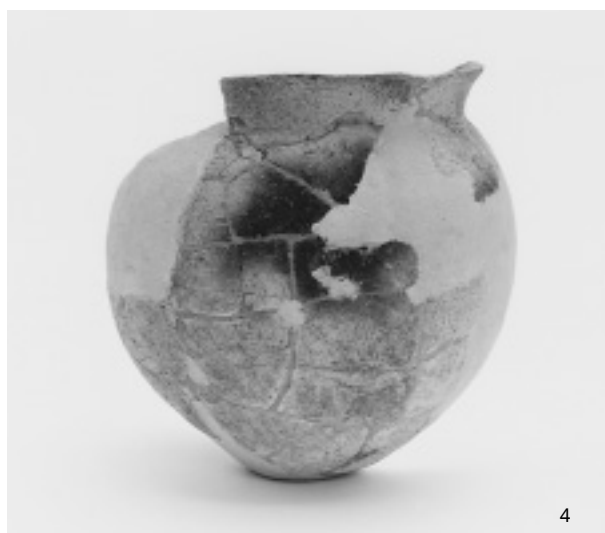


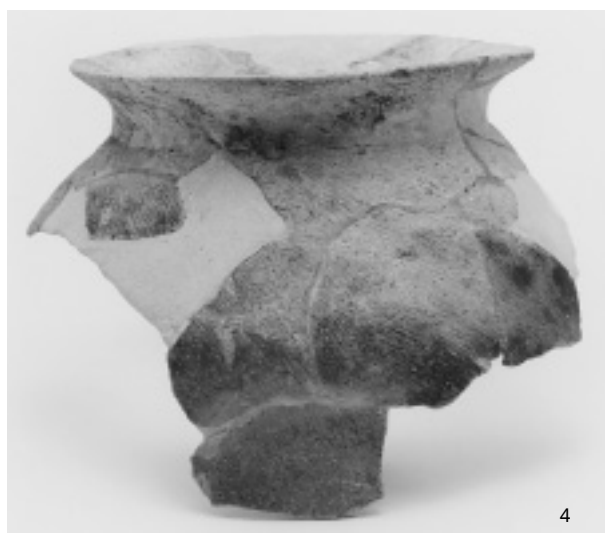
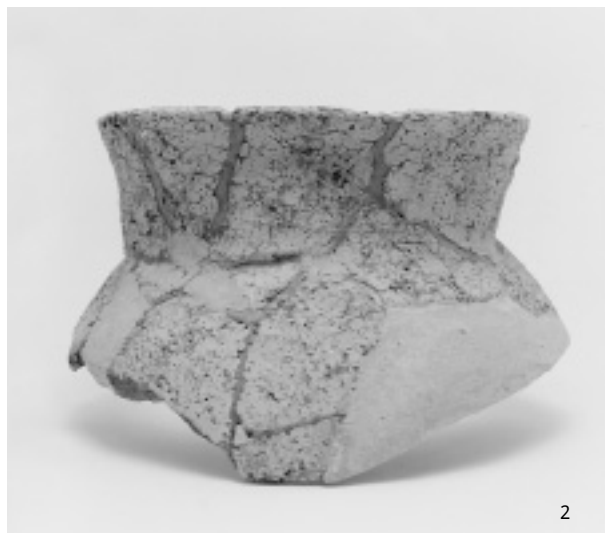
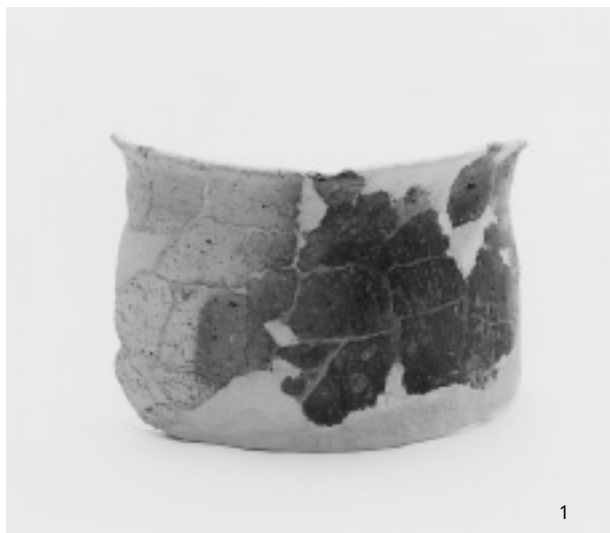
土師器 高坏・甑











出土遺物土師器甕(3)



1



2



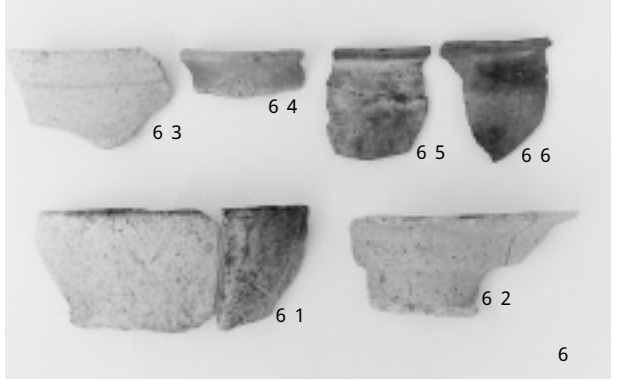
3



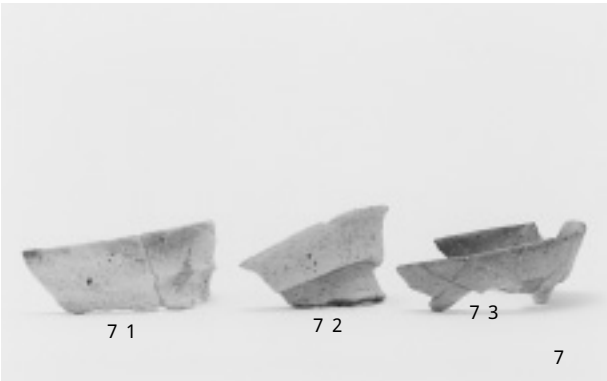
4



5



6

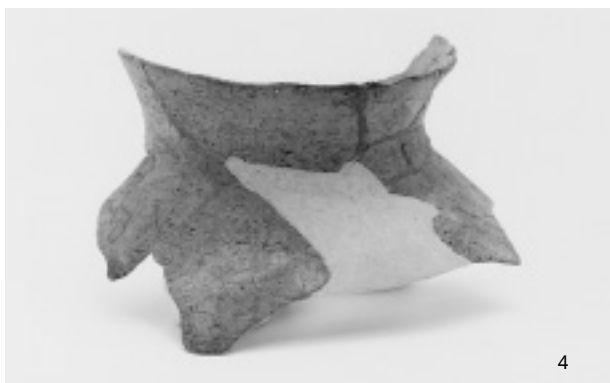
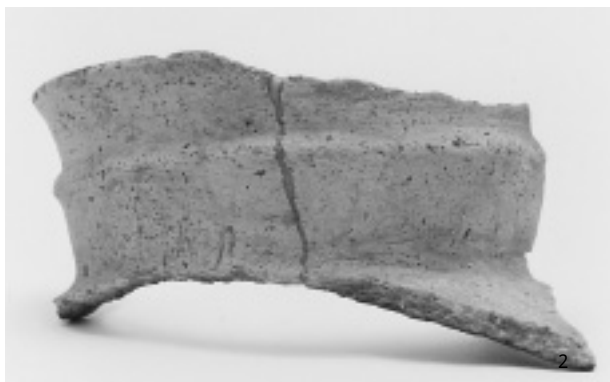


7

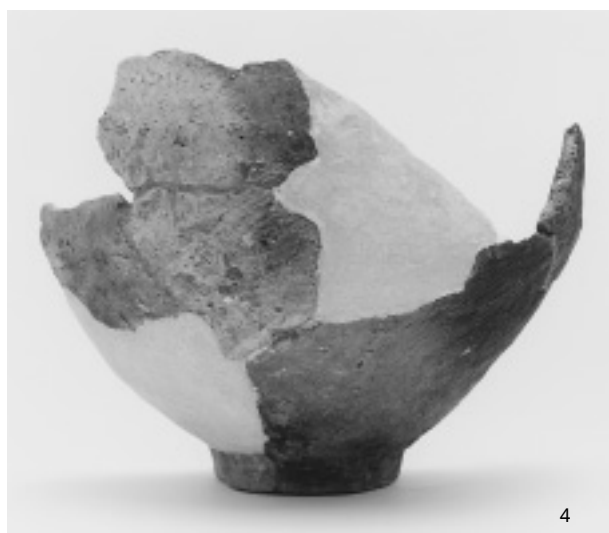


8

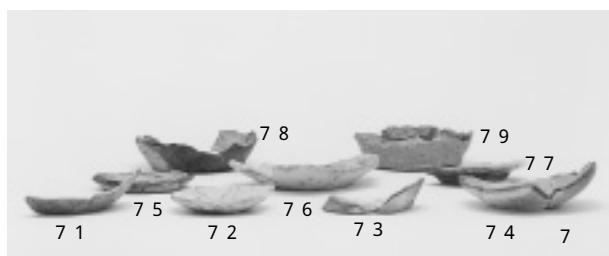
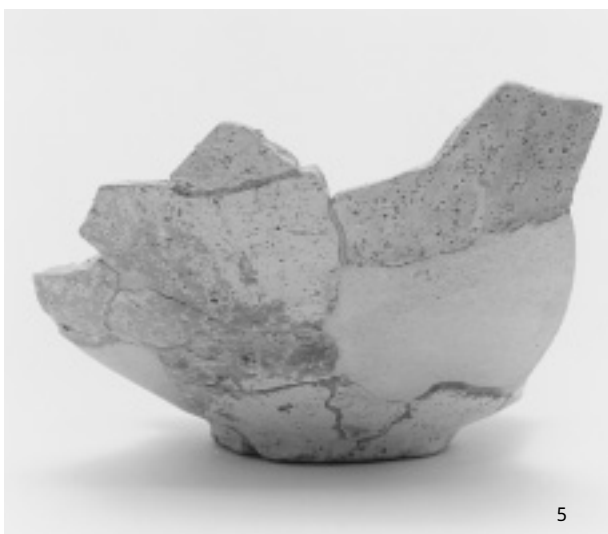
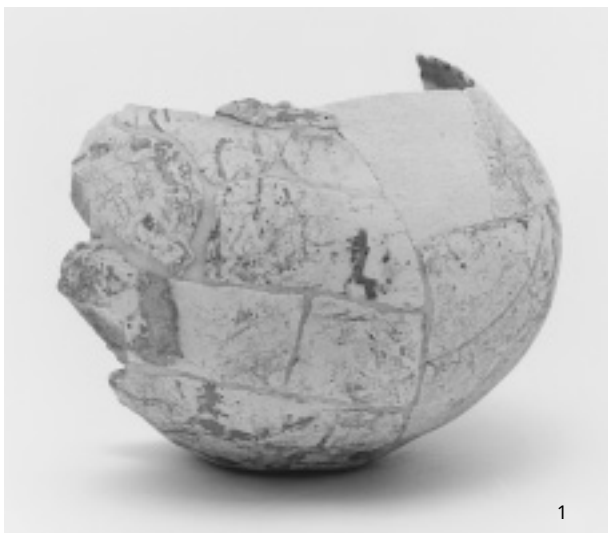
土師器 甕・壺(1)

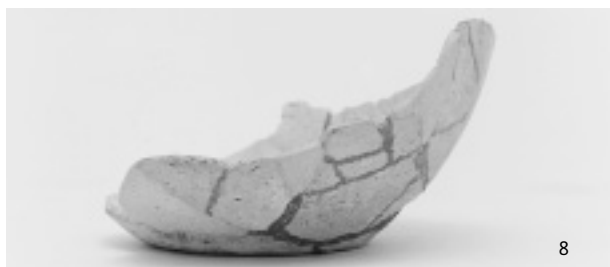


土師器 甕・壺(2)



土師器 甕・壺(3)





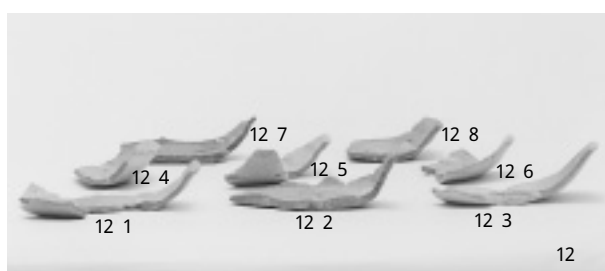
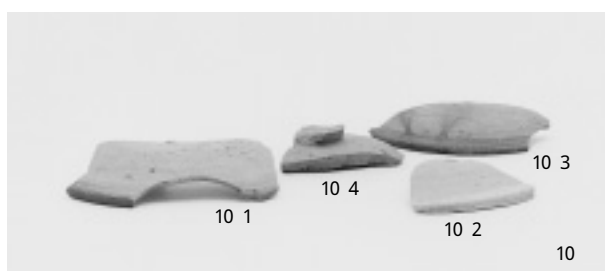
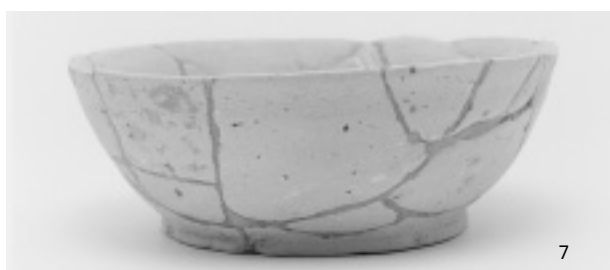


須惠器 坏(1)

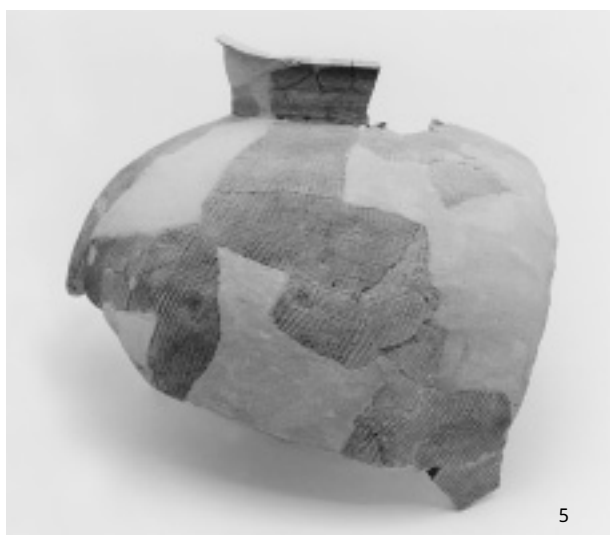


須惠器 坏(2)





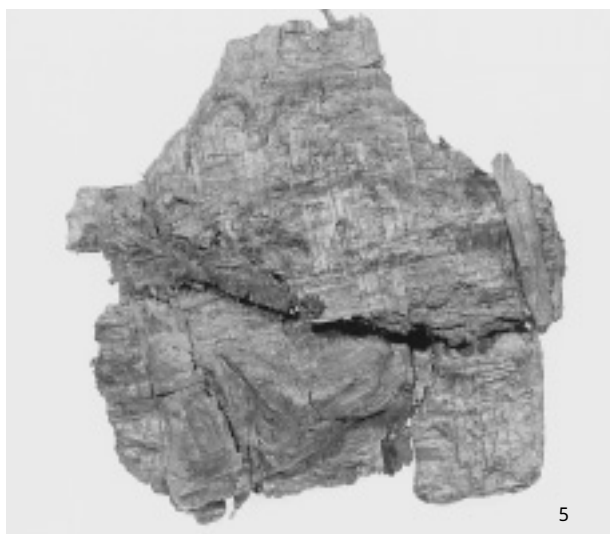
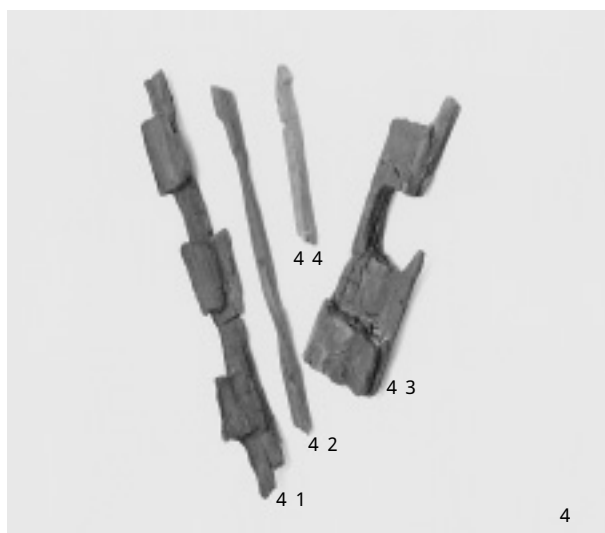
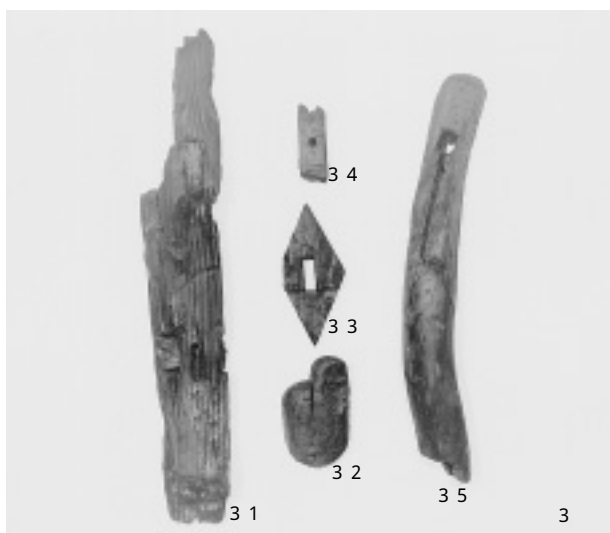
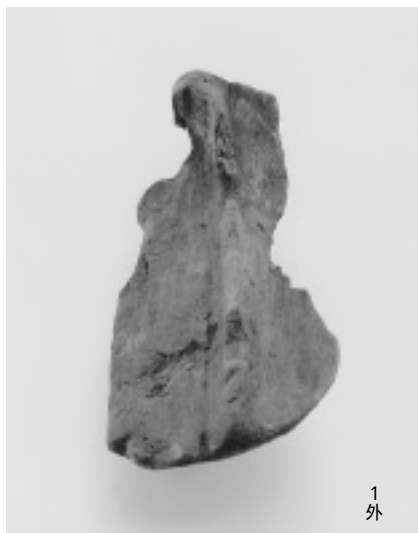
須惠器 坏(4)



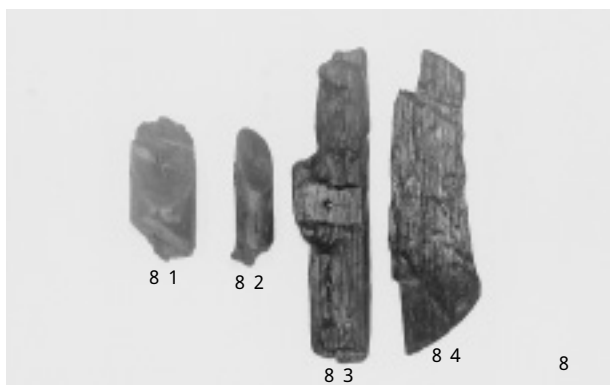
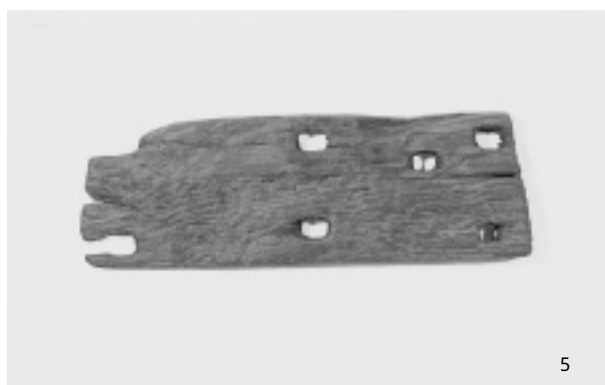
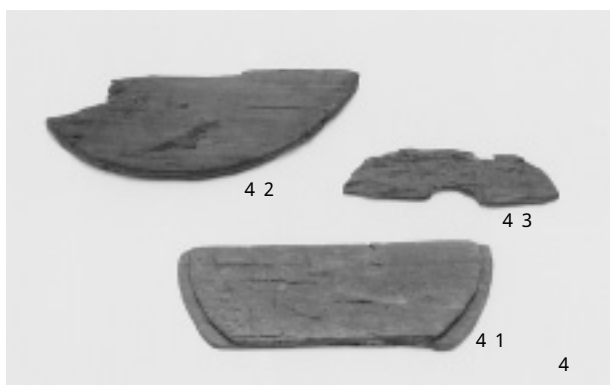
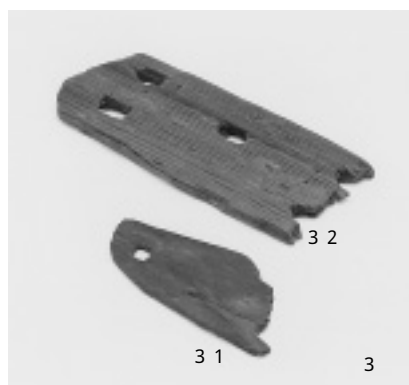
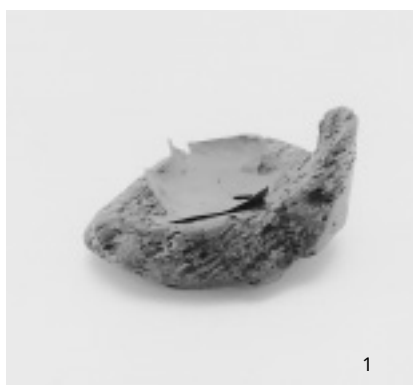


須惠器 大甕他

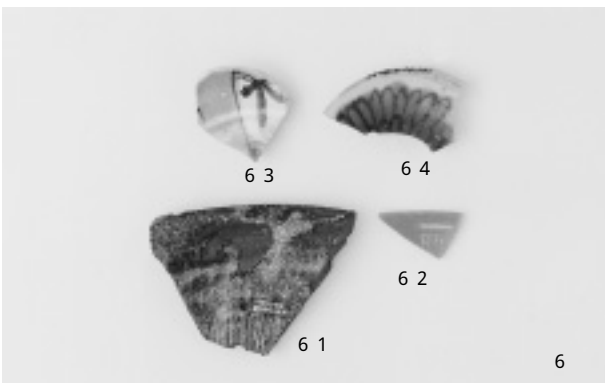
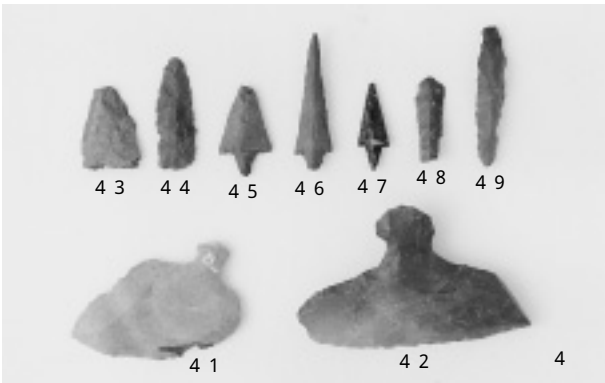
图版44



木製品(1)



図版46



石器・石製品・陶磁器

付 編

1. はじめに

山形県域に分布する後期更新世以降に形成された火山灰土中には、十和田火山をはじめとする東北地方の火山のほか、遠く九州地方や朝鮮半島などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、天童市蔵増押切遺跡において、テフラの混入が考えられた土層を対象にテフラ組成分析と屈折率測定を行って、示標テフラの検出同定を行うことになった。分析測定の対象となった試料は、発掘調査の担当者によりSG土層セクションにおいて採取された試料である。

2. テフラ組織分析

(1) 分析試料と分析方法

試料 について、火山ガラス比分析と重鉍物組成分析を合わせたテフラ組織分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により80 で乾燥。
- 4) 分析篩により1/4 - 1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態別比率を求める(火山ガラス比分析)。
- 6) 偏光顕微鏡下で重鉍物250粒子を観察し、重鉍物組成を求める(重鉍物組成分析)。

(2) 分析結果

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図1に、その内訳を表1に示す。試料 層には、スポンジ状に発泡した白色の軽石型ガラス(1.6%)や無色透明なバブル型(平板状、0.4%)や分厚い中間型火山ガラス(0.4%)が認められた(0.8%)¹。一方、重鉍物は全体の1%以下と非常に少なく、重鉍物組成を明らかにすることが困難であった。重鉍物は全体の1%以下と非常に少なく、重鉍物組成を明らかにすることが困難であった。重鉍物としては、単斜輝石(cpx)、斜方輝石(opx)、磁鉄鉍(mt)、角閃石(ho)、ジルコン(zr)などがごく少量含まれている。

3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

試料 について、示標テフラとの同定精度を向上させるために、温度一定型屈折率測定(新

井, 1972, 1993) により屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表 2 に示す。試料に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.502 - 1.506 である。この火山ガラスの形態や色調さらに屈折率²などを合わせて考慮すると、この火山ガラスは A.D. 915 に十和田火山から噴出した十和田 a 火山灰 (To a, 町田ほか, 1981) に由来していると考えられる。

4. 小結

蔵増押切遺跡において採取された試料を対象に、テフラ組織分析と屈折率測定を行った。その結果、十和田 a テフラ (To a, A.D. 915) に由来すると思われる火山ガラスが検出された。

- * 1 採取された試料には、わずかに桃色がかった灰白色火山灰層らしい小ブロックが認められる。試料の採取方法によっては、より火山ガラスの比率が高くなる傾向もあるのかもしれない。
- * 2 今回検出された火山ガラスの屈折率(n)は、実際にはテフラ・カタログ (町田・新井, 1992) に記載されている火山ガラスの屈折率より若干高い傾向にある。To a については、その噴出年代が新しいために、保存状況によって水和の程度が異なり、屈折率の値に幅があると考えられる (新井房夫群馬大学名誉教授談)。

文献

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定 - テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p. 254 - 269.

新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法 2 - 研究対象別分析法」, p. 138 - 149.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.

町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ。科学, 51, p. 562 - 569.

表1 蔵増押切遺跡における火山ガラス比分析結果

試料	bw(pl)	bw(st)	md	pm(sp)	sp(fb)	その他	合計
②	1	0	1	4	0	244	250

数字は粒子数. bw(pl) : バブル型 (平板状) , bw(st) : バブル型 (線状構造をもつもの) , md : 中間型 , pm(sp) : 軽石型 (スポンジ状) , pm(fb) : 軽石型 (繊維束状) .

表2 蔵増押切遺跡における屈折率測定結果

試料	火山ガラス (n)
②	1.502-1.506

屈折率測定は, 温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) による.

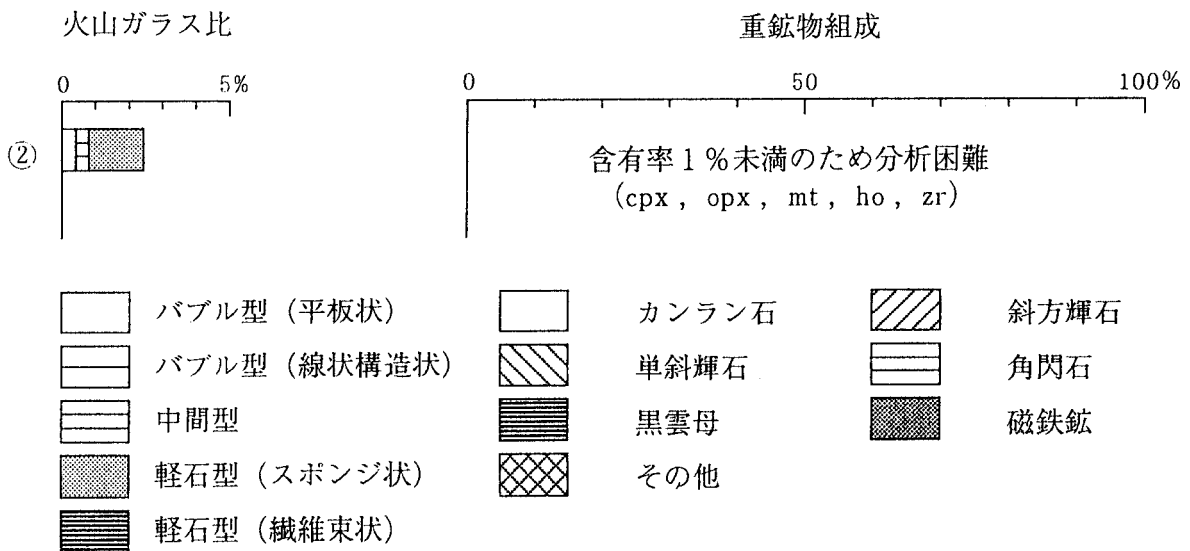


図1 蔵増押切遺跡テフラ試料のテフラ組成ダイアグラム

1. はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール (植物珪酸体) 分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

天童市西部に位置する蔵増押切遺跡の発掘調査では、近世以降とされる水田跡と古代の水田跡とみられる土層が認められた。そこで、これらの遺構ならびに土層における稲作の確認およびその他の層における稲作跡の探査を目的としてプラント・オパール分析を行うことになった。

2. 試料

調査地点は、南側調査区では東壁において南より No.1地点、No.2地点、No.3地点、北側調査区では南側より No.4地点、No.5地点の計5地点である。

各地点における分析試料は以下の通りである。

No.1地点では、上位よりオリーブ黒色粘質土 (現代の水田, a層)、灰オリーブシルト (旧水田, b層)、灰色シルト (層)、茶褐色シルト (層)、黄褐色シルト (層)、黒色粘質シルト (層)、灰色粘質土 (層) の7点、No.2地点では、上位より灰色シルト (層)、茶褐色シルト (層)、黄褐色シルト (層)、黒色粘質シルト (層) の上部と下部の5点、No.3地点では、灰色シルト (層)、茶褐色シルト (層) の2点、No.4地点では、上位よりオリーブ黒色粘質土 (現代の水田, 1層)、灰色シルト (2層)、茶褐色シルト (3層)、黒色粘土 (4層)、暗灰色粘土 (5層) の5点、No.5地点では、茶褐色シルト (3層)、黒色粘土 (4層)、暗灰色粘土 (5層) の3点がそれぞれ採取された。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976)」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料土の絶乾 (105℃・24時間)
- 2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加 (直径約40 μm , 約0.02g)
電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈低法による微粒子 (20 μm 以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散, プレパラート作成

7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞(葉身にのみ形成される)に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数(試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算計数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10^5 g)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03)、8.40、6.31、1.24、0.48である。(杉山・藤原, 1987)。

4. 分析結果

稲作跡の探査が主目的であるため、同定は、イネ、キビ族(ヒエなどが含まれる)、ヨシ属、ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる)、タケ亜科(ネザサ節型、クマザサ属型、その他未分類)の主要な5分類を中心に行った。

分析の結果、イネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科の他にサヤヌカグサ属、シバ属、マコモ属のプラント・オパールが検出された。これらの分類群について定量を行いその結果を表1、図1~図5に示す。また、主な分類群については巻末に顕微鏡写真を示した。

5. 稲作の可能性について

稲作跡(水田跡)の検証や探査を行う場合、イネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、プラント・オパール密度にピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくく、密度が基準値に満たなくても稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。以上のことを基準として稲作の可能性について検討を行う。

(1) 南側調査区

現水田のa層ならびに旧水田のb層では、No.1地点において分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールがそれぞれ8,800個/g、14,600個/gと非常に高い密度で検出された。このことは両層準が水田耕作土であることと矛盾しない。

層では、No.1~No.3地点において分析を行ったところ、各地点ともにイネのプラント・オパールが検出された。その密度は、No.1地点で6,600個/g、No.2地点で8,800個/g、No.3地点で7,000個/gといずれも高い値である。したがって、本層準が耕作層であった可能性が高いと判断される。

層でもNo.1~No.3地点において分析を行ったところ、これらすべてからイネのプラン

表1 蔵増押切遺跡のプラント・オパール分析結果

分類群 \ 試料	南側 東壁										北側 西壁														
	No.1					No.2					No.3					No.4					No.5				
	I a	I b	II	III	IV	V	VI	II	III	IV	V-1	V-2	II	III	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
イネ科																									
イネ	88	146	66	65	22		88	48	28	7	7	70	30	95	36	13	13						12	18	
キビ族 (ヒエ属型)																									
ヨシ属	14	22	22	15	6	7	27	14	7	7	7	14	6	19	7	13	7					6	6		
サヤスカグサ属	7																								
ウシクサ族 (ススキ属型)	14	22	15	7	7	32	14	20	14	7	7	14	6	32	22	6	13	15				6	6		
シハ属	7	7	7	7			7					7													
マコモ属																									
タケ亜科																									
ネササ節型	41	37	15	15	22	38	54	27	42	7	15	14	24	82	22	6	13	15				12	6		
クマササ属型	81	37	37	36	22	108	74	34	69	48	146	7	43	44	22	31	13	44				18	54		
未分類等	7	7		7	7	38	14	7	14	7	22	6		6	7	6	7	7				6	6		
不明	81	190	213	233	29	178	176	82	55	61	168	98	109	82	80	63	93	51				55	54		
プラント・オパール総数	331	468	375	385	109	401	446	239	228	156	350	223	225	368	196	144	160	132				115	150		

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	2.58	4.30	1.94	1.92	0.64		2.58	1.41	0.81	0.20		2.05	0.89	2.80	1.07	0.37	0.39				0.36	0.53	
キビ族 (ヒエ属型)										0.57													
ヨシ属	0.85	1.39	1.39	0.92		0.40	1.71	0.86	0.44	0.43		0.88	0.38	1.20	0.46	0.79	0.42				0.38	0.38	
ウシクサ族 (ススキ属型)	0.17	0.27	0.18	0.09	0.09	0.39	0.17	0.25	0.17	0.08		0.17	0.08	0.39	0.27	0.08	0.17	0.18			0.08	0.07	
ネササ節型	0.19	0.18	0.07	0.07	0.10	0.18	0.26	0.13	0.20	0.03	0.07	0.07	0.12	0.40	0.10	0.03	0.06	0.07			0.06	0.03	
クマササ属型	0.61	0.27	0.28	0.27	0.16	0.81	0.56	0.26	0.52	0.36	1.10	0.05	0.32	0.33	0.16	0.23	0.10	0.33			0.14	0.40	

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

ト・オパールが検出された。密度は、No .1地点と No 2地点ではそれぞれ6 500個/g、4 800個/gと高い値であり、No 3地点でも3 000個/gと比較的高い値である。以上のことから、本層準においても稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

層では、No .1地点と No 2地点において分析を行った。イネのプラント・オパールは両地点ともに検出されたものの、密度は2 200~2 800個/gとやや低い値である。直上の層が高い密度であることから、本層準において稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層から後代のものが混入した危険性も否定できない。

層はNo .1地点と No 2地点で、層ではNo .1地点のみで分析を行ったところ、イネのプラント・オパールはNo 2地点の層上部のみで認められた。密度は1 000個/g未満と低いことから、これについては上層等他所から混入したものと思われる。したがって、これらの層準については稲作の痕跡は認められない。

(2) 北側調査区

現水田の1層ならびに旧水田?の2層については、No 4地点において分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールは1層では9 500個/gと非常に高い値であり、2層でも3 600個/gと比較的高い密度で検出された。このことは、両層準が水田耕作土であることと矛盾しない。

3層、4層および5層では、No 4地点と No 5地点において分析を行った。このうち、3層と4層では両地点においてイネのプラント・オパールが検出されたものの、密度は1 200~1 800個/gと低い値である。したがって、両層準において稲作が行われた可能性は考えられるものの、他所からの混入の危険性も考慮する必要がある。なお、5層からはイネのプラント・オパールは検出されないことから、本層準については耕作層の可能性は認められない。

6. まとめ

蔵増押切遺跡においてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の探査を試みた。その結果、水田層と見られていた南側調査区の層では、イネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことより、ここで稲作が行われていたことが分析的に確認された。その他では、同じく南側調査区の層においてもイネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことから、本層準についても耕作層である可能性が認められた。

文献

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 - , 考古学と自然科学, 9:15-29.

藤原宏志(1979)プラント・オパール分析法の基礎的研究(3) - 福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産総量の推定 - , 考古学と自然科学, 12:29-41.

藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 - , 考古学と自然科学, 17:73-85.

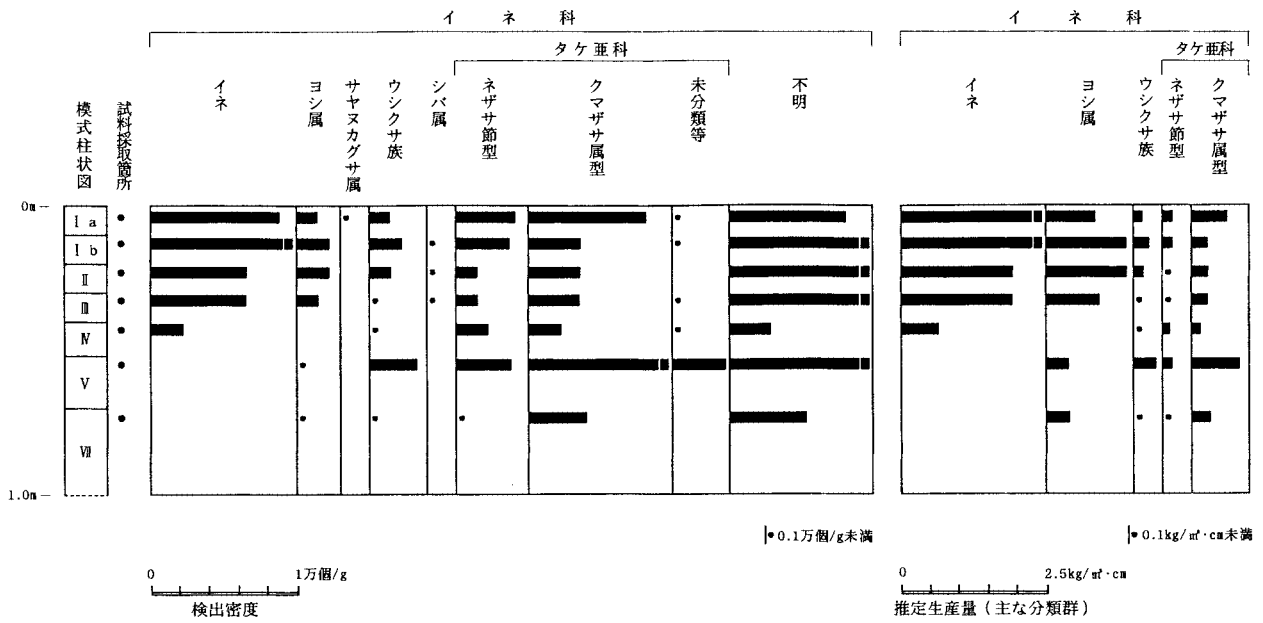


図1 No.1地点のプラント・オブール分析結果
※主な分類群について表示。

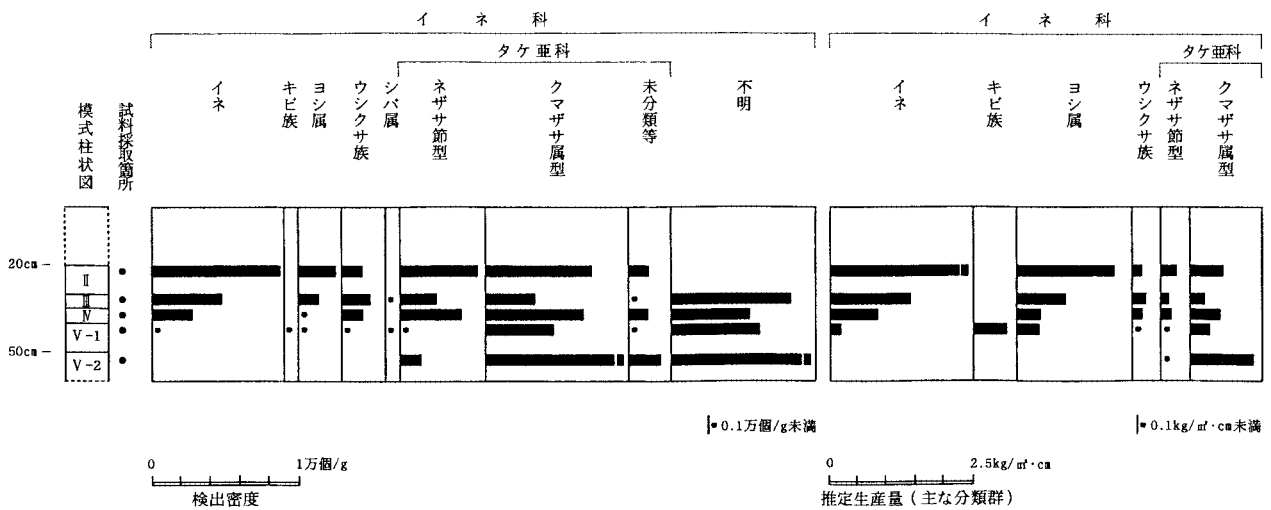


図2 No.2地点のプラント・オブール分析結果
※主な分類群について表示。

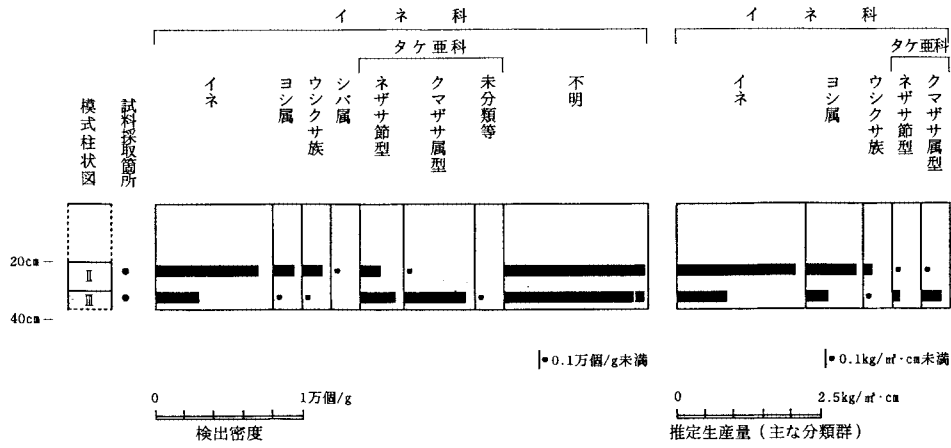


図3 No.3地点のプラント・オパール分析結果
※主な分類群について表示。

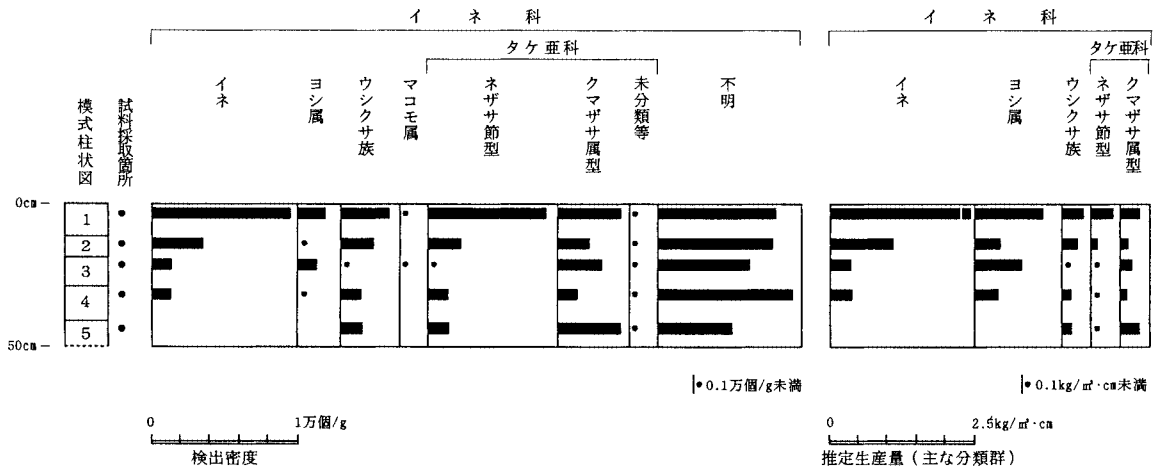


図4 No.4地点のプラント・オパール分析結果
※主な分類群について表示。

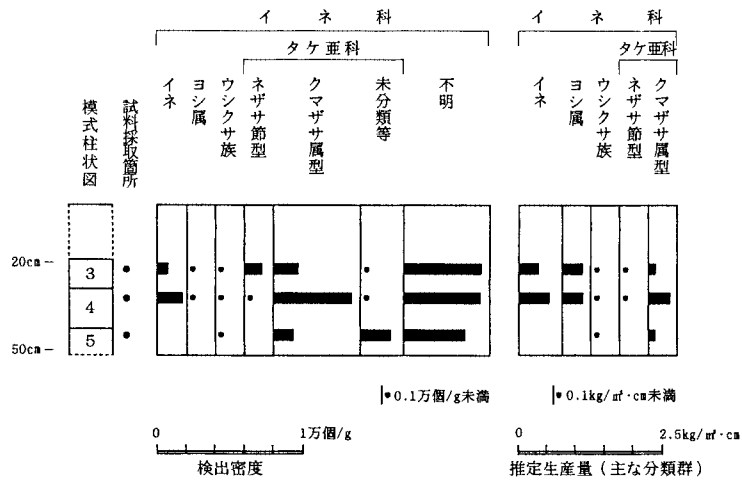


図5 No.5地点のプラント・オパール分析結果
※主な分類群について表示。

プラント・オパール（植物珪酸体）の顕微鏡写真

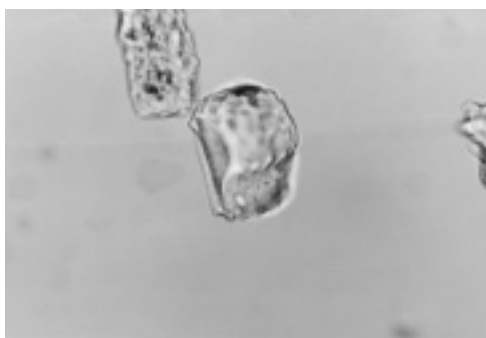
No.	分類群	地点	試料名
1	イ ネ	No. 1	III 層
2	イ ネ	No. 2	IV 層
3	イ ネ	No. 4	2 層
4	サヤヌカグサ属	No. 1	I a 層
5	キ ビ 族	No. 2	V 層
6	ヨ シ 属	No. 2	II 層
7	ウシクサ族（ススキ属）	No. 1	V 層
8	シ バ 属	No. 1	III 層
9	タケ 亜科（ネザサ節型）	No. 1	V 層
10	タケ 亜科（クマザサ属型）	No. 1	V 層



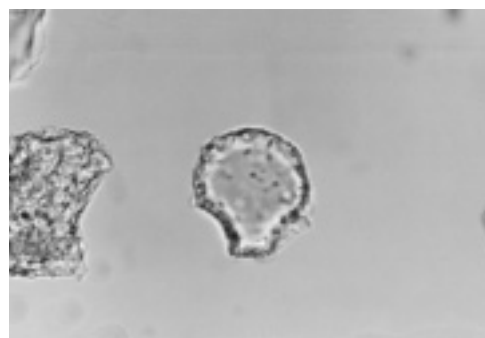
1



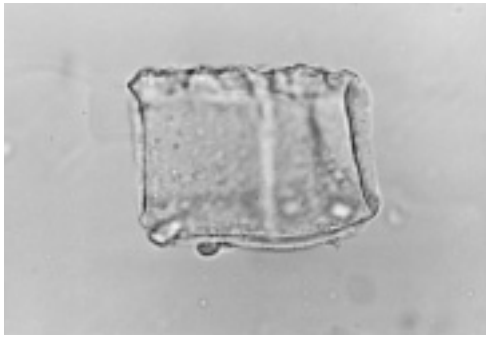
2



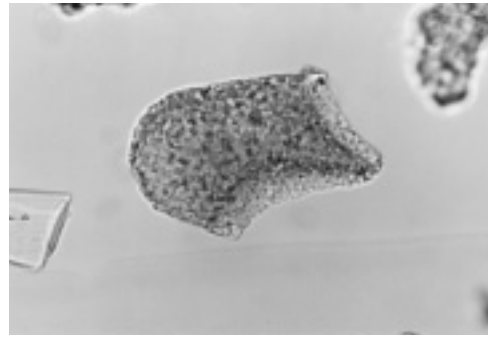
3



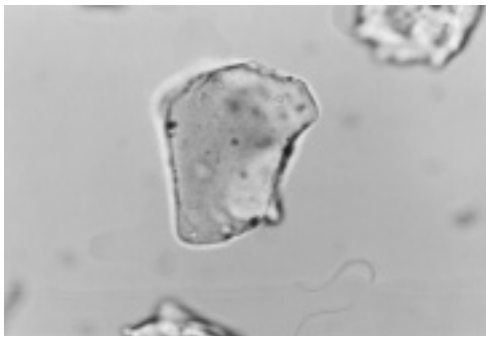
4



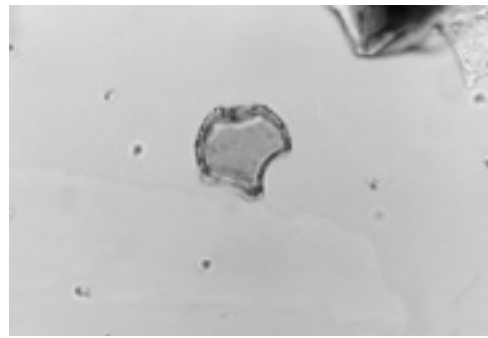
5



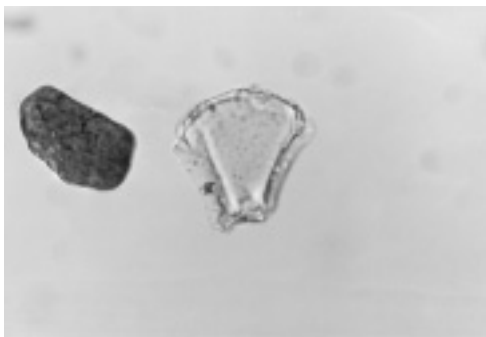
6



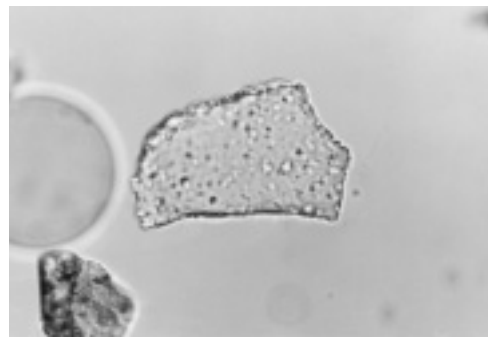
7



8



9



10

1 ~ 10 0 50 100 μ m

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第112集

くらぞうおしきり
蔵増押切遺跡発掘調査報告書

2003年 3月25日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999 - 3161

山形県上山市弁天二丁目15番 1号

☎023 - 672 - 5301

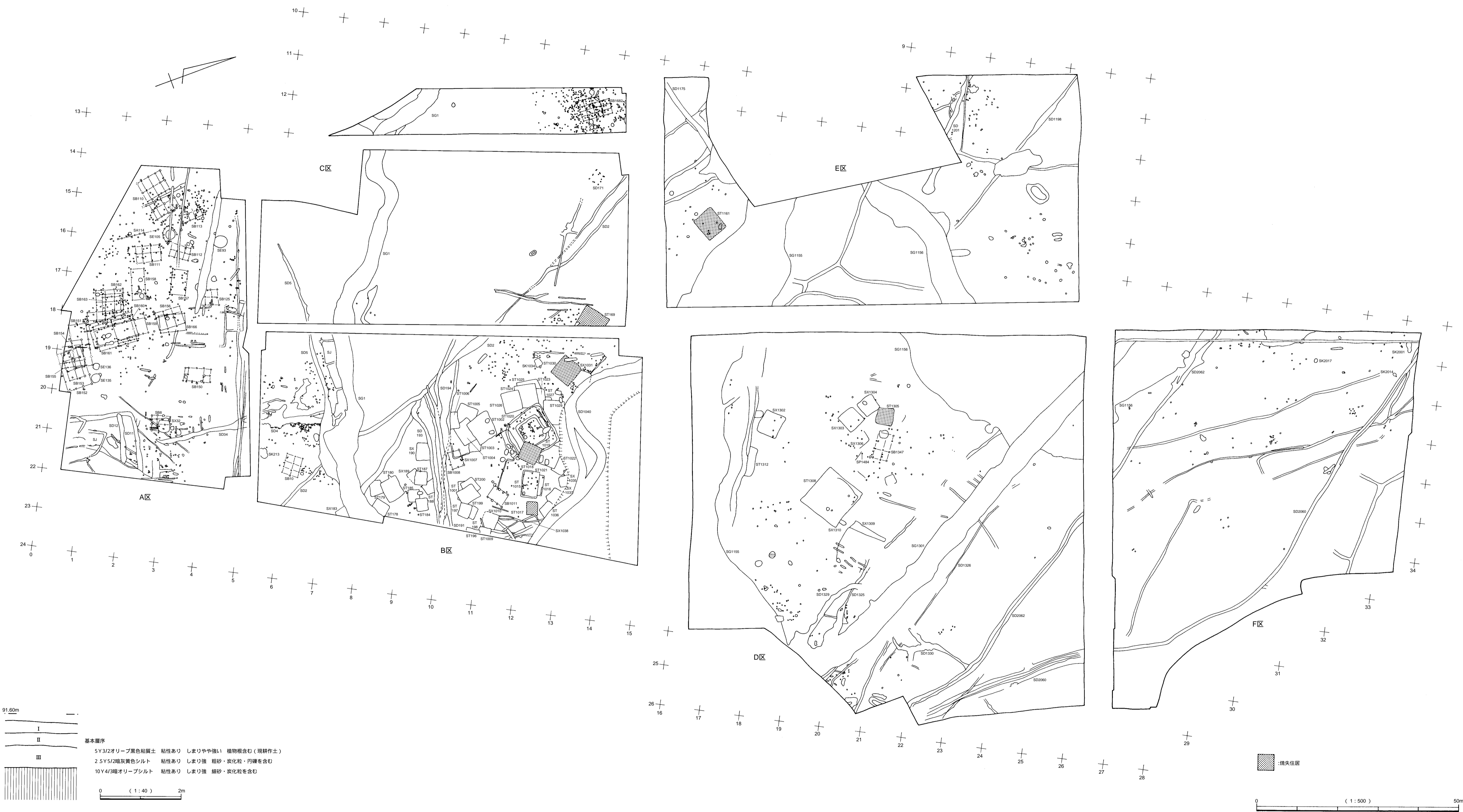
印刷 中央印刷株式会社

山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第112集

蔵増押切遺跡

発掘調査報告書

付図・遺構配置図



山形県埋蔵文化財センター調査報告書第112集 蔵増押切遺跡 遺構配置図